

元岡・桑原遺跡群
23

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群23

—第18次・42次・59次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一二四六集

2014

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会

一〇一四

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群23

—第18次・42次・59次調査の報告—

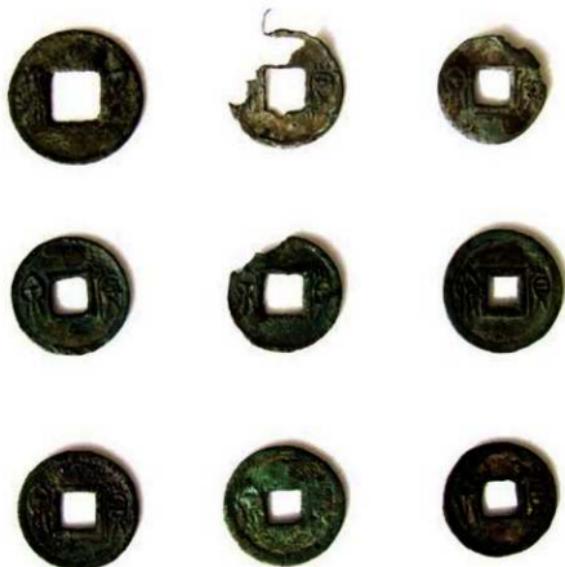


遺跡略号 MOT -18・42・59

調査番号 9946・0451・1140

2014

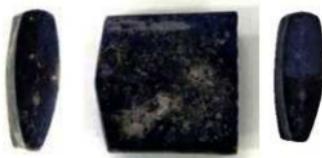
福岡市教育委員会



42次調査区出土の漢代の貨幣



42次調査出土の辰砂



42次調査出土の脊尻金具



42次調査出土の銅鏃



42次調査1号小銅鐸



42次調査2号小銅鐸



42次調査出土漆物箱

42次調査出土の漆塗容器



有文木製品（鰐）



トリ形木製品 1

トリ形木製品 2



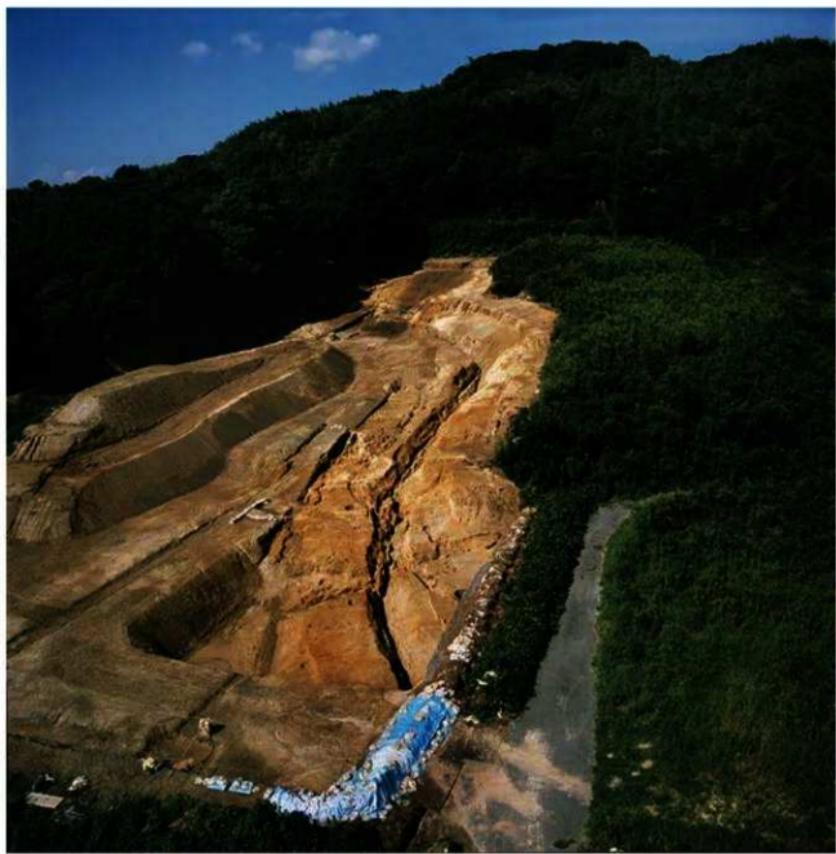
祭祀木製品 1



祭祀木製品 2



42次調査出土の琴



第59次調査 1区全景（北東から）



(1) 第59次調査 SX24土器出土状況（北から）



(2) 第59次調査 SX24出土遺物

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区的キャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区的移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。また、統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から当教育委員会が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査も行っており、現在も発掘調査を継続しております。

本書で報告する第18・42・59次調査では、弥生時代から中世にいたる集落跡や生産遺跡など、長期間にわたる生活・生産活動の痕跡が確認されました。特に、第42次調査では、隣接する第52次調査とともに自然流路内から、弥生時代から古墳時代初頭にかけてのおびただしい数の土器や、大陸との交流を示す資料が出土し、当地域に暮らした人びとの歴史を明らかにする貴重な発見となりました。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は福岡市が九州大学統合移転に伴い、西区大字元岡地内で平成11～24年度に発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群第18・42・59次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、公共受託事業として実施した。
3. 実測図作成および写真撮影の実施者は、以下のとおりである。

	第18次調査	第42次調査	第59次調査
遺構実測図作成	—	米倉、常松、吉留 屋山洋、木下博文	比嘉、名取さつき 坂口剛毅
遺構写真撮影	—	米倉、常松、木下	比嘉
遺物実測図作成	吉留秀敏、米倉 上方高弘、鳥井幸代	常松、木下、山崎加代子、 横溝舞	比嘉、大庭 井上加代子
遺物写真撮影	米倉、上方	常松	比嘉
製図	米倉、上方 加集和子、大庭友子	山崎、林田憲三 柴田志乃	比嘉、大庭、井上

4. 金属製品の保存処理は、福岡市埋蔵文化財センター職員が行った。
5. 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託し、V-3にその成果を掲載した。
6. 第59次調査の空中写真撮影は、有限会社空中写真企画に委託し、その成果を使用した。
7. 本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
8. 本文中に掲載した方位は、すべて磁北を示す。
9. 本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下のとおりである。
 SD : 溝　SH : 土坑　P : ピット(柱穴)　SX : その他の遺構
10. 本書に開わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 調査・整理・報告書作成にあたり、多くの諸氏に協力を賜った。以下に芳名を記して謝意を表したい。
 重藤輝行（佐賀大学）　五十音順、敬称略
12. 執筆は、米倉（I-1・III）、常松（IV）、比嘉（I-2、II、V）が担当した。
13. 本書の編集は、米倉と常松との協議のもと、比嘉が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群	調査次数	18次	調査略号	MOT-18
調査番号	9946	分布地図図幅名	129 桑原	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字元岡地内			調査面積	16,800 m ²
調査期間	平成11（1999）年10月15日～平成14（2002）年2月20日				

遺跡名	元岡・桑原遺跡群	調査次数	42次	調査略号	MOT-42
調査番号	0451	分布地図図幅名	140 元岡	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字元岡地内			調査面積	7,000 m ²
調査期間	平成16（2004）年10月1日～平成21（2009）年6月30日				

遺跡名	元岡・桑原遺跡群	調査次数	59次	調査略号	MOT-59
調査番号	1140	分布地図図幅名	140 元岡	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字元岡地内			調査面積	2,298 m ²
調査期間	平成24（2012）年1月13日～平成25（2013）年3月15日				

本文目次

I	はじめに	1
1	九州大学統合移転地内調査に至る経緯	1
2	調査の組織	2
II	元岡・桑原遺跡群の位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	4
III	第18次調査の記録　－4－	9
1	はじめに	9
2	第18次調査の概要と今回報告分	9
3	SX100・404出土遺物	10
4	弥生土器	55
5	縄文土器	56
6	土製品	57
7	石器	58
8	おわりに	75
IV	第42次調査の記録　－2－	93
1	第42次調査の概要	93
2	金属器類	103
3	木製品	113
4	まとめ	184
V	第59次調査の記録	221
1	調査の概要	221
2	調査の内容	224
3	自然科学分析	259
4	まとめ	265

挿図目次

II	
第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺道路 (1/100,000)	3
第2図 元岡・桑原遺跡群調査区位置図 (1/15,000)	5
III	
第1図 調査時と現在の調査区位置図(1/4,000)	10
第2図 第18次調査のグリッド配置と谷部包含層位置図 (1/1000)	11
第3図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物1 (1/3)	12
第4図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物2 (1/3)	13
第5図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物3 (1/3)	14
第6図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物4 (1/3)	15
第7図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物5 (1/3)	16
第8図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物6 (1/3)	17
第9図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物7 (1/3)	18
第10図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物8 (1/3)	19
第11図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物9 (1/3)	20
第12図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物10 (1/3)	21
第13図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物11 (1/3)	22
第14図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物12 (1/3)	23
第15図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物13 (1/3)	24
第16図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物14 (1/3)	25
第17図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物15 (1/3)	26
第18図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物16 (1/3)	27
第19図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物17 (1/3)	28
第20図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物18 (1/3)	29
第21図 包含層SX100南部 (A～C区) 出土遺物19 (1/3)	30
第22図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物1 (1/3)	31
第23図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物2 (1/3)	32
第24図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物3 (1/3)	33
第25図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物4 (1/3)	34
第26図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物5 (1/3)	35
第27図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物6 (1/3)	36
第28図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物7 (1/3)	37
第29図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物8 (1/3)	38
第30図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物9 (1/3)	39
第31図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物10 (1/3)	40
第32図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物11 (1/3)	41
第33図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物12 (1/3)	42
第34図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物13 (1/3)	43
第35図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物14 (1/3)	44
第36図 包含層SX100中部 (D～F区) 出土遺物15 (1/3)	45
第37図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物1 (1/3)	46
第38図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物2 (1/3)	47
第39図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物3 (1/3)	48
第40図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物4 (1/3)	49
第41図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物5 (1/3)	50
第42図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物6 (1/3)	51
第43図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物7 (1/3)	52
第44図 包含層SX100北部 (G～IK区) 出土遺物8 (1/3)	53
第45図 包含層SX100-404出土布目土器・支柱 (1/3)	53
第46図 包含層SX100-404出土カマド (1/3)	54
第47図 調査区出土弥生土器1 (1/3)	55
第48図 調査区出土弥生土器2 (1/3)	56
第49図 調査区出土縄文土器 (1/3)	57
第50図 調査区出土土製送風管 (1/4)	58
第51図 調査区出土土鍤 (1/3)	59
第52図 調査区出土石器1 (1/1)	61
第53図 調査区出土石器2 (1/1)	62
第54図 調査区出土石器3 (1/1)	63
第55図 調査区出土石器4 (1/1)	64
第56図 調査区出土石器5 (1/1)	65
第57図 調査区出土石器6 (1/1)	66
第58図 調査区出土石器7 (1/2)	67
第59図 調査区出土石器8 (1/3)	68
第60図 調査区出土石器9 (1/3)	69
第61図 調査区出土石器10 (1/3)	70
第62図 調査区出土石器11 (1/3)	71
第63図 調査区出土石器12 (1/3)	72

第64図 調査区出土石器13 (1/3)	73	第33図 調査区出土の木製品19 (1/4)	138
		第34図 調査区出土の木製品20 (1/4)	139
IV		第35図 調査区出土の木製品21 (1/4)	140
第1図 第42次・52次調査区主要遺構配置図 (1/1,000)	94	第36図 調査区出土の木製品22 (1/4)	142
第2図 SD02土層ベルト断面図 (1/80)	96	第37図 調査区出土の木製品23 (1/4)	143
第3図 調査遺構配置図 (1/4,000・1/400)	折込	第38図 調査区出土の木製品24 (1/4)	144
第4図-1 第52次調査区出土遺物 (1/4)	98	第39図 調査区出土の木製品25 (1/4)	145
第4図-2 第52次調査区出土遺物 (1/4)	100	第40図 調査区出土の木製品26 (1/4)	148
第5図 SD02 1区遺物出土状況 (1/50)	99	第41図 調査区出土の木製品27 (1/4)	149
第6図 SD02 2区遺物出土状況 (1/50)	101	第42図 調査区出土の木製品28 (1/4)	150
第7図 SD02 3区遺物出土状況 (1/50)	折込	第43図 調査区出土の木製品29 (1/4)	151
第8図 SD02 4区遺物出土状況 (1/50)	折込	第44図 調査区出土の木製品30 (1/4)	153
第9図 調査区出土の漢代の貨幣 (1/1)	104	第45図 調査区出土の木製品31 (1/4)	155
第10図 調査区出土の辰砂粒子と銅尻金具 (1/1)	105	第46図 調査区出土の木製品32 (1/4)	156
第11図 調査区出土の青銅鋤先と小形做製鏡 (1/2)	107	第47図 調査区出土の木製品33 (1/4)	157
第12図 調査区出土の小銅鐸 (1/1)	109	第48図 調査区出土の木製品34 (1/4)	159
第13図 調査区出土の銅櫛 (1/1)	110	第49図 調査区出土の木製品35 (1/6)	160
第14図 調査区出土の鉄製品と貨幣 (1/2・1/1)	111	第50図 調査区出土の木製品36 (1/12)	161
第15図 調査区出土の木製品1 (1/4)	114	第51図 調査区出土の木製品37 (1/4)	162
第16図 調査区出土の木製品2 (1/4)	116	第52図 調査区出土の木製品38 (1/4)	163
第17図 調査区出土の木製品3 (1/4)	117	第53図 調査区出土の木製品39 (1/8)	164
第18図 調査区出土の木製品4 (1/4)	118	第54図 調査区出土の木製品40 (1/8)	165
第19図 調査区出土の木製品5 (1/4)	119	第55図 調査区出土の木製品41 (1/4)	166
第20図 調査区出土の木製品6 (1/4)	120	第56図 調査区出土の木製品42 (1/6)	168
第21図 調査区出土の木製品7 (1/4)	121	第57図 調査区出土の木製品43 (1/4)	169
第22図 調査区出土の木製品8 (1/4)	122	第58図 調査区出土の木製品44 (1/4)	171
第23図 調査区出土の木製品9 (1/4)	123	第59図 調査区出土の木製品45 (1/4)	172
第24図 調査区出土の木製品10 (1/4)	126	第60図 調査区出土の木製品46 (1/4)	173
第25図 調査区出土の木製品11 (1/4)	127	第61図 調査区出土の木製品(拓本) 47-1 (1/4)	174
第26図 調査区出土の木製品12 (1/4)	128	第62図 調査区出土の木製品47-2 (1/4)	175
第27図 調査区出土の木製品13 (1/4)	130	第63図 調査区出土の木製品48 (1/4)	177
第28図 調査区出土の木製品14 (1/4)	131	第64図 調査区出土の木製品49 (1/4)	178
第29図 調査区出土の木製品15 (1/4)	132	第65図 調査区出土の木製品50 (1/4)	179
第30図 調査区出土の木製品16 (1/4)	133	第66図 調査区出土の木製品51 (1/4)	180
第31図 調査区出土の木製品17 (1/4)	136	第67図 調査区出土の木製品52 (1/4)	181
第32図 調査区出土の木製品18 (1/4)	137	第68図 調査区出土の木製品53 (1/4)	182

V			
第1図 第59次調査区周辺地形図 (1/2,000)	222	第19図 SK25・28実測図 (1/40)	241
第2図 第59次調査区位置図 (1/1,000)	223	第20図 SD22・SK28・SP151・包含層出土遺物実測図 (1/3・1/4)	241
第3図 1区全体図 (1/400)	225	第21図 SX29実測図 (1/30)	243
第4図 SX01実測図 (1/150)	226	第22図 SX29出土遺物実測図 (1/3・1/4)	243
第5図 SX01土層断面実測図 (1/80)	227	第23図 SX24実測図 (1/100) および土層断面実測図 (1/60)	245
第6図 SX01出土遺物実測図 (1/3・1/4)	228	第24図 SX24内構構成図 (1/80)	246
第7図 SD05出土遺物実測図① (1/3・1/4)	230	第25図 SX32出土遺物実測図 (1/3・1/4)	247
第8図 SD05実測図 (1/250) および土層断面実測図 (1/60)	230	第26図 SX24遺物出土状況実測図 (1/40)	248
第9図 SD05出土遺物実測図② (1/4)	231	第27図 SX24出土遺物実測図① (1/3・1/4)	250
第10図 SD12出土遺物実測図 (1/3)	231	第28図 SX24出土遺物実測図② (1/3)	251
第11図 磁気トレンチ、SD10-12土層断面 (1/80・1/40)、SK11実測図 (1/30)	232	第29図 SX24出土遺物実測図③ (1/3・1/4)	253
第12図 SK02～04、06・08・09実測図 (1/30)	234	第30図 SX24出土遺物実測図④ (1/4)	254
第13図 2区・3区第1面全体図 (1/400)	235	第31図 SX24出土遺物実測図⑤ (1/4)	255
第14図 SD13-14-16-20-22実測図 (1/200) および土層断面実測図 (1/60)	236	第32図 SX24出土遺物実測図⑥ (1/6)	256
第15図 SD13-14出土遺物実測図 (1/3・1/4)	237	第33図 SX24出土遺物実測図⑦ (1/1・1/2)	256
第16図 SD16出土遺物実測図 (1/3)	238	第34図 4区全体図 (1/200)	257
第17図 SD20出土遺物実測図① (1/3・1/4)	239	第35図 その他遺物実測図 (1/1・1/3)	258
第18図 SD20出土遺物実測図② (1/3・1/4)	240	第36図 历年較正結果	260
		第37図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真	264

表目次

II		第2表 測定資料および処理	259
第1表 元岡・桑原遺跡群発掘調査一覧	7	第3表 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果	259
第2表 元岡・桑原遺跡群発掘調査報告書一覧	8	第4表 炭化材の樹種同定結果	261
V		第5表 炭化材の樹種同定結果一覧	263
第1表 玉類計測値一覧	256	第6表 出土遺物観察表	267

卷頭図版目次

卷頭図版 1 第42次調査区出土遺物 1	卷頭図版 4 第59次調査 1区全景
卷頭図版 2 第42次調査区出土遺物 2	卷頭図版 5 (1)第59次調査SX24土器出土状況 (北から)
卷頭図版 3 第42次調査区出土遺物 3	(2)第59次調査SX24出土遺物

図版目次

III		
図版 1	第18次調査出土遺物 1	組合式木製案45-245出土状況 (Y-2[区])
図版 2	第18次調査出土遺物 2	図版 9 小型白の未製品37-165出土状況 (W-5[区])
図版 3	第18次調査出土遺物 3	脚付容器31-127出土状況 (W-2[区])
図版 4	第18次調査出土遺物 4	図版10 円形木製品 (蓋) 39-181出土状況 (W-2[区])
図版 5	第18次調査出土遺物 5	トリ形木製品67-377出土状況 (W-5[区])
図版 6	第18次調査出土遺物 6	図版11 銅尻金具10-111出土状況 土器群106 (X-4[区])
図版 7	第18次調査出土遺物 7	有文木製品66-371出土状況 土器群106 (X-4[区])
図版 8	第18次調査出土遺物 8	図版12 琴62-347出土状況 1 (X-6[区])
図版 9	第18次調査出土遺物 9	琴62-347出土状況 2 (X-6[区])
図版10	第18次調査出土遺物10	図版13 例物箱68-379・381出土状況 (X-6[区])
図版11	第18次調査出土遺物11	例物箱68-380出土状況 (X-6[区])
図版12	第18次調査出土遺物12	図版14 又鍬26-100堅杵28-113出土状況 (W-5[区])
図版13	第18次調査出土遺物13	波除板49-264出土状況 (Y-4[区])
図版14	第18次調査出土遺物14	図版15 蓋形容器38-171出土状況 (Y-3[区])
図版15	第18次調査出土遺物15	脚付容器31-126出土状況 (Z-2[区])
図版16	第18次調査出土遺物16	図版16 横状木製品56-296出土状況 (W-5[区])
		舟の仕切り板56-297・298出土状況 (Z-2[区])
		図版17 又鍬17-26出土状況 (Y-2[区])
IV		
図版 1	第42・52次調査区と伊都キャンバス 第42・52次調査区全景	木製品出土状況 土器群109 (Y-1[区])
図版 2	第42次調査区 流路SD02 (全景) 第42次調査区 流路SD02 (南西部)	図版18 木製品出土状況 土器群109 (Z-2[区]) 木製品出土状況 土器群109 (Y-1[区])
図版 3	第42次調査区 流路SD02 (全景) 第42次調査区 流路SD02 (全景)	図版19 遺物出土状況 1 (Y-1・2[区]) 遺物出土状況 2 (Y-1・2[区])
図版 4	土器群107 建築材50-266出土状況 1 (Y-2[区]) 土器群107 建築材50-266出土状況 2 (Y-2[区])	図版20 遺物出土状況 土器群123 (W-5[区]) 遺物出土状況 SD02 (Y・Z-2[区])
図版 5	琴63-348出土状況 (Z-2[区]) 不明木製品46-252出土状況 (Y-3[区])	図版21 木製品出土状況 土器群109 (Y-1[区]) 木製品出土状況 (Y・Z-2[区])
図版 6	建築材50-267出土状況 1 (Z-1[区]) 建築材50-267出土状況 2 (Z-1[区])	図版22 建築部材54-284出土状況 (Z-2[区]) 小形彷彿鏡11-19出土状況 (Y-3[区])
図版 7	柱材53-281出土状況 (Z-2[区]) ねずみ返し49-263出土状況 (Z-2[区])	図版23 琴部材64-356出土状況 土器群106 (X-3[区]) 脚付容器31-125出土状況 土器群123 (W-6[区])
図版 8	椅子の受部47-259出土状況 (Y-2[区])	図版24 建築材53-280出土状況 (Y-3[区]) 木製品出土状況 土器群109 (Y-2[区])
		図版25 梯子54-288出土状況 (X-4[区])

平地24-89出土状況 (Z-1区)	(2)1トレンチ土層断面
図版26 木製品出土状況 (Y-2区)	(3)2トレンチ土層断面
木製品出土状況 (Z-2区)	図版 8 (1)SD10・SD12全景
図版27 白29-118出土状況 (X-3区)	(2)SD10土層断面
建築部材出土状況 (Z-2区)	(3)SD12土層断面
図版28 木製品出土状況 (Z-1区)	図版 9 (1)SK03・SK04完掘状況
木製品出土状況 SD02 南端出土	(2)SK03・SK04半掘状況
図版29 第42次調査区出土遺物 1	(3)SK04土層断面
図版30 第42次調査区出土遺物 2	図版10 (1)SK08完掘状況
図版31 第42次調査区出土遺物 3	(2)SK06完掘状況
図版32 第42次調査区出土遺物 4	(3)SK06・08土層断面
図版33 第42次調査区出土遺物 5	図版11 (1)SD05・13・14・16全景
図版34 第42次調査区出土遺物 6	(2)I～3区全景
図版35 第42次調査区出土遺物 7	(3)SD20・22完掘状況
図版36 第42次調査区出土遺物 8	図版12 (1)SD13・14 A-A' 土層断面 (2)SD13・14 B-B' 土層断面 (3)SD16 C-C' 土層断面
V	
図版 1 (1) I区全景	図版13 (1)SD20全景
(2) I区全景	(2)SD20 E-E' 土層断面
図版 2 (1)SD05全景	(3)SD20 D-D' 土層断面
(2)SD05近景	図版14 (1)SK25土層断面
図版 3 (1)SX01全景	(2)SK28土層断面
(2)SX01 A-A' 土層削削状況	(3)SX29檢出状況
(3)SX01掘削状況	図版15 (1)SX32遺物出土状況
図版 4 (1)SX01 A-A' 土層断面	(2)SX24土層断面
(2)SX01 B-B' 土層断面	(3)SX24遺物出土状況1
(3)SX01B-B' 土層断面掘削状況	図版16 (1)SX24遺物出土状況2
図版 5 (1)SD05土層断面 1	(2)SX24土層断面
(2)SD05土層断面 2	(3)SX24遺物出土状況4
(3)SD05上層断面 3	図版17 第59次調査出土遺物1
図版 6 (1)SD05土層断面 4	図版18 第59次調査出土遺物2
(2)SD05土層断面 5	図版19 第59次調査出土遺物3
(3)SD05上層断面 6	図版20 第59次調査出土遺物4
図版 7 (1)I区南丘陵部確認調査区全景	

I はじめに

1 九州大学統合移転地内調査に至る経緯

平成6年に九州大学が医学部・薬学部等を除いて、福岡市西区元岡・桑原地区に統合移転することが決定された。これを受けて福岡市教育委員会では、九州大学統合移転地を始めとした市内の大规模遺跡開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査を担当する課として、平成7年度に文化財部大規模事業等担当課を発足させた。また同課の発足前の平成7年2月15日から同年12月31日まで移転用地内の踏査を行い、さらに平成8年3月11日から同年9月30日まで試掘調査を実施し、さらに一部の古墳等についても確認調査を行った。

統合移転予定地は福岡市土地開発公社が全城を先行取得し、埋蔵文化財調査・造成工事が終了した後に九州大学が再取得し、造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結んで実施することとなり、平成8年度後半から発掘調査を開始した。

用地内で造成を行わずに現地形のままキャンバスとする地区については、公社先行取得後速やかに九州大学が再取得を行ったが、その後キャンバスの造成工事計画が変更となり、九州大学が再取得した地区についても造成工事によって埋蔵文化財が破壊を受けることが明らかになつたため、埋蔵文化財の発掘調査が必要となつた。九州大学は福岡市に対して、九州大学取得用地内の埋蔵文化財調査について依頼し、福岡市教育委員会は大学側が調査体制を整えるべきとして協議を進めたが、結果的に調査範囲が数万m²に及ぶ大規模なことなどから、平成14年度後半から福岡市教育委員会が調査を行うことで、協定書を結んだ。

九州大学再取得地の調査は、平成14年度後半に包蔵地の全体把握のための確認調査と試掘調査から開始し、平成15年度当初から発掘調査を開始した。調査範囲は農学部農場地区である統合移転地の南西隅部分（G地区）と他の地区数地点で、調査想定面積は4万m²に及び、当初は調査員4名体制で平成19年度中の調査終了を計画していた。しかしその後、九大側の大幅な計画変更により、九大移転計画が当初予定より5年以上遅れ込むこととなつたため、発掘調査についても見直しが行われ、平成16・17年度は調査員2名体制、18年度以降は1名で調査を行うこととなつた。そのため、この時点で発掘調査予定は平成25年度まで、調査報告書作成は平成28年度までかかる見込みであった。この間、平成18年度に、調査担当課が大規模事業等担当課から埋蔵文化財第2課へと組織変更した。

調査地区についての方針も、当初は造成地内の全遺跡を発掘調査する予定であったが、結果的には圃場整備に対する調査方針を適用し、道路・水路等の永久構築物部分、遺構面を削る部分、遺構面から2m以上の盛土を行う部分に対して発掘調査を実施することとなつた。

その後、未試掘部分の試掘調査を行った結果、新たに1万m²近くの要調査地点が増え、調査員を2名増員し、3名体制とし、調査期間も平成26年度中までと変更した。

平成23年9月7日、第56次調査で元岡古墳群G-6号墳石室内から鉄刀1振が発見され、X線解析の結果、「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果口（鍊か）」の19文字が象嵌されていることが判明した。庚寅年は570年と見られ、国内最初の暦使用の証拠と考えられる重要な発見であった。その結果、G-6号及びそれに先行する首長墓と考えられるG-1号墳の保存が決定した。

平成24年度に、福岡市文化財部は教育委員会から経済観光文化局へと移管され、調査担当は福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課の担当となつた。

調査は第1表のとおり現在も発掘調査を継続中である。九州大学取得地区の主要調査区であるG地区

は出土遺物量が極めて多く、第31次調査が約1500箱、今回報告する第42次調査区は1万箱を超える。

2 調査の組織（調査・整理作業関係年度分）

平成19年度～20年度

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 力武卓治→田中壽夫

調査第2係長 常松幹雄（第42次調査担当）

庶務 文化財部文化財管理課管理係 烏越由紀子→垣替美香

平成21年度～22年度

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 田中壽夫

調査第2係長 杉山富雄→菅波正人

主任文化財主事 吉留秀敏→大塚紀宣

庶務 文化財部文化財管理課→埋蔵文化財第1課管理係 山本朋子→井上幸江

平成23年度

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 田中壽夫

調査第2係長 菅波正人

主任文化財主事 長家 伸

大塚紀宣・比嘉えりか

庶務 埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江

平成24年度

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 宮井善朗

調査第2係長 菅波正人

主任文化財主事 大塚紀宣

比嘉えりか（第59次調査担当）・大森真衣子

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

平成25年度

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 宮井善朗

調査第2係長 榎本義嗣

主任文化財主事 大塚紀宣

大森真衣子・清金良太

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

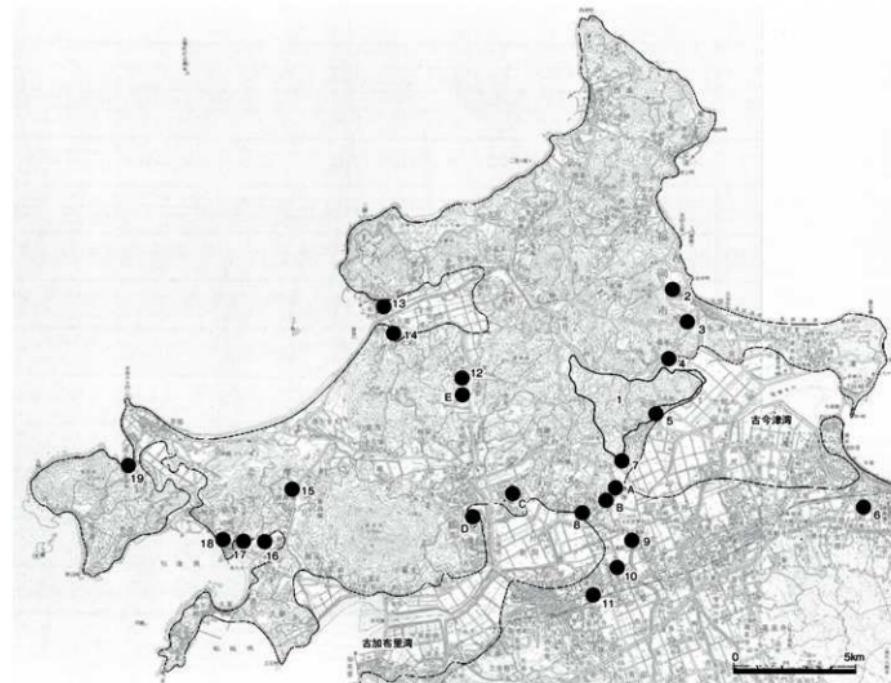
II 元岡・桑原遺跡群の位置と環境

1 地理的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。

現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、繩文海進から中世のある時期までは、中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。この東西の湾入部が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在のような地形をなすに至っている。元岡・桑原遺跡群は、その東側の湾（古今津湾）の北西岸に位置する（第1図）。

今回報告する第18次調査区は遺跡の北東部、第42・59次調査区は遺跡の南端部に位置する。



第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡 (1/100,000)

- 1 元岡・桑原遺跡群 2 大原D道跡 3 大原A道跡 4 桑原興那貝塚 5 元岡瓜生貝塚 6 今宿五郎江道跡 7 治木木・泊リュウサキ道跡 8 泊熊野道跡 9 志登道跡群
10 間道跡群 11 浦志道跡群 12 輪輪道跡 13 吹切道跡 14 久米道跡 15 八熊製鉄道跡 16 須床松原道跡 17 新町道跡 18 松元村道跡 19 天神山貝塚
A 伯大塚古墳 B 鶴道具山古墳 C 津和崎櫛現古墳 D 稲葉古墳群 E 井田原開古墳

2 歴史的環境

(1) 周辺遺跡の概況

縄文時代

糸島半島東部に位置する大原D遺跡（2）では、草創期から晩期にいたる遺物が確認され、特に草創期の焼失住居が注目される。一方、半島北西部の天神山貝塚（19）では、縄文時代前期から後期にかけての遺物を含む貝塚が確認されている。後期になると、半島西部の引津湾岸にある新町遺跡（17）や岐志元村遺跡（18）などで、住居跡や貝塚の形成が見られる。特に、新町遺跡第5次調査で確認された土壙墓には両腕に貝輪を装着した老年女性が埋葬されており、底部に木葉を圧着して施文した特殊な斐形土器を頭部付近に副葬するなど、呪術的・祭的な要素が見られ、注目される。

弥生時代

糸島半島基部付近の集落遺跡としては、弥生中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や溝が確認された志登遺跡群（9）や浦志遺跡群（11）がある。また、元岡・桑原遺跡群の西側に隣接する泊桂木遺跡や泊リュウサキ遺跡（7）では、竪穴住居跡や掘立柱建物などが確認されている。一方、引津湾岸の御床松原遺跡（16）では弥生時代前半から古墳時代にかけての集落跡が確認され、貨泉が出土したことでも注目される。御床松原遺跡では漁撈具が豊富に共伴することから、漁撈を専業的な生業とする集落であったことが分かる。御床松原遺跡や新町遺跡が位置する引津湾は、玄界灘の荒波を受けにくい良好な入り江であったことから、縄文時代以降、多くの遺跡が形成されたのであろう。弥生時代の糸島地域は、『魏書』東夷伝倭人条に登場する「伊都国」に該当し、弥生時代中期以降、対外交流の中継地としての役割を果たしていたことを示す遺跡が確認されている。特に、糸島平野の中央部に位置する糸島市三雲・井原遺跡群では、斐棺墓内から多数の青銅製の鏡や武器類、玉、ガラス壁などが確認されている。

後期から終末期にかけての環濠集落遺跡である今宿五郎江遺跡（6）では、貨泉や楽浪系土器、小銅鐸などの大陸との交流を示す遺物や、集落を画する大型溝などが確認され、伊都国の大規模な拠点集落であったことがわかる。また、浦志遺跡群でも、弥生時代後期頃の把手付壺形土器や小銅鐸が出土し、朝鮮半島との関係が注目される。さらに、糸島市潤遺跡群（10）では終末期から古墳時代初頭にかけての大規模な玉造工房跡や、準構造船が発見され、伊都国での生産活動や交易の状況を示す。

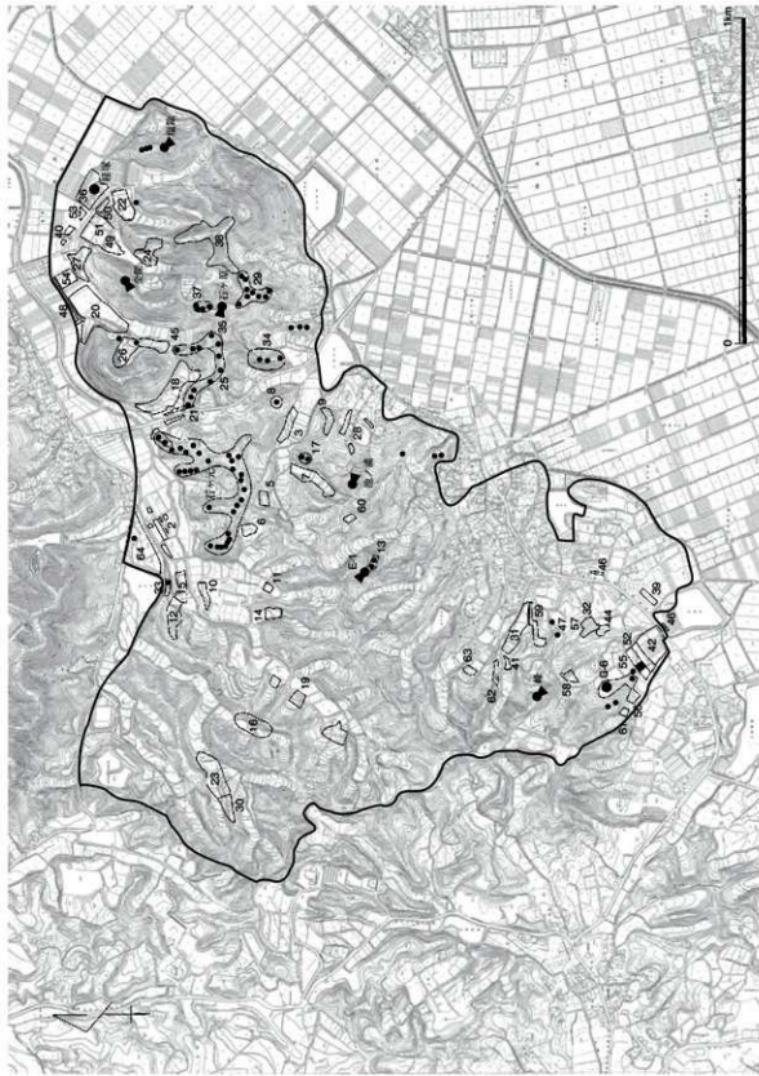
一方、墳墓遺跡としては、国史跡にも指定されている志登支石墓群が知られる。志登支石墓群では、早期から中期にかけての支石墓10基や斐棺墓8基が確認され、柳葉形磨製石鏃が出土した。また、泊熊野遺跡（8）では、大量の水銀朱が副葬された斐棺墓が見られる。志摩地域の久米遺跡（14）では、細型銅劍・銅戈を副葬品にもつ中期前半期の斐棺墓群も確認されている。

古墳時代

古墳時代になると、半島の基部付近に前方後円墳が集中して営まれ、首長墓の展開を追うことができる。前期には、元岡・桑原遺跡群の付近では、泊大塚古墳（A）、御道具山古墳（B）が営まれ、中期以降には元岡・桑原地域へと中心を移す。一方、志摩地域では、津和崎權現古墳（C）・稻葉1号墳・稻葉2号墳（D）・井田原開古墳（E）が連続して築造されるが、中期以降は断絶する。いずれも、湾内を望める丘陵上に位置することが注目される。

古墳時代の集落遺跡は多くないが、朝鮮半島との関連を示す文物が出土することが特徴の一つといえ、新町遺跡や御床松原遺跡では縄蓆文を施文する陶質土器や軟質土器が出土した。

第2図 元岡・桑原遺跡群調査区位置図 (1/15,000)



古代

半島東部の大原A遺跡（2）では製鉄炉と鍛冶炉、八熊製鉄遺跡（15）や蓮輪遺跡（12）でも製鉄炉、また吹切遺跡（13）では炭窯関連遺構が確認され、糸島半島における鉄生産の活発さが伺える。

中世

古代末に桑原庄、さらには糸島半島全域が怡土莊に含まれて以降、今津湾の湾口にある今津が重要な港湾として存在する。鎌倉期の輸入陶磁器が出土する小集落及び墓が散見できるものの、南北朝期から戦国期に山城が作られたのを除くと、現在に至るまで農村として推移していったものと思われる。

（2）既往の調査成果

旧石器時代～縄文時代

第3次調査では、丘陵下の狭い平地部で旧石器時代から縄文時代早期の遺物群と縄文時代草創期～早期の石組炉などの遺構が発見されている。同じく第58次調査でも、縄文時代早期の良好な包含層と石組炉が確認された。後期の桑原飛櫛貝塚では厚さ80cmの貝層から牙製品や貝輪が出土し、土壙墓も確認された。また、第2次調査では晩期の貯蔵穴が確認された。

弥生時代

前期～中期前半の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、中期中頃に遺構・遺物が見られるようになる。第3次調査では、中期後半の竪穴住居跡9軒以上、掘立柱建物などが見つかり、第20次調査では自然流路から当該期の遺物が出土している。弥生時代後期後半から古墳時代初頭では、今回報告する42次調査や52次調査で大量の土器とともに、小銅鐸・小型仿製鏡・貨泉などの青銅製品、木製琴、ワイングラス型漆器など、多彩な遺物が確認された。前述のように、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が確認された泊桂木遺跡や泊リュウサキ遺跡は、42次調査区のすぐ西側にあるため、一連の集落と考えられる。

古墳時代

前期から終末期にかけて、断続的に首長墓が築造される。前期には、御道具山古墳・泊大塚古墳と大型の前方後円墳が営まれる。その後は元岡地区の丘陵上へと位置を変え、元岡E-1号墳・池ノ浦古墳・峰古墳と続く。一方で、桑原地域では、塩除古墳・金屎古墳・経塚古墳・石ヶ原古墳が築造される。終末期には、圭頭大刀などの装飾付大刀5振が出土した元岡G-1号墳に続き、「庚寅」銘大刀が出土したことでも注目されるG-6号墳が築造される。いずれも、古今津湾に面した眺望のよい立地にある。

また、石ヶ元古墳群では金銅製單鳳環頭大刀、鳥足文叩きをもつ陶質土器甕、新羅系と考えられる陶質土器甕、鐵鋗・金槌・銅鐸などの鍛冶道具、鐵滓などが出土した。鍛冶道具副葬や鐵滓供獻から鍛冶集団の存在が伺えるとともに、その背景に渡来系集団の関与が推測される。

古代

石ヶ元古墳群にみたように、少なくとも6世紀後半には元岡・桑原遺跡群で鍛冶が行われていたことは疑いなく、7世紀後半になると製錬炉が出現し、製鉄から鍛冶まで一貫した鉄・鉄器生産が開始される。さらに、奈良時代には複数の谷で集中的に多数の製錬炉が作られるなど、大規模な製鉄関連

第1表 元岡・桑原遺跡群発掘調査一覧

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳数	内容	報告書(集)
9602	第1次	確認	960401～960930			試掘調査	743
9656	石ヶ元古墳群第1・2次	公社	960401～981031	4737	31	円墳	743
9657	桑原金屋古墳第1次	確認	960820～961129	500		前方後円墳	909
9658	石ヶ原古墳第1次	確認	960827～961129	1280		前方後円墳	909
9659	第2次	公社	961111～970325	3007		古墳時代～古代溝、土坑、水田	722
9763	第3次	公社	971129～990222	3500	1	縄文時代石組炉、弥生時代住居跡、円墳	829
9764	第4次	公社	971201～980331	1219		古代～中世掘立柱建物・溝	829
9771	元岡古墳群第2次	確認	971110～971128	60			
9811	第5次	公社	980427～980623	2500		古代土坑・包含層	639
9812	第6次	公社	980630～980828	2800		古墳時代包含層	639
9813	第7次	公社	980506～990611	7500		古墳時代～古代住居跡・掘立柱建物、溝状遺構、踏道跡	1012
9829	第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916～981225	300	1	円墳	829
9851	第9次	公社	981102～981210	190		弥生時代住居跡	1172
9854	第10次	公社	990106～990225	1336		古代～中世包含層	639
9855	第11次	公社	990106～990320	1650		古墳時代～古代土坑。包含層	829
9902	第12次	公社	990406～000328	5500		古代製鉄炉	860・1063
9903	第13次	公社	990412～000316	600	3	前方後円墳、円墳	861
9904	第14次	公社	990422～990722	1200		古代包含層	639
9923	第15次	公社	990611～990928	3500		古代包含層、中世水田	860
9933	第16次	公社	990602～991110	1200		古代包含層	639
9934	第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910～991208	517	2	円墳	861
9946	第18次	公社	991010～020921	16800		古墳時代～古代住居跡・掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	1063・1102・1172
9947	第19次	公社	991016～991215	3000		古代包含層	743
0001	第20次	公社	000405～030523	20130		古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962・963・964・1105
0002	第21次(石ヶ元古墳群)	公社	000405～000921	3170	3	円墳	861
0033	第22次	公社	000410～001025	4750		古代掘立柱建物、製鉄関係遺構	909
0019	第23次	公社	000601～010331	8110		確認調査	743
0034	第24次	公社	000821～030320	500		古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052	第25次(元岡古墳群A群)	公社	001124～011130	2200	7	円墳	861
0110	第26次	公社	010405～011130	5487	1	古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153	第27次	公社	011201～020820	4495		古墳時代住居跡	909
0154	第28次	公社	020201～020704	2200		古代～中世包含層	909
0202	第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405～030930	4000	11	円墳	861
0240	第30次	公社	020801～020930	2450		古代包含層	743
0242	第31次	九大	030401～060113	9000		古代瓦窯、掘立柱建物、鍛冶炉、古墳時代祭祀関連	1103
0255	第32次	九大	030120～030331	1700		試掘	
0303	第33次	九大	030408～030519	450	1	円墳	1064
0310	第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401～030812	1200	3	円墳	909
0340	第35次(石ヶ原古墳)	公社	030520～050112	1853	1	前方後円墳	909
0341	第36次(経塚古墳)	公社	030901～050331	3500		大型円墳、中近世墓群	1011・1105
0365	第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020～040226	461	4	円墳	861
0371	第38次(水崎城)	公社	040308～050117	1000		中世山城	1105
0404	第39次	民間	040405～040416	88		弥生時代包含層	
0410	第40次	九大	040407～040430	1000		包含層	1064
0435	第41次	九大	040507～041130	900		古代包含層、製鉄関係遺構	1064
0451	第42次	九大	041001～090331	7000		縄文時代晚期～古墳時代初頭自然流路	1174・本報告
0486	第43次	九大	050207～050308	500		古墳墓道	1173
0523	第44次	九大	050601～051020	1189		古墳～古代集落	1064
0535	第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720～051122	1128	3	円墳	1105
0538	第46次	福岡市立木	050808～051011	403	1	弥生～中世集落	965
0562	第47次(元岡I～I号墳)	九大	060105～060310	107		円墳	1064
0563	第48次	公社	060110～060223	447		弥生～古代集落	1173
0611	第49次	公社	060403～070322	4000		古墳時代～古代集落	1173
0709	第50次	公社	070401～070827	811		近世末～近代墓地	1173
0741	第51次	公社	070829～081003	6888		古墳時代～古代集落	1173
0763	第52次	九大	080121～100331	3000		弥生～古墳時代初頭自然流路	
0768	第53次	九大	080215～080409	770		古代集落	
0844	第54次	公社	081006～090109	1872		古代集落	1173
1001	第55次	九大	100401～110330	3300	2	大型方墳	
1043	第56次	九大	110411～111228	6970	2	大型円墳、中世集落	1210
1103	第57次	九大	110413～130906	6700		古墳時代包含層、古代～中世集落	
1110	第58次	九大	110620～130315	1152		縄文時代早期集落、古代包含層	
1140	第59次	九大	120123～130315	2298		古墳時代～中世集落	
1306	第60次	九大	135022～130829	271		古墳～古代包含層	
1315	第61次	九大	130701～131023	407		古代包含層	
1327	第62次	九大	130901～131115	1374		中世集落	
1328	第63次	九大	131001～継続中			古代～中世包含層	
1331	第64次	九大	131101～継続中			弥生～古墳集落	

遺構群が出現する。

第7次調査では、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半に集落が営まれるが、7世紀後半にそれらを再開発して倉庫や施設などを建設し、貯水池が築かれ、8世紀中頃以降には製鍊炉6基、鍛冶炉14基が営まれる。貯水池からは瓦や墨書き土器、硯、木簡などが出土し、特に「壬辰年（692年）韓鉄…」と記された木簡は、この時期に確実に鉄生産が行われたことを示す資料として注目される。また、第12次・18次・31次調査などその他の谷部でも、製鉄関連施設が多数確認され、木簡や墨書き土器、祭祀具、帶金具、銅權、硯など、公的な官衙施設に連関する遺物などが出土している。また、前述した志摩の八熊製鉄遺跡のように、糸島地域の他の遺跡でも製鉄関連遺跡が発見されており、他地域とは隔絶した状況がうかがえる。

その歴史的背景には、九州島に設置された中央政府の先駆機関である大宰府が行政や外交を担当するなかで、朝鮮半島に対応する最前線として糸島半島を重要視していたことなどが想定されている。

平安時代には、第31次調査で瓦の生産も行われ、鴻臚館へ供給された可能性がある。

＜参考文献＞

井上裕弘編『八熊製鉄遺跡 大牟田遺跡』志摩町文化財調査報告書第2集 1982年

岡部裕俊編『泊桂木遺跡』前原市文化財調査報告書第64集 1997年

河合修編『新町・御床松原遺跡』糸島市文化財調査報告書第2集 2010年

常松幹雄編『浦志遺跡A地点』前原町文化財調査報告書第15集 1984年

平尾和久ほか『泊リュウサキ遺跡』前原市文化財調査報告書第102集 2009年

福田博右編『泊桂木遺跡II』前原市文化財調査報告書第98集 2008年

第2表 元岡・桑原遺跡群発掘調査報告書一覧

書名	シリーズ名	所収調査次数	発行年
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 693集		2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 743集		2003
元岡・桑原遺跡群1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 722集	第2次	2002
元岡・桑原遺跡群2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744集	桑原石ヶ元古墳群	2003
元岡・桑原遺跡群3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 829集	第3・4・8・11次	2004
元岡・桑原遺跡群4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 860集	第12・15・24次	2005
元岡・桑原遺跡群5	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 861集	第13・17・25・29・37次	2005
元岡・桑原遺跡群6	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909集	第22・27・28・34次・金屋古墳・石ヶ原古墳	2006
元岡・桑原遺跡群7	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 910集	第28次	2006
元岡・桑原遺跡群8	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 962集	第20次	2007
元岡・桑原遺跡群9	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 963集	第26次	2007
元岡・桑原遺跡群10	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 964集	第46次	2007
元岡・桑原遺跡群11	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1011集	第23・30・36次	2008
元岡・桑原遺跡群12	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1012集	第7次	2008
元岡・桑原遺跡群13	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1013集	第20次・2	2008
元岡・桑原遺跡群14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1063集	第12・18・20次・3	2009
元岡・桑原遺跡群15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1064集	第33・40・41・44・47次	2009
元岡・桑原遺跡群16	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102集	第18次・2	2010
元岡・桑原遺跡群17	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1103集	第31次	2010
元岡・桑原遺跡群18	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1105集	第20次・4・36次・2・38・45次	2011
元岡・桑原遺跡群19	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1172集	第9・18次・3	2012
元岡・桑原遺跡群20	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1173集	第43・48・49・50・51・54次	2012
元岡・桑原遺跡群21	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1174集	第42次・1	2012
元岡・桑原遺跡群22	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1210集	第56次調査・1	2013
桑原遺跡群1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 432集	第1次発掘調査報告	1995
桑原遺跡群2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 480集	飛鶴貝塚第1次調査	1996

III 第18次調査の記録－4－

1 はじめに

第18次調査は、すでに発掘調査報告書が3冊刊行されている（註）。当初、調査報告書はこの3冊で完結予定であったが、調査担当者である吉留秀敏が2冊目刊行後に病魔におそれ、3冊目の報告書でもすべてを報告仕切らなかった。吉留は3冊目の報告書を刊行したほぼ1年後に他界した。

遺構・土層についてはほぼ3冊の報告書で報告済みであるが、第4面以下の遺物の一部と、弥生時代以前の遺物などが未報告となっていた。その後、本執筆者である米倉が未報告の遺物等を確認したところ、トレス済みの出土遺物図面約30枚、実測済み石器図面約50点、未実測の土器・石器が200点以上あることが判明した。これらの遺物を平成25年度中に報告すべく作業を行っていたところ、さらに未実測の木製品があることが判明したため、今回はSX100・404出土遺物の未報告分の内、吉留による作業が終了している分と今回新たに実測を行った分を報告し、実測等の作業が間に合わなかつた礫石器の大半と木製品等については、さらに次年度以降に報告を行う。

報告に当たっては、吉留が版組・トレスしたものができるだけそのまま掲載するようにし、今回新たに実測した分は別途版組を行ったため、同一器種でページが異なるところに掲載したものがある。また、SX100・404を北部・中部・南部に分けて遺物の報告を行っているが、米倉が途中まで当初の意を十分くみ取れなかつたため、一部挿図で掲載場所が本来の位置と異なっている部分があることが最後になって判明したが、時間の関係上、そのままにした。

註）「元岡・桑原遺跡群14」 2009 福岡市教育委員会

「元岡・桑原遺跡群16」 2010 福岡市教育委員会

「元岡・桑原遺跡群19」 2012 福岡市教育委員会

2 第18次調査の概要と今回報告分

第18次調査は、水崎山から北に派生する二つの尾根に挟まれた谷の中に立地する。谷の幅約100m、奥行き300mを測り、その標高は12～46mで、上流に行くに従い急斜面となる。全体が谷の中の斜面のため、6m以上の埋没土及び造成土に覆われており、土層堆積物の様相は複雑であるが、基本的な土層は次のとおりである。I層：腐植土、II層：暗褐色砂～シルト質土、III層：褐色有機質シルト質土、IV層：黒色粘質土・上部砂礫、V層：黄褐色レス、VI層：下部砂礫、VII層：岩盤（花崗岩）となる。

遺跡は地下2～6mに埋没して全体が5面からなっている。表土直下～II層上位で第1面（近世）・第2面（中世）、II層上位で第3面（古代）、III層上位で第4面（古墳時代後期）、IV層上部～V層上部で第5面（旧石器時代～弥生時代）を認定している。このうち、1～4面については既刊の3冊の報告書で報告済みで、4面で検出した谷底近くの包含層であるSX100・404（同一包含層で地点により名称が異なっている）の出土遺物の一部までを報告しており、同包含層の残余遺物と5面（包含層）の遺物が未報告となっている。

本書では、SX100・404の未報告遺物及び調査区全体から出土した弥生時代・縄文時代・旧石器時代遺物を報告する。出土した石器の内、磨製石斧・打製石斧を除く礫石器と木製品については今回報告しきれずに、別途報告を行う予定である。また、吉留が設定した第5面については、出土遺物の

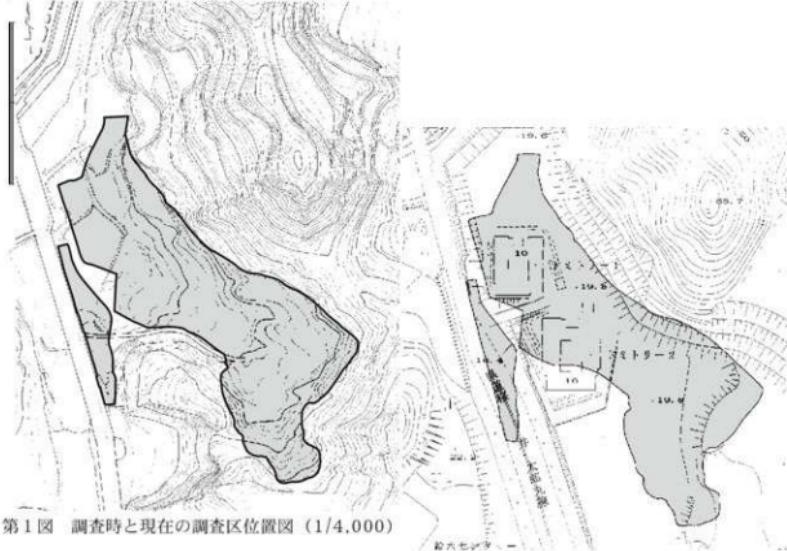
ラベルや野帳等に明確な記述が無く、「元岡・桑原遺跡群16」9ページに「IV層上部で第5面のうち弥生時代～縄文時代、V層上部で第5面のうち旧石器時代資料を検出、確認した」との記述があることから、本報告書で報告している弥生土器・縄文土器・旧石器時代から弥生時代の石器の大半がこのV層に該当するものと思われる。

3 SX 100・404出土遺物

前報告書（「元岡・桑原遺跡群19」）で報告している分の残りの遺物である。今回報告分には、吉留がすでに版組し、トレースも終わっている分と、実測が終了しておらず、今回新たに実測・版組・整図を行った分がある。そのため、すでに報告している分も含め、グリッド（区）ごとの器種分類がうまく版組に活かされていない場合がある。今回の報告に当たって、土器については前号と同様、1点ずつの説明は省き、概略の傾向と特色ある遺物の説明にとどめる。石器については本来なら一覧表を付すべきであるが、できるだけ個別の報告を行うことで一覧表に代えたい。

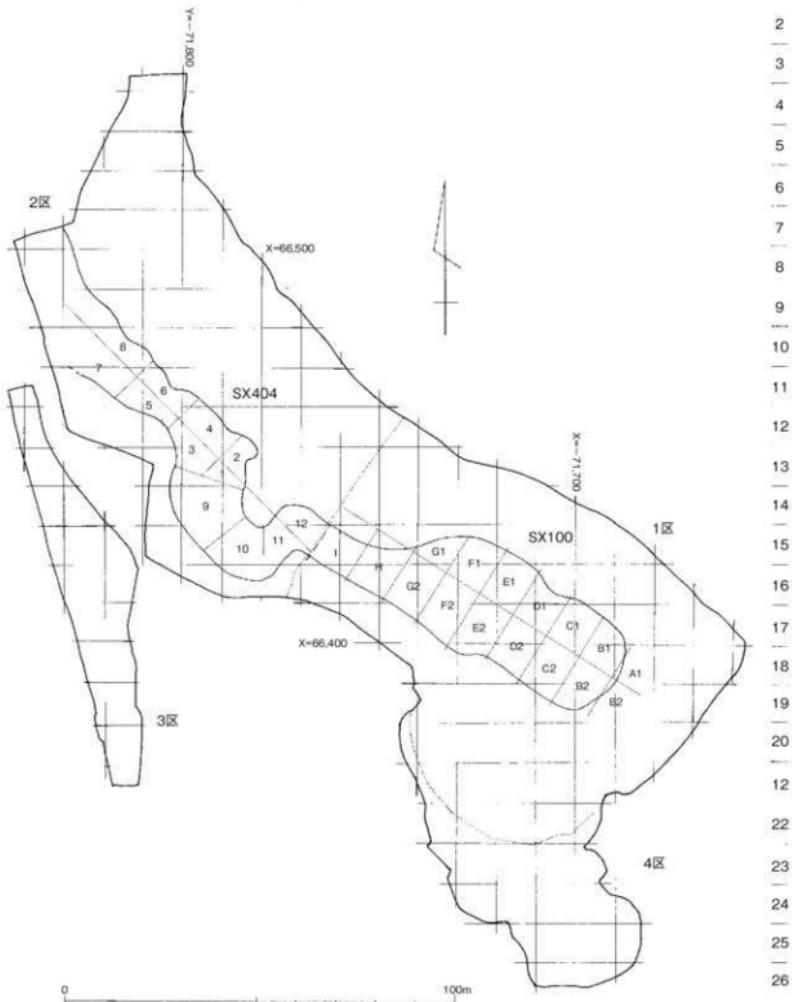
（1）北部（A～C区）出土須恵器・土師器（第3～21図）

北部出土遺物は前回まで未報告のものである。須恵器は古墳時代後期から奈良時代の壺身・壺蓋・壺・甕が多く出土しているほか、堤瓶・高坏・横瓶などが出土している。壺蓋・壺身のうち23点にヘラ記号があり、「×」と「井」が目立つ。127の外底部はヘラ切り調整で、「官」の墨書が施されている。壺・甕の口縁部直下に連続する「×」や鋸歯状などのヘラ記号を施したものもある。土師器も同様の時期のもので、壺・小型壺・甕が多く出土し、高坏も比較的多く出土している。また甕の中に外面にタタキを施したものも少量含まれている。

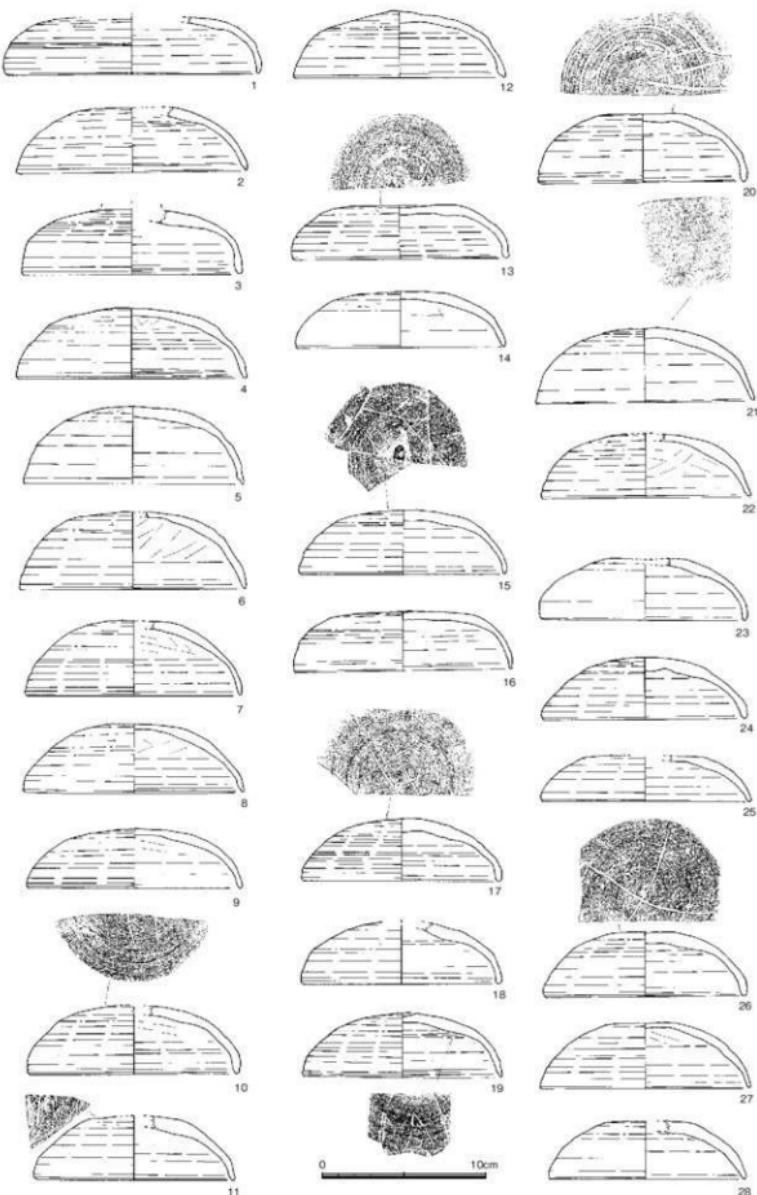


第1図 調査時と現在の調査区位置図（1/4,000）

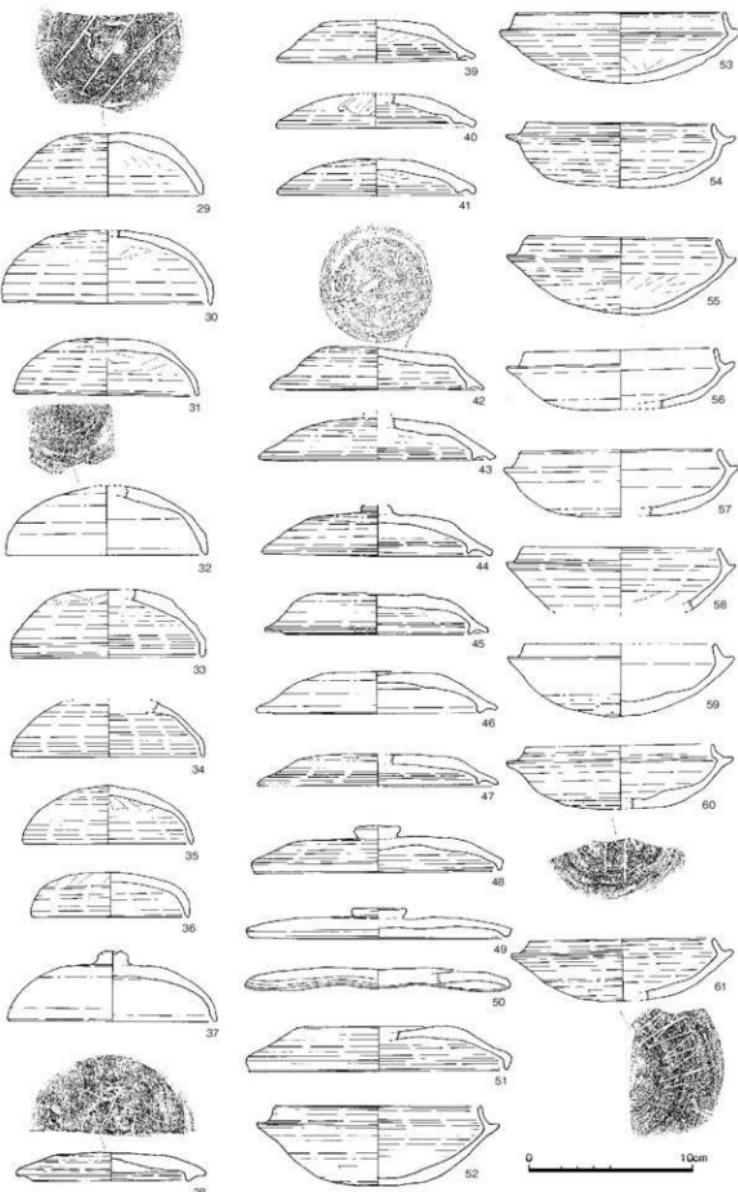
[T | S | R | Q | P | O | N | M | L | K | J | I | H | G | F | E | D | C | B]



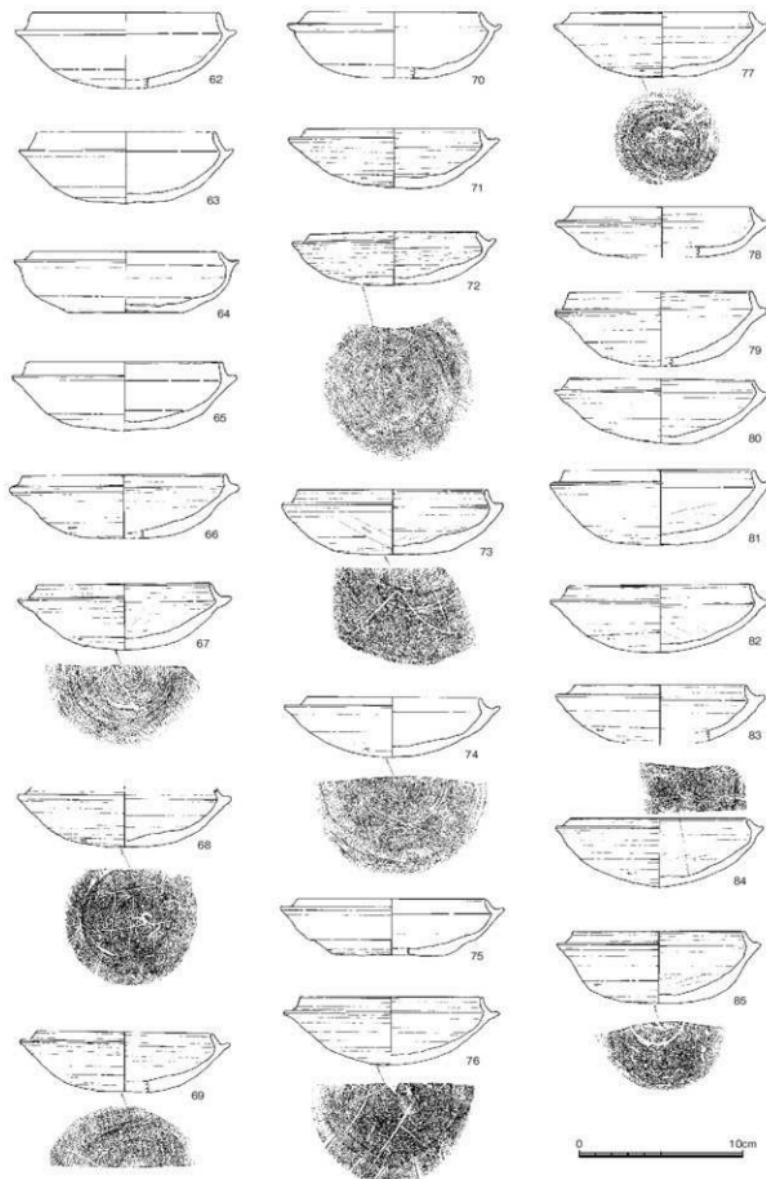
第2図 第18次調査のグリッド配置と谷部包含層位置図 (1/1,000)



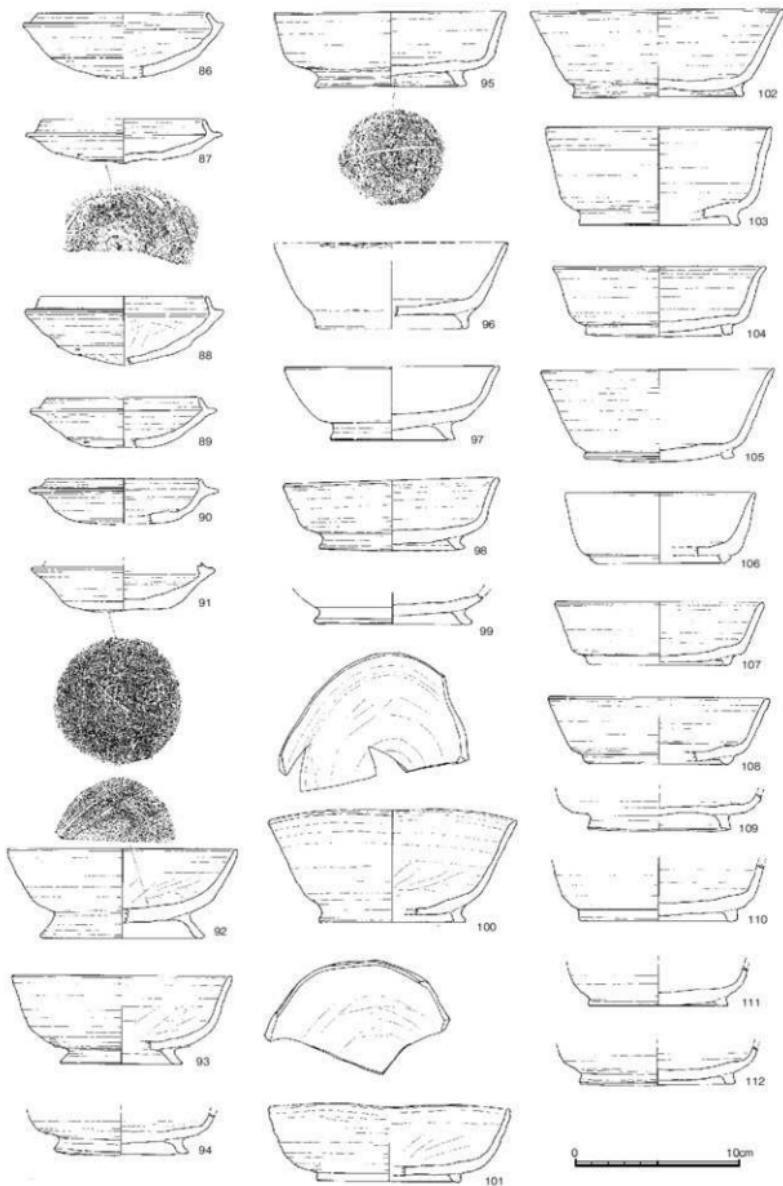
第3図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物1 (1/3)



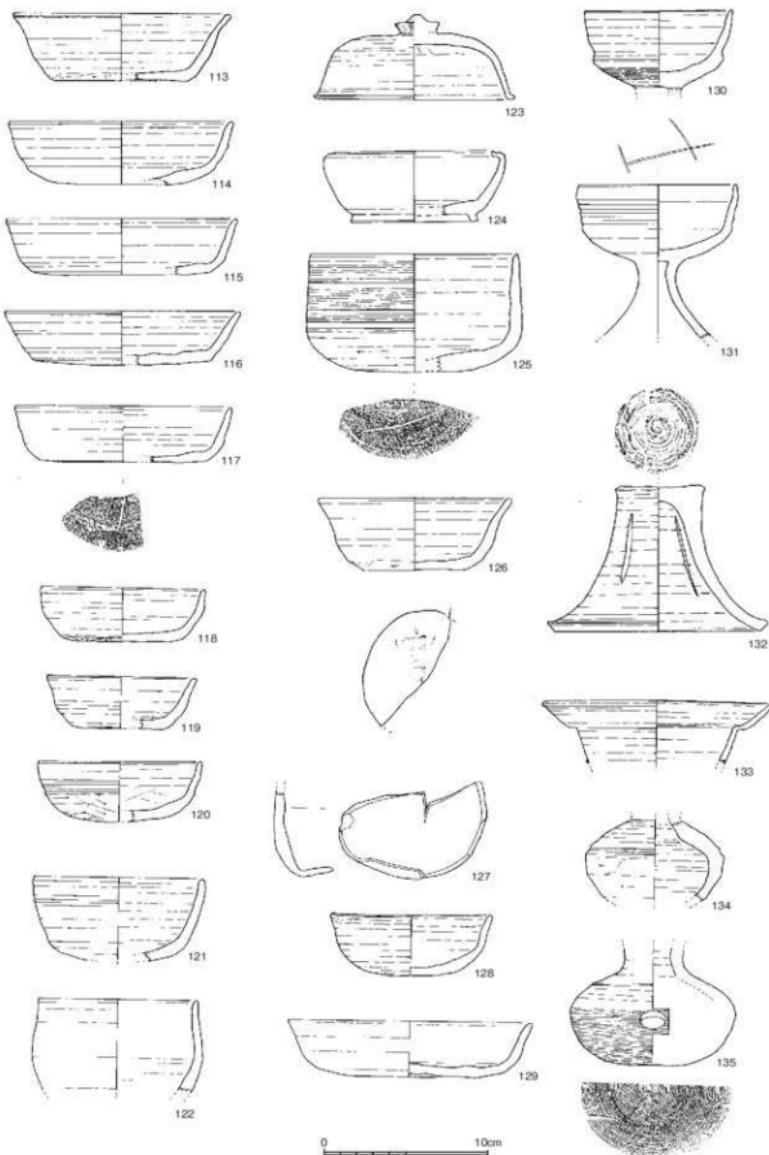
第4図 包含層SX100南部(A～C区)出土遺物2 (1/3)



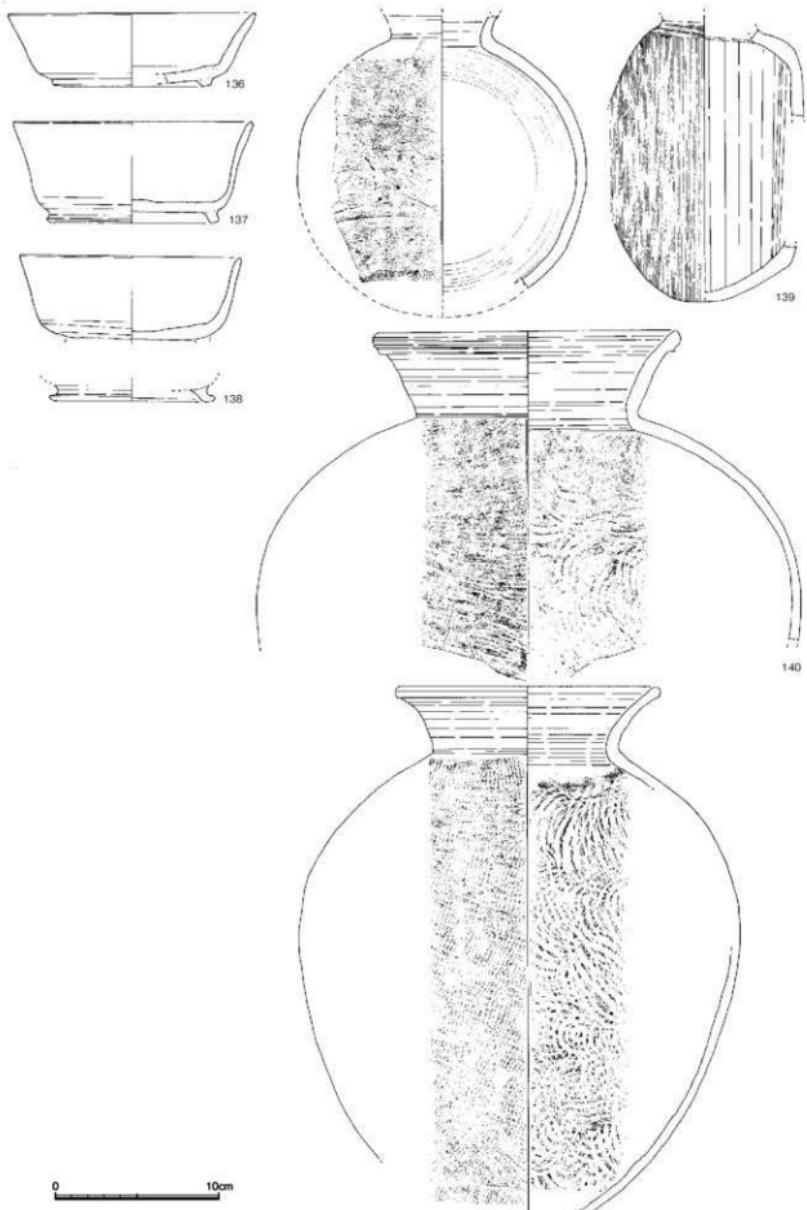
第5図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物3（1/3）



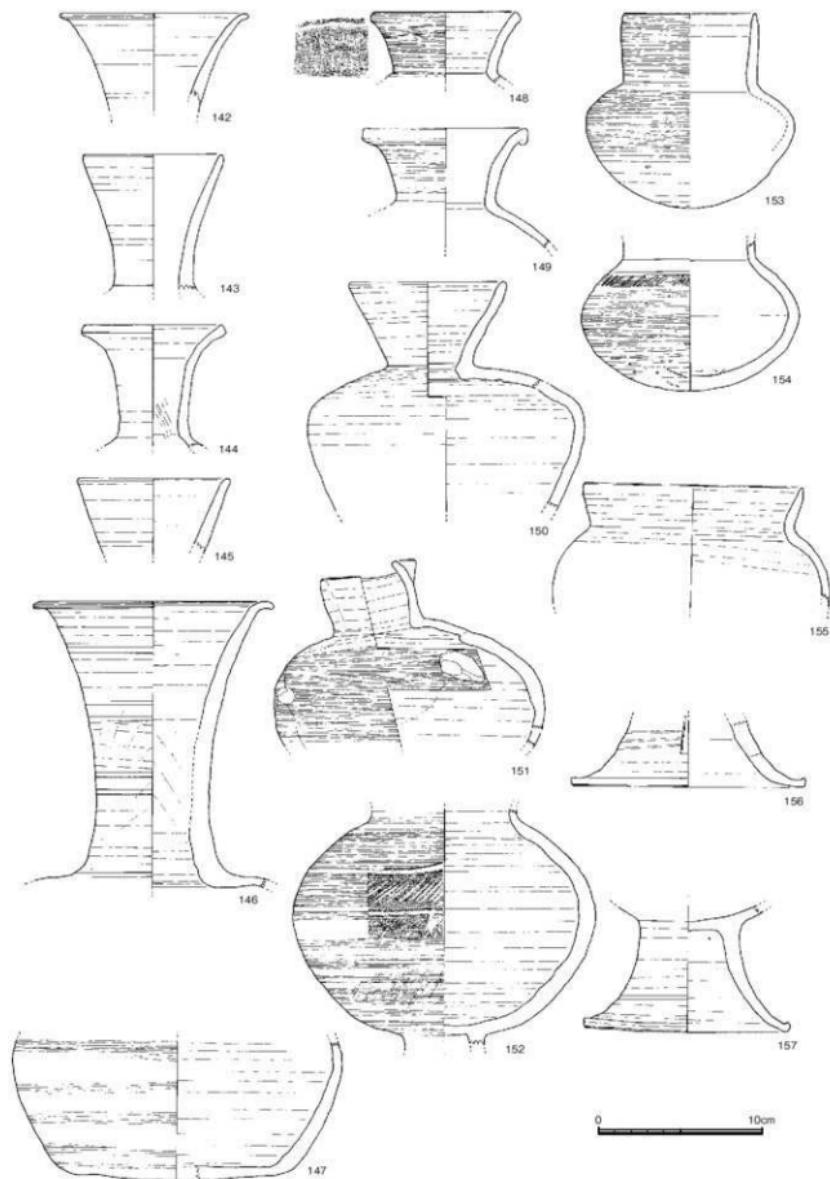
第6図 包含層SX100南部 (A~C区) 出土遺物4 (1/3)



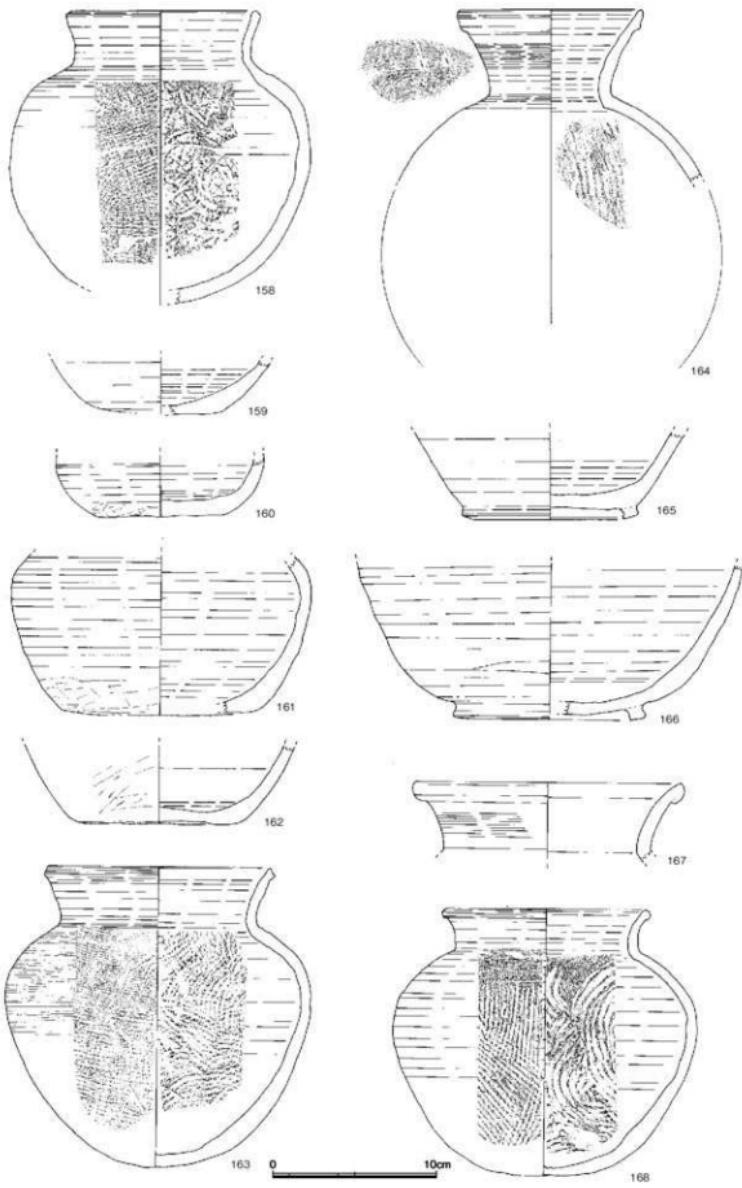
第7図 包含層SX 100南部(A~C区)出土遺物5(1/3)



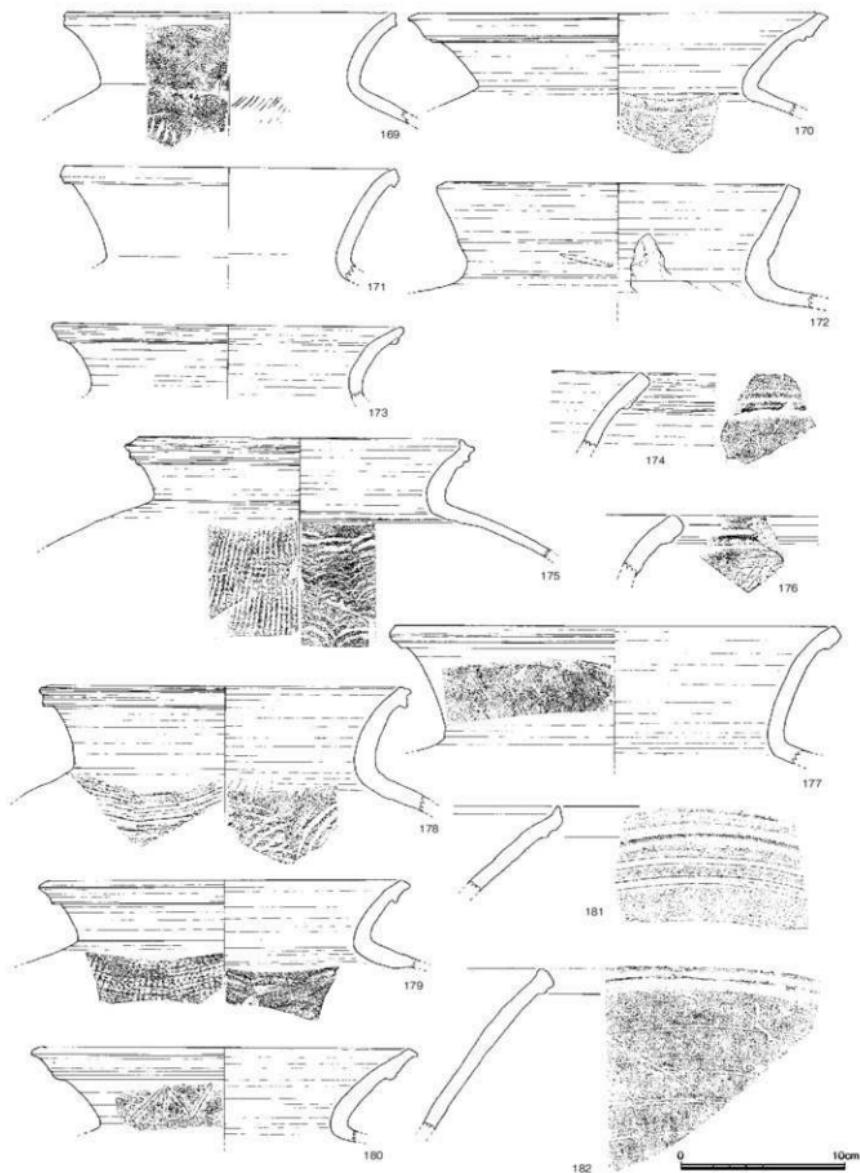
第8図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物6 (1/3)



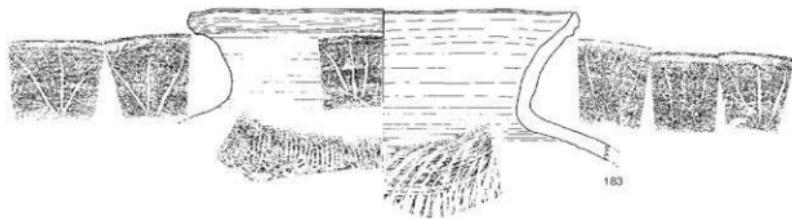
第9図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物7（1/3）



第10図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物8（1/3）



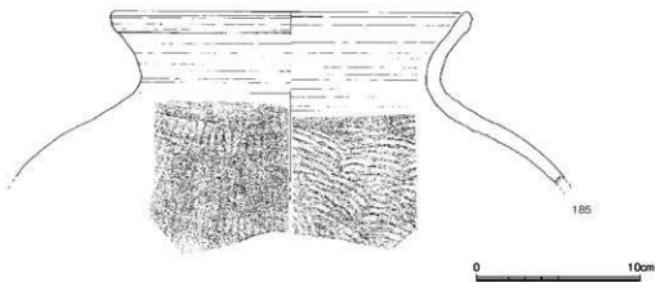
第11図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物9（1/3）



183



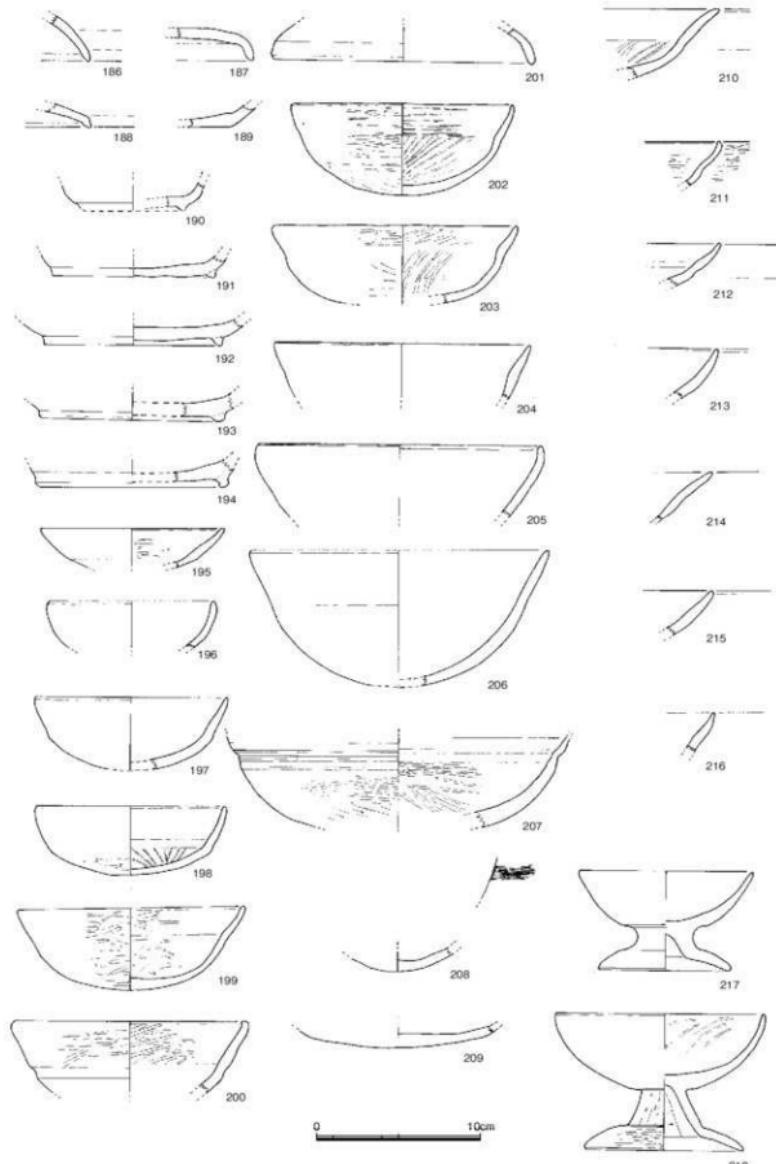
184



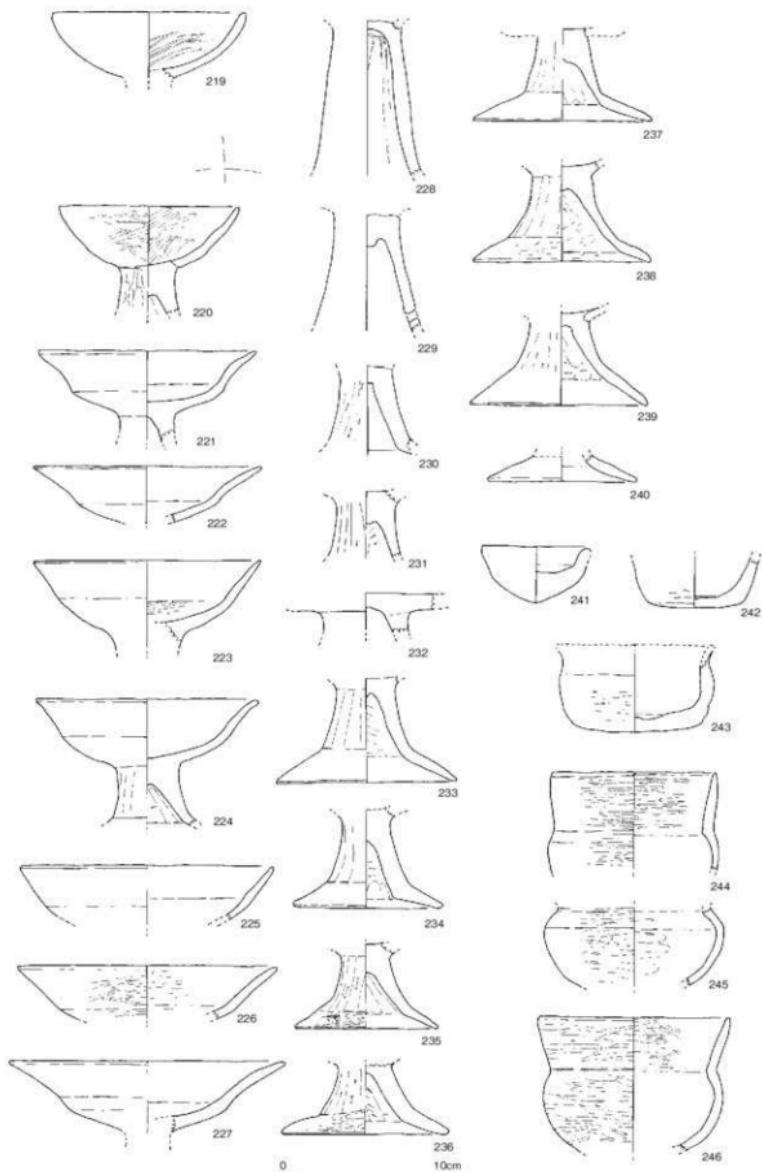
185

0 10cm

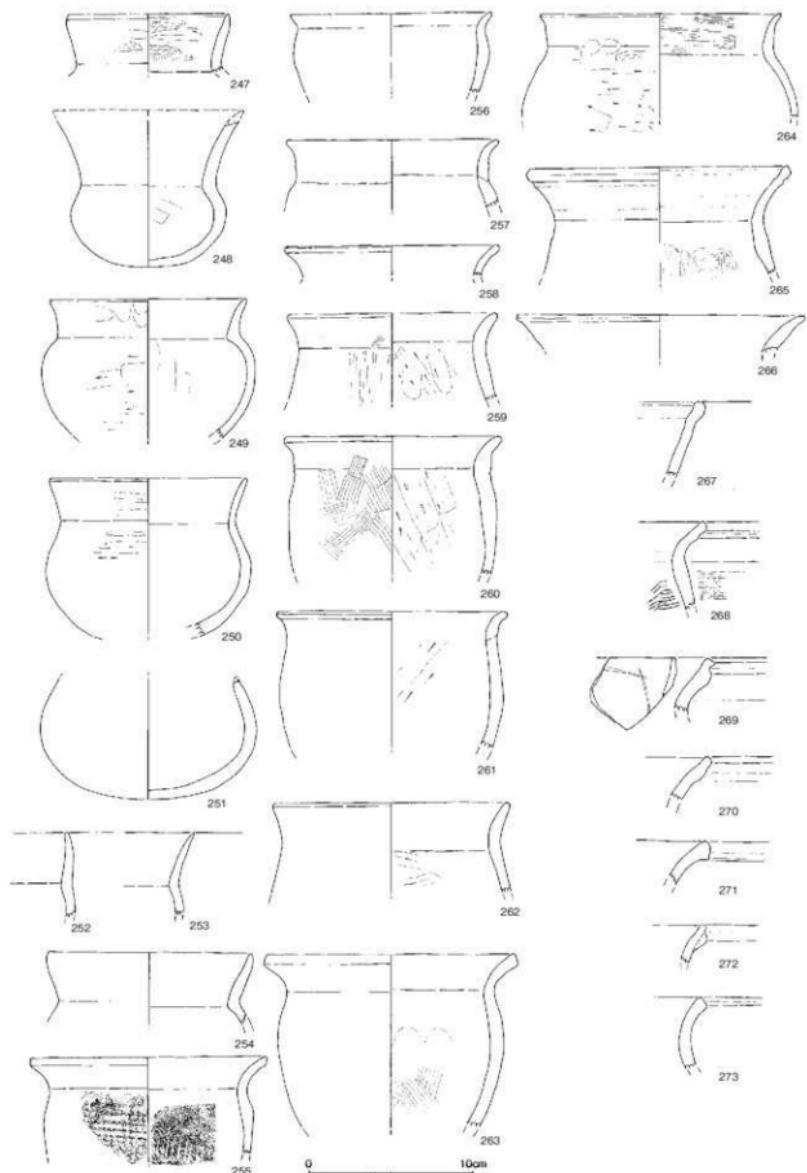
第12図 包含層S X 100南部（A～C区）出土遺物10（1/3）



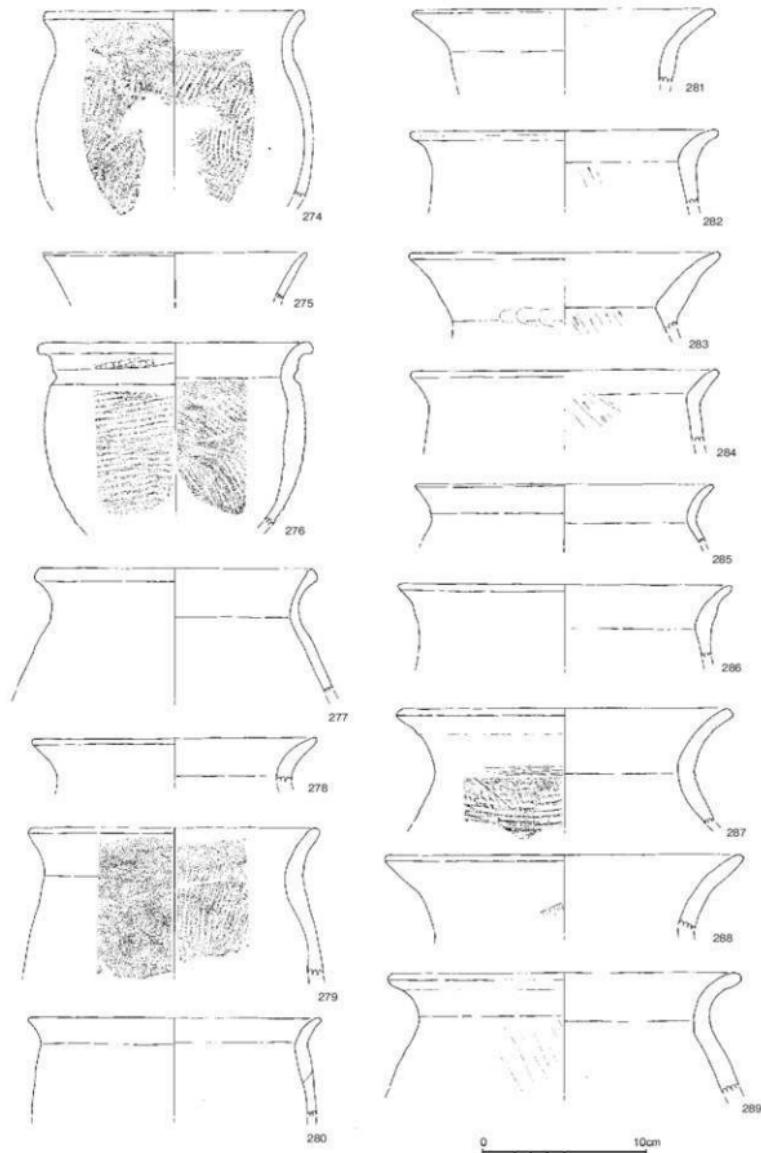
第13図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物11 (1/3)



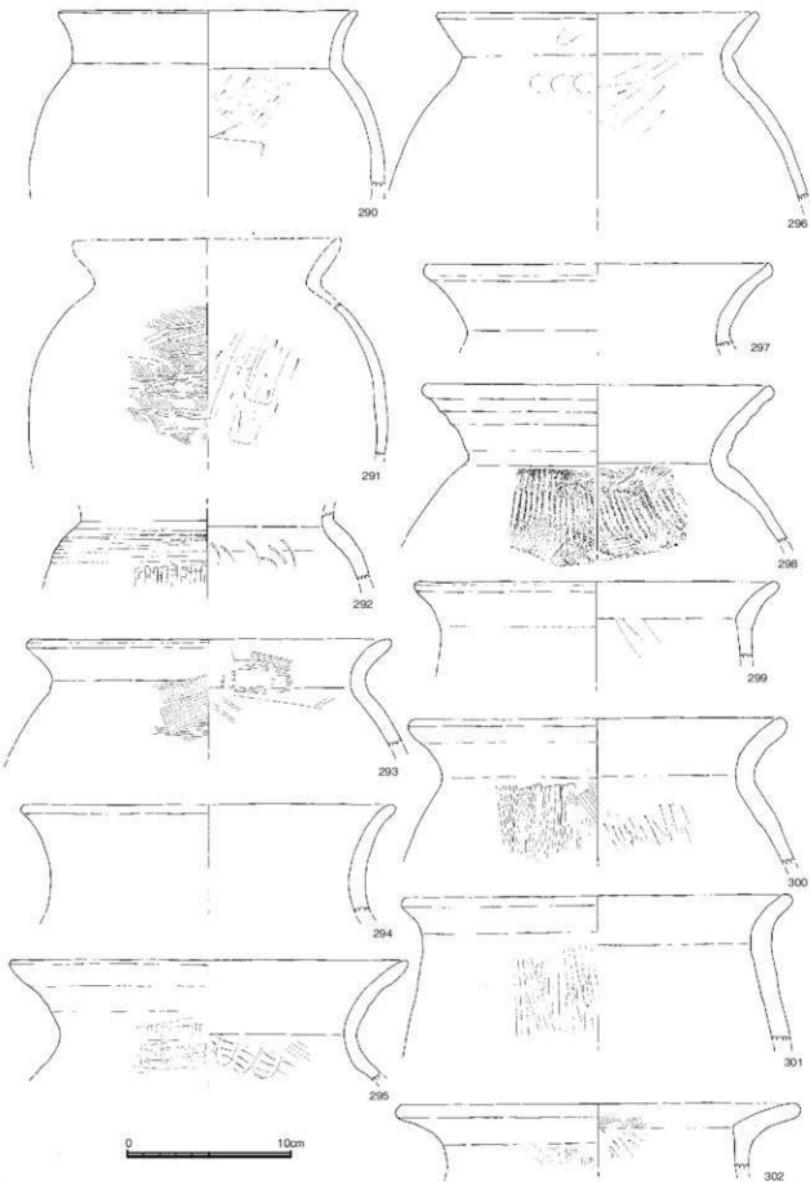
第14図 包含層SX100南部(A~C区)出土遺物12(1/3)



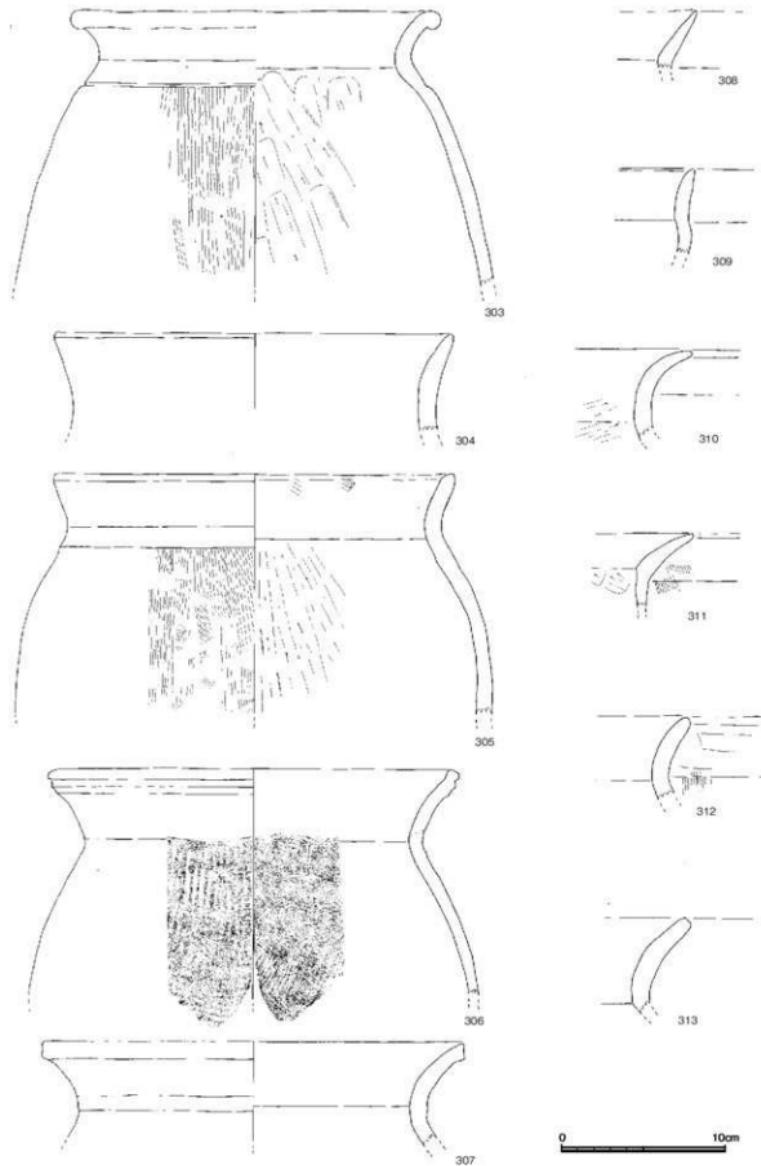
第15図 包含層SX 100南部 (A~C区) 出土遺物13 (1/3)



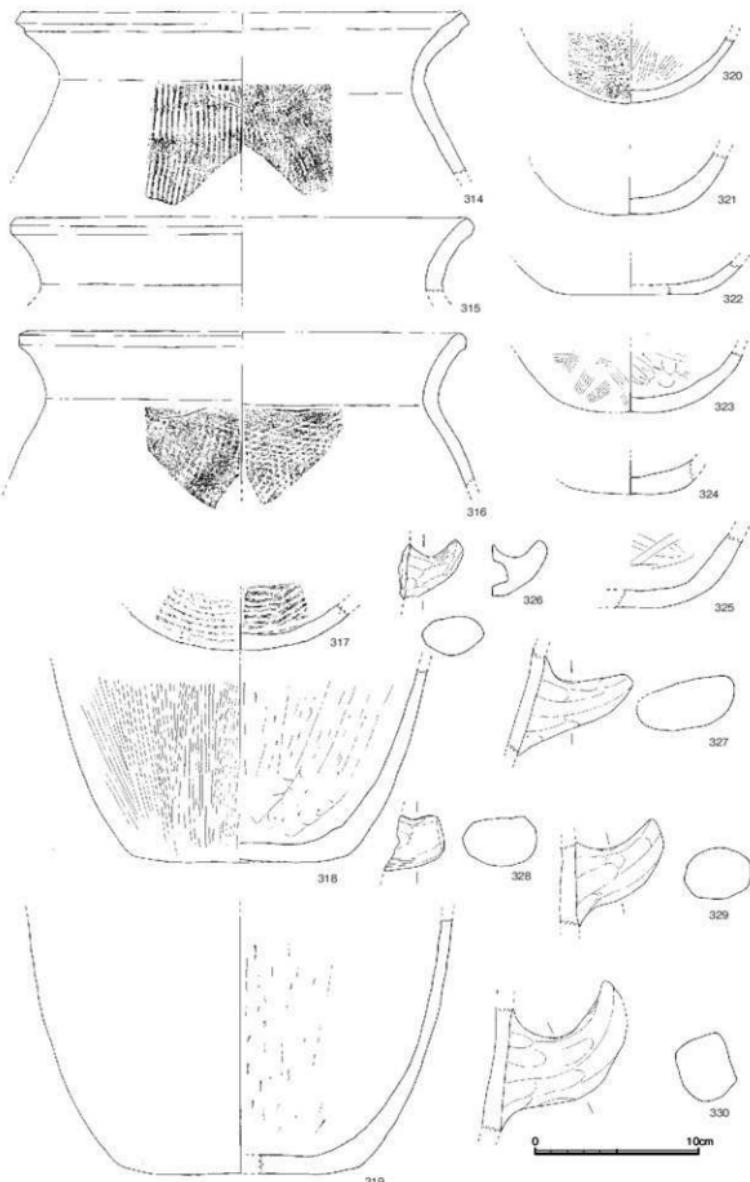
第16図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物14（1/3）



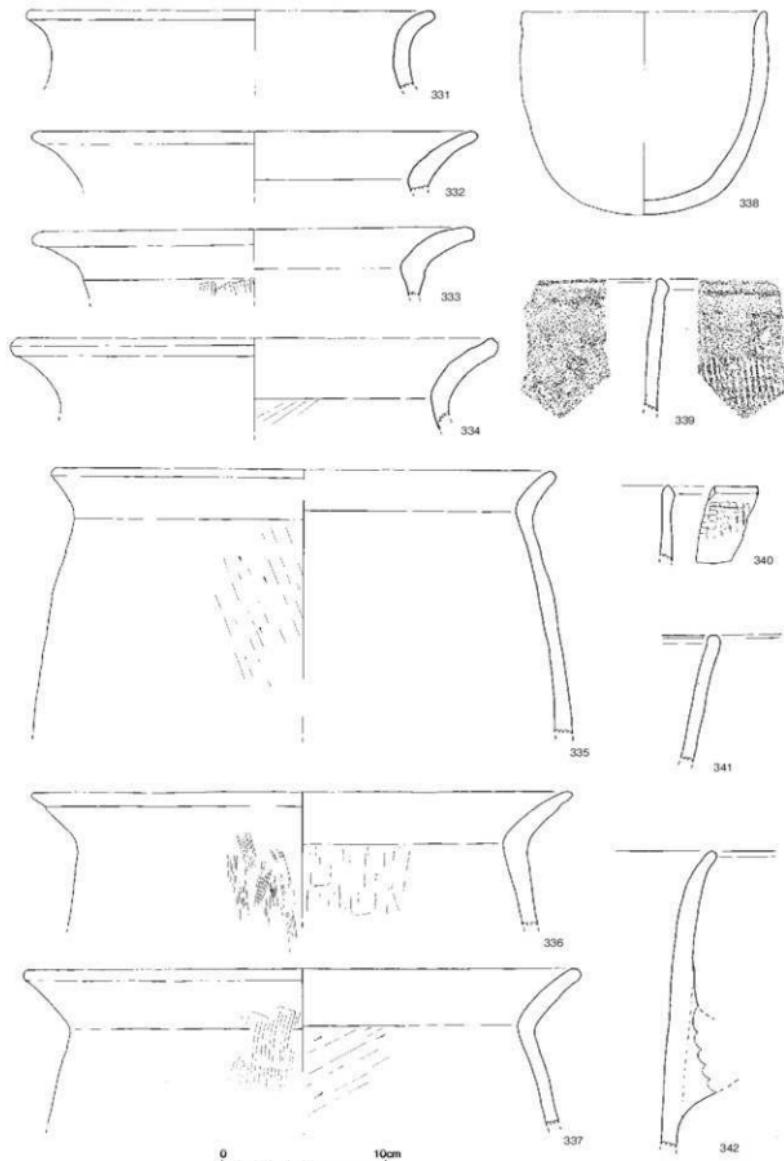
第17図 包含層S X 100南部（A～C区）出土遺物15 (1/3)



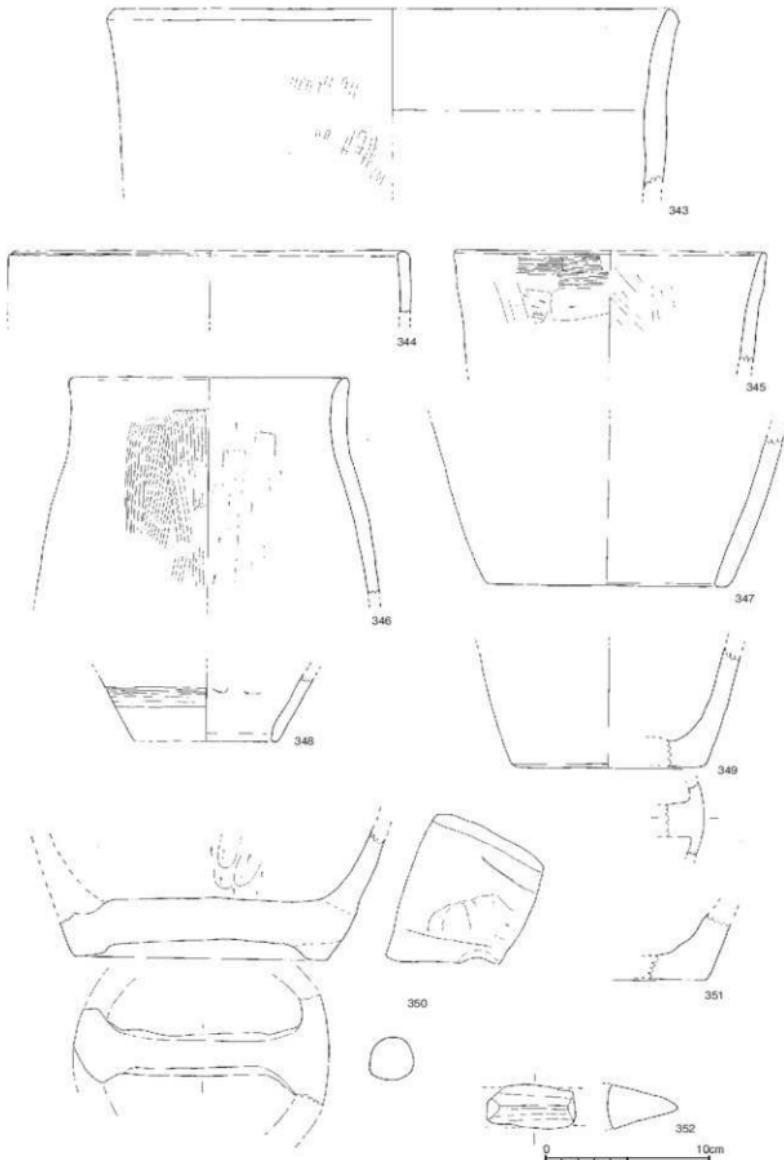
第18図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物16（1/3）



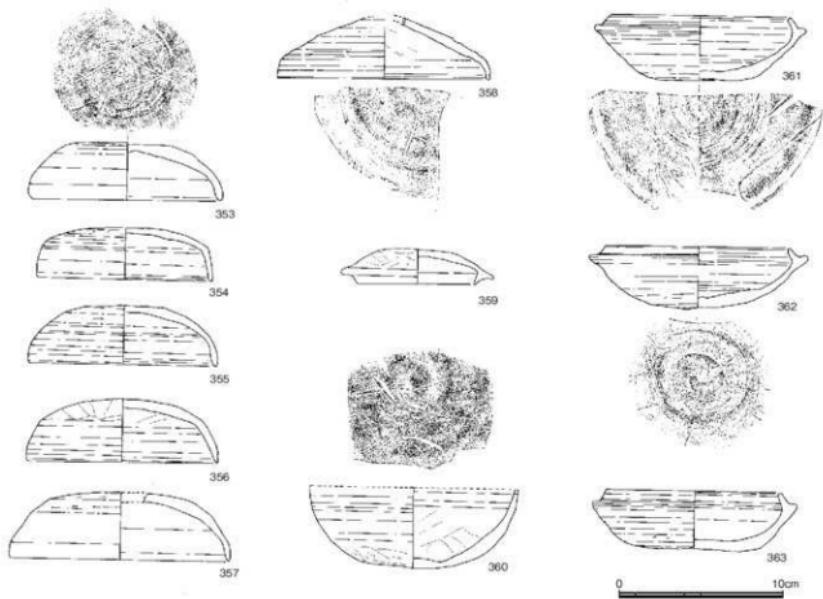
第19図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物17 (1/3)



第20図 包含層SX100南部（A～C区）出土遺物18 (1/3)



第21図 包含層SX 100南部（A～C区）出土遺物19 (1/3)

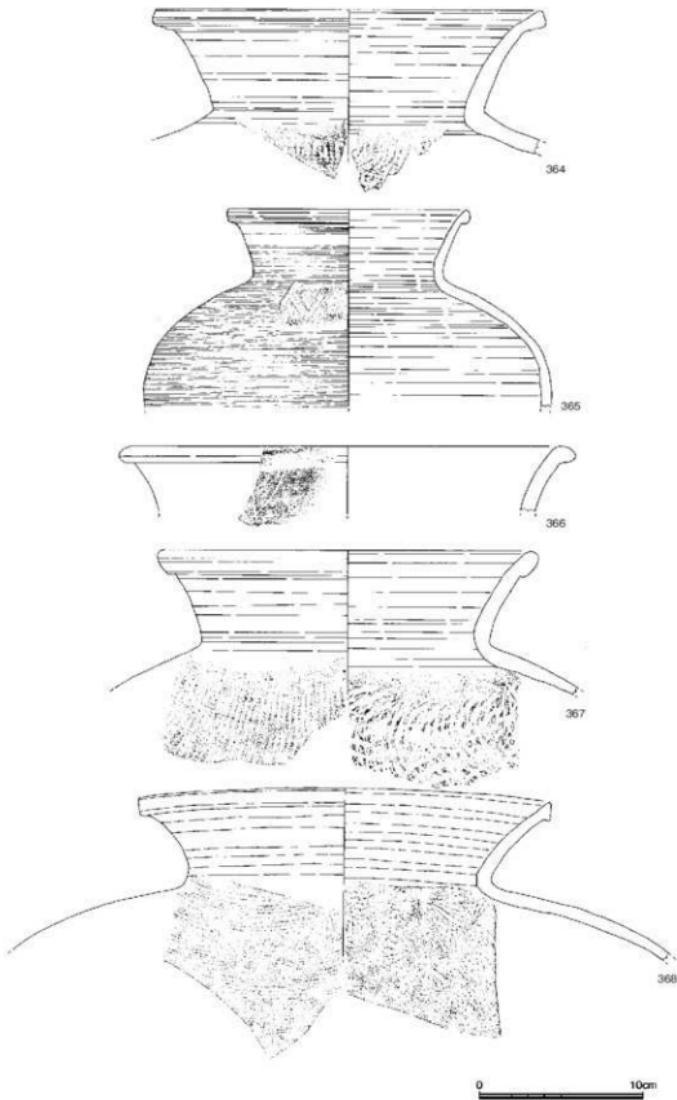


第22図 包含層SX 100中部（D～F区）出土遺物1（1/3）

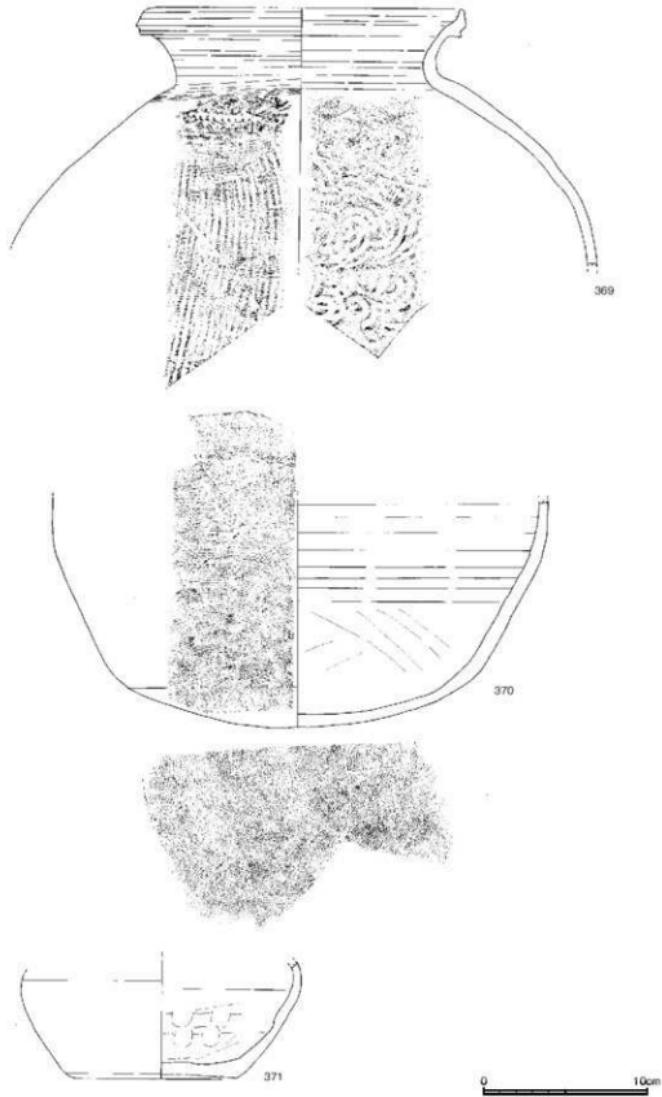
（2）中部（D～F区）出土須恵器・土師器・陶磁器（第22～36図）

前報告書で報告している分の追加遺物である。前報告では200点を超える壺蓋・身の他、椀・高坏・鉢・皿・壺・瓶・平瓶・横瓶・堤瓶・甕などの須恵器が報告されている。本報告では、上記須恵器の追加資料と土師器などを掲載した。土師器は椀・高坏の他、甕が大量に出土している。甕は総じて小型のものが多い。甕の中には外面にタタキ、内面に当て具痕を有しているものが少量ある。瓶も数点出土しているが、底部が遺存しているものはすべて橋状のものである。520・521は外面にタタキを施し、内面に当て具痕がある。

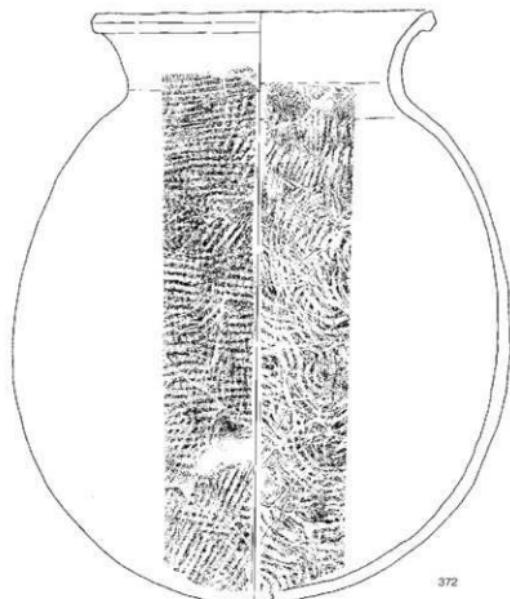
古代末から中世の遺物も少量出土している。529は瓦器椀で、口径15.2cm、器高6.4cmを測る。531はミニチュア土器で、口径4.0cm、器高2.9cmを測る。532は陶製の火舎である。外面に「井」形と「口」形のスタンプを押している。口径37.4cmを測る。533は須恵質の鉢で、口縁端部内面を擒み上げている。口径34.5cm、器高14.7cmを測る。534は瓦質の捕鉢で、目は7条ある。535は把手か。536は土師器坏で、口径14.0cm、器高2.7cmを測る。



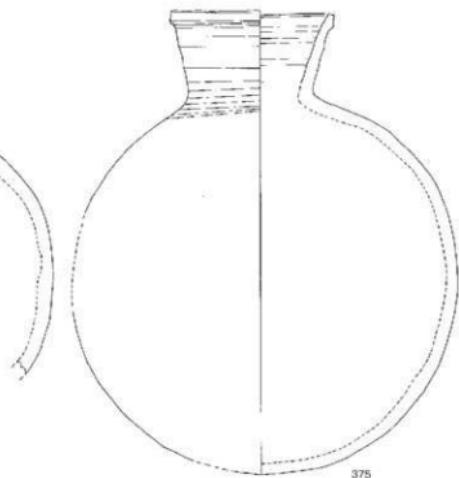
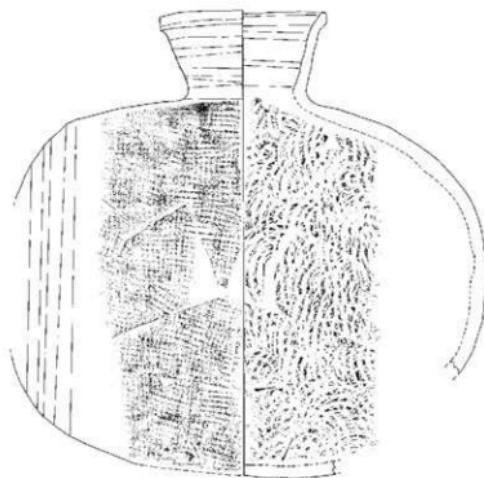
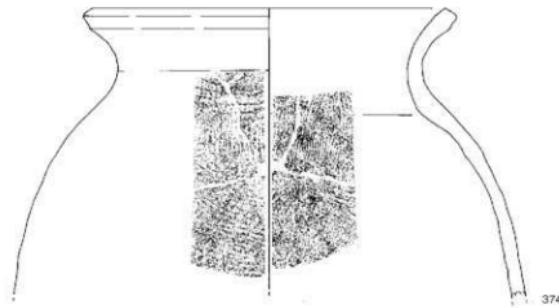
第23図 包含層SX 100中部（D～F区）出土遺物2（1/3）



第24図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物3(1/3)

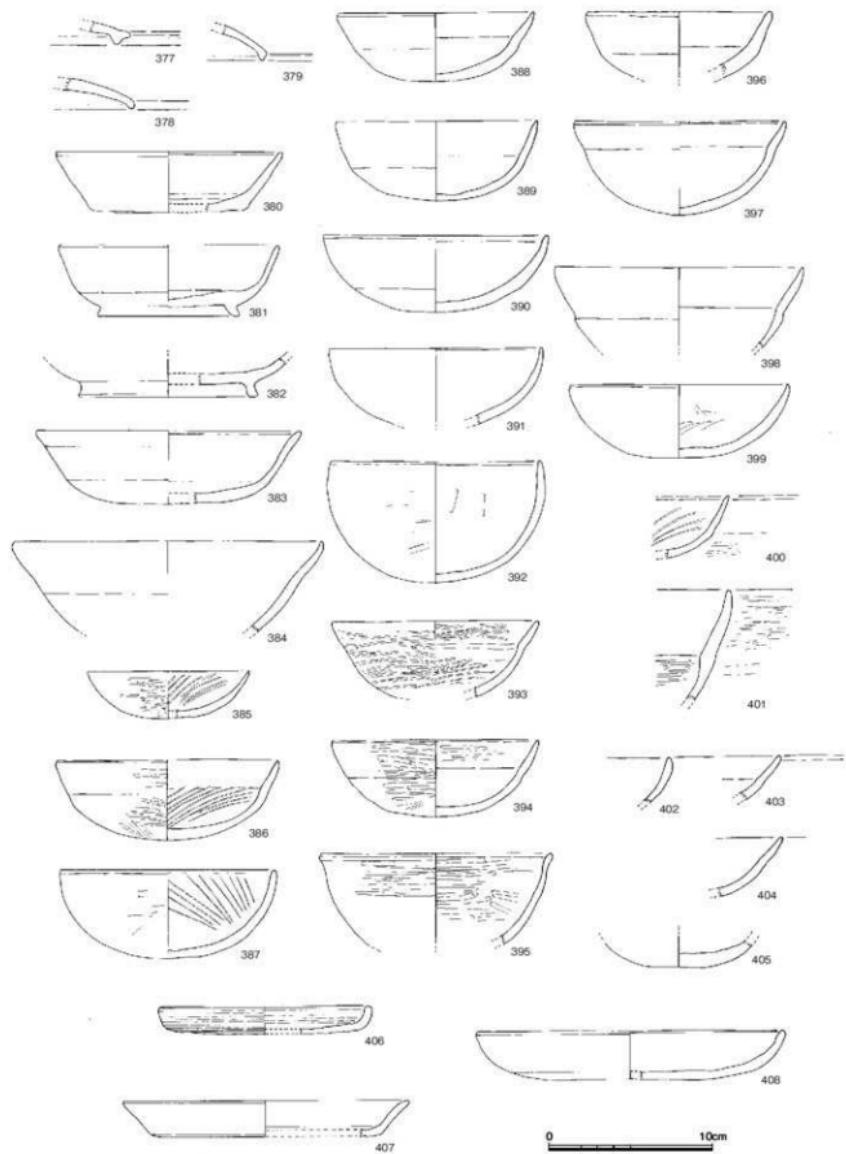


第25図 包含層 SX 100 中部 (D~F区) 出土遺物 4 (1/3)

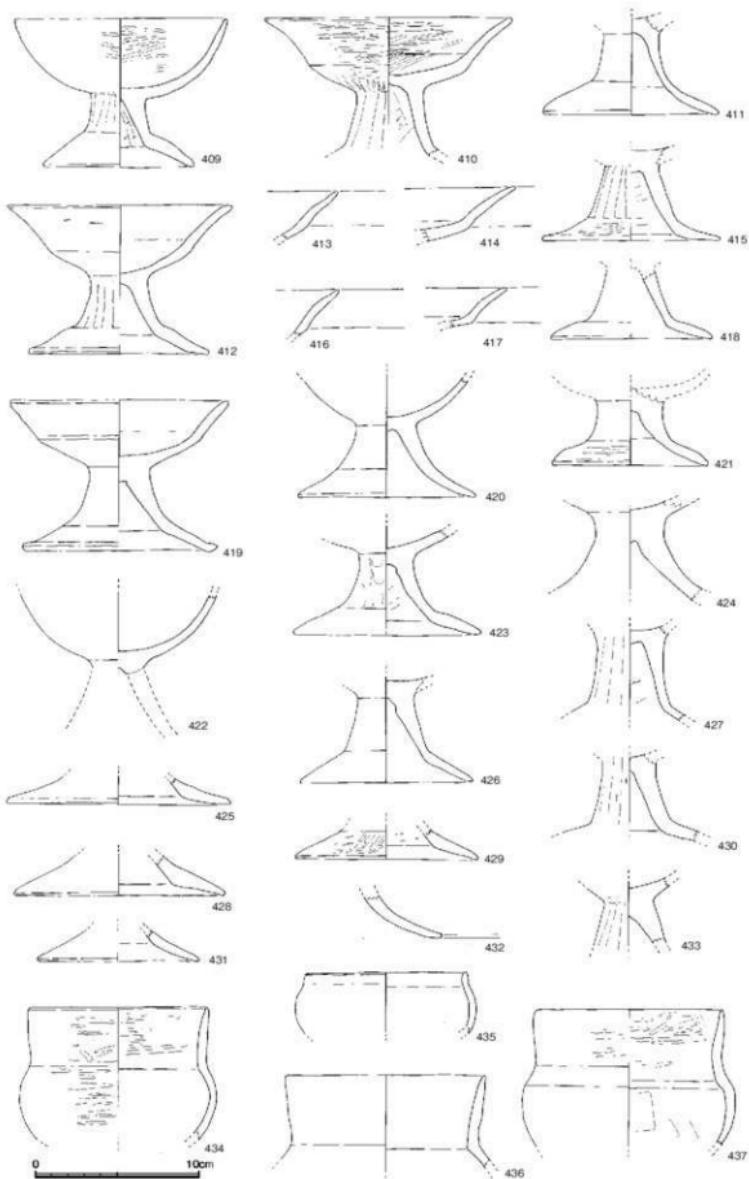


0 10cm

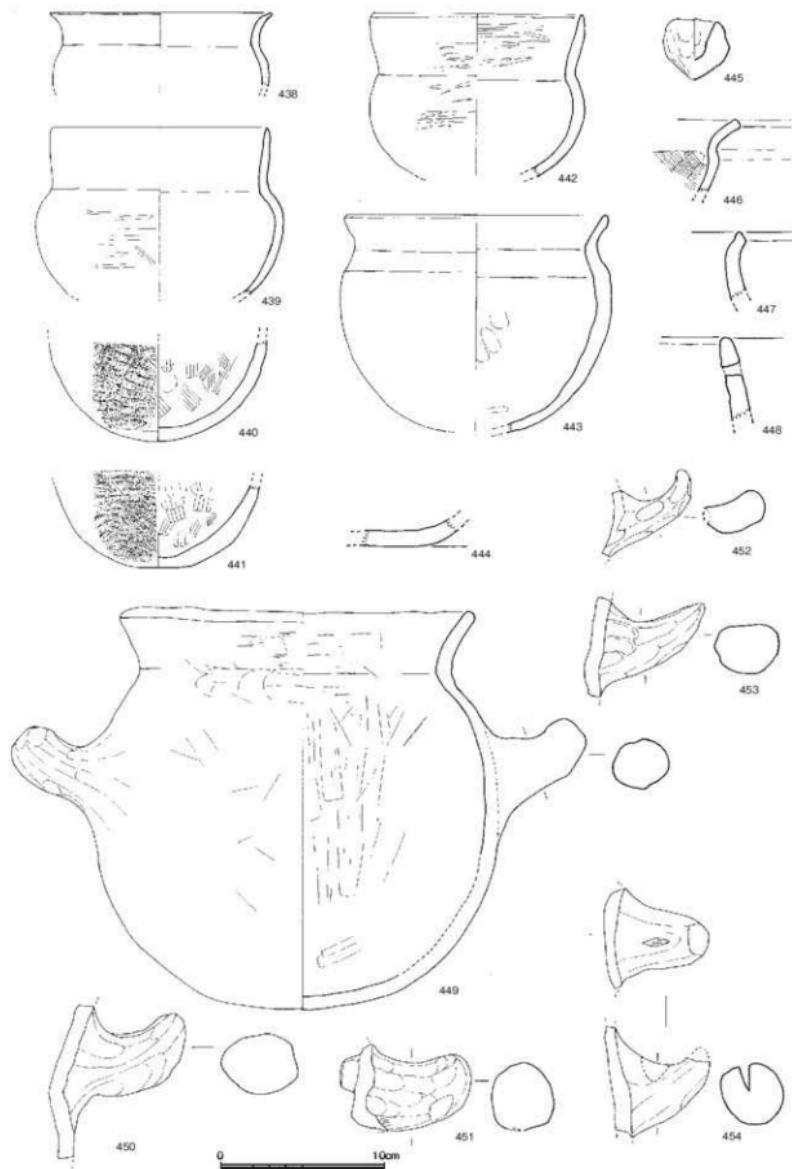
第26図 包含層 SX 100中部 (D~F区) 出土遺物 5 (1/3)



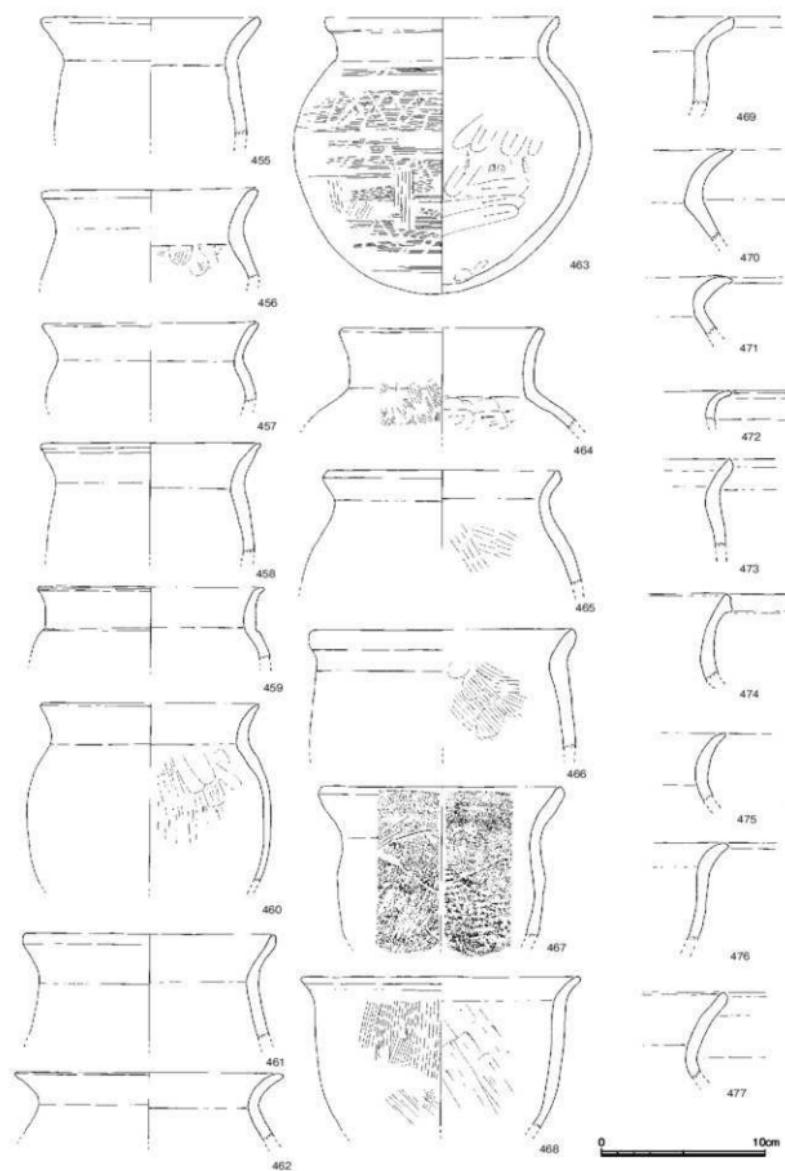
第27図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物6(1/3)



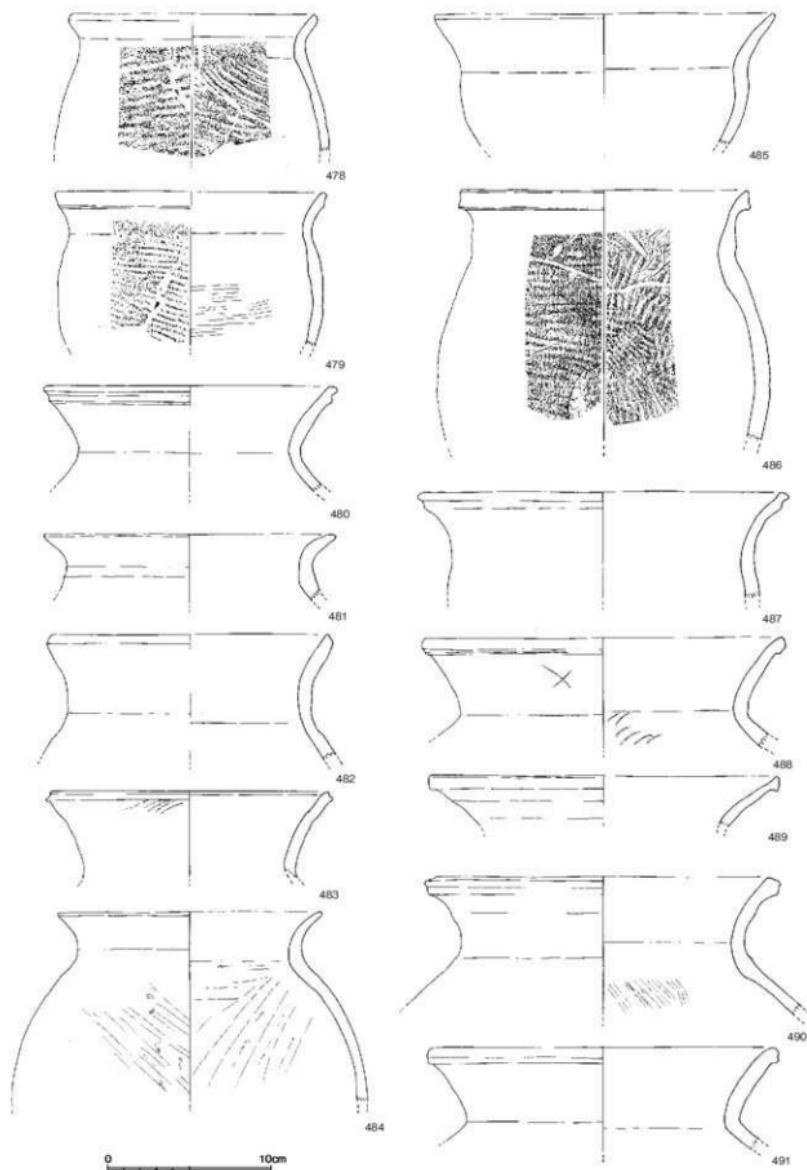
第28図 包含層SX100中部(D~F区)出土遺物 7 (1/3)



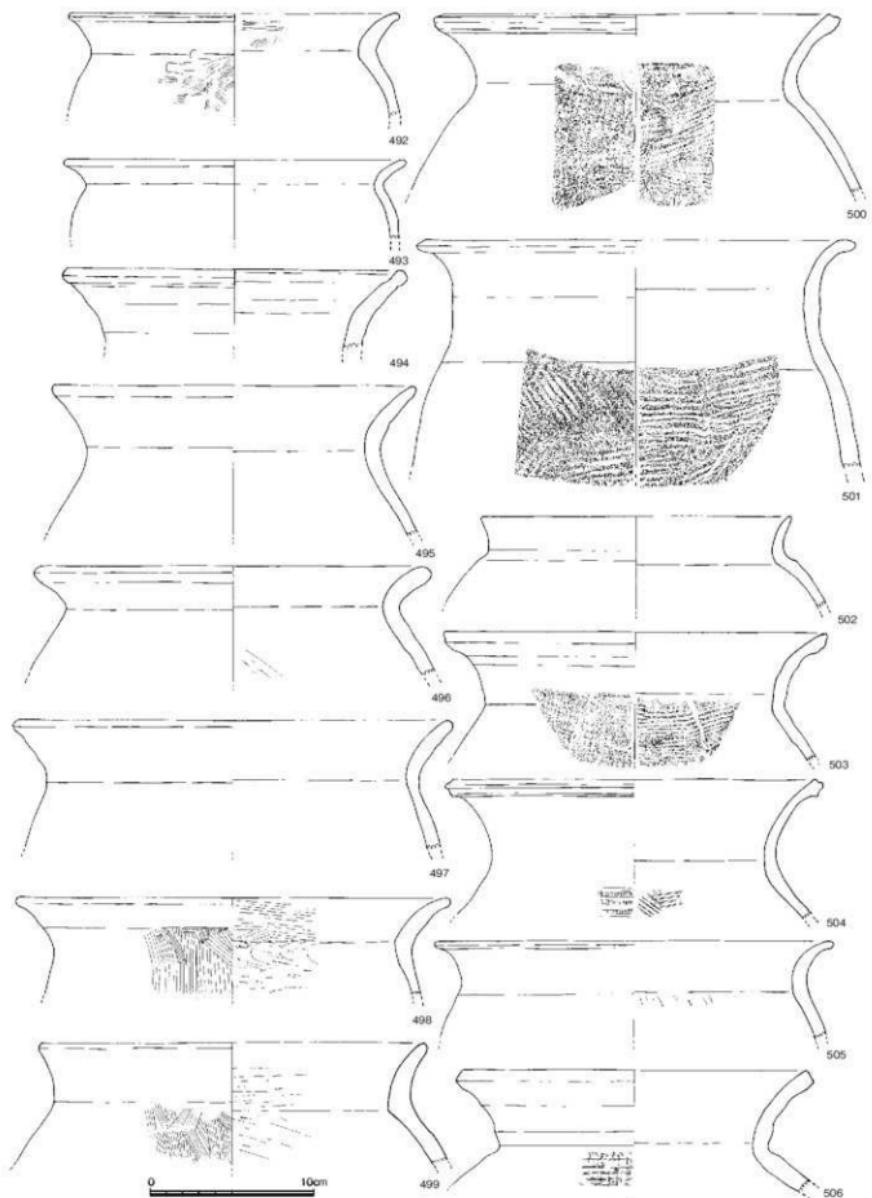
第29図 包含層SX100中部(D~F区)出土遺物8(1/3)



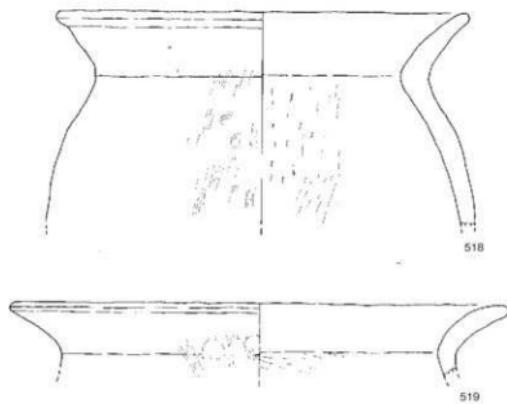
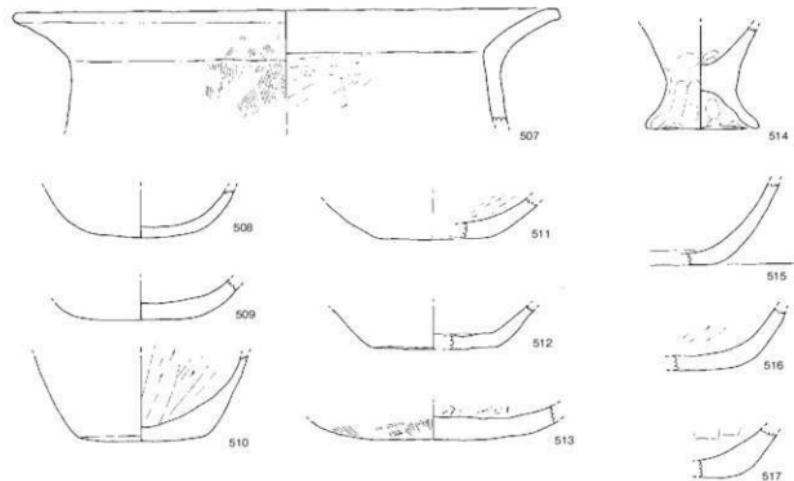
第30図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物9 (1/3)



第31図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物10(1/3)

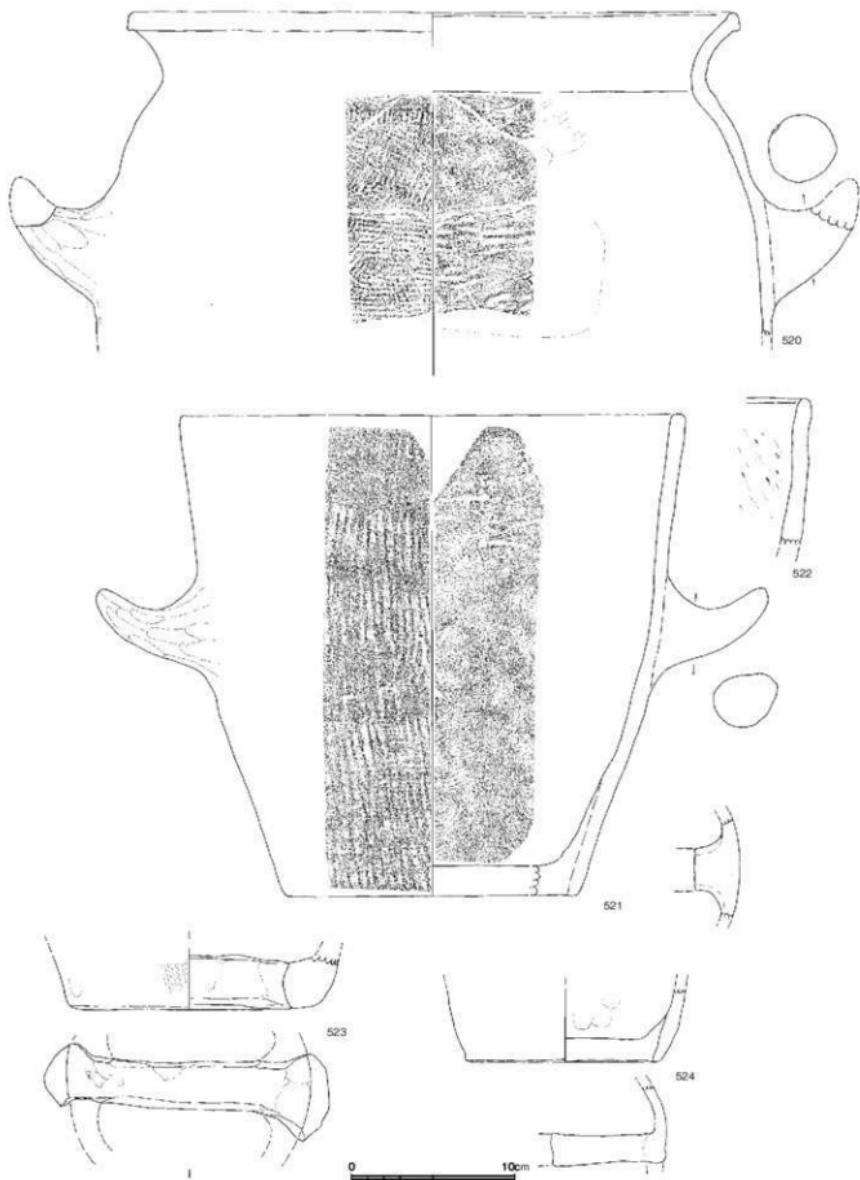


第32図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物11(1/3)

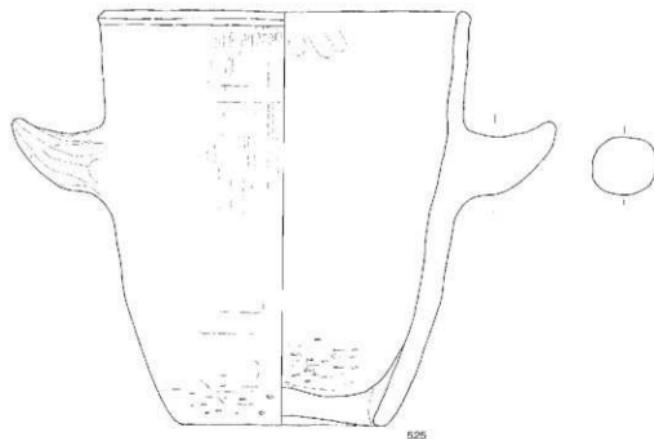


0 10cm

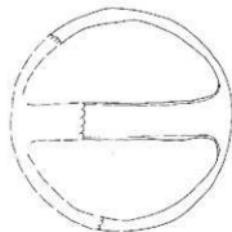
第33図 包含層SX100中部(D~F区)出土遺物12(1/3)



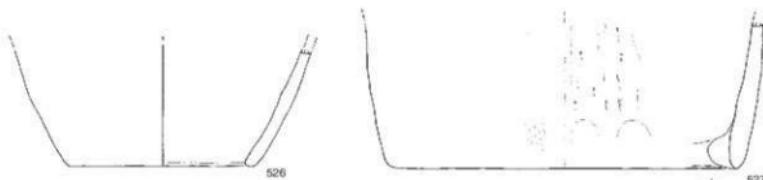
第34図 包含層SX 100中部(D~F区)出土遺物13(1/3)



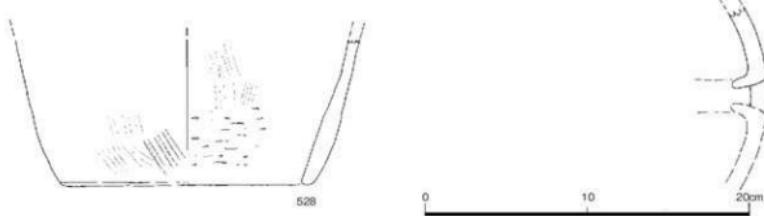
525



526



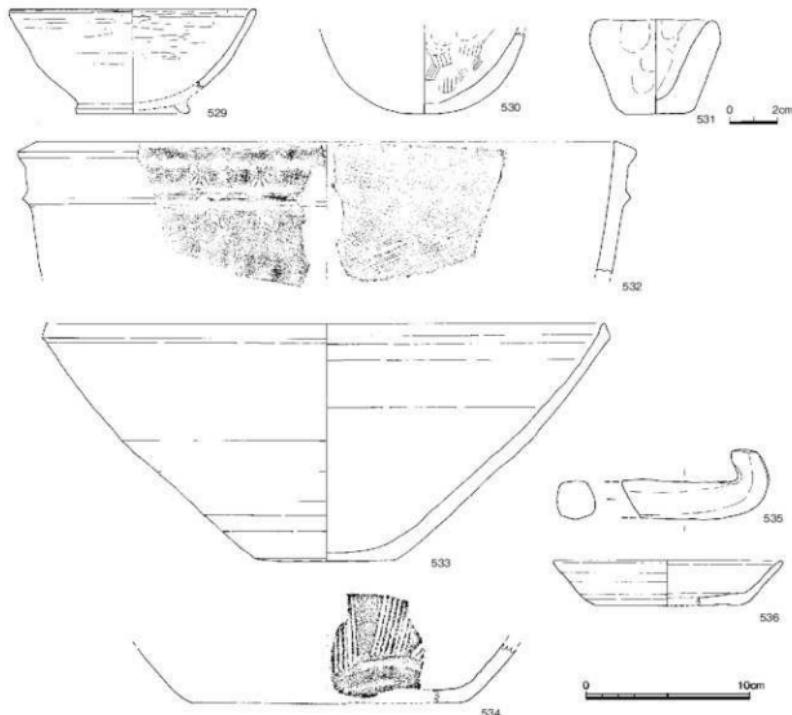
527



528

0 10 20cm

第35図 包含層S X 100中部(D~F区)出土遺物14(1/3)



第36図 包含層SX 100中部（D～F区）出土遺物15（1/3）

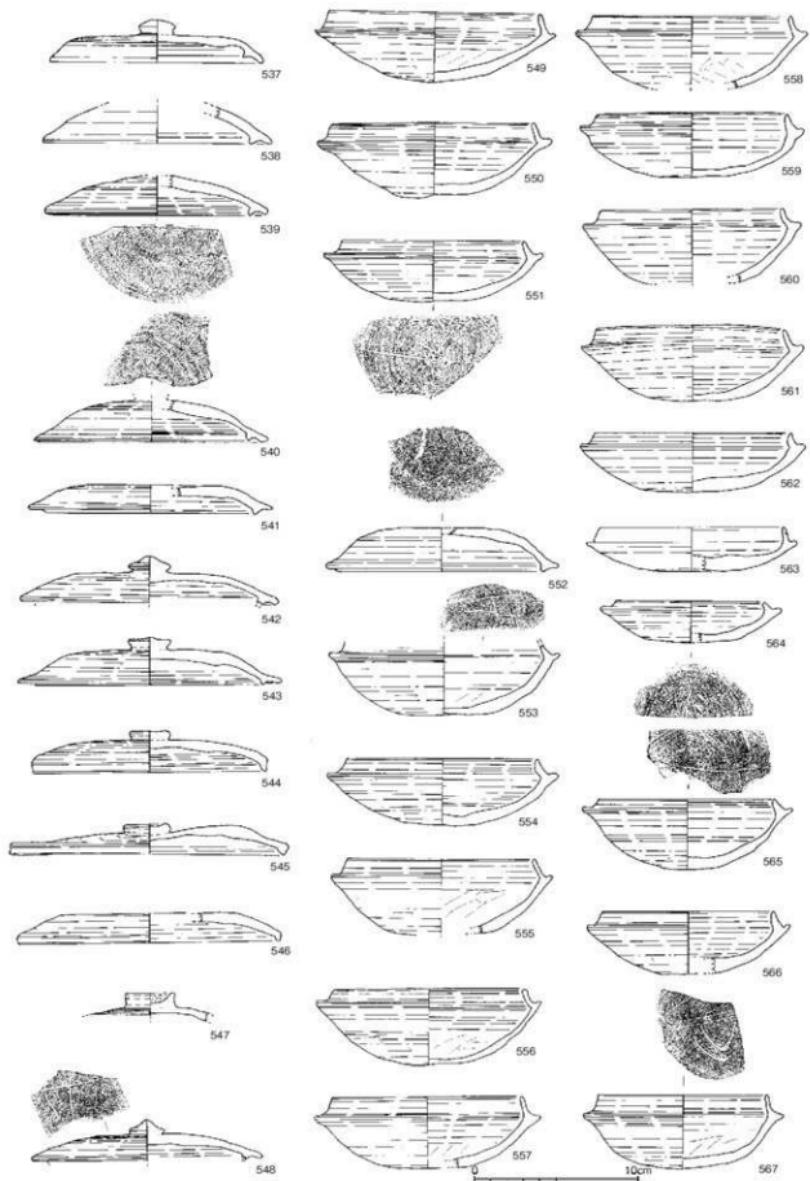
（3）北部（G～I区）出土須恵器・土師器（第37～44図）

前報告書で報告している分の追加遺物である。前報告では壺蓋・身の他、椀・高杯・鉢・皿・壺・瓶・平瓶・横瓶・堤瓶・甕などの須恵器が報告されている。本報告では、上記須恵器の追加資料など掲載した。100点近い壺蓋・身の他、高杯・瓶・平瓶・壺・甕などを掲載した。須恵器の器種や時期など、前回報告分や他の地区とも大差はない。

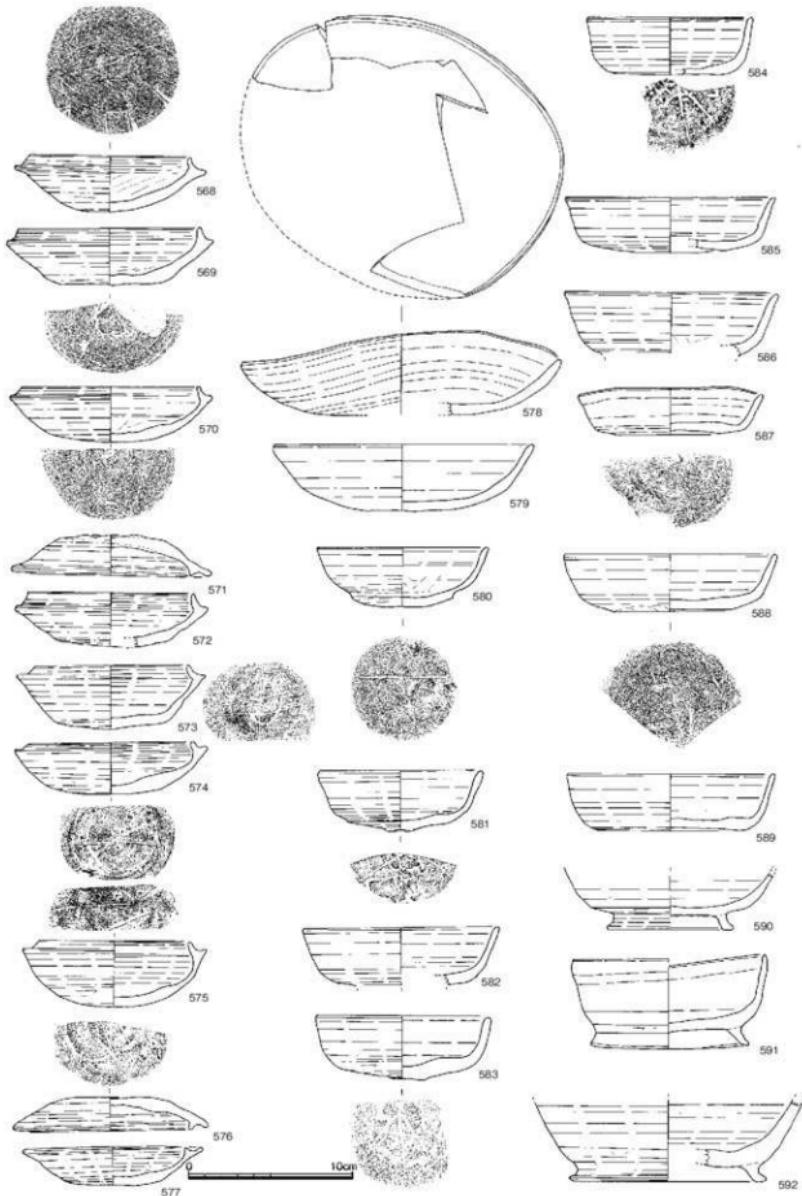
土師器はほぼ全点前報告書で報告済みであるが、若干の中世土師器（667～671）を今回掲載した。667は壺、668・669は皿、670は大皿である。671は土師器の把手付き甕もしくは瓶で、口径20cm前後を測る。

（4）布目土器・支脚・カマド（第45・46図）

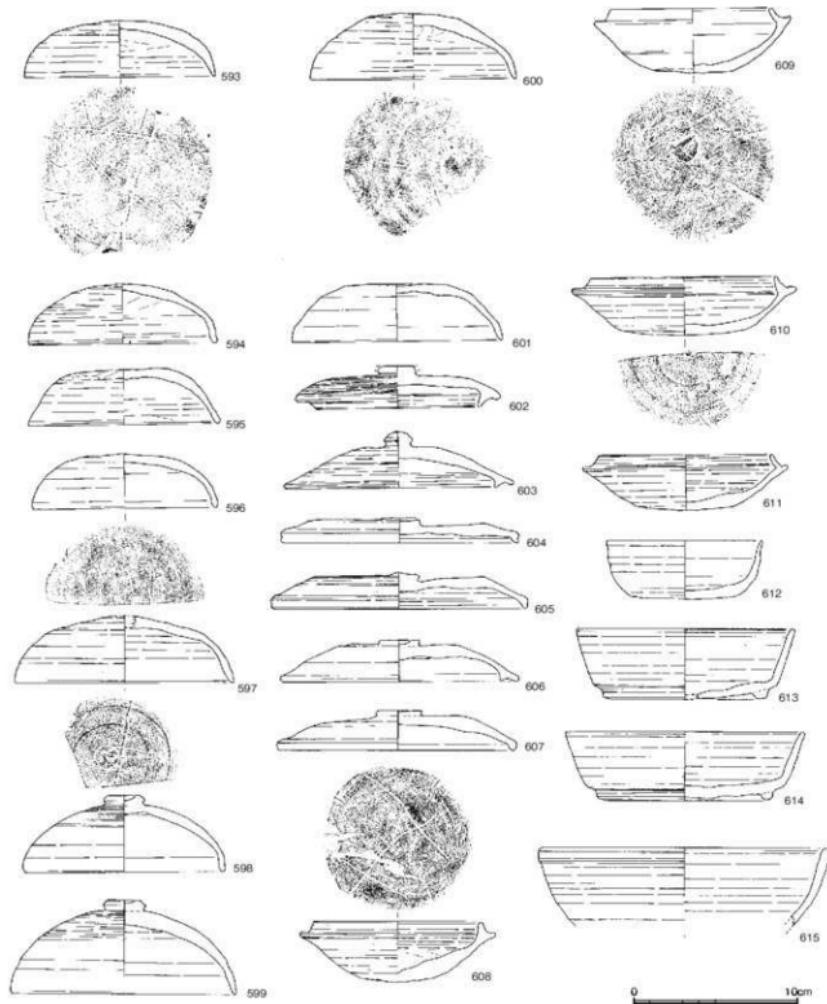
SX 100全体から出土した。672は一見カマド風の破片であるが、吉留による「埴輪？」の注記がある。673～675は内面に布目を有する土器で、製塩関係の土器か。676～678は支脚の破片と思われる。679～681はカマドの破片である。



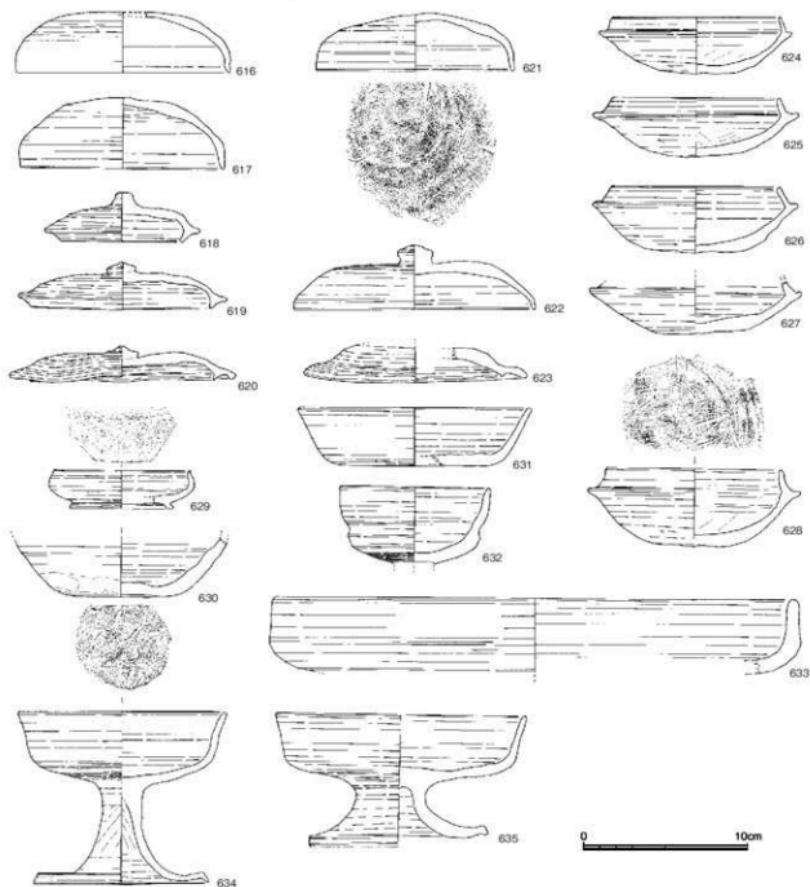
第37図 包含層S X 100北部(G~I区)出土遺物1 (1/3)



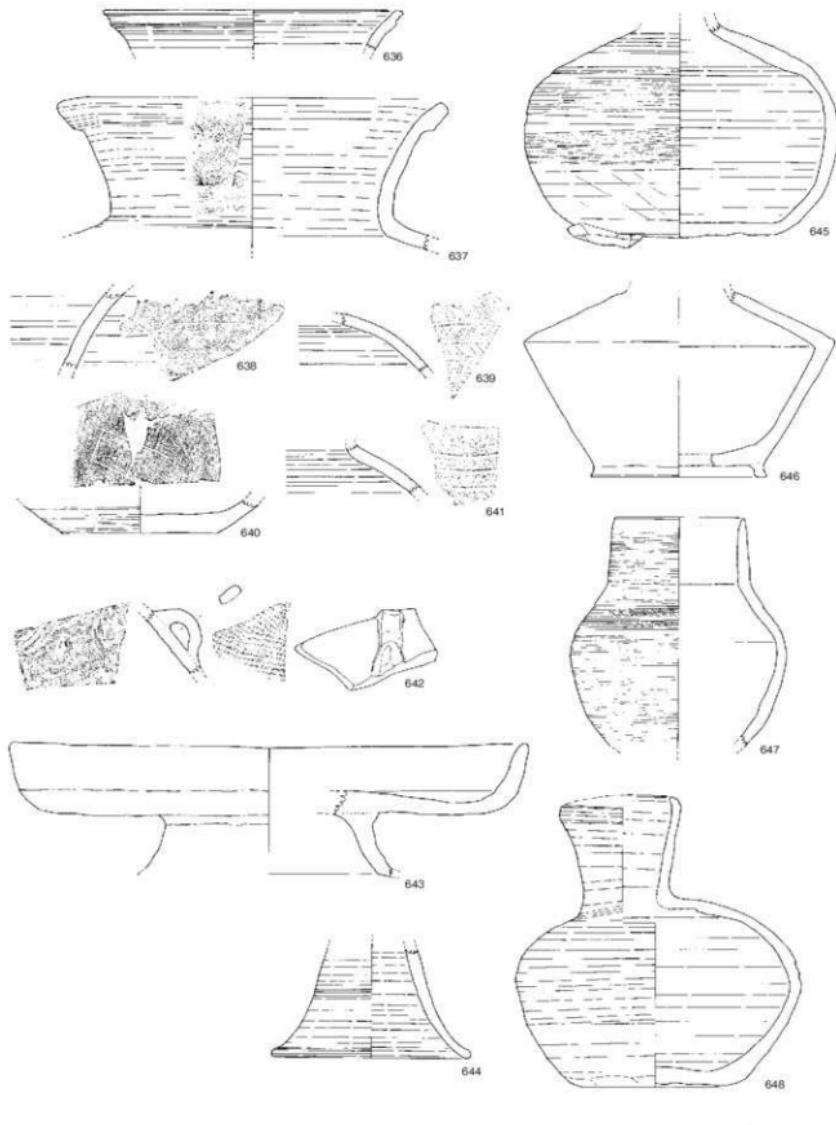
第38図 包含層SX 100北部（G～I区）出土遺物2（1/3）



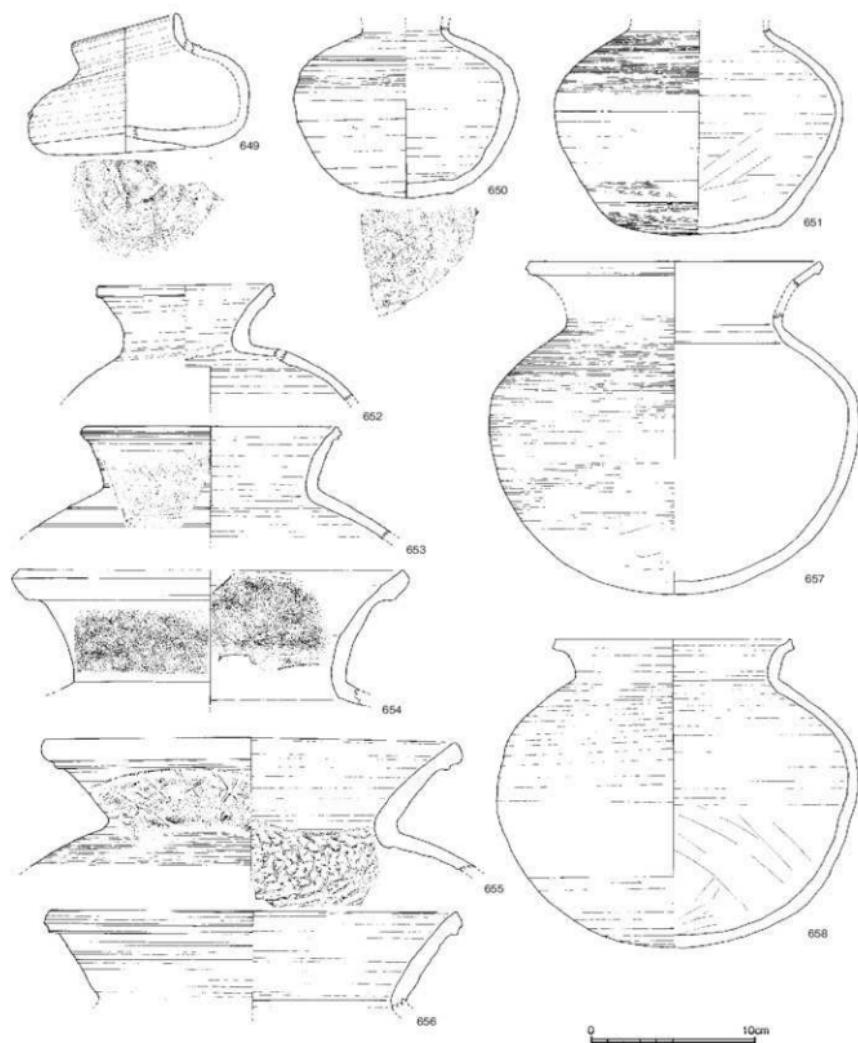
第39図 包含層SX 100北部（G～I区）出土遺物3 (1/3)



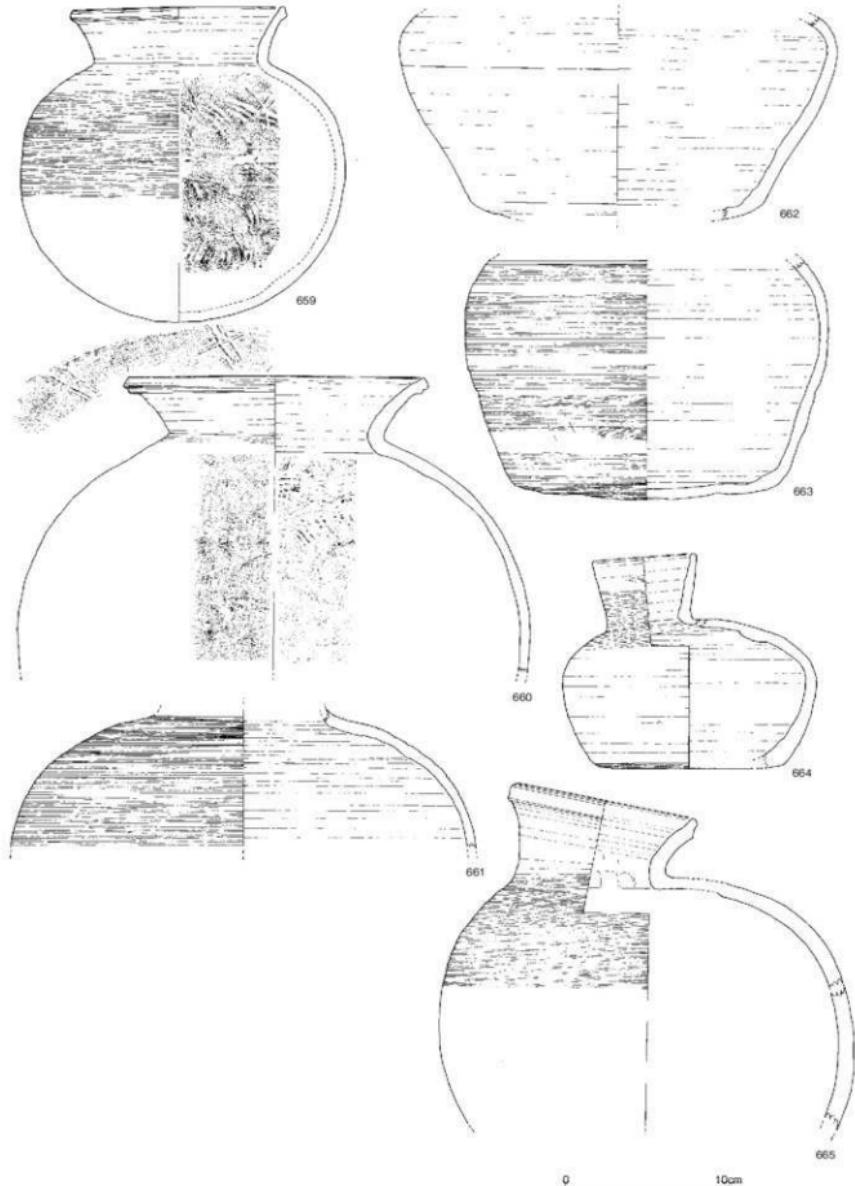
第40図 包含層SX 100北部（G～I区）出土遺物4（1/3）



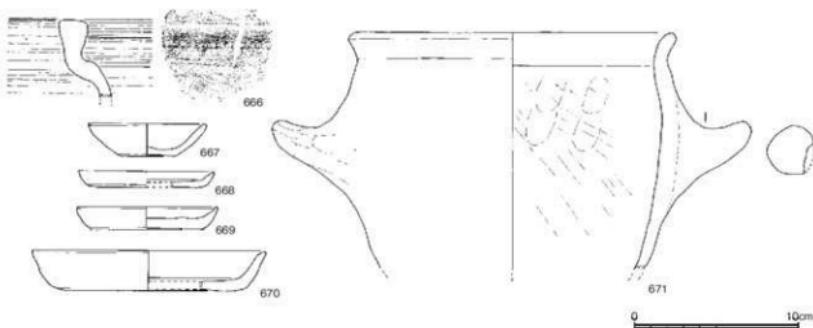
第41図 包含層SX 100北部 (G～I区) 出土遺物5 (1/3)



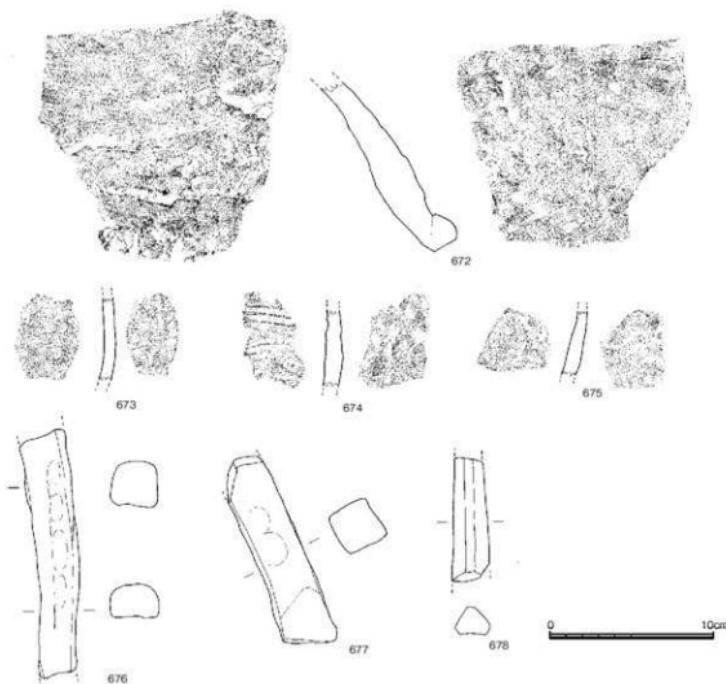
第42図 包含層SX 100北部 (G~1区) 出土遺物6 (1/3)



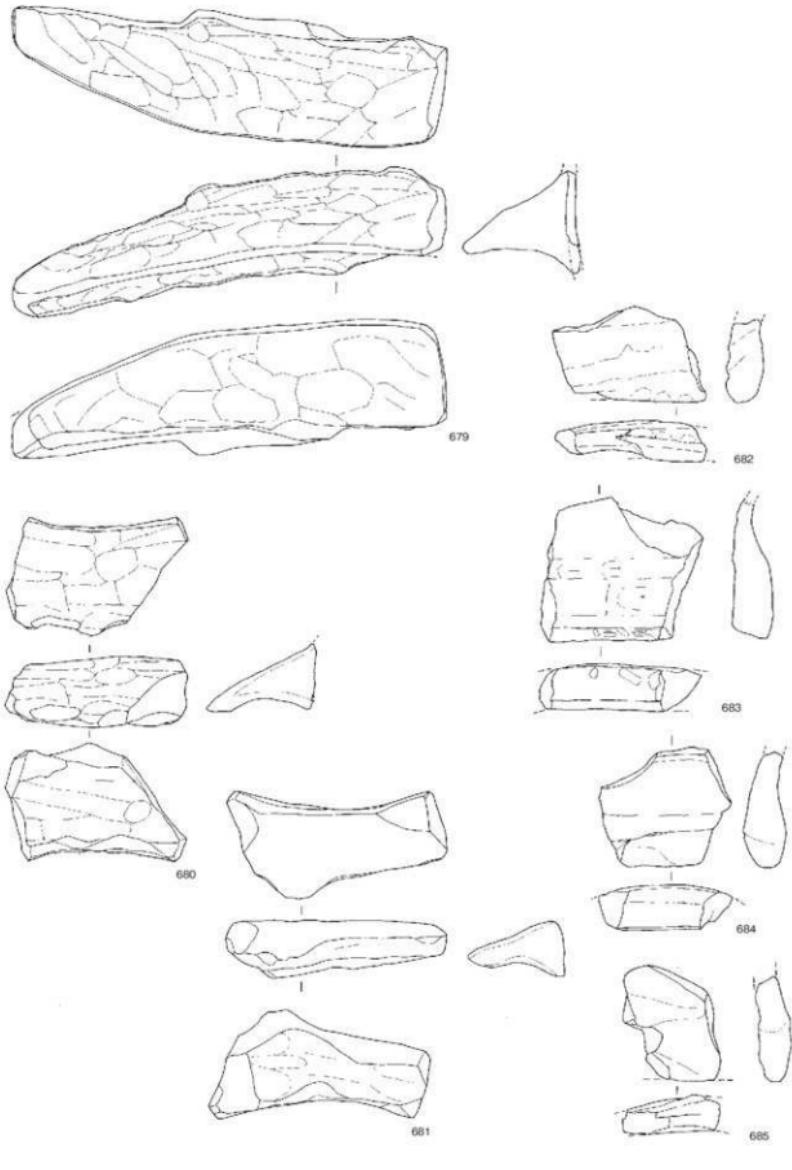
第43図 包含層SX 100北部 (G~I区) 出土遺物7 (1/3)



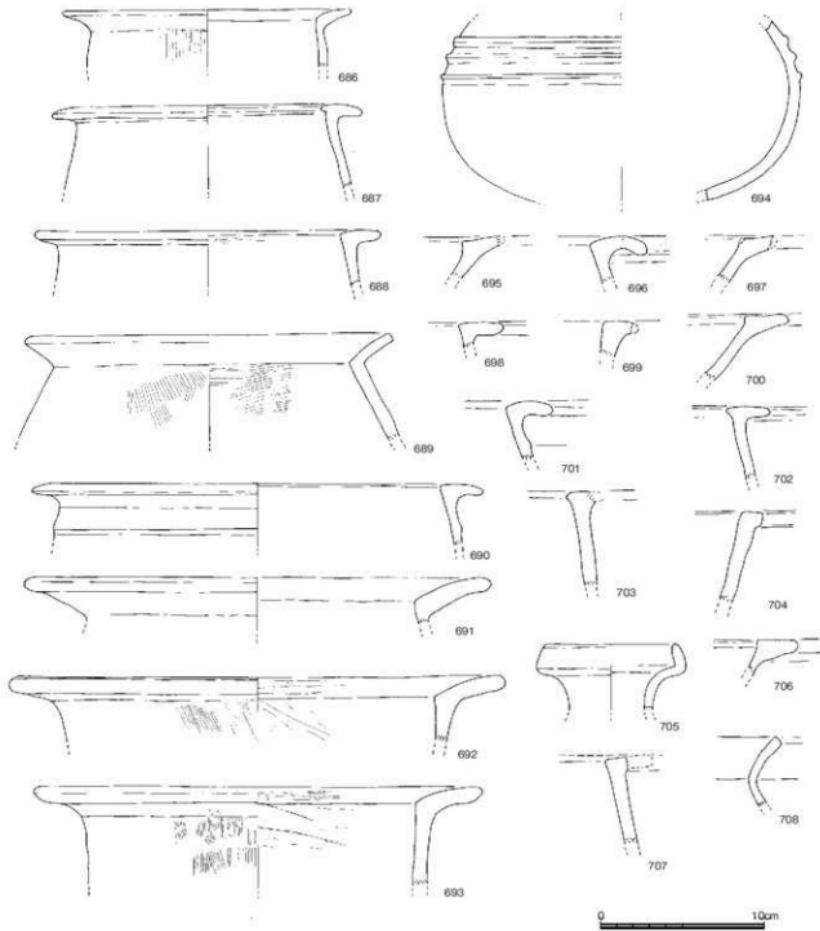
第44図 包含層SX 100北部 (G~I区) 出土遺物8 (1/3)



第45図 包含層SX 100・404出土布目土器・支脚 (1/3)



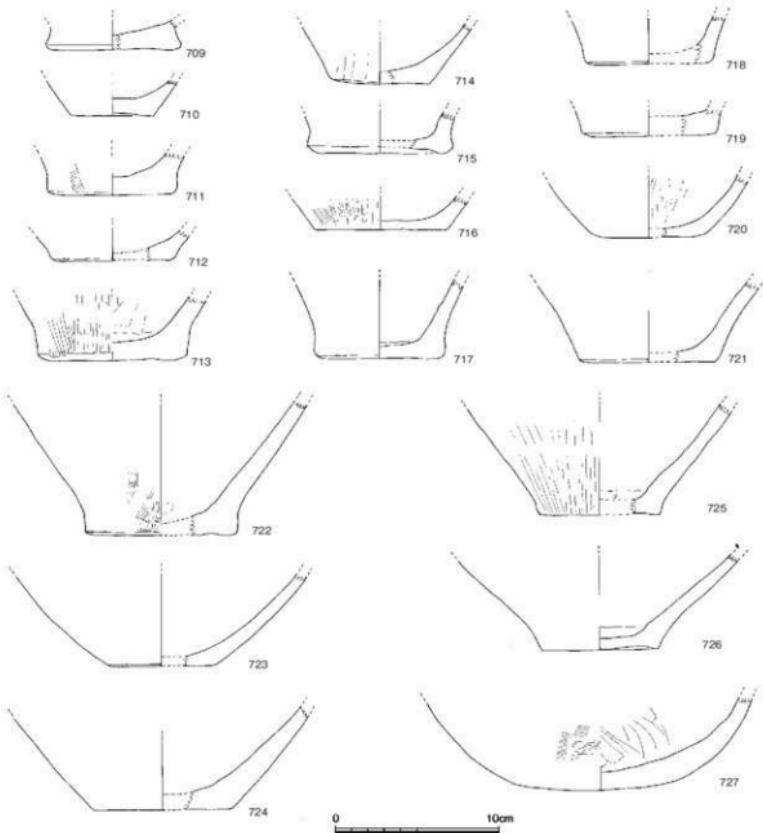
第46図 包含層SX 100・404出土カマド (1/3)



第47図 調査区出土弥生土器 1 (1/3)

4 弥生土器 (第47・48図)

調査区全体から出土した弥生土器である。出土した弥生土器は、中期中頃～後期の土器で、出土量は調査区全体でコンテナ1箱に満たない。686～708は壺・甌の口縁部片である。甌は鋤先口縁とく字状を呈し、外面にハケメを施したもので、694は断面三角形の突帯を3条施す壺で、大粒の砂礫を多く含んで、粗い土器である。中期中頃から後期前半代のものがほとんどである。掲載していない袋状口縁の細片に赤彩したものが1点ある。

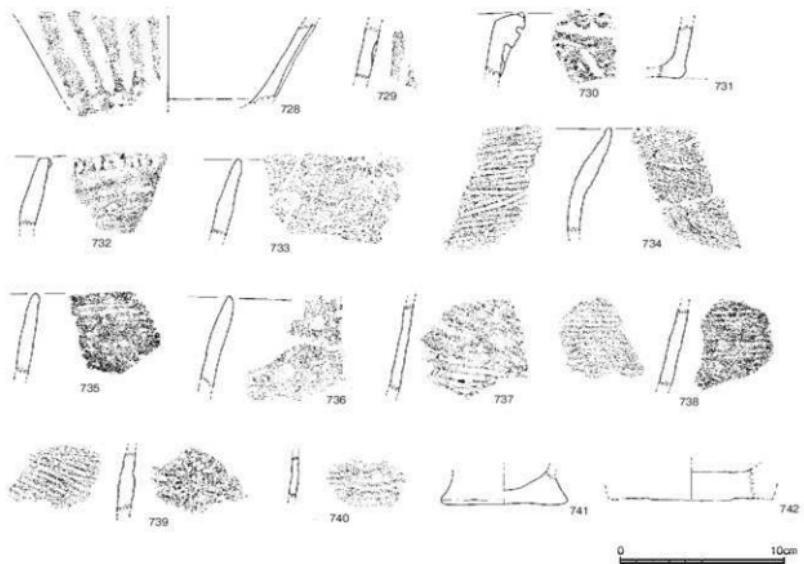


第48図 調査区出土弥生土器2 (1/3)

709~727は底部の破片で、727を除いて平底で、おおむね当該期のものであろう。727は底部の立ち上がりが稜を成さない丸底気味の平底で、底径9cm前後を測る。内面は指による粗いナデがそのまま残っている。

5 繩文土器（第49図）

出土した縄文土器は50点あまりで、図示した以外の破片はいずれも微細な破片で、その大半は後期後半から晩期の粗製深鉢と思われる。728は阿高式系の土器片で、凹線文を縦方向に施している。胎土に滑石を多量に含んでいる。729も滑石を含む。730は棒状施文具により沈線を施している。滑



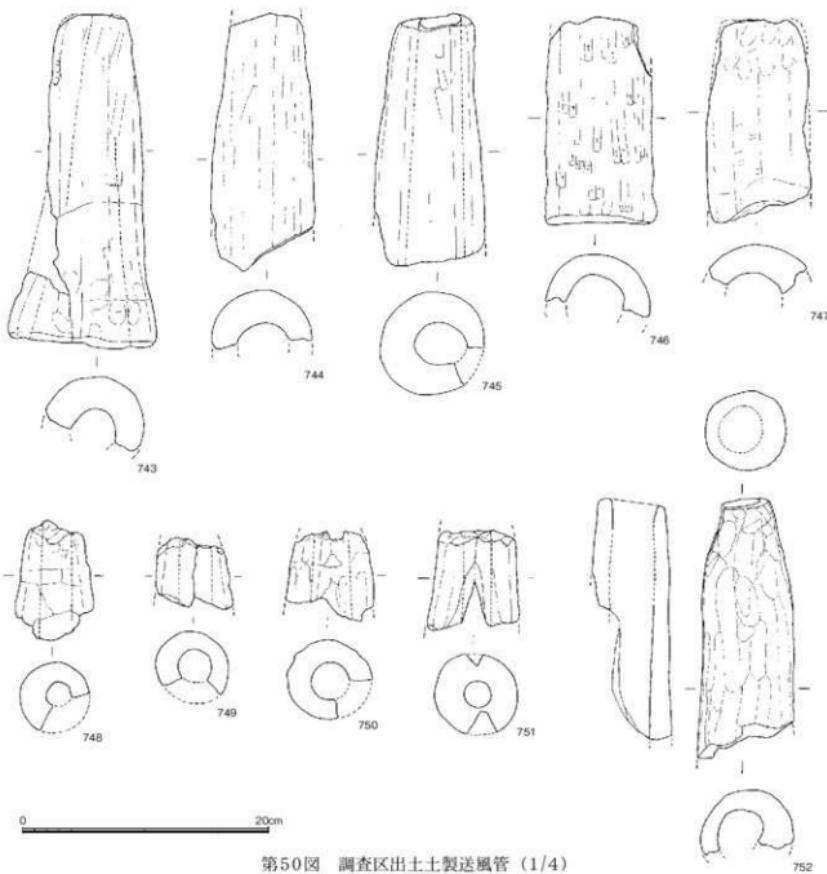
第49図 調査区出土縄文土器 (1/3)

石は含んでいない。731は阿高系の底部で、滑石を含んでいる。732以降は粗製深鉢である。732は口縁端に刺突を施している。733は貝殻では無い条痕を外面に施している。734・735、737～740は両面または片面に貝殻条痕を施したもので、735は条痕をほとんどナデ消している。736も貝殻条痕かと思われるが、ほぼ全面ナデで仕上げている。これらの土器は器表面に径数mm前後のくぼみが無数にある。741はやや上げ底風味で、底径7.8cmを測る。742は器壁が1.7cmと厚い。焼成が悪いための遺存状況が悪いためか、器面がボロボロである。

6 土製品（第50・51図）

743～752は土製送風管である。唯一全形がわかる743は長さ27.5cm、外径6.0～12.2cmを測る。内径は差込口側で2.0cm、送風側で8.2cmを測る。外面はヘラで調整し、内面は主に指押さえで仕上げている。器壁の厚さは2.5cm前後を測る。調整や形状はおおむね743に近いものが多いが、外面を小さなヘラで調整しているもの（746）や、指ナデで仕上げているもの（752など）もある。752は孔が途中で歪んでいる。

753～799は土錐である。大きさ・形態は様々であるが、おおむね両先端部が細くなっているものが多い。最も大きい753は長さ10.0cm、最も短い794は2.7cmを測る。794は一見土製玉の形態を成しているが、大きさから小型の錐であろう。

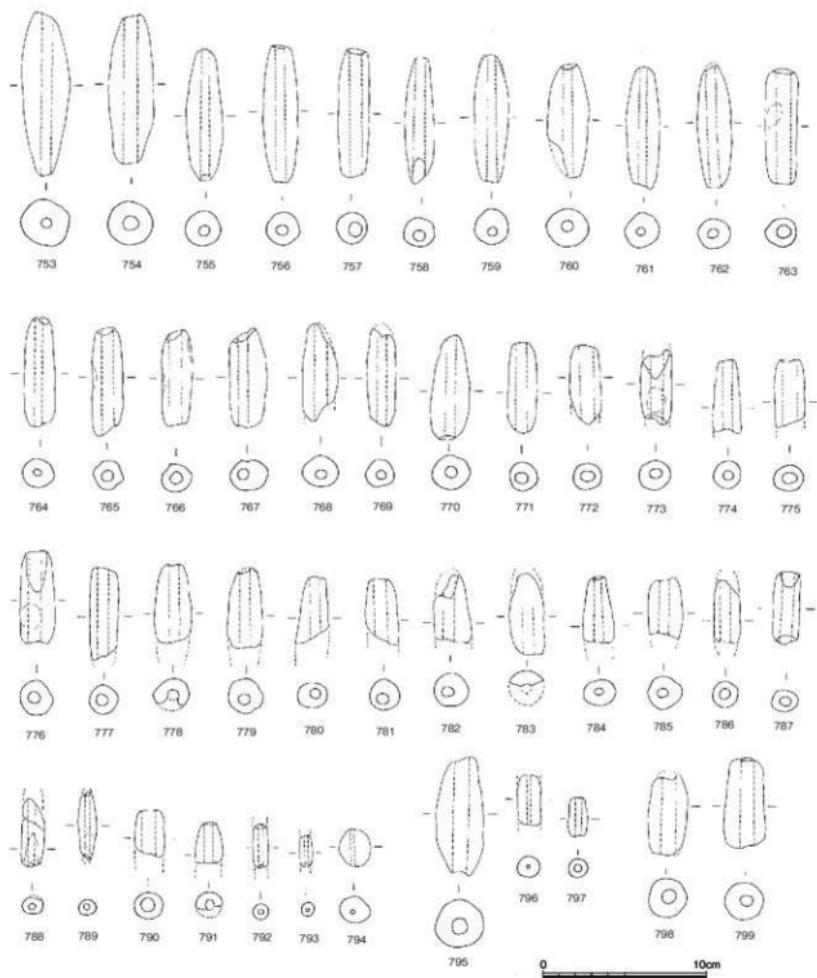


第50図 調査区出土土製送風管 (1/4)

7 石器

(1) 旧石器時代の石器 (第52~55図)

旧石器時代の石器について筆者はあまり詳しくないため、吉留が残した記述があるものは併記する。旧石器時代の石器はバティナの進んだものがほとんどで、縄文時代以降の石器とは一別できるものが多い。1は黒曜石製の剥片で、台形様石器の記述がある。全体のバティナは古く、右側縁下部には古いバティナの調整が確認できる。図の上面に新しいバティナの連続する調整が施されている。2は黒曜石製のナイフ形石器で、緩やかに湾曲する縦長剥片を使用している。上端部を欠損し、左側縁の一部に新しいバティナの調整が施されている。右側縁は全面プランティングを施し、左側縁も一部を除



第51図 調査区出土土鍾 (1/3)

いて細かな調整が施されている。3は黒曜石製で三棱尖頭器の記述がある。厚みがかなりあり、全体の形状は粗く、調整も大きな剥離のみで細かな調整に至っていない。失敗品の可能性はないだろうか。4は1~3に比べてややバティナが新しい。黒曜石製の縦長剥片を利用したスクレイバーで、スポールを転用したものか、と記述されている。左側縁に調整痕があり、右側縁は自然面である。5はチャート製のスクレイバーで、自然面が残る厚めの縦長剥片を利用している。6はバティナの進んだ黒曜石製の2次調整剥片である。左側縁に微細な連続する調整を施している。スクレイバーと思われる。7は風化の進んだ黒曜石製のスクレイバー。牟田産黒曜石と思われる。自然面のある縦長剥片の片側側縁から大きめの押圧剥離で3回剥いだ後、微細剥離で調整を行っている。8は全体が弓状に湾曲する黒曜石製の縦長剥片で両側縁に微細な連続する調整が確認できる。右下の抉り状の部分は、バティナの新しい後世のものである。9も全体が弓状に湾曲する縦長剥片を利用したもので、自然面とは逆側の側縁に連続する調整を施している。自然面の側縁には、新しいバティナの剥離が全体に認められる。10は透明感のある黒曜石を利用している。両側縁に微細剥離が連続して施され、右側縁の下部は抉り状を呈している。

11は黒曜石製のクサビ形細石核である。最終剥離の細石刃は長さ約3cm、幅4mmを測る。右側面上部はガジリである。12は黒曜石製の石核で上部全面は新しい剥離である。13は黒曜石製の原石で、全体は角ばっている。バティナの進んだ剥離面が3つ確認できる。14はスポールの記述がある黒曜石製の剥片である。バティナはあまり進んでいない。図の下部側縁は自然面で、上部側縁には細かな調整が施されている。

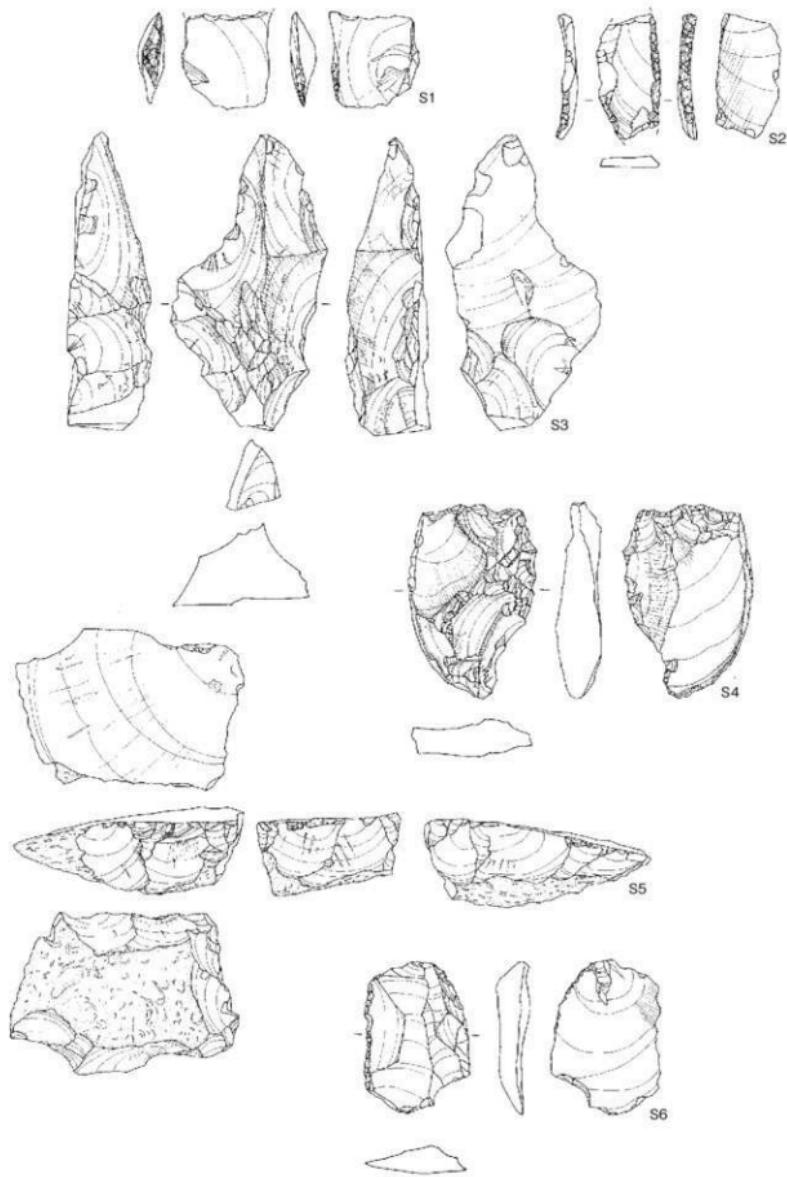
15以降は剥片である。15・16は片側側縁に使用痕状の連続する微細剥離がある。15~17は牟田産黒曜石と思われる。19は透明感の強い黒曜石製で、下部と片側側縁に微細剥離がある。25は石核調整剥片と記述されている。

(2) 縄文時代・弥生時代の石器（第56~64図）

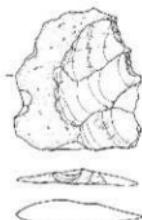
29~47は打製石鏃で、31・32は黒曜石である。29・30はいわゆる二等辺三角形鏃で、基部の縦方向の押圧剥離の入れ方から草創期のものと考えられる。29はバティナが進んでいる。30はやや大振りで片面に自然面を多く残し、反対面は主要剥離面を残している。31も同時期のものと考えられる。基部は短い押圧剥離で、側面からは長い押圧剥離で調整している。32は両面とも押圧剥離をていねいに施して製作している。33は安山岩製で、31に近い形態を成している。34~40は黒曜石製である。41~47は黒曜石製で、いわゆる剥片鏃で、断面形が三角形に近い縦長剥片から作り出している。42は透明感の強い黒曜石製で、片側は押圧剥離で調整している。44~46はいずれも欠損品であるが、側縁はほとんど調整を施していない。48安山岩製で、全面を加工している。先端部を欠失している。石鏃もしくはポイント等の製品もしくは未製品であろうか。

49~55は剥片である。49~52、54は刃器状の縦長剥片で、49・50・52は側面に加工痕が認められる。51は片側縁が刃こぼれ状を呈している。53は厚手の剥片で、右上の側縁に細かな連続する調整が施されており、スクレイバーかと思われる。55は半月形の剥片であるが、バティナがやや古く、旧石器時代から縄文時代初期の可能性が高いと思われる。56はごく一部に剥離がある黒曜石の原石である。やや扁平な角礫に近い。

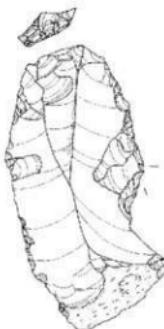
57~61はスクレイバーである。57は安山岩製で、全体が湾曲しており、両辺に加工が施されている。58は姫島産黒曜石製。59~61は安山岩製。59は三角形の平面形の頂部両側に抉り状の加工を施しており、石匙とした方が良いかもしれない。61は折損品のため、全形は不明であるが、あるいは



第52図 調査区出土石器 1 (1/ 1)



S7



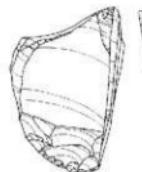
S8



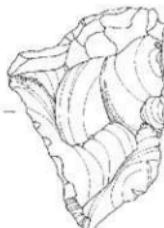
S9



S10



S11



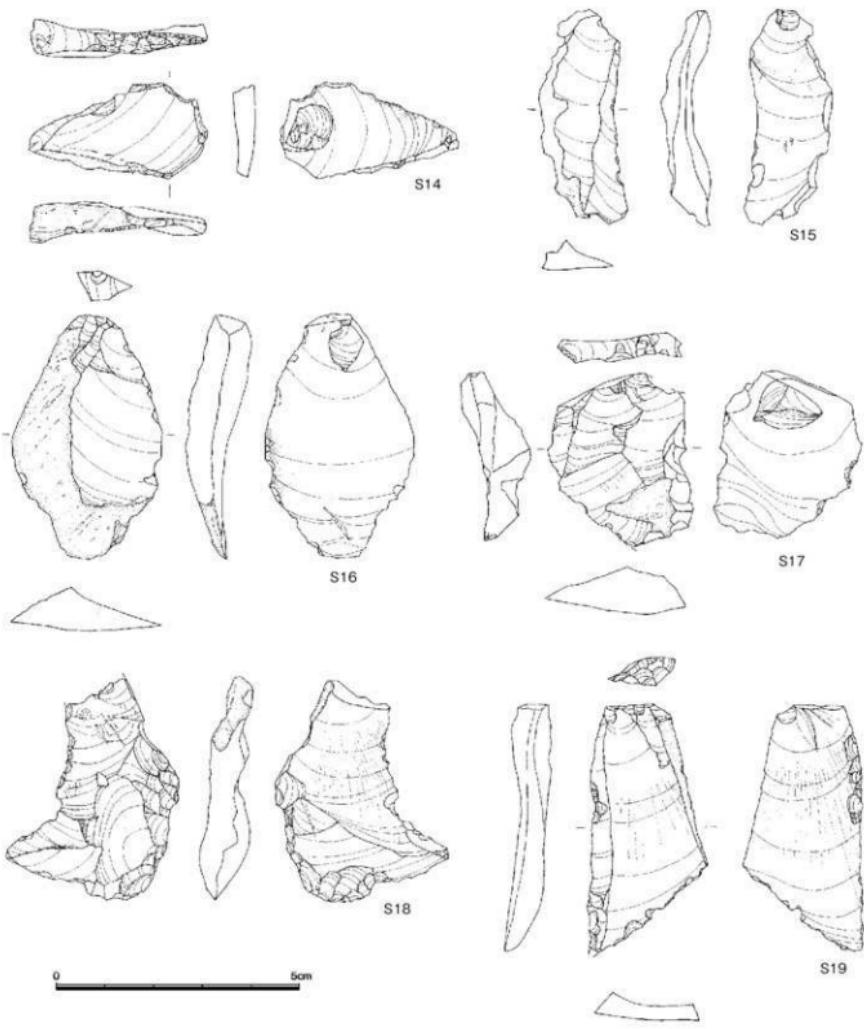
S12



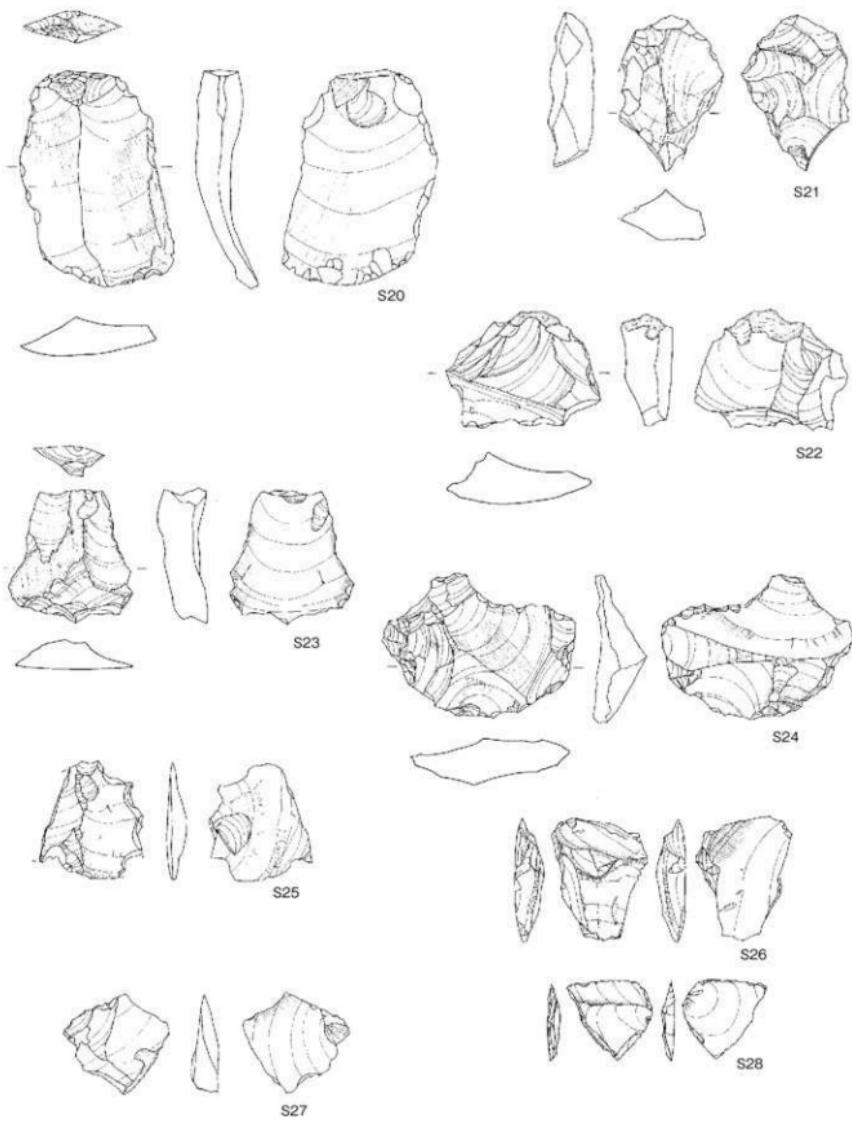
S13

0 5cm

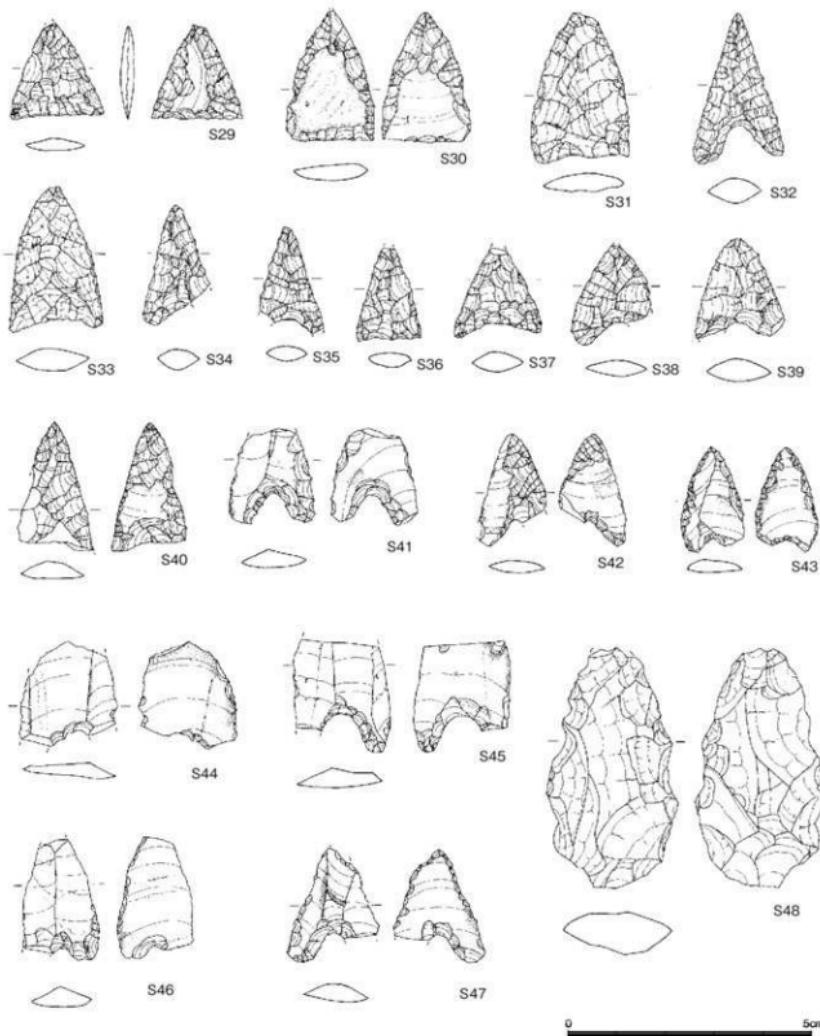
第53図 調査区出土石器 2 (1/1)



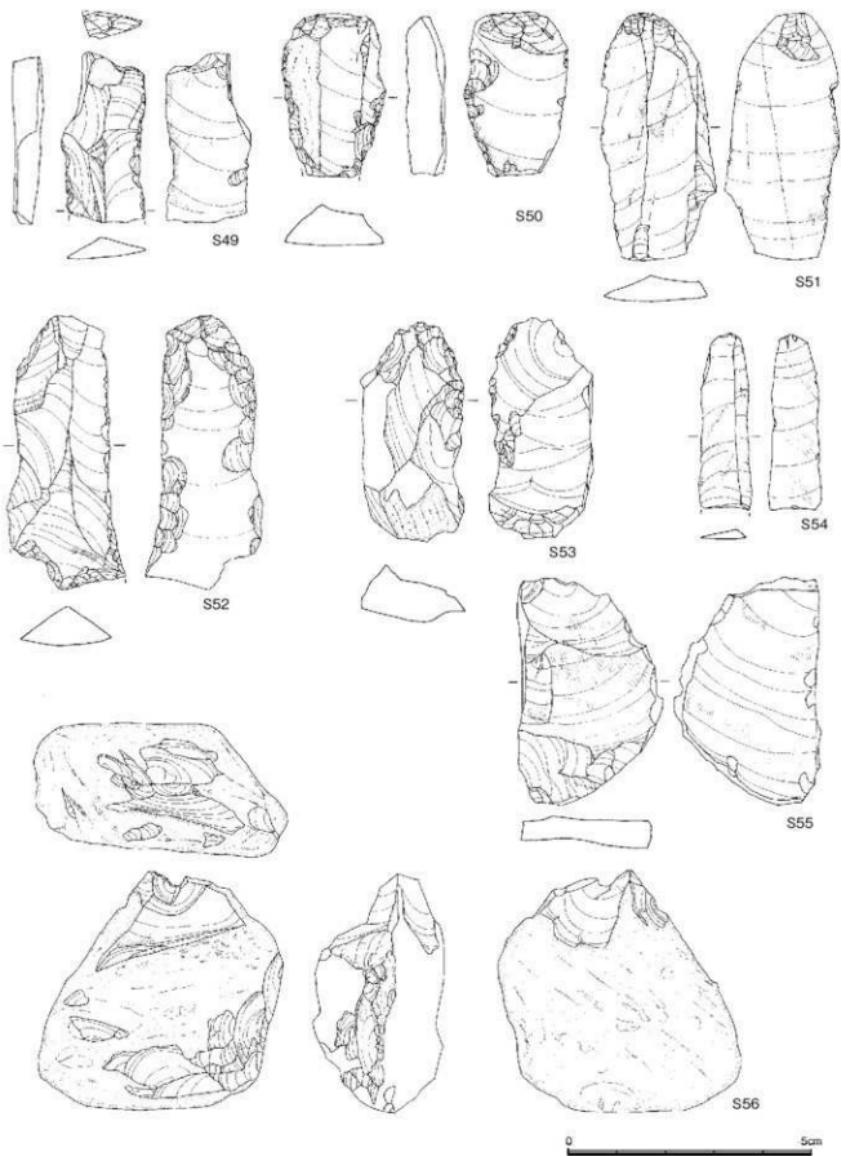
第54図 調査区出土石器3 (1/1)



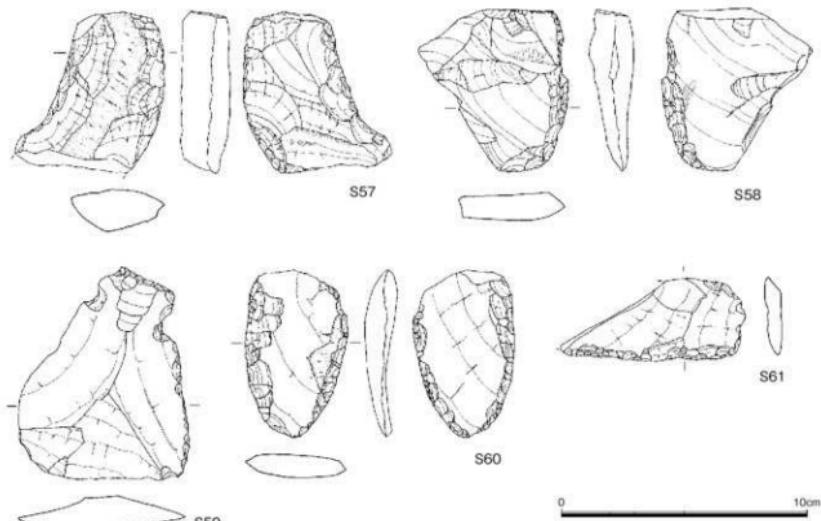
第55図 調査区出土石器4 (1/1)



第56図 調査区出土石器5 (1/1)



第57図 調査区出土石器 6 (1/1)

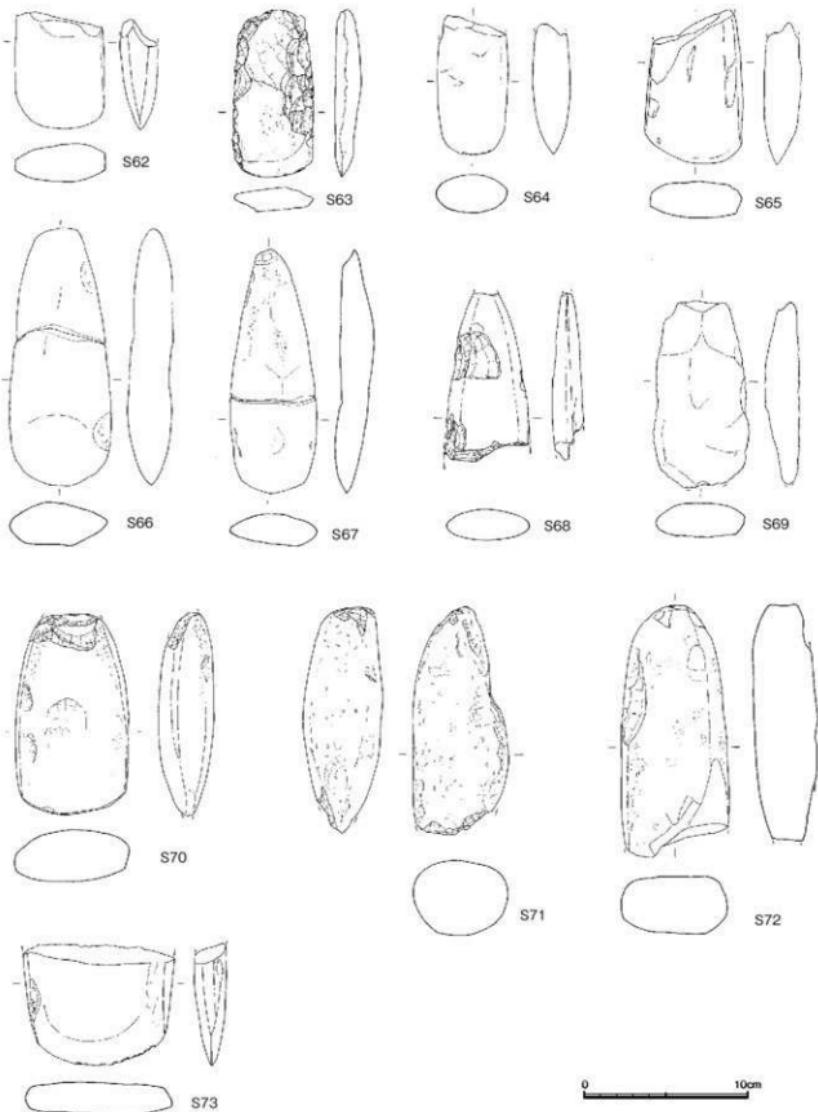


第58図 調査区出土石器7 (1/2)

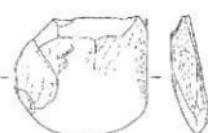
打製石鎌等も考えられる。

62～81は磨製石斧である。62は両側縁を水平に研磨している定角式に近い形態をなしている。安山岩製か。63は全体に剥離や敲打痕が残り、刃部のみ完全に磨いている。緑色片岩製か。長さ10.2cm、幅4.9cm、厚さ1.4cm、重さ138gを測る。64は質の悪い蛇文岩製か。ほぼ全面を研磨している。幅4.3cm、厚さ2.4cmを測る。65も質の悪い蛇文岩製か。幅5.9cmの割には厚さ2.2cmとやや薄い。刃部が片側が大きく減っている。66はSX83・84とSD230の接合資料である。全体磨滅がひどく、研磨の痕跡もほとんどわからない。緑色片岩製か。長さ15.7cm、幅6.2cm、厚さ2.6cm、重さ384gを測る。67はG区とI区の接合資料である。全体の磨滅が激しく、刃部周辺以外の研磨痕跡は明瞭ではない。断面形は弓状にやや反っており、先端部は尖りぎみである。長さ14.8cm、幅5.3cm、厚さ1.9cm、重さ225gを測る。玄武岩製。68は現存の厚さ1.8cmと薄い。図の反対面中央部が窪んでおり、あるいは別の用途に転用しているかもしれない。石材不明。69は全体の磨滅が極めて著しく、研磨や敲打の痕跡は全く判別がつかない。先端部が一部欠けている可能性もあるが、それさえ判然としない。図の反対面はほぼ平坦である。長さ11.4cm、幅5.9cm、厚さ2.1cm、重さ189gを測る。緑色片岩製か。

70は玄武岩質の石材である。基部は破損しているが、全体的に寸詰まりの形態を成している。ただし、刃部は完全に潰れて平坦面を成し、体部中央に窪みがあることから、敲石などに二次利用されているものと思われる。長さ12.1cm、幅7.0cm、厚さ3.5cm、重さ522gを測る。71は刃部を欠いている。摩耗がひどく、研磨の痕跡はほとんど見えない。右側面上部は大きく欠いているが、元々の形状である。現存の長さ13.9cm、幅5.9cm、厚さ4.7cm、重さ472gを測る。蛇文岩製か。72は玄

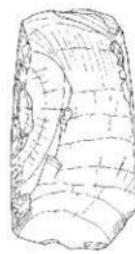
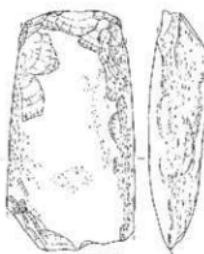
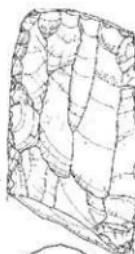


第59図 調査区出土石器 8 (1/ 3)



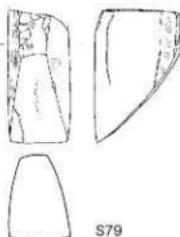
S74

S75

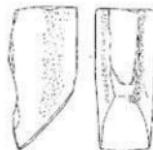


S76

S77



S79



S80



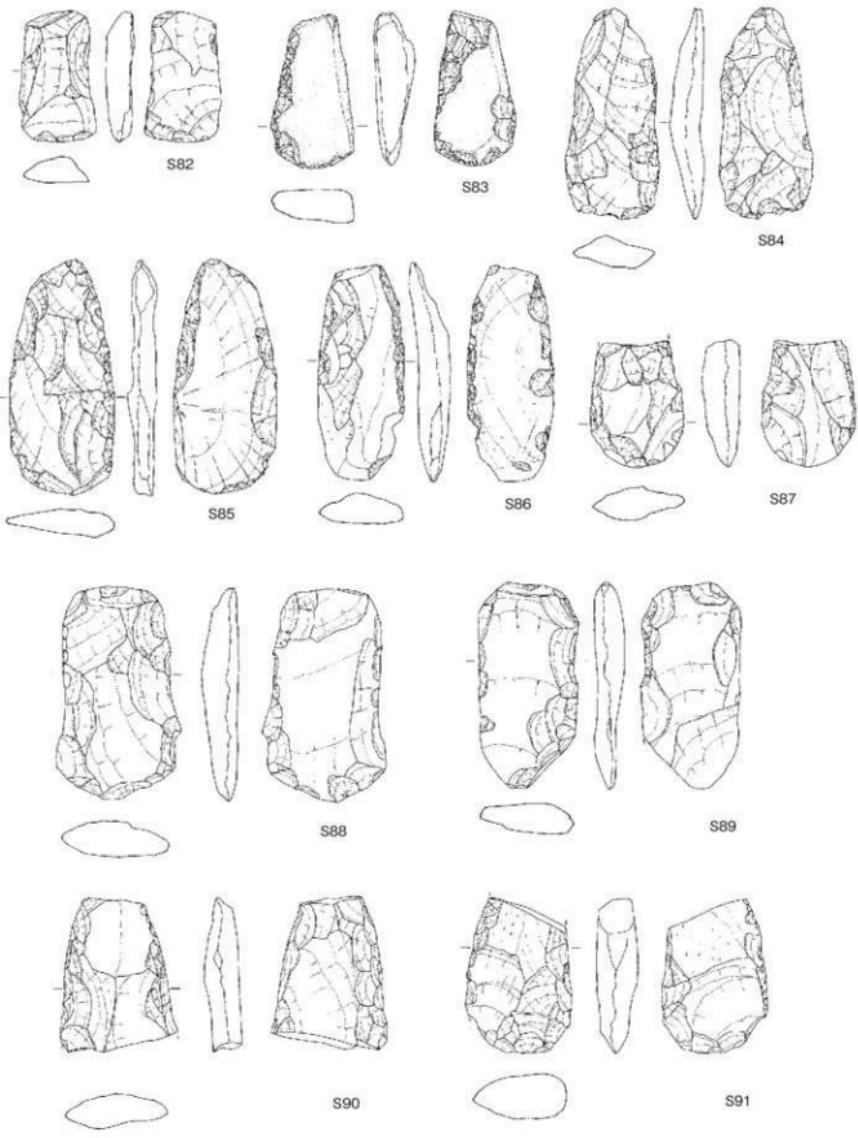
S81



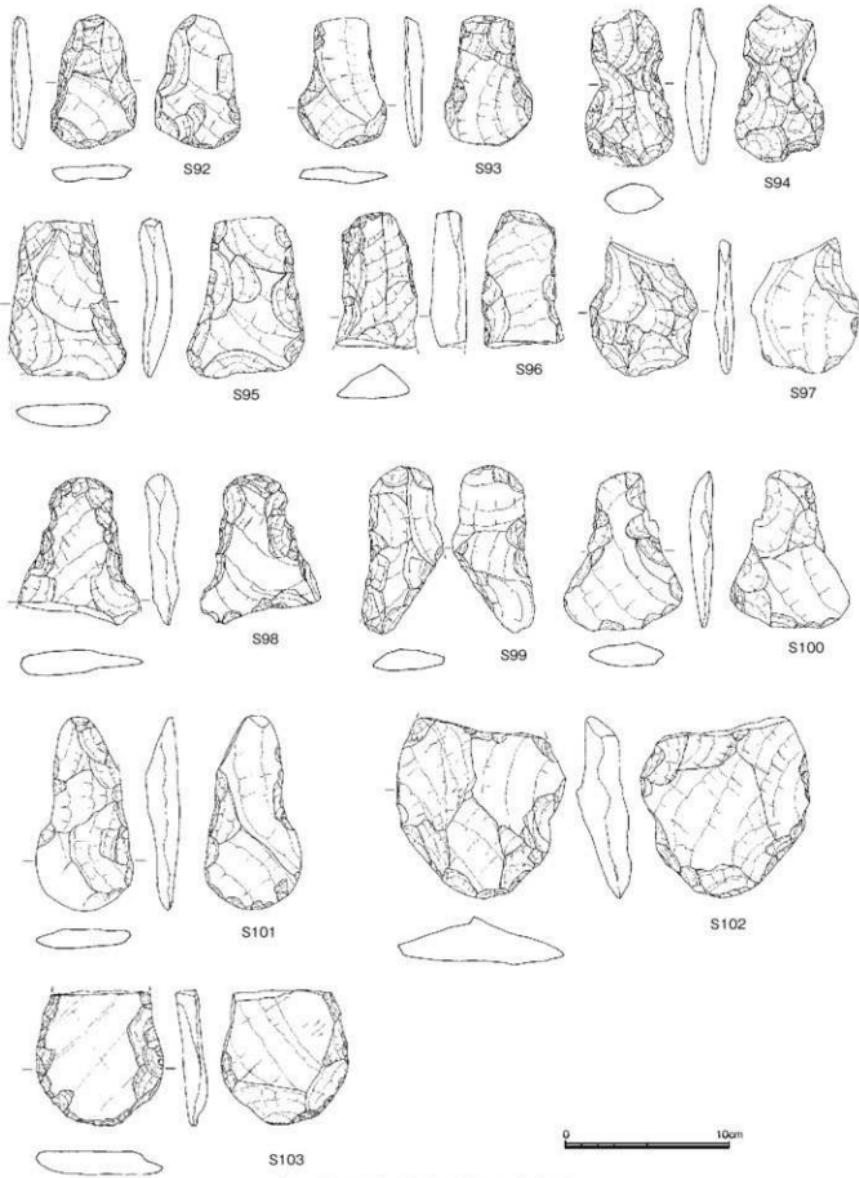
S78



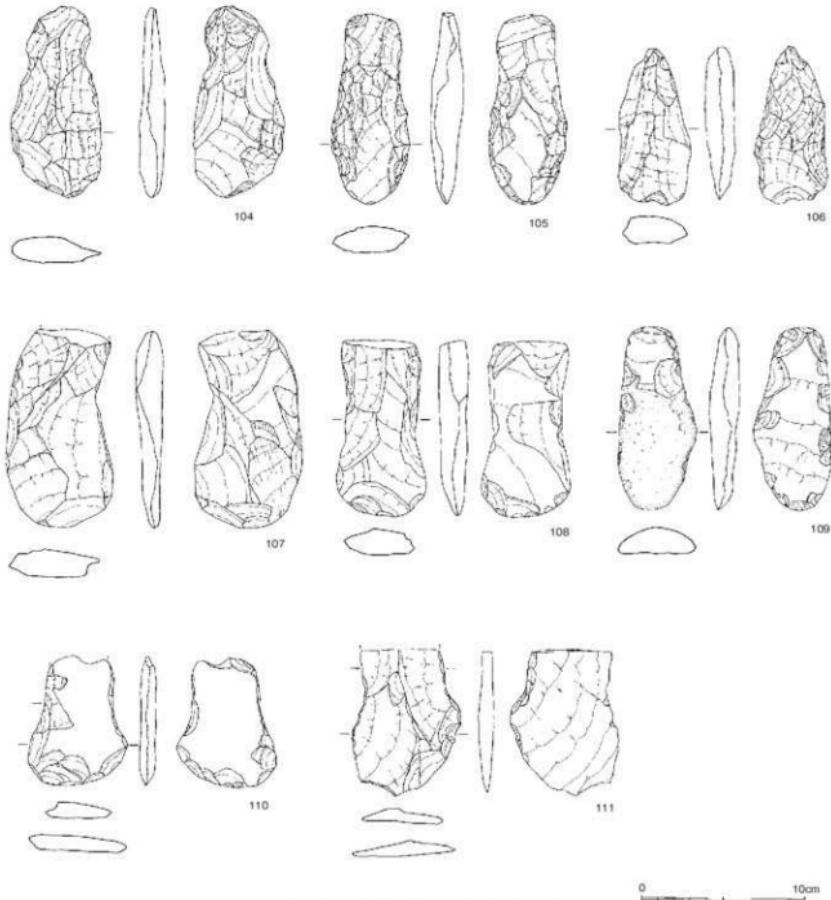
第60図 調査区出土石器9 (1/ 3)



第61図 調査区出土石器10 (1 / 3)



第62図 調査区出土石器 11 (1/3)

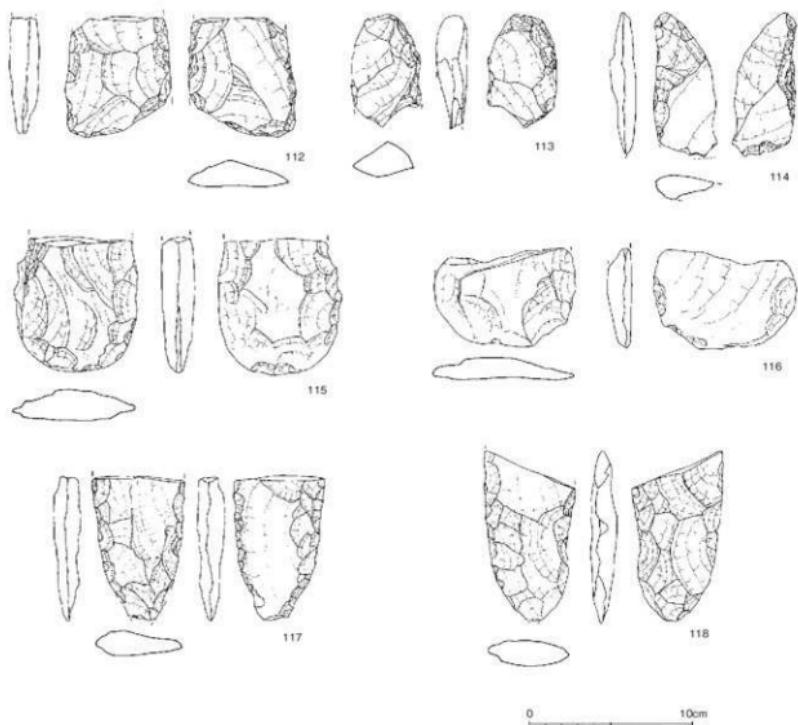


第63図 調査区出土石器12 (1/ 3)

武岩質で、現存の長さ15.4cm、重さ660gを測る。73は幅(9.3cm)の割に厚さ(1.9cm)が薄い。凝灰岩質の石材である。74は玄武岩製、75は玄武岩質の石材である。76も玄武岩製で、全面剥離が残り、敲打や研磨の痕跡が見られず、未完成品の可能性が高い。重さ837gを測る。77はほぼ縦に半裁されている。玄武岩製で、現存の長さ14.5cm、重さ653gを測る。

78～80は柱状片刃石斧である。78は現存長15.4cm、重さ445gを測る。全体的に敲打痕が多く残っている。石材不明。79と80は刃部片で、79はほぼ全面研磨を施し、80は敲打痕が側縁端部に残っている。81は小型の片刃石斧である。ほぼ全面ていねいに研磨している。背面中央の両端に抉りが施されている。長さ5.9cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm、重さ37gを測る。図示した以外に磨製石斧の破片は、不明確な小片もいれると約10点ある。

82以降は打製石斧である。82は玄武岩製で、基部を欠失しているものと思われる。全体に調整が



第64図 調査区出土石器13 (1/ 3)

粗く、刃部も微細な調整を施しておらず鋭角になっていない。失敗品の可能性もある。長さ8.0cm、重さ92gを測る。83は安山岩に似るが、石材不明。川原石の刃部と側面などの一部に加工を加えているが、完成品とは思われない。長さ9.3cm、重さ137gを測る。84は玄武岩製で、剥片素材を利用している。縦断面は全体がやや弓なりに反っている。細かな調整をあまり施していないが、打製石斧の形態は完成している。色調は灰白色に近く、風化が進んでいる。長さ12.8cm、重さ155gを測る。85も灰白色を呈する玄武岩製である。横長の剥片を利用し、片面は主要剥離面をほとんど残している。細かな調整で全体を整えている。長さ14.9cm、重さ186gを測る。86は安山岩製か。横長剥片の片面は大きな加工を加え、反対側面は細かな調整で仕上げている。刃部には調整痕が見られず、一見磨製石斧のような刃部であるが、剥片素材のままであるものと考えられる。長さ13.9cm、重さ165gを測る。87は玄武岩製である。やや擦状を呈している。剥片素材ではなさそうである。88は灰色を呈する玄武岩製の完形品である。剥片素材を利用している。風化が著しい。長さ13.0cm、重さ283gを測る。89も玄武岩製で、縦長剥片を利用している。灰色を呈し、風化・磨滅が著しく、天地が明瞭ではないが、厚みから考えて刃部の一部が欠失していると考えるのが自然であろう。長さ12.4cm、重さ196gを測る。本来の重さは230g前後か。90は安山岩製か。基部の破片であるが、

全体はやや大型になるものと思われる。遺存部だけで177 gを測る。91は玄武岩製の刃部破片。両面に自然面を残しており、柱状節理で割っていた礫素材を利用している。厚みや全体の調整具合から小型磨製石斧の未成品の可能性もある。

92～111は撥状に近いもの。あるいは刃部付近が基部より大きなものである。92は長さ8.1 cmと小型であるが、完形品と思われる。玄武岩質であるが、明瞭ではない。重さ62 gを測る。打製石斧に分類したもの。大きさや重さから別の用途の可能性もある。93は基部を欠失しているものと思われるが、さほど大きくはないようもない。現存の長さ7.7 cm、重さ54 gと、92よりさらに軽い。玄武岩製で剥片素材を利用している。94は玄武岩の剥片素材を利用している。基部を欠失している。中央部付近の両側に抉り状の加工を加えている。現存の長さ9.9 cm、重さ95 gを測る。本品もあるいは打製石斧以外の可能性もある。95は玄武岩製で、縦長の剥片を利用し、全体が弓状を呈している。長さ9.6 cm、重さ139 gを測る。96は断面三角形を呈する玄武岩製である。縦長剥片を利用している。細かい調整は主要剥離面側に少し見られるだけである。あるいは打製石斧ではないかもしれない。97は玄武岩製の横長剥片を利用している。厚さが1 cmと薄い。現状の重さは66 gで、全体でも100 g強程度か。98は玄武岩製。左側面下部は平坦面を成している。99は玄武岩製で、下部の一部を欠失している。長さは10.1 cmで、重さは71 gと軽い。100は玄武岩製で、風化が進み、表面は白色に近い色を呈している。両面とも元々の剥離面を多く残している。刃部の剥離は使用時につけたものであろう。長さ9.7 cm、重さ98 gを測る。101は玄武岩製の剥片素材を利用している。両側縁とも撥状の屈曲部付近に加工を多く加え、刃部の多くは元々の剥片剥離面をそのまま残している。長さ11.8 cm、重さ145 gを測る。102は玄武岩製の大型打製石斧である。風化が進んでいる。剥片素材を利用している。現存の重さ366 gを測る。103は片面が青灰色、片面が灰白色を呈する玄武岩製である。現存の重さ151 gを測る。104は玄武岩製で、横長剥片を利用している。大きな剥離のみで縁辺調整まで言っておらず、未成品かもしれない。あるいは刃部中央付近の厚みがあること、基部の両側にノッチ状の調整があることからあるいはスクレイパー・大型石匙などの可能性もある。長さ11.6 cm、幅5.6 cm、厚さ1.6 cm、重さ130 gを測る。105も玄武岩製で、細身の打製石斧である。刃部は両面とも素材時の面が残っている。長さ11.7 cm、幅4.9 cm、厚さ1.9 cm、重さ124 gを測る。106は玄武岩製で、右上部分を欠失している。片面の大半は剥片の素材のままである。色調は灰白色に近い。107は平面形がやや弓状を呈している。やや風化が進み、基部を欠失しているかどうか分かりづらい。長さ12.0 cm、幅6.5 cm、厚さ1.6 cm、重さ175 gを測る。109は玄武岩原石を最初に剥離した剥片を利用しており、片面に原石に自然面が大きく残っている。欠損らしき部位は見当たらない。刃部も形成されており、小型の打製石斧である。長さ11.1 cm、幅4.8 cm、厚さ1.7 cm、重さ117 gを測る。110は基部を欠失している。磨滅がひどく、主要剥離面の剥離の方向も不確化で、周縁調整も不明瞭である。現存の長さ7.7 cm、現存の重さ74 gを測る。111は灰白色を呈する玄武岩製である。厚さ0.9 cmというかなり薄い剥片の周縁部を調整しただけの製品である。基部は欠失している。現存の重さ66 gを測る。112は灰色を呈する玄武岩製で、磨滅の少ない刃部の破片である。113も灰色を呈する玄武岩製の破片である。114も玄武岩製で、刃部・基部とともに欠失している。115は大型の打製石斧の刃部で、玄武岩製である。全体の形状や調整具合から磨製石斧の未成品に似るが、厚さが1.9 cmしかなく、打製石斧と考えて良いものと考えられる。116も幅の大きな破片で、玄武岩製。厚さ1.2 cm、幅8.9 cmを測る。片面は大半が素材時の剥離面のままである。117は磨滅の少ない、やや暗めの灰色を呈する玄武岩製である。118も玄武岩製で、撥状になるかもしれない。

8 おわりに

第18次調査は、冒頭でも述べたように当市職員吉留秀敏が発掘調査し、すでに3冊の調査報告書が刊行されているが、3冊目の報告書作成前に病魔に襲われ、3冊目の報告書刊行を予定より1年遅らせ、さらに予定の半分以下で刊行せざるを得なかった。その後、4冊目の報告書の準備を行っていたものの、その刊行を果たすことなく、平成25年3月5日に逝去された。奇しくも57歳の誕生日の翌日であった。

その後、吉留の資料を整理する中で、18次調査の未刊行分のトレース済み図面、旧石器の実測図等があり、さらに実測が必要な遺物がコンテナ30箱分あることが判明し、昨夏以降、米倉が4冊目の報告書の準備を始めるに至った。しかし、晚秋になる頃、大量にある縄石器の実測が報告書に追いつかず、さらに未実測分の木製品があることが新たに判明したため、これらの遺物については次年度以降に繰り下げざるを得なくなり、さらに報告の回を重ねることをご寛容願いたい。

古墳時代・古代について

さて、第18次調査は、古墳時代後期以降の元岡における開発の歴史をかいと見ることが出来る。すなわち、平野部の少ない当該地において、狭い谷部を造成・整地を繰り返して利用しており、これまでの報告書で吉留が報告しているとおりである。本報告では、谷の利用を始めた初期段階近くの包含層（S X 100・404）出土遺物と、全調査区から出土した旧石器時代・縄文時代・弥生時代遺物を報告した。前者の内、特記する遺物として「官」の墨書が入った須恵器の坏身がある。底部立ち上がり付近をなでてけずっており、やや特殊な土器であるが、8世紀初頭前後の土器と思われ、当調査区の西側の第20次調査で出土した「大寶元年」銘木簡に近い時期の可能性が高い。第20次調査では、池状の遺構の中から、地名や人名を示す木簡や中国製陶磁器や鉢など官衙的な遺構・遺物が出土している。今回の「官」1字だけでは、詳細な内容までは確認できないが、元岡・桑原遺跡群では第20次調査の他にも、8次調査や12次・31次などで、官衙的要素の強い遺構や遺物が出土しており、今回出土遺物はさらに1例を追加したものと言える。

縄文時代遺物について

縄文土器は全点あわせて100点に満たず、かついずれも細片である。時期的には後期後半から晩期前半ころの粗製土器が大半を占めている。縄文時代遺物で特徴的なのは、打製石斧の多さである。出土した打製石斧は摩滅がひどく、一部小片で認定が難しいものもあるが、確実なものだけで、37点、不確実なものも含めると40数点にのぼる。出土した縄文土器の大半が後期後半から晩期前半であることを考えると、打製石斧の全般的な消長時期なども考え合わせると、概ね当該時期のものと考えて差し支えないと思われる。

縄文時代後期以降に農耕が存在したことについては、山崎純男によって土器中に遺存している穀物の圧痕等からほぼ証明されているが、その中で土掘り具としての打製石斧の多さが認められている。ほぼ草創期と認定できる石鏃（s 29～s 31）を除いた石鏃は20点（内、後期後半前に特有な鉛桶技法に伴う剥片鏃が7点）に対して、縄文時代と考えられる磨製石斧は8点以下、打製石斧は40点前後に上り、熊本県などの遺跡に比べると少ないものの、石鏃などに対する量は多い。また、当調査区から出土した縄文時代遺物は摩滅がひどく、周辺域にある本来の使用地または廃棄地から流れ込んだものと思われ、本来的にはさらに量が多かったと考えられる。そのような状況でも40点前後出

土していることは目を引く。第2章で述べているように、元岡周辺はやや急峻な多くの尾根とその間の谷部から成っており、焼畑農耕の可能性を検討する必要がある。

出土した打製石斧は大半が玄武岩製で、当地の東約4kmにある今山産と思われる。重さ100g前後の小型のものと300g前後のやや大型のものがある。早良区重留遺跡においても、150g前後と300g前後の2種類があり、この大きさの違いは用途に起因するものであろうか。今回の資料の中には玄武岩の剥片はあまり見られず、磨製石斧や打製石斧の明確な未成品も確認できず、同様な石器が出土した重留遺跡とは若干異なっている。残念ながら、今回は包含層の出土で時期が特定できるものではないが、今後の縄文時代農耕研究に一資料を追加できたと考えられる。

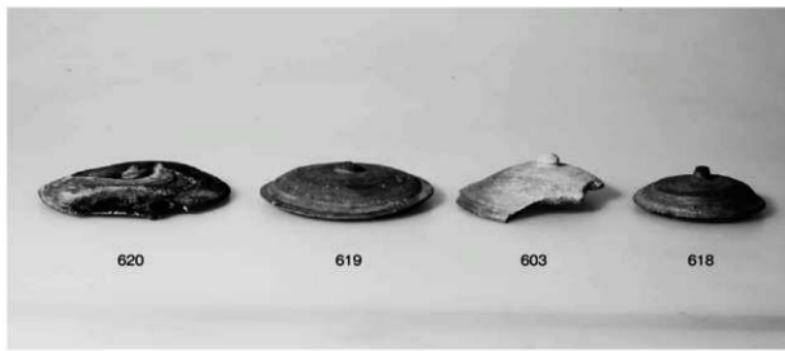
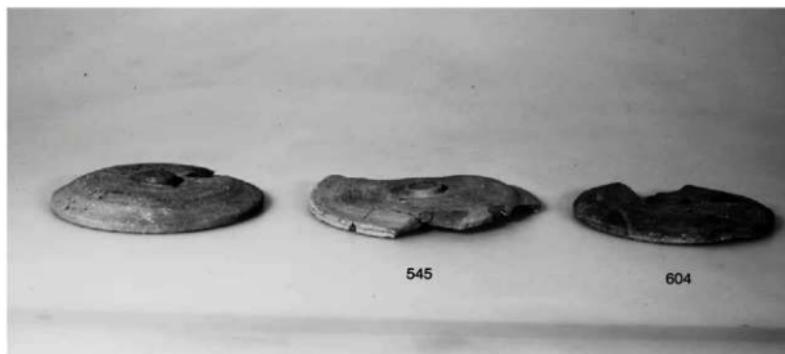
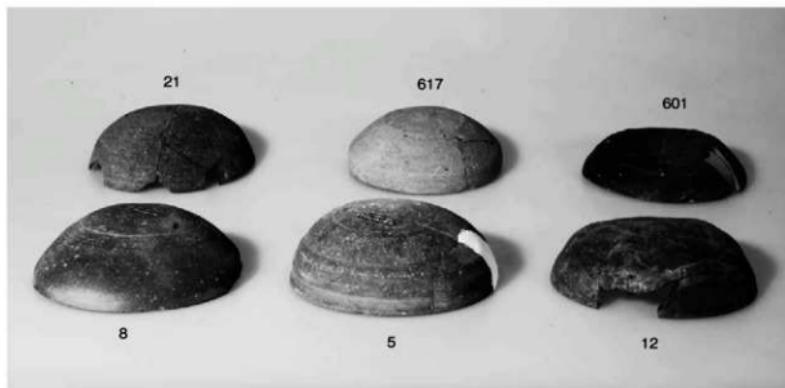
また、縄文時代の磨製石斧は玄武岩製が1点、安山岩製が1点、緑色片岩(?)製が3点、蛇紋岩製が2点とバラエティーがあるのに対して、弥生時代と考えられる磨製石斧は凝灰岩質1点以外はすべて玄武岩製で、縄文時代と弥生時代の石斧石材の違いを追認できた。

旧石器時代遺物

旧石器時代遺物はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・クサビ形細石核と各期の遺物が出土している。元岡・桑原遺跡群全体からも同様の石器が出土しているが、同期の遺構や明瞭な包含層としてはとらえられていない。第18次調査では、谷部包含層の最下部である第5面から出土しており、該期の包含層である可能性もあるが、残っている記録からはわからなかった。また、同面より無文土器出土という記録も残っているが、現物は確認できなかった。今後、収蔵にむけての作業の中で確認できれば、あらためて報告したい。

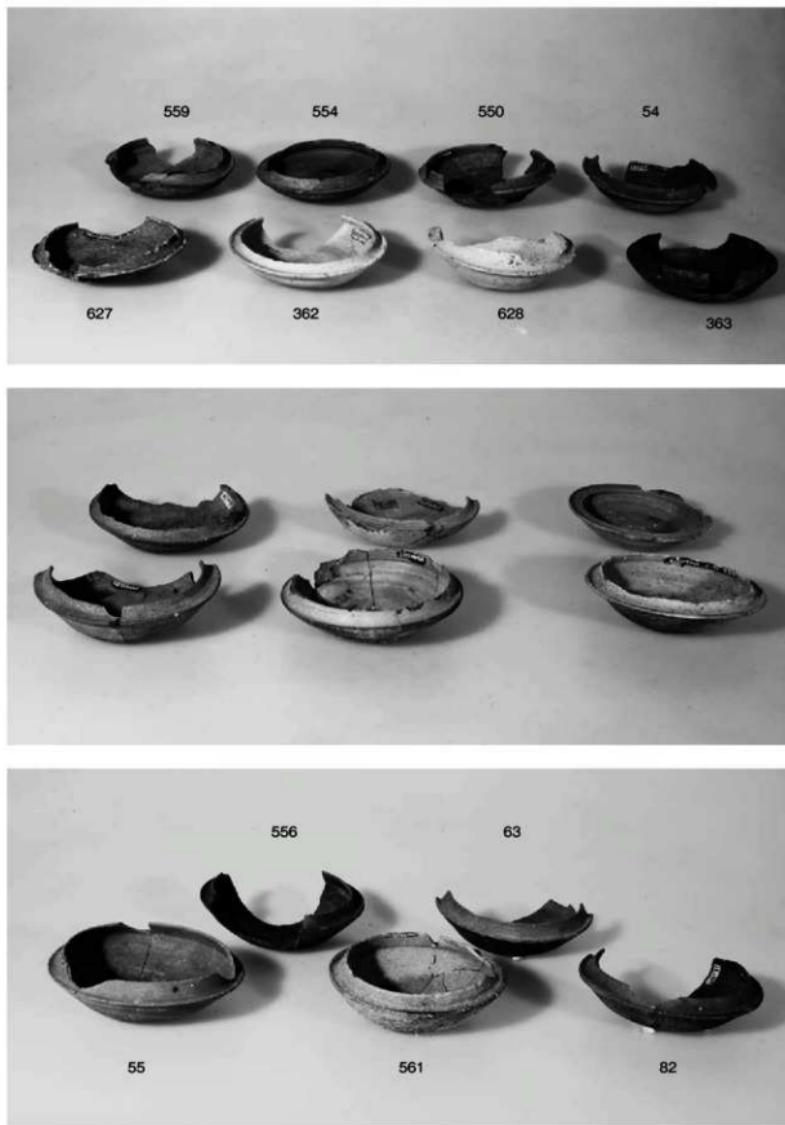
残っていた吉留氏の実測図は、往年の図面に比べると精細さを欠いていた。しかし病状の悪化の中で、ていねいに実測されており、本報告書が氏の伝えたいことを十分伝えきっているか、不安が残るところであるが、ご寛容願いたい。



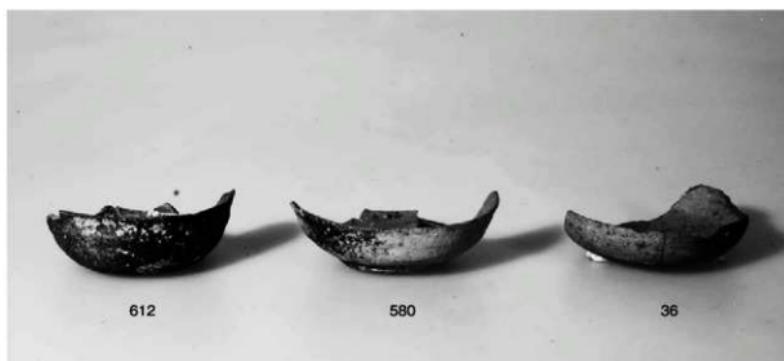


第 18 次調查出土遺物 1

図版2



第18次調査出土遺物 2



第 18 次調查出土遺物 3

図版 4



第 18 次調査出土遺物 4



第 18 次調查出土遺物 5

図版 6



243



244



248



249



350



367



369



371



372



375



376



389



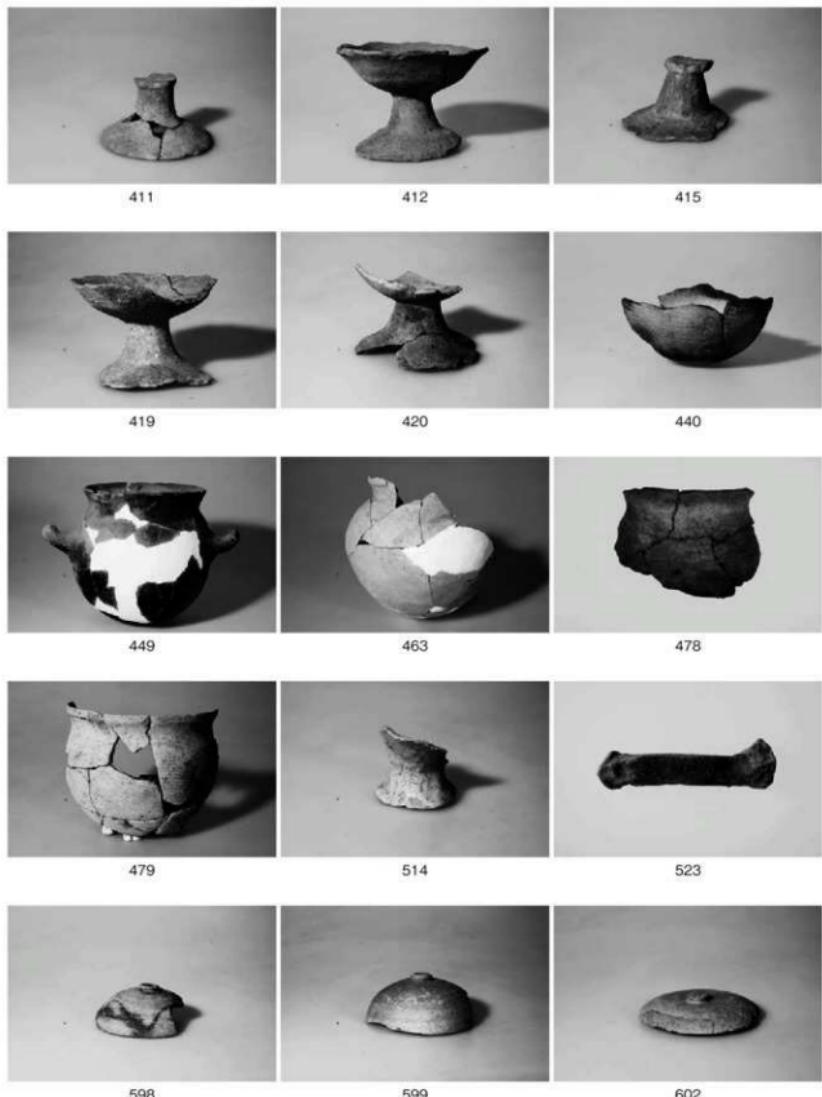
390



409



410



第 18 次調查出土遺物 7

圖版 8



617



622



634



637



643



645



646



648



649



650



651



659



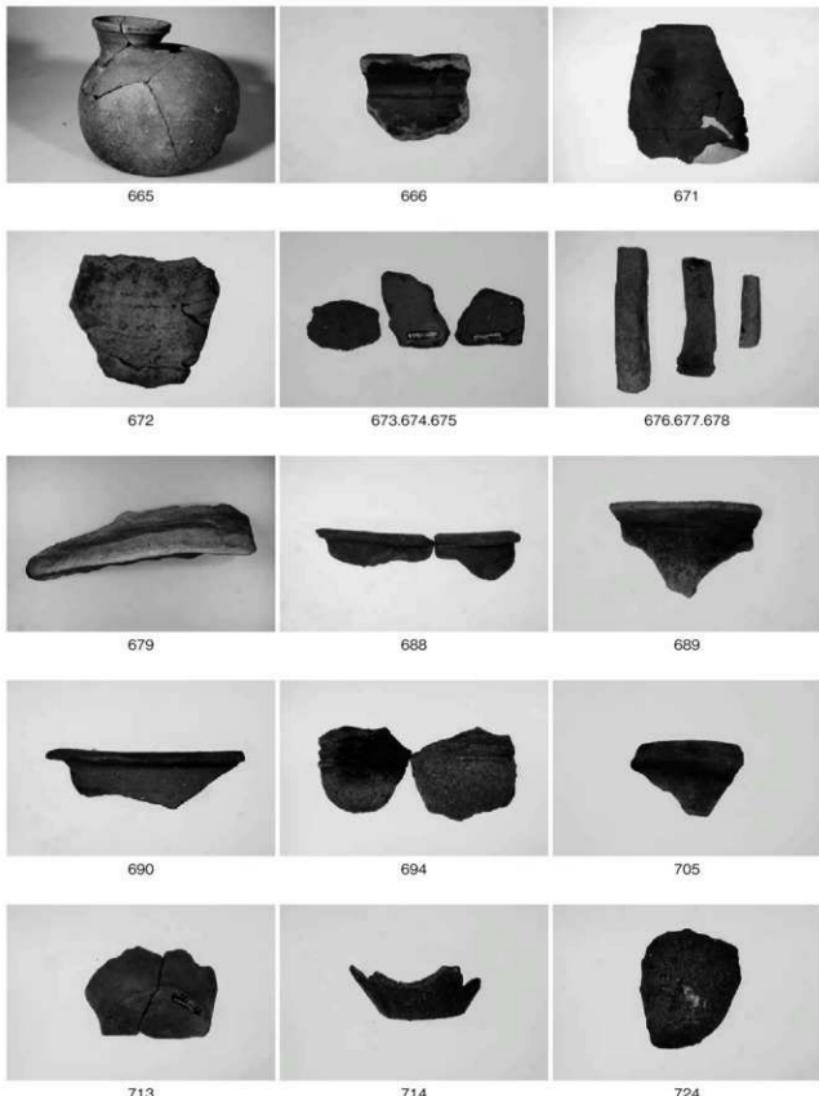
660



663

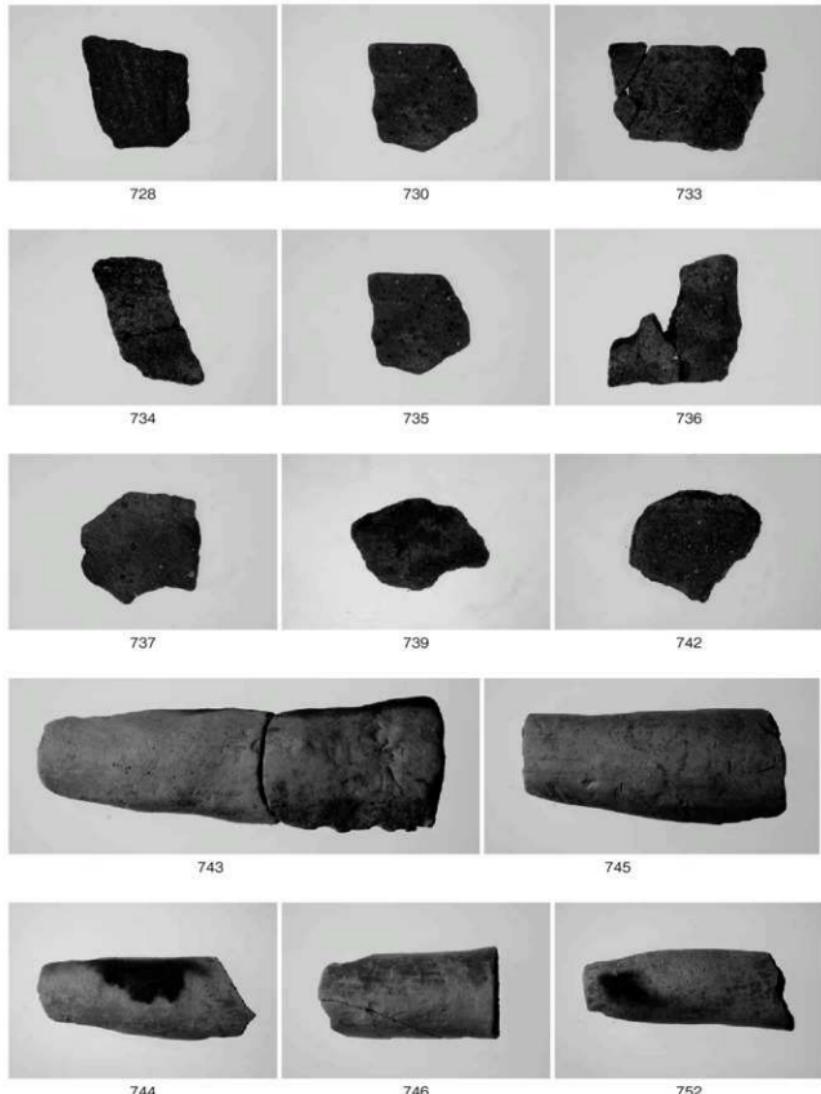


664



第 18 次調查出土遺物 9

図版 10



第 18 次調査出土遺物 10

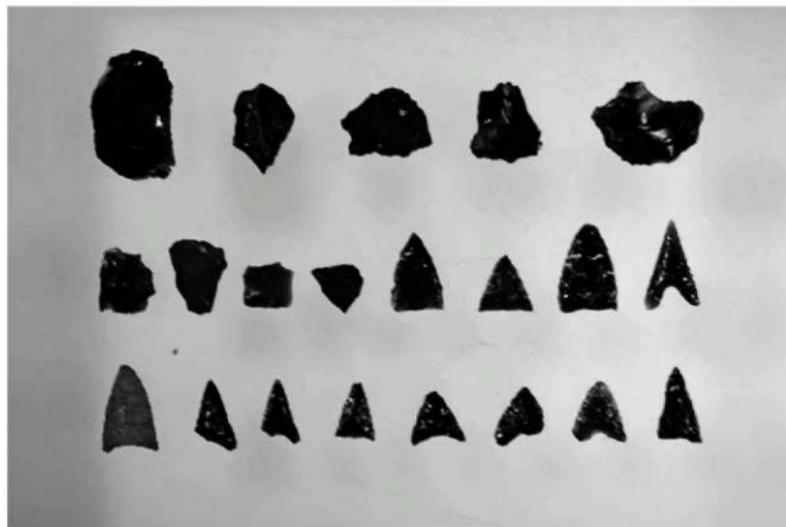


土鍬



旧石器

第 18 次 調査 出土 遺物 11

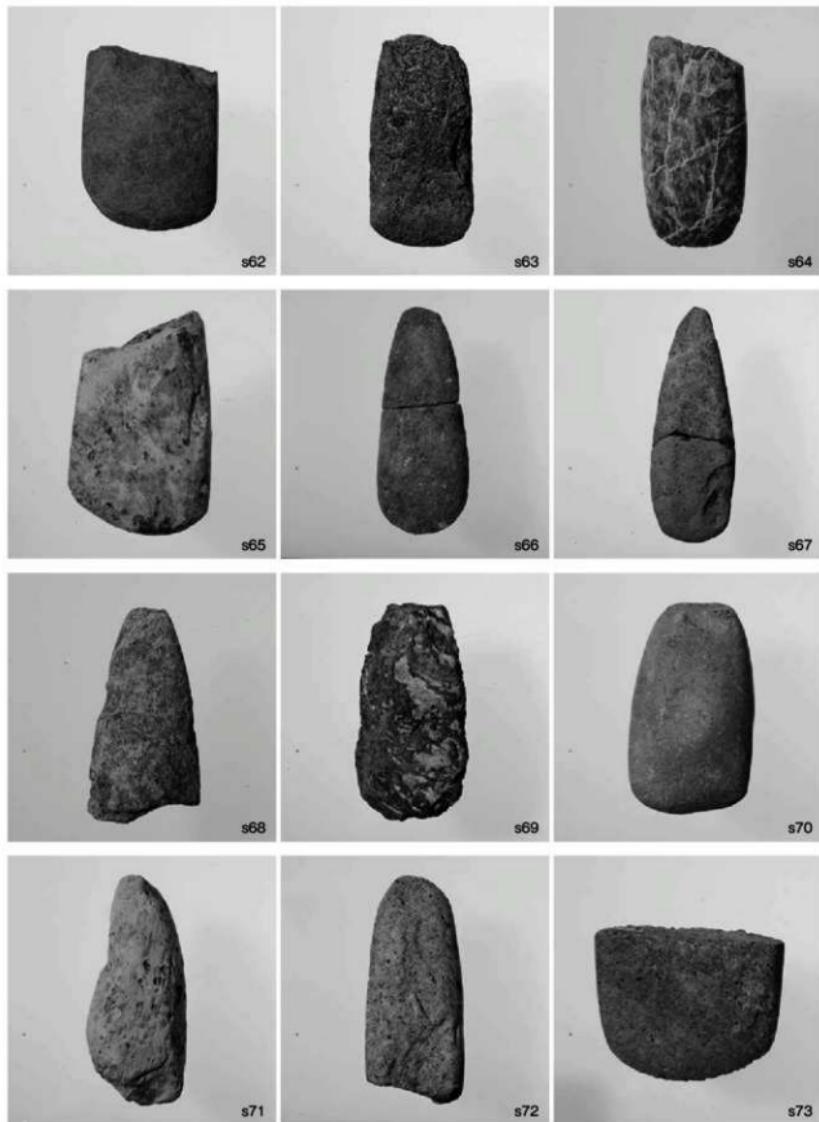


剥片石器 1



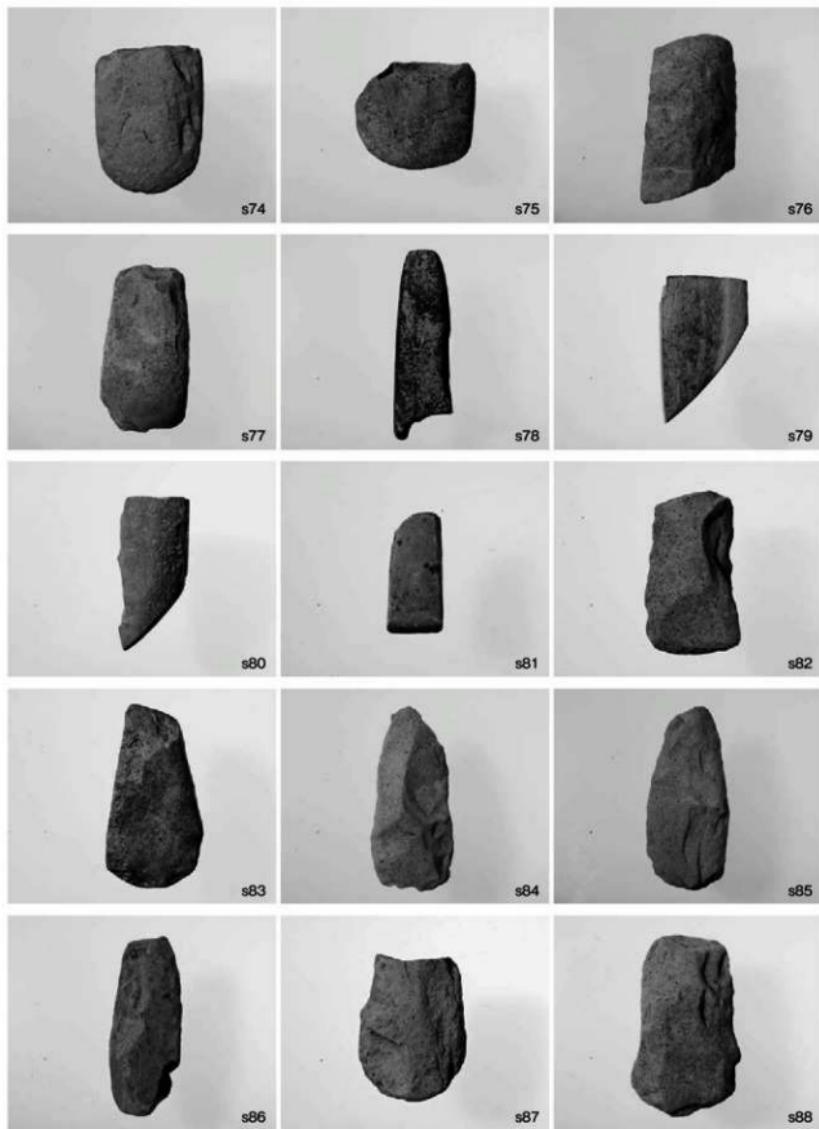
剥片石器 2

第 18 次調査出土遺物 12

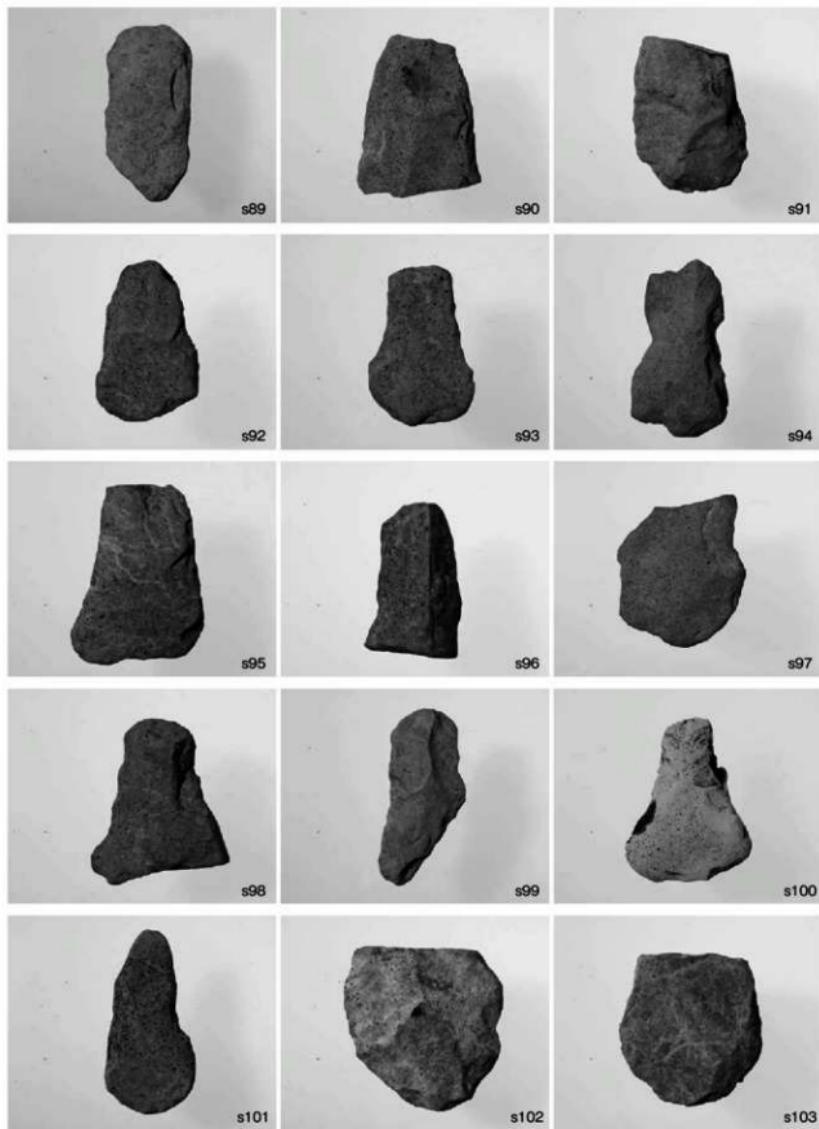


第 18 次調査出土遺物 13

図版 14

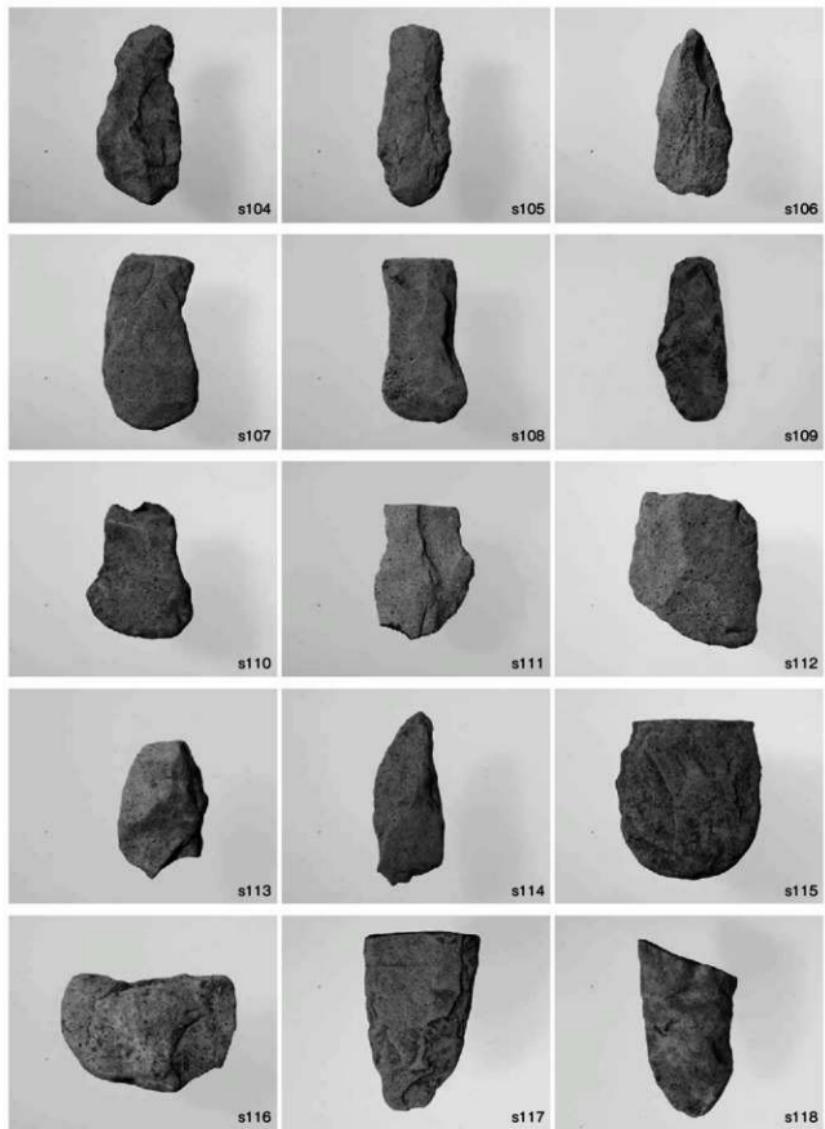


第 18 次調査出土遺物 14



第 18 次調査出土遺物 15

図版 16



第 18 次調査出土遺物 16

IV 第42次調査の記録 —2—

I 第42次調査の概要（第1・3図）

調査区は南側から約60mの6区までを42次調査区、以北の拡張区を52次調査区と呼称している。42次調査は、調査区を東西に分け東側をI区、西側をII区と呼称してきた。第3図の南北のグリッドでいえばおよそAを境に東側が1区、西側がII区にあたる。

42次調査区は2004年10月に東半分の表土を除去して遺構検出に着手したところ流路から多量の土器が出土したことから、西側に調査区を拡張することになったためである。周辺では2005年8月から10月にかけて主要地方道福岡志摩線の道路拡幅のための調査が実施された。46次調査B区はSD01の延長線上にあたるが狭長なトレーンチ調査であったため標高8mまでの掘削が限界であった（福岡市2007）。

42次調査区については2011年度までに整理作業を終えたI区の流路SD01南側出土の土器類について報告がなされた（福岡市2012）。出土遺物は多量で、遺物の種類も多岐にわたるため、どのような括りで報告するか改めて担当者間で協議をおこなった。

II区では、「鞘尻金具」や「有文木製品（翳）」、「絵画のある琴」など重要遺物には木製品や金属器類など多く、これら要保存処理遺物は処理が遅れると資料の保全に支障をきたしかねない。調査時に随時報道発表をおこなってきたが、資料の保全を優先し、展示や研究などで活用される早急な環境整備がまたれた（福岡市2009）。

今回は、調査区西側II区の流路SD02で検出された木製品の経年による劣化を考慮して木製品について事実報告を行う。さらに42次調査区で出土した金属器類については、資料の全体像を示す必要があると考え、I・II区、52次調査区を含めて今回の報告にまとめた。

このように42・52次調査区は、要保存処理遺物から土器や石器などの一般遺物という順序で事実報告を行う。土器や石器類の報告は今後も継続する予定である。

【参考文献】

福岡市教育委員会2007「元岡・桑原遺跡群10」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第964集

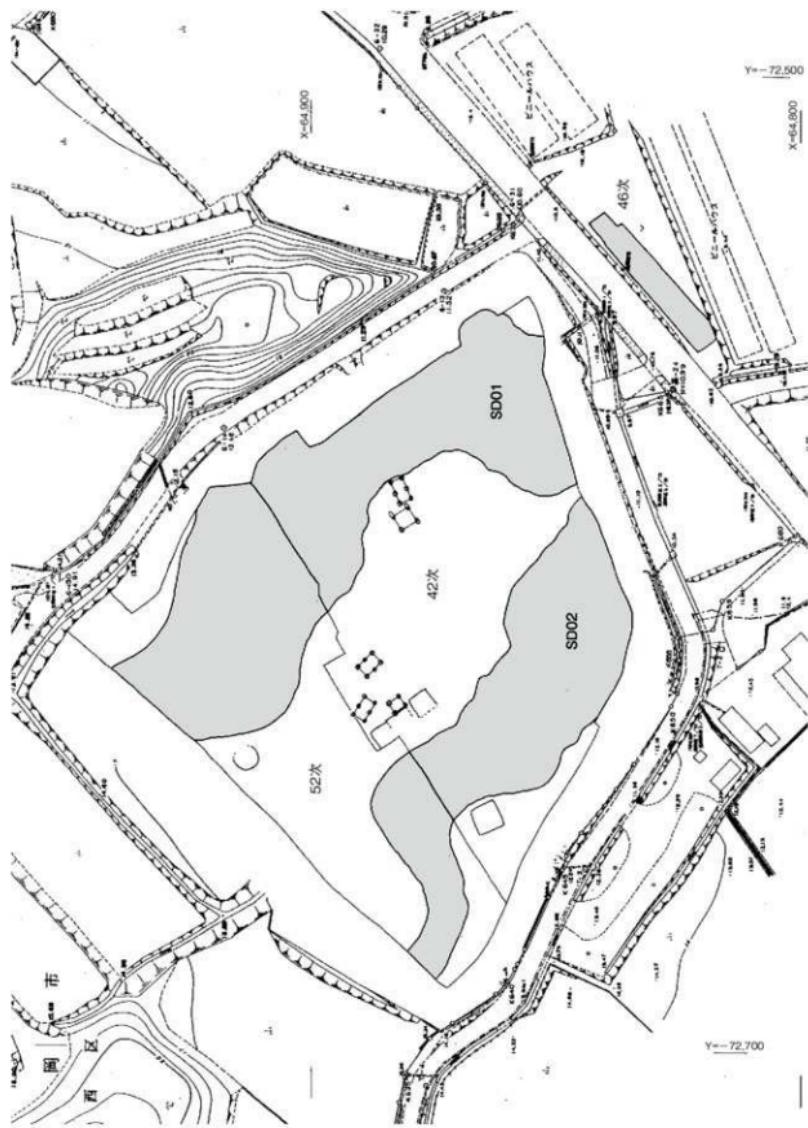
福岡市教育委員会2009「九州大学新キャンパス地内 元岡・桑原遺跡群発掘調査パンフレットII」

福岡市教育委員会2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集

調査区の概要（第1・3図）

糸島地域は、福岡平野の西に位置する早良平野と山塊を隔てた一帯の呼称である。玄界灘に突出する糸島半島は、東西から湾入する入海をはさんで北の志摩郡と南の怡土郡とに分かれている。元岡・桑原遺跡群は、旧志摩郡の東部に展開する九州大学伊都キャンパス用地（約280ha）が主体をしめる。本章で紹介する42次調査区は、遺跡群の南西端にあたる北の丘陵部に杜をいたぐ標高8~10mの南斜面に立地する。この地は、東から湾入する今津湾の最奥部に南面し、入り海の彼方には「イト」の拠点集落である三雲・井原遺跡群を望むことができる。

調査区の東西には斜面を開析する二つの流路（SD01・SD02）が貫流し、その間に掘立柱建物や竪穴住居跡が検出された。流路で検出された弥生中期後半から後期にかけての膨大な土器は、この斜面に紀元前後から3世紀代にかけて営為が継続したことを意味している。膨大という表現は、筆者が担当した2007年4月から約2年間で、厚さ10cmのコンテナに換算すると約8,000箱、市内全体の



第1図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査区主要遺構配置図 (1/1,000)

出土量のおよそ2年分を上まわる遺物が出土したこと裏付けられている。

注目されるのは、木製品、金属器類、動植物遺体、石器など多様な出土品のなかに九州初や国内初とされる資料が少なからず含まれていたことである。特徴的なものをあげると絵画を描いた琴の部材や祭祀儀礼に用いられた木製品、弥生中期後葉の山陰地方や中国山地などの外來系土器、朝鮮半島の後期無文土器や楽浪系土器、五銖銭や貨泉など漢代の貨幣、青銅製鞘尻金具、辰砂の粒子、イノシシの下顎骨の集積などがある。また半世紀以上にわたって形状が分からなかったヒョウタン形土器が完形に復元できたのも貴重な成果である(福岡市2012)。こうした遺物の集中は、この地が祭祀遂行の場であると同時に对外交流の拠点としても機能したことを物語っている。

【参考文献】

福岡市教育委員会2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集

SD02の土層ベルト(第2・3図)

約10,000m²の調査区で検出された構造は、調査区の東西の谷筋を流れる幅20~30mの2条の自然流路(SD01・SD02)と、両者にはさまれた中州部分に分布する掘立柱建物および竪穴住居跡である。南北80mにわたって蛇行する自然流路には、弥生時代中期後葉から後期にかけての多量の土器が流れ込んでおり、流路の両岸には土器群とよぶ土器の集積が多数確認された。

調査区の基盤層は花崗岩質であるが、調査区南では青灰色シルト層が厚く堆積している。土層柱状図は元岡・桑原遺跡群21(1174集)の第4図を参照いただきたい(福岡市2012)。流路が開析された時期は縄文時代晚期で、最下層から城ノ越式土器が検出されることから弥生時代中期初頭には自然流路沿いに集落が形成されたとみられる。流路の落ち際に土器の集積が形成されるのは弥生中期後半である。土器群とよぶ集積は、SD02の両岸で検出され、ひとつの集積で出土した土器の量もコンテナ500を超す多量なものであることから、岸辺で土器を用いた祭祀が後期初頭まで継続したことがうかがえる。また後期前半の時期、土器の量は減少するが、後期後半になると再び増加する傾向がみられる。流路は埋没と開析を繰り返しながら、6世紀代にはほぼ埋まってしまったと推定される。

SD02の土層図(第2図)は、上流(北側)から下流にかけての土層ベルトの観察所見である。T-1、T-2、T-3とした土層ベルトの位置は第3図に示すとおりである。

T-1

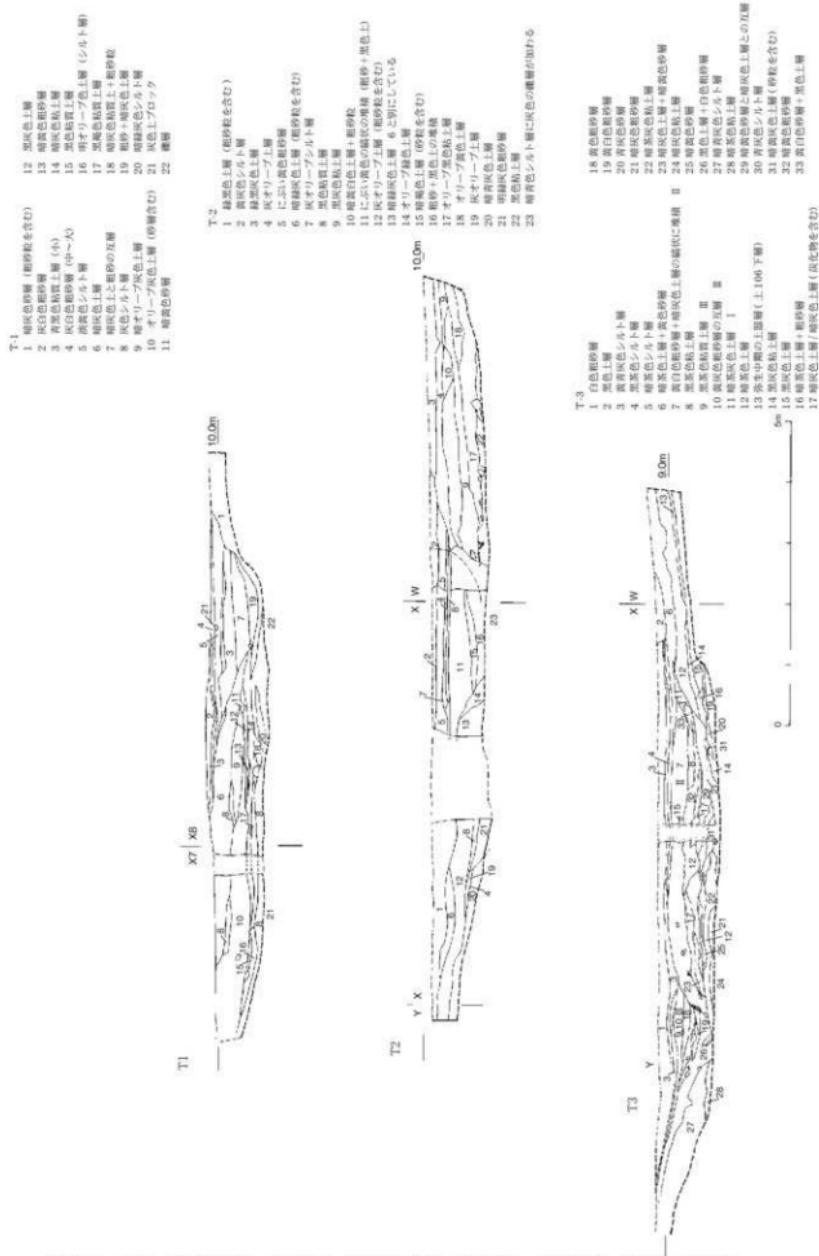
T-1はWX-7・8区にかかる土層で、SD02が東に大きくカーブする箇所にある。22の礫層は花崗岩質の基盤層上の堆積で遺物は含まれていない。シルト質の粘質土と粗砂層の互層がいったん埋没した後、土層西よりで開析された流路が確認できる。この流路は西側の基底面を抉り込んでいくことから急な流れであったと推定される。

T-2

T-2は東西軸WX-Yと南北5・6の境界に設定した土層ベルトである。20の暗青灰色の土層を開析した流路で幅は約30mになる。断面の東側でシルト質の粘質土と粗砂層の互層を開析する流路が確認できる。この流路はSD02が埋没した後の流路で、T-1の土層西よりで開析された流路と同一のものである可能性がある。

T-3

T-3はT-2からおよそ10~18m下流に設定した土層ベルトである。27の暗青灰色シルト層は花崗岩質の基盤層に堆積したものである。ここも一旦窪地になった後、開析されてシルト層に覆われていった過程を読みとることができる。基底部の粗砂層では弥生中期初頭の土器が検出された。



第2図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査区 SD02 土層ベルト断面図 (1/80)

以上の土層ベルトの所見からSD02は弥生時代中期前葉には開析され、中期後半に一旦埋没した後に後期に幅を狭めた流路によって再度開析されたとみられる。そして後期終末までに流路はほぼ埋没し、古墳時代前期には調査区の南に広がる糸島半島の東に湾入する今津湾の最奥部へ雨水の通路として機能していたとみられる。

【参考文献】

福岡市教育員会2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集

遺物の出土状況（第3～8図）

遺物の出土量は地点によって粗密がみられるが、土器が数層にわたって堆積した箇所や木製品の多くは土器の下で検出される場合が多いことから、上層、中層、下層というように分層的な調査をおこなった。このため出土状況の実測図は、同一地点で複数に及ぶことも屡であった。

ここでは特徴的な木製品と金属器が出土した4地区について解説する。第3図に1区～4区として算線で囲った範囲である。また各地区で重要な遺物については青アミで示した。木製品の多くは上層部では遺存しておらず、とくに断らぬ限り下層で出土したものである。資料に付随する数字は挿図および一覧表の挿図番号と合致する。

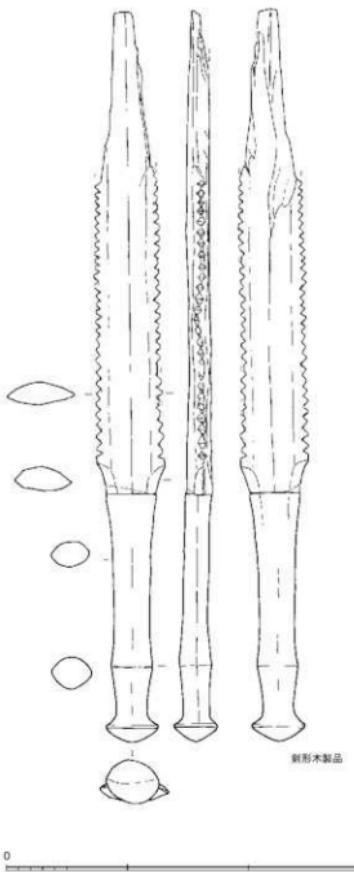
1区（第3・4・5図、図版12・13）

1区は、X 6区北側からX 7区南側にかけての42次と52次調査区の両方にかかる範囲である（第5図）。第5図の左上の十字はX 7区の南6m、左下の十字はX 6区の北から5mにあたる地点である。出土状況は、そこから東に7m、11m×7mの77m²の範囲である。

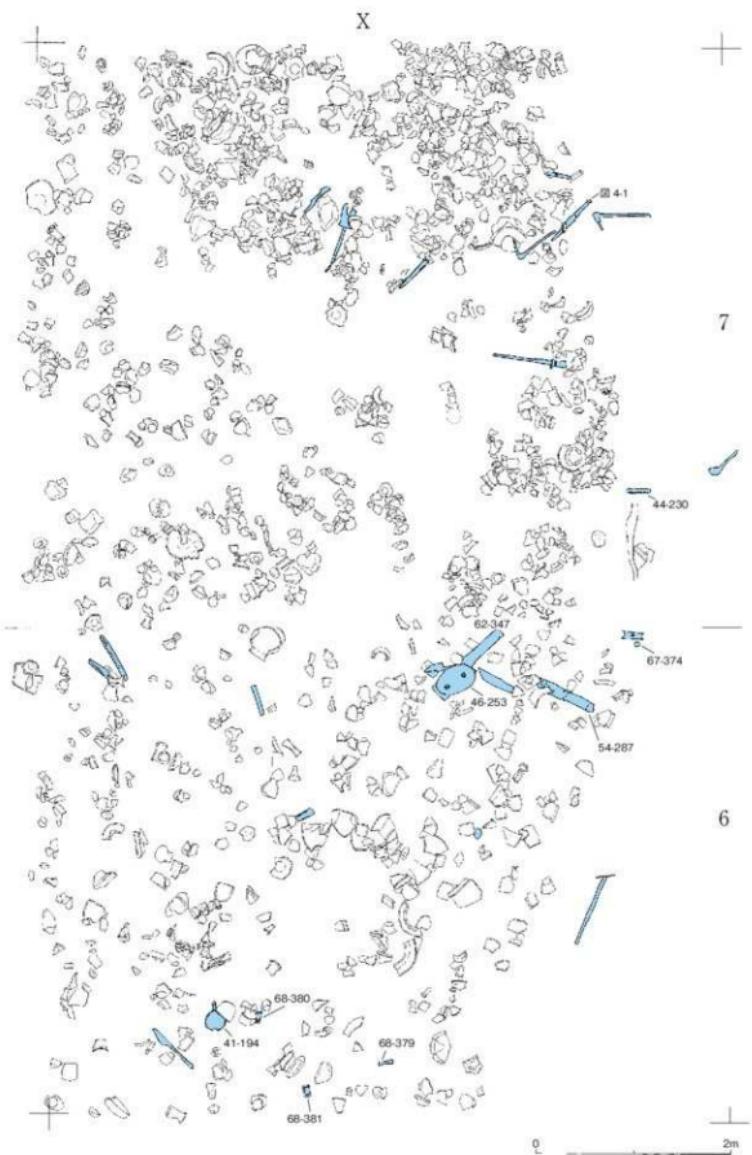
ここでは絵画のある琴や精巧なつくりの剣物箱、剣形木製品（第4図-1）が出土した。絵画のある琴の部材は1区のほぼ中央で出土した。琴は当初椅子96-253の下に隠れていたが、板の端に脛穴が見えたため箱作りの琴の部材と推定した。木偶67-374は琴の東1.5mで検出され、男性器形の木製品は木偶の南、1区の範囲から外れる地点で出土した。

琴の南西3～4mでは精巧なつくりの剣物箱68-379・380・381が出土した。剣物箱68-379・380がセットになることは出土状況からみても疑いない。

剣形木製品が出土したのは琴の北約4mである。剣形木製品は厳密にいえば52次調査区での出土になる



第4図-1 元岡・桑原遺跡群 第52次調査区出土遺物 (1/4)



第5図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査区 SD 02 1区遺物出土状況 (1/50)

が、参考までに図示する(第4図-1)。硬質の木を加工した木製品で、刃部両端に鋸歯状の刻みがある。刃部中央とその両側に鎬が通る精緻なつくりであることから剣形木製品とよぶ。現存長60cm、柄は20.3cmをはかり、接合しない刃部の破片(約20cm)も出土していることから、本来は1m近い長剣であったと推定される。把頭の見通しは梢円形を呈し、柄は把頭寄りで撥を二つ合わせたように広がる。素材から染み出たタンニンによって表面は漆黒色を呈している。

土器は弥生時代中期後半から後期にかけての時期で、層位として捉えることは困難であった。辰砂の粒子が出土したのは1区の南側で下層の粗砂中で検出された。

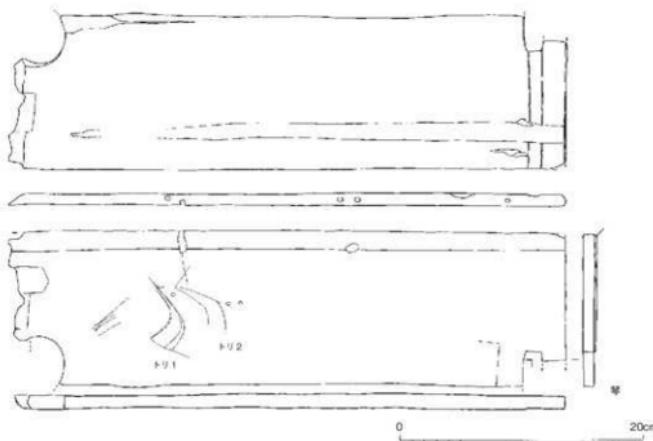
2区 (第6図、図版9・10・14・16)

2区は、W5区～4区にかかる箇所で、左上の十字はW5区の西北端、左下の十字はW4区の北から4mの地点でそこから東に9m、14m×9mの計126m²の範囲である。

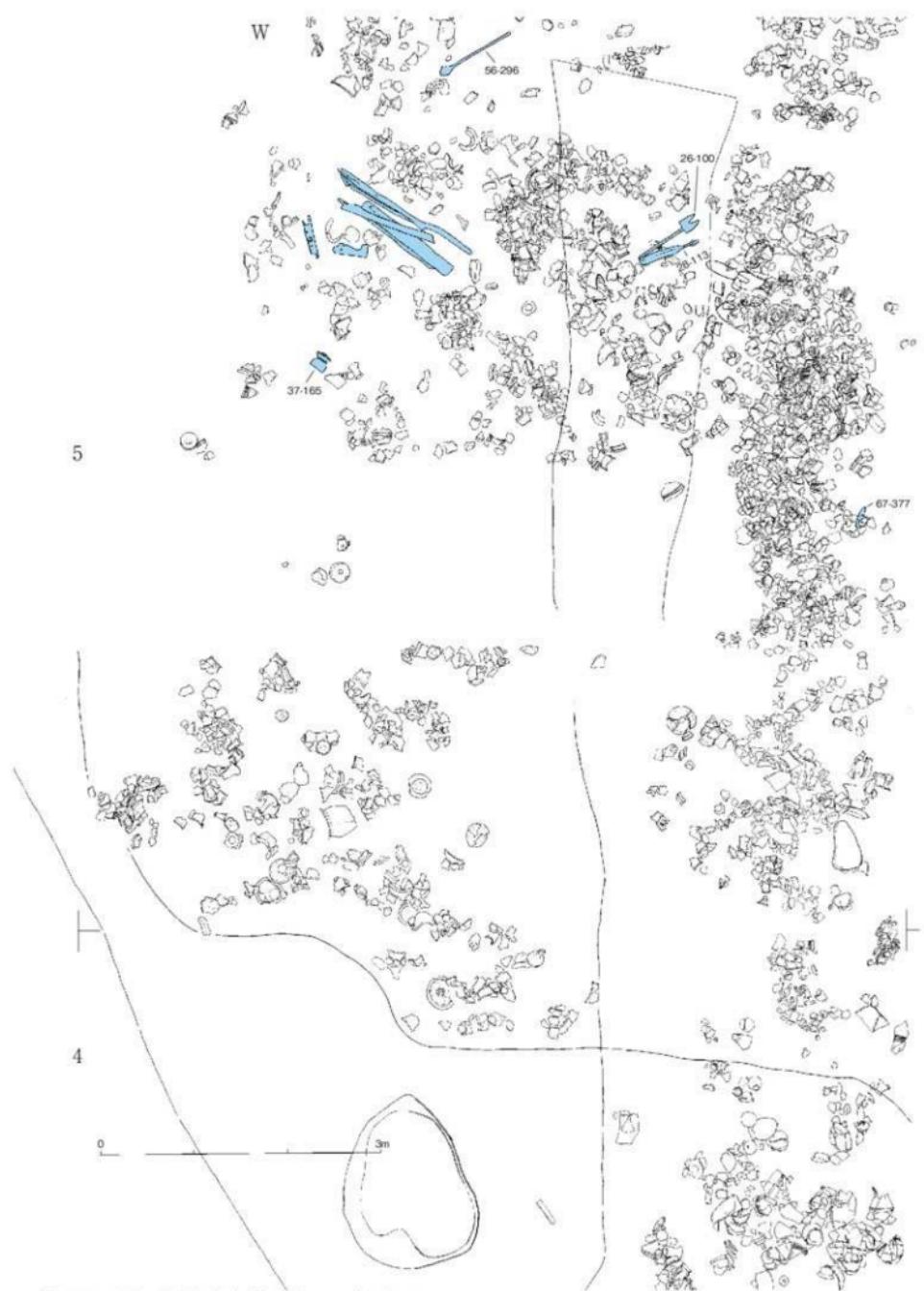
SD02の斜面に堆積した土器群112は弥生中期後半の土器を主体としており、木製品はその下層で検出された。とくに流路の落ち際で出土したトリ形木製品67-377は遺存度が良好で、胸部には杆に緊縛して立てるための溝がめぐっていた。さらにトリ形木製品67-376や378の2点は、67-377の北と南6mほどの地点で検出された。これら3点の木製品の作風はそれぞれ異なってはいるが近接して出土したことからいずれも流路西岸の祭祀に使用されたと考えられる。

2区の北側では又鏟26-100と堅杵28-113が共伴した。堅杵は持ち手中央に突起を有する型式であることから弥生中期中頃に比定される。櫛状木製品56-296はその傍で出土した。小型白の未製品37-165は、調整痕が鮮明で遺存度も良好である。

トリ形木製品は、詫田西分遺跡(佐賀県)や上罐子遺跡(糸島市)で出土しているが、福岡市内で初例である。3例のトリ形木製品が近接して出土したことは、流路に接した祭祀の道具立てとして注目される。



第4図-2 元岡・桑原遺跡群 第52次調査区出土遺物 (1/4)



第6図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査区 - 101 -
SD 02 2区遺物出土状況 (1/50)

3区（第7図、図版11・25）

3区は、W・X-3区～4区にかかる箇所で、右中央の十字はX 3・4区の東端で、13m×13mの計169m²の範囲である。

3区は土器群106の下層にある。土器群106はコンテナ500を超す多量の土器が出土した地区で、42次調査区でも遺物の集積密度が最も濃い場所である。土器群106の上層は弥生時代終末の土器が大半を占めており、厚さ20～30cmの堆積の下から丹塗土器を含む弥生中期後半の土器の集積が検出された。下層で検出された木質は加工痕などではなく、自然木の流れ込みとみられる。

木製品では巻頭図版3に示した有文木製品66-371が中期後半の土器の直下で出土した。有文木製品のとくに湧水部を向いた面の遺存度は良好で、鮮明な朱色が遺存していた。また木柄の可能性のある66-372も近接して検出されたことから駆としての機能を彷彿とさせる。

3区の南東部では中国山地の塙町式土器が須玖II式土器に伴って出土した。塙町式土器の分布の西限とみられる。出土状況が確認されたことで土器の併行関係を知るうえで重要な知見が得られた。

有文木製品の南接する鍬（糸島型）の傍では青銅製鞆尻金具10-11が検出された。単独の出土であるが、最下層で出土した。

このほか貨泉9-6と9-7についても出土地点を捉えることができた。9-6は上層の土器に伴うもので、9-7については流路に埋設したもので、土器の共伴関係は明らかにしえなかつた。

4区（第8図、図版4・5・7・8・22）

4区は、SD02の最も下流にある標高6～7mの地区である。Y・Z-2区とその南北2mにかかる箇所で、右の十字はZ 2区の東端で、東西20m×南北14mの計280m²の範囲である。流路は、調査区南側の道路を隔てた米栗池の方にのびて、近世以降に埋め立てられた今津湾の奥部に緩やかに流れ込むと推定される。

4区の北西で検出された建築材50-266やねずみ返し48-261や53・54-280～285までの柱部材はこの付近でまとまって出土した。SD01と02の間の微高地には掘立柱建物の柱穴が検出されている。出土した建築部材のなかには建物の倒壊などによって流れ込んだものが含まれているかもしれない。このほか一抱えはある扁平な石材が多数出土した。紐掛けの加工がなされたものは碇石の可能性がある。

鏡面が凹状に歪んだ小形仿製鏡11-19はZ 2区の粗砂層から出土した。貨泉9-8もY-2区で検出された。

2 金属器類

42次調査区とその北に接する52次調査区は緩斜面を開析した流路(SD01、SD02)が主体を占めるもので、本来は一連の遺跡である。流路に堆積した遺物はコンテナにしておよそ8,000箱という膨大な量にのぼる。土器や石器類、木器類については遺物量から調査次数や地区ごとに事実報告をおこなわなければ收拾がつかない状況である。

一方金属器類の総量はコンテナ数箱におさまる程度であり、出土地点ごとに分けて報告すると却つて全体像の把握が困難となるため、今回まとめて報告する次第である。

漢代の貨幣（第9図）

流路の埋土や土器群で採集された漢代の貨幣は、五銖銭1と貸泉8で計9点にのぼる。この枚数は、原の辻遺跡(毫岐市)で出土した総数にせまる数であり、本調査区の分布密度の高さが伺える。

五銖銭は、先行する半両銭を廃して武帝の元狩4(前119)年から鋳造を開始した方孔円銭である。「銖」は重さの単位で、1銖は、一両の24分の1に相当し、本来5銖(3.25g)とされた。王莽の始建国元(9)年から地皇3(22)年までは五銖銭の使用が禁止されたが、後漢になると再び鋳造されるようになり、三国・六朝を経て隋代まで通用した。

本例は表面を綠青が覆い、五銖の文字は、劣化のため不鮮明である。周縁にそって郭があり、裏面の穿には方郭がめぐる。五字の交錯する箇所は弯曲して内向し、全体に縱長の趣がある。銖は金篇の頭は鋭く尖り、王の中心に4つの珠文が配されている。朱旁の頭は方折し下筆は円折している。岡内分類のI b式で、鋳造時期は前1世紀代後葉と推定される(岡内1982)。

貸泉は、新の王莽が天鳳元(14)年に初鋳した方孔円銭で、光武帝によって五銖銭が復活された後も私鋳がつづいた。『説文』に泉は、水が流出して川をなす形を象り、音は銭に通じるとされる。当初は径1寸(2.25cm)、重量は5銖(3.19g)とされたが、本例の8枚の貸泉は、径は2.0~2.3cm、重量は1g代から2.3gまで個体差がある。泉の白の中は、「+」と「丁」の二種の表現がみられ、7や9のように「丁」が長くのび、左右の筋とならんで川字状を呈する例もある。周縁の郭について3・4・9は不明瞭だが、穿にそった方郭は8枚の貸泉すべてにおいて両面で確認された。

「イト」の領域で出土した秦漢代の貨幣は、半両銭、五銖銭、貸泉の3種類で、これらのうちで枚数が最も多いのは貸泉である。分布は、御床松原遺跡、新町遺跡、今宿五郎江遺跡、そして元岡・桑原遺跡を含め糸島半島東西の湾岸部に集中する傾向がある。内陸部では上鐘子遺跡や八反田遺跡で貸泉各1枚が出土しているが、三雲遺跡や井原遺跡など拠点的な集落において出土例は確認されていない(註1)。

【参考文献】

長崎県教育委員会2005「原の辻遺跡 総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』第30集

平成5年度からの調査で五銖銭1、貸泉9、大泉五十1が出土した。

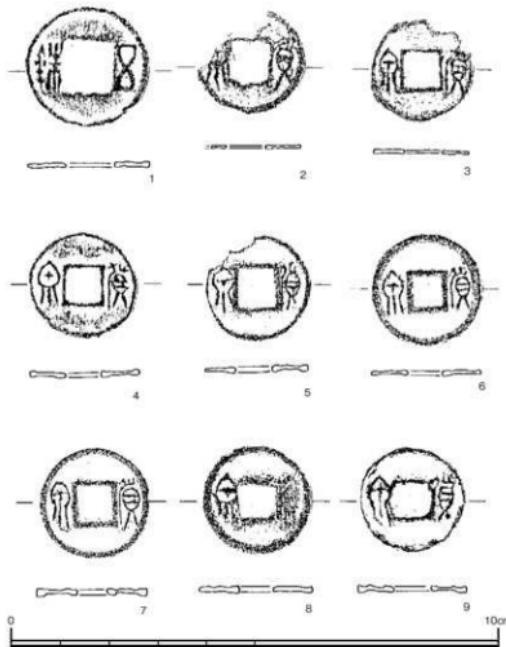
岡内三真1982「漢代五銖銭の研究」『朝鮮学報』第百二輯

【註1】2014年2月現在の糸島市教委の所見。

辰砂の粒子（第10図）

「辰砂」は、水銀朱の产地として古くから名高い湖南省辰州の地名に由来する。土器群120の下層の粗砂中から出土したもので、扁平な指頭状の結晶体で、磨滅して光沢のある水銀朱色を呈している。

北部九州において辰砂の粒子は三雲遺跡の調査で確認されたことから注目されるようになった。三



第9図 42次調査区出土の漢代の貨幣 (1/1)

件名	資料名	出土地点	径cm	身厚cm	重量g	備考
9-1	五銖銭	X-Y-3の後	2.5	0.15	3.1	裏は無文、穿にそって方郭がめぐる。緑灰色を呈する。
9-2	寶泉	B-1、左1層	2.2	0.02~0.1	0.6	裏は無文、穿にそって方郭がめぐる。約1/3を欠損。
9-3	寶泉	B-6、右上1層下	2.0	0.05	1.1	折れ曲がり、2箇所に欠損あり。裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。
9-4	寶泉	W-5、1層	2.25	0.15	2.0	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。
9-5	寶泉	W-5、土器群112	2.15	0.2	1.6	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。緑灰色を呈する。
9-6	寶泉	X-3、土器群106	2.25~2.3	0.12	1.5	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。緑灰色を呈する。
9-7	寶泉	X-3	2.25~2.3	0.22	3.2	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。緑灰色を呈する。
9-8	寶泉	Y-2、右下2層、黒褐色	2.3	0.14	2.7	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。緑灰色を呈する。
9-9	寶泉	Y-4	2.2	0.17	1.8	裏は無文で穿にそって方郭がめぐる。黒褐色を呈する。

雲遺跡で辰砂の粒子が出土したのは、弥生時代後期後半や終末の遺構からである(柳田1980・1981)。その後福岡平野の比恵遺跡群57調査で柱穴などからまとまって出土して改めて注目された。統いて比恵遺跡群69次調査、南八幡遺跡9次調査などで事例が追認された(市毛1998)。本例にみる

長軸1.5cmの結晶は、極めて大粒であることから、国内の鉱床群の産出ではなく、交易品として将来されたものと考えているが、今後化学分析による検証がのぞまれる。

【参考文献】

- 柳田康雄1980「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』第58集、福岡県教育委員会
柳田康雄・小池史哲1981「三雲遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』第60集、福岡県教育委員会
市毛 熊1998「朱の考古学」(新版) 雄山閣
福岡市教育委員会1997「比恵遺跡群(24)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第530集
福岡市教育委員会2000「南八幡遺跡5」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第641集
福岡市教育委員会2001「比恵30」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第671集

青銅製鞘尻金具(第10図)

11は、鈍角の頂部をもつ将棋の駒形の青銅製品である。開口部の見通しの形状から片刃の刀子をねさめた鞘の責金具、鞘尻金具と推定される。全長、開口部の最大幅ともに2.9cmをはかる。鍛造の痕跡がないことから鋳造品と考えられる。土器群106下層の弥生中期後半の土器の下から出土した。

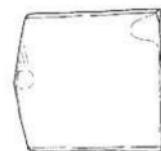
件名	資料名	出土地点	縦×横cm	身厚cm	重量g	備考
10-10	辰砂	X-6-N, 土器群120、下層	1.5×1.15	0.65	3.8	表面は磨滅し、赤く発色している。
10-11	鞘尻金具	土器群106、下層	2.9×2.9	0.95	14.1	青銅製、表面に磨滅はなく、遺存状態は良好である。
10-12	青銅製金具	黒木南鼻遺跡 箱式石棺	高さ2.89	—	—	総長幅3.15cm、総短幅0.99cm、肩部長辺2.94cm、肩部短辺0.80cm。表面は緑青で覆われ、肩部にはヤスリによる調整がみられる。対馬歴史民俗資料館保管。



10



11



—



—



12



第10図 42次調査区出土の辰砂粒子と鞘尻金具(1/1)

鞆の貴金属とされる資料は、シゲノダン出土の三角形を呈する鞆尻金具があるが、国内の事例は希少である。類例として、対馬の黒木南鼻遺跡の箱式石棺出土の青銅製金具がある（高倉1974）。この資料は頂部に鉗を有し、その側部に小孔が穿たれており、馬鐸の可能性があるとする所見が示されている。筆者は頂部側面の小孔は釘穴で、把頭もしくは鞆尻など刀装具の貴金属と解釈する。鞆尻金具であれば両刃の刃部が想定される。

調査区では漢代の貨幣や樂渠系の土器が出土していることから、この貴金属も交易品としてもたらされたのであろう。漢代において刀子は、木筒や竹筒を削る道具として使われていた。これまで伊都国の中点集落とされる三雲遺跡では3世紀代の土器に「竟」（=鏡）の線刻が確認されており、本例も、文字の流入を傍証する資料として注目される。

【参考文献】

対馬遺跡調査委員会1974「Ⅲ 豊玉村佐保シゲノダンと唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告 一浅茅湾とそ

の周辺の考古学調査—』『長崎県文化財調査報告書』第17集、長崎県教育委員会

シゲノダン・唐崎の資料は把頭飾の盤部に装着する金具である可能性がたかい。

高倉洋彰1974「V 黒木南鼻遺跡対馬一浅茅湾とその周辺の考古学調査—』『長崎県文化財調査報告書』第17集

青銅製鋤先（第11図）

13・14は青銅製鋤先の刃部から袋部にかけての破片である。

13は赤銅色をとどめている。刃込部と刃部との幅は狭くかなり使い込まれている。袋部の端部には折損の痕跡がみられ、内底部に暗灰色の中子砂が遺存する。平面図左の刃部の磨滅が著しい。

14も刃込部と刃部との幅は狭く限界近く使い込まれ、袋部の端部には折損の痕跡がみられる。圧をうけている。平面図右の刃部の磨滅が著しいことから、両者とも片面が平坦で他方が中ふくらみの刃先装着部をもつ鎌身に使用されたと推定される。

【参考文献】

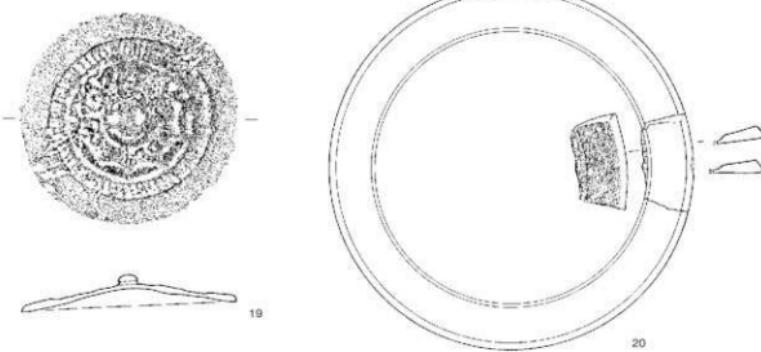
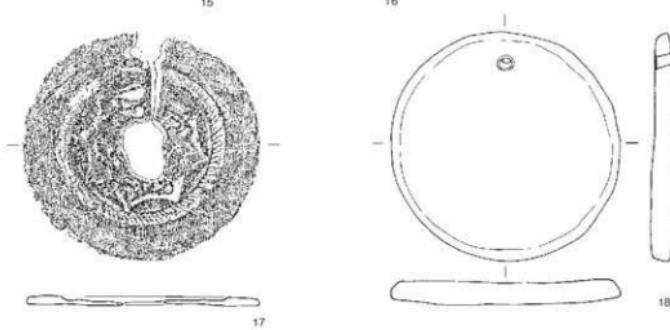
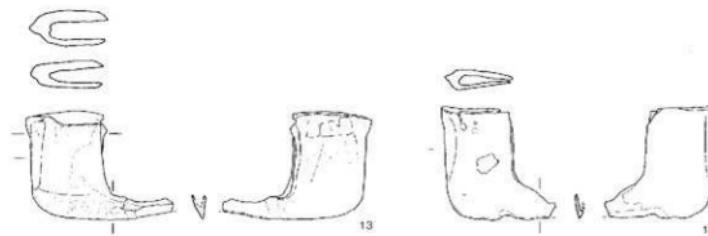
柳田康雄1980「青銅製鋤先」『古文化論叢』鏡山 猛先生古稀記念論文集刊行会

小形彷彿鏡と有孔土製円盤（第11図）

流路で出土した銅鏡は、小形彷彿鏡4面と船載鏡の破片1点の計5点にのぼる。小形彷彿鏡は、重圓文系の彷彿鏡2面と内行花文鏡の彷彌鏡2面である。

小形彷彌鏡15・16は、面径は4cm程度で鏡面側は中心部に径2cm程度の凹みがみられる。鏡背

件名	資料名	出土地点	縦×横cm	身厚cm	重量g	備考
11-13	青銅製鋤先	C-1, M-1	4.4	残存最大幅3.3	47.2	左側の刃の部分に使用痕が認められる。最大厚1.5cm。
11-14	青銅製鋤先	SD02	4.6	残存幅4.6	29.6	表面には大小の細かい孔がみられる。最大厚1.05cm。
11-15	小形彷彌鏡	SD01	径4.1～4.2	厚1.0～3.0	24.9	背面の文様は不明。縁の断面は丸みを帯びている。径5mmの紐に径1.5mmの細い紐穴を施す。
11-16	小形彷彌鏡	Z-2, 土器群136	径4.0	厚1.0～3.0	26.3	背面は青から紫色を呈する。径3.5mmの紐に径1.0mmの細い紐穴を施す。15と同形状。
11-17	小形彷彌鏡	SD02	径9.3～9.5	最大厚0.3	96.4	紐を打ち欠く。縁に穿孔を施す。銀衛文等の内側に弧文(8)がめぐる。
11-18	有孔土製円盤	SD03	径9.4	最大厚1.0	—	縁には1箇所斜方向に穿たれた径4.5mmの孔がある。
11-19	小形彷彌鏡	Y-3, 河川	径8.8～9.0	外縁厚0.3	126.8	紐は1.3×0.7cmで、径1～3mmの紐穴を施す。厚さは均等でなく、全体に薄い。銀衛文の内側に弧文(10)がめぐる。
11-20	銅鏡	SD01上流、A-9	縦横4.0×2.0	最大厚0.45	21.8	約1/12の外縁の破片。復元径は15.0cm。平縁で銀衛文が認められる。緑色をおびた褐色を呈する。



0 15cm

第 11 図 42 次調査区出土の青銅箭先と小形仿製鏡 (1/2)

には重圓文系の文様が鋳出されている。両者の文様構成や鏡面に凹みをもつ特徴などから、径は若干異なるが、同範の可能性がある。鏡面側に凹みがある例として、松原遺跡（佐賀県東脊振山村）SD608出土の小形仿製鏡がある（高木2002・註1）。

小形仿製鏡17は、內行花文鏡の仿製鏡で、平縁、櫛歯文の内側に八の弧文がめぐる。文様に鮮明さを欠く。鉢を打ち欠き、鏡縁部に1ないし2の穿孔が加えられている。18の土製円盤は、17の出土地点の下流約30mで検出された。径9.5cmで、小形仿製鏡17と径はほぼ同じである。縁辺に焼成前の穿孔があり、その位置は17の穿孔の位置とほぼ重なっている。注意すべきは、円盤の下断面が銅鏡にみられるようにゆるやかな凸面を呈していることである。さらに円盤の穿孔が17の穿孔の位置と重なることから、この有孔土製円盤は穿孔を施した仿製鏡を模倣した可能性が想定される。

小形仿製鏡19は、平縁、櫛歯文の内側に10の弧文がめぐる。鏡面は土圧のため内側に大きく歪んでいる。小型仿製鏡17・19は、内Ⅱb式、内Ⅱa式に分類される（田尻2012・高倉1990）。

20は銅鏡の破片である。平縁で復元径15cm、櫛歯文の向きはやや不揃いである。銹化しているが銅質はよく船載鏡と考えられる。內行花文鏡であろうか。

【参考文献】

高倉洋彰1990「弥生時代の小形仿製鏡」『日本金属器出現期の研究』学生社

田尻義了2012「小形仿製鏡から捉える弥生時代青銅器の生産体制」『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
高木恭二2002「第5章 鏡鏡・弥生時代後鏡」『考古資料大観5』小学館

【註1】南健太郎氏のご教示による。

小銅鐸（第12図）

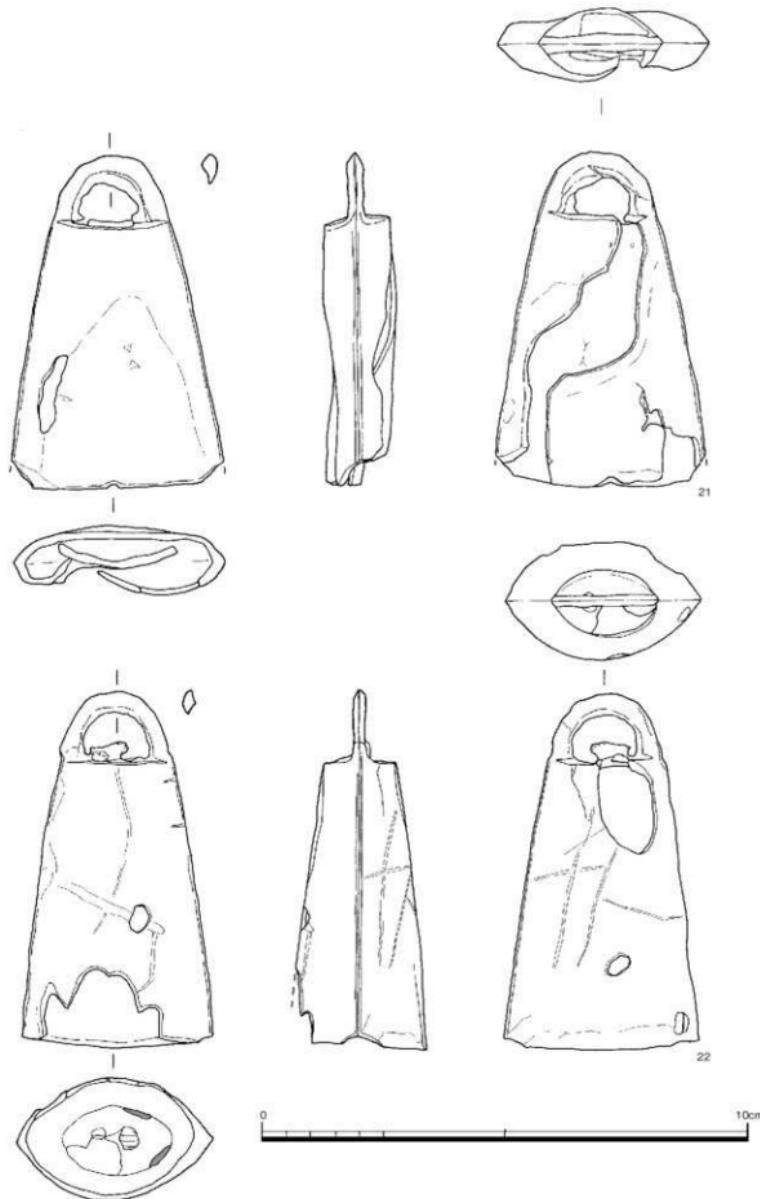
小銅鐸2点は、SD01の下流で近接して出土した（福岡市2012）。小銅鐸が複数で出土することは国内では稀である。出土地点については折込の第3図に地点を示した。

21は無文、無鱗で総高6.91cmをかる。舞は湯まわりがわるく、舌をさげる箇所がない。鐸身は正面左に全長1.7cmの不整形の孔があるが、湯まわりの不良によるものであろう。鐸身の正面右は裾部から舞にかけてクランク状に欠損している箇所がある。こちらも湯まわりの不良によるものが原因であろう。土圧により扁平に圧し潰された状態である。赤銅色をとどめている。

22は無文、無鱗で総高7.28cmをかる。舞は一部を欠くが杏仁形の長軸にそった位置に2孔がある。鐸身は正面左の裾部と、正面右は鐸身上部から舞にかけて大きな欠損部がある。このほか鐸身の両面に小豆大的孔が3箇所で確認できる。舞の内側に2か所、アミで示した箇所に白灰色の中子砂が遺存する。また22は鐸身に筋状の細線が観察される。赤銅色をとどめている。

北部九州で出土する鐸形銅製品中21・22のような例は、無文・無鱗であることから朝鮮式小銅鐸の系譜として捉えられる場合が多い。しかし鐸身の正面、側面ともに確実な型持孔がみられないことや、杏仁形の長軸にそった舞孔の位置は、朝鮮式小銅鐸の特徴と必ずしも一致しない。北部九州では弥生時代後期半まで銅矛の鋳造が行われており、型持孔を有しない銅鐸の鋳造技術があったことは福田型銅鐸の製作によってうかがい知ることができる。本遺跡の小銅鐸は、朝鮮式小銅鐸を祖形とする

排図	資料名	出土地点	縦×横cm	身厚cm	重量g	備考
12-21	小銅鐸	C-1、2層	6.91	舞2.57× 1.48 裾4.32	48.1	舞には両側から圧がかり変形している。その内面に凹凸が多い。舞は湯周りが不足。無鱗であり、外周はバリを丁寧に落としている。赤銅色を呈する。
12-22	小銅鐸	C-1、2層	7.28	舞2.47× 1.51 裾3.99	59.1	無鱗で舞身表面に筋状の線がみられる。舞身の内面は粗ねが著しい。外周のバリは丁寧に落している。舞の長軸に沿って2孔を抜出す。



第12図 42次調査区出土の小銅鐸 (1/1)

る祭祀具として、北部九州の青銅器の鋳造技術が融合して製作されたものといえよう。ただ両者とも湯まわりは不完全で、鉄掛を施した痕跡もみられない。銅矛が量産された工房などで鋳造されたのなら、湯まわりの不備をそのままにするのは不可解である。

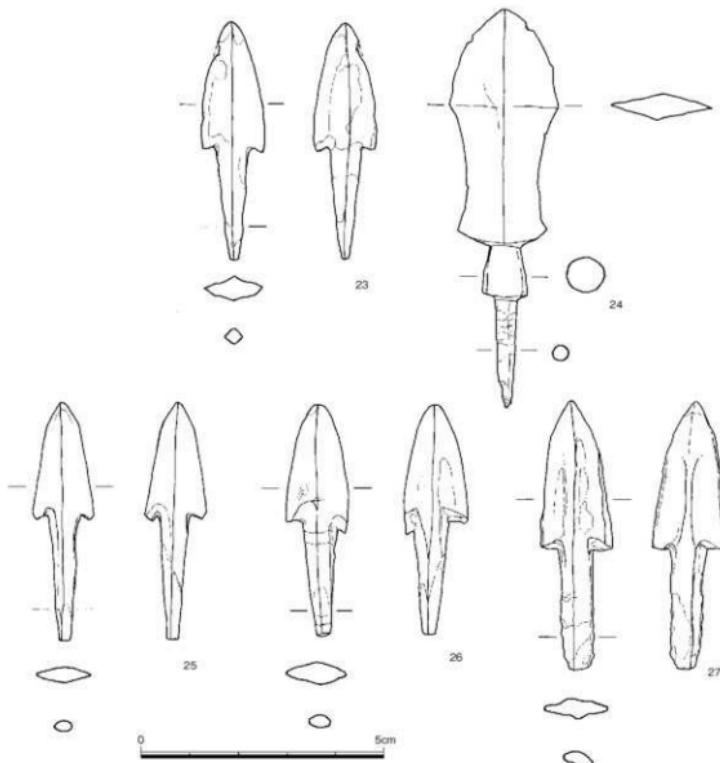
井戸や湧水点など水辺に近い立地で小銅鐸が出土する例は、西日本や鐸形土製品の出土状況にもみられる(前原町1984・福岡市2003)。このような小銅鐸は、いわば水利灌漑施設を共有する規模の集団で共有された祭祀具と捉えられる。小銅鐸の個々の型式にみられる規範は、武器形青銅器のそれと比べてゆるやかであった。という印象をうける。

【参考文献】

前原町教育委員会1984「浦志遺跡A地点」『前原町文化財調査報告書』第15集

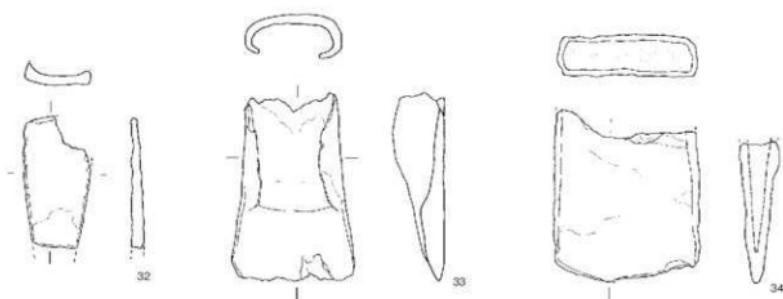
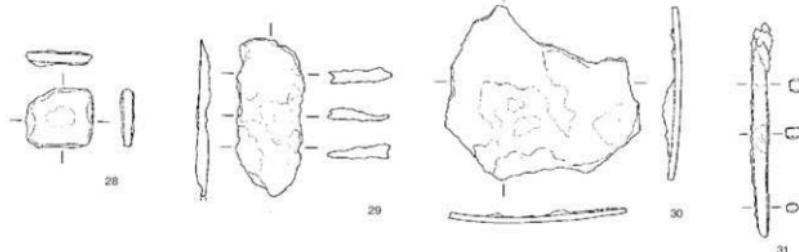
福岡市教育委員会2003「笠抜遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第752集

福岡市教育委員会2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集

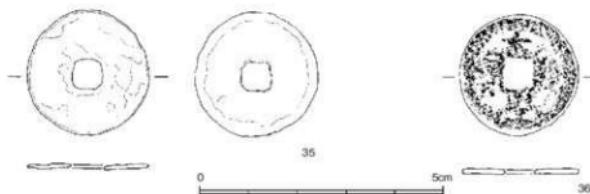


第13図 42次調査区出土の銅鐸 (1/1)

件名	資料名	出土地点	全長cm	身幅cm	身厚cm	重量g	備考
13-23	銅鏡	SD-01. C-2	4.9	1.3	0.5	7.2	両面共に鏡ており遺存状態は悪い。茎の部分などに元の銅の色（赤橙色）の部分がみられる。緑灰色を呈する。
13-24	銅鏡	SD-02. Y-2. 右上5層、褐色粘土	8.2	2.2	0.55	23.6	身の長さは4.8cm、ほぼ完形品である。やや黒ずんだ赤褐色を呈する。
13-25	銅鏡	SD-02. X-2. 右下1層、暗紫灰色	4.8	1.3	0.4	4.6	先端部を欠くが、遺存状況は良い。横灰色～灰白色を呈する。
13-26	銅鏡	SD-02. Z-3. 左下4層、灰色粘土	4.7	1.3	0.5	7.9	遺存状態は良好。鈍い褐色を呈する。
13-27	銅鏡	SD-02. X-3. 土器群106. 下層	5.45	1.4	0.45	8.6	先端部のみ鋭利に研ぎ出す。錫化しているが重量感がある。



0 15cm



第14図 42次調査区出土の鉄製品と貨幣 (1/2・1/1)

銅鏡（第13図）

42次調査区では、SD01で1点、SD02で4点、計5点の銅鏡が検出された。

23の先端部は鋭く刺逆まで仕上げの研ぎが施されている。側面形は長紡錘形を呈している。鋸化によって表面は劣化しているが、重量感はある。

24は、有茎式の銅鏡で、身には十字の鏡がとおる。縁身と茎の間に範被とよばれる傘状の部位を有している。身の輪郭線が先端から闊の途中で変換して流れる「有尖」と分類されるタイプで、先端が内側、変換点から下が外側するカーブを描く。縁身の闊部、賜抉とよばれる部位は茎から鈍角を呈している。遺存状況は良好で、赤銅色をとどめている。古墳時代前期に比定される。

25は両面とも断面が長菱形になるまで鏡が丁寧に研ぎ出されている。刺逆にも仕上げの研ぎが施されている。茎部の付根は太く、端部は先細りとなっている。

26は先鋭な研ぎではないが、刺逆まで仕上げの調整が加えられている。側面形は23同様、長紡錘形を呈している。赤銅色のにぶい光沢がある。

27は筋状に鋲出された鏡をもつ。先端部のみ鋲利に研ぎ出す。刺逆は鋭角に鋲出されていたようだが、仕上げの研ぎが加えられていないため輪郭はほぼ水平となっている。

漢代の貨幣の項で本調査区の出土数が原の辻遺跡の出土数に迫るものと述べたが、銅鏡については4%弱にとどまっている（長崎県2005）。

【参考文献】

長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』第30集

平成16年度までの調査で銅鏡140点近くが出土した。

杉山晋作1980『古墳時代銅鏡の二三について』『古代探獣』早稲田大学出版部

鉄製品と貨幣（第14図）

28～30は、用途不明の鉄製品。31は、断面形から鉄鏡の基部と推定される。

32は、鋳造鉄斧の袋部側面の破片である。鋳型の合せ目が観察される。再加工の痕跡は不明である。

33は、袋状鉄斧の刃部から袋部にかけての部位である。

34は、鋳造鉄斧の刃部の破片である。

35・36は、円形方孔の銅鏡。36は、拓本からかろうじて太平通寶（北宋976～983年）とよめる。

件名	資料名	出土地点	全長cm	身幅cm	身厚cm	重量g	備考
14-28	不明鉄製品	C-4. 右上肩	2.4	2.7	0.6	9.0	
14-29	不明鉄製品	D-5. 土器群9	残存長 6.4	2.8	0.5	20.9	全体に鏡が著した形は不明鏡である。刀子か。
14-30	不明鉄製品	E-1. 土器群5. W	残存長 7.1	残存幅 8.0	0.25	62.7	内側はかなり鏡で覆われている。
14-31	不明鉄製品	E-1. 南肩、2層 サブトレンチ	残存長 8.7	0.65	約0.5	10.0	頭部は欠損していると思われる。断面は基部に向かって方形状からやや長方形状となる。鉄鏡か。
14-32	鋳造鉄斧	E-2. 下、 3層（妙層）	残存長 5.4	2.7	0.5	17.5	鋳造鉄斧の袋部側面の破片。再加工の痕跡は不明。
14-33	袋状鉄斧	E-3. 4区、 ベルト肩下層	残存長 7.7	刃部幅 5.0	最大厚 1.0	116	刃先は外側に広がる。刃部の長さ3.0cm。
14-34	鋳造鉄斧	X-3. 土器群106	残存長 7.0	5.8	1.6	88.1	刃先はくさび形となる。
14-35	銅鏡	E-1. 拡張区、 土器群5	径約2.5	—	約0.1	2.7	表面の鏡びが著しいため文字や文様は不明。
14-36	銅鏡	Z-4. 東側表株	径2.5× 2.4	—	0.1	2.9	表面の磨滅が著しい。太平通寶の可能性がある。

3 木製品

自然流路SD02下層の湧水点に堆積した粘質土は、木葉や種子など有機質のものを多く含んでいた。湧水は木製品の遺存状況にも功を奏したようで、鍬・鏟・さらえなどの農具、杓子・アカトリなどの掬い具、火鑓臼・鉄斧柄、漆塗り容器や剣物容器などさまざまな木製品が出土した（福岡市2009）。注目される資料として原始絵画を刻んだ琴の部材、有文木製品（駒）、トリ形木製品、人面や男性シンボルを象った木製品、剣形木製品、精巧な剣物箱などの祭祀に関するものである。これらの木製品には弥生中期後葉～後期の土器を伴っており、北部九州において初例となるものや稀少な資料が主体を占めている（常松2009）。

ここでは42次調査区のSD02で出土した382点の木製品について種別・器種別に分類し、表で紹介する。種別では運搬具 工具 農具 梢柄 杵・臼 容器 掴い具 紡織具 発火具 建築部材 机 椅子 舟材 游勞具 儀器 楽器 施設器具類に分類した。

出土量が最も多いのは農具で次いで掬い具、容器、建築部材の順となる。農具の主体は起耕具で、なかでも鍬が鑓の倍近くにのぼる。掬い具である柄杓や小型の臼には未製品も含まれている。

漆塗り容器のなかには細密な絵付けを行ったものもみられる。

42次調査区のI区および上流域の52次調査についても近い将来、報告を行いたいと考えている。

【参考文献】

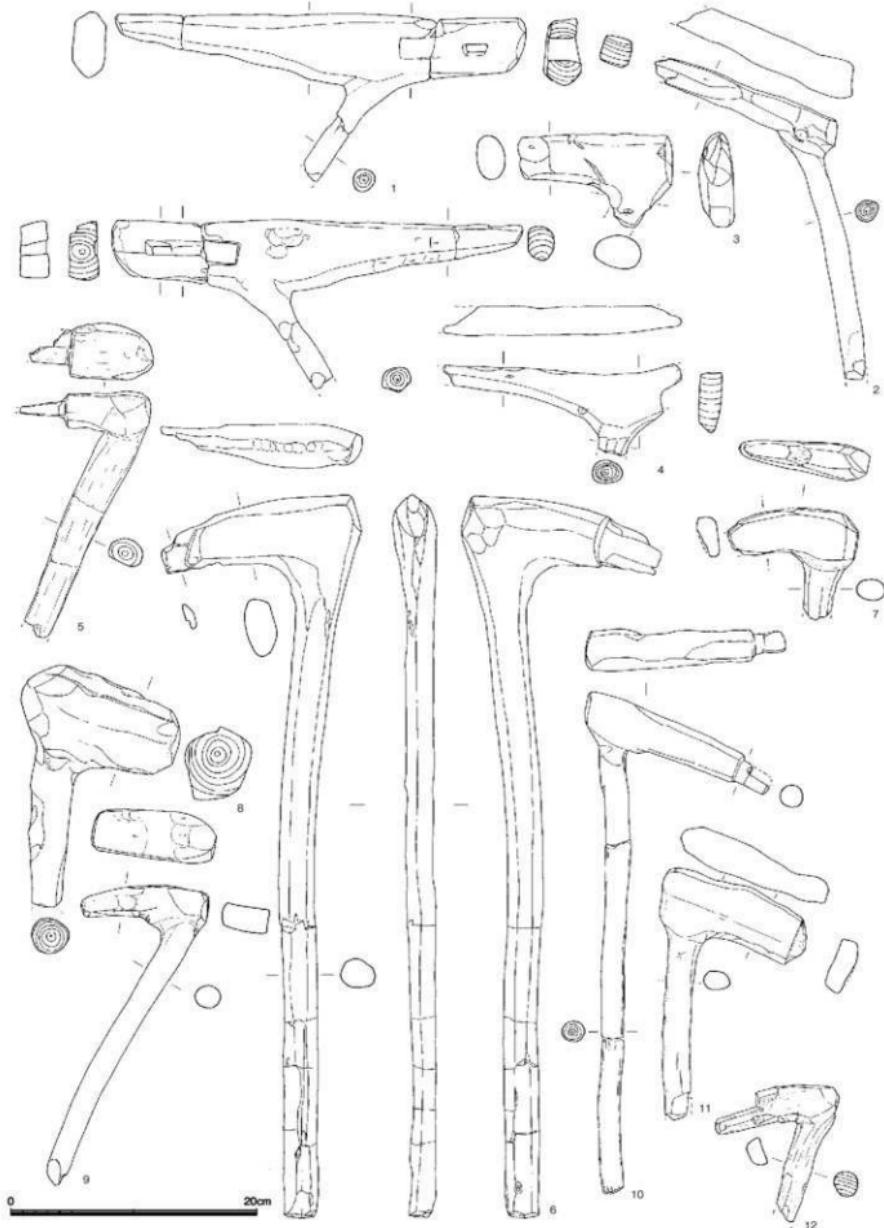
福岡市教育委員会2009「元岡・桑原遺跡群」『九州大学新キャンパス地内 元岡・桑原遺跡群発掘調査パンフレットII』

常松幹雄2009「弥生時代の木製祭祀具 一福岡県 元岡・桑原遺跡群の調査からー」『考古学ジャーナル』No.591、ニューサイエンス社

42次調査区出土の木製品1（第15図）

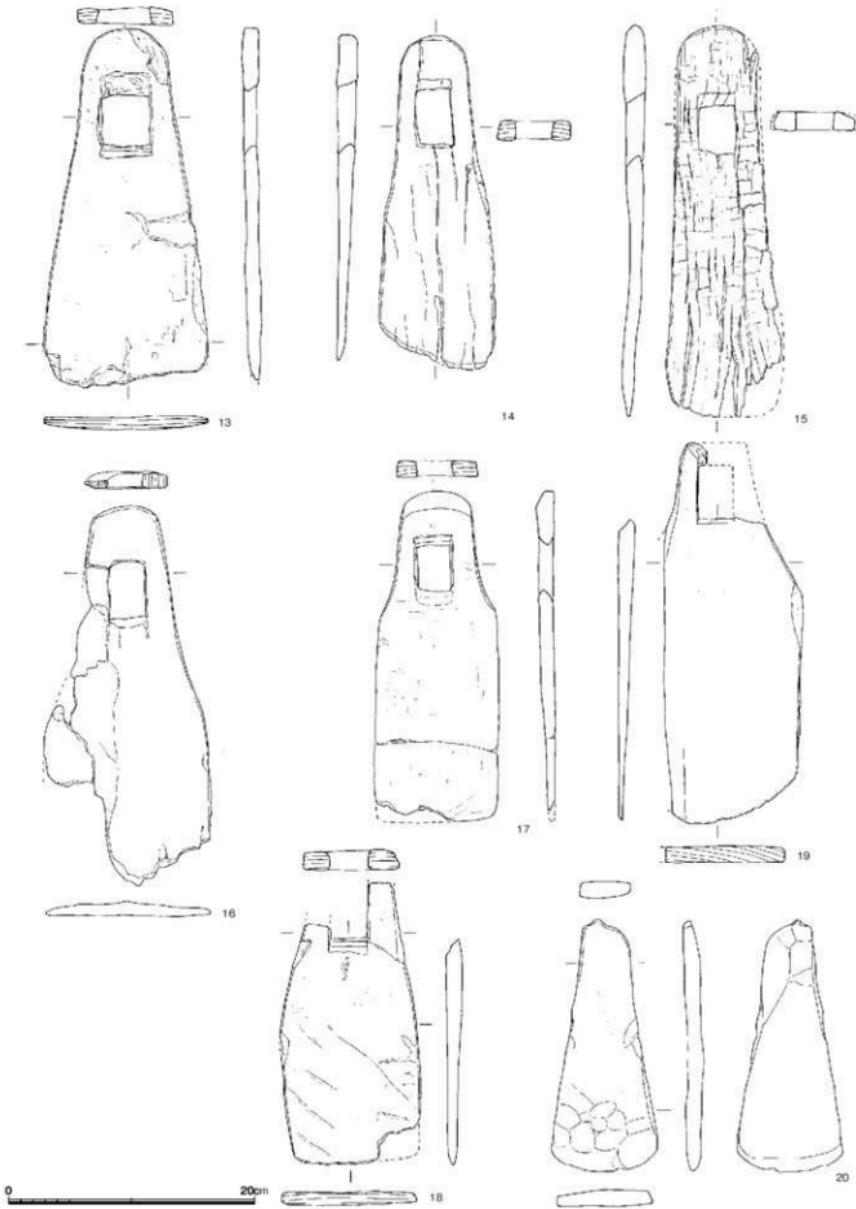
1は運搬具である背負子の部材とされる。上鐘子遺跡（糸島市）では全形のわかる背負子が出土している。2は膝柄によばれる農具の柄に相当する。第21図57～61のような平鍬を緊縛して使用している。

件名	種別	器種	出土地点	全长	身幅	身厚	加工分類	備考
15-1	運搬具	背負子（部分）	Z-1、土器群109	鍬底長：32.6	5.7（最大）	3.3（最大）	芯持ち材	手ノ穴を2箇所に残す。片面小さくソ穴と大孔ノ穴の間に溝をつくる。枝分かれの部分を利用。
15-2	農具	鋤柄	X-5	29.2	13.5	3.4	—	身のしまった堅い材。持ち手の茎は細い。明瞭な段のある加工。
15-3	工具	籠柄柄	Z-1	12.7	4.0	2.2	—	枝分かれ部を利用。
15-4	工具	籠柄柄	Z-1	19.5	7.3	2.5	—	柄は残らず、木目の密なしきりとした木材。枝の分岐を利用した柄部。
15-5	工具	笄柄	W-5、土器群123	21.5	10.6	3.0	—	先端部は扁平で深く削り出す。
15-6	工具	籠柄柄	Y-2	59.2	4.6	2.4	—	木の枝分かれ部を利用して作る。両台脚と柄尻を調整して仕上げる。内法幅2.5cm幅4.0cmの石製籠笄刀を取り付けるものとみられる。
15-7	工具	笄柄	Z-2	9.0	10.7	2.9	—	木の枝分かれ部を利用。
15-8	工具	笄柄（未完成）	X-5	残存長：19.8	13.1	5.3	—	ハンマーのような形をした木製品。笄柄の未完成。あるいは前遺跡出土。表面はヒビが激しく劣化する。先端部はやや膨らんでいる。
15-9	工具	笄柄（未完成）	X-4	25.6	横幅：10.4 縦幅：1.7 ～2.9	3.8	—	木の枝分かれ部を利用。身はしきりしまった材。
15-10	工具	籠柄柄	W-6、土器群123	41.4	柄幅：2.0 身幅：2.5 ～4.0	柄厚：1.6 身厚：2.6 ～3.4	—	木の枝分かれ部を利用して柄にする。笄台部の先端は段を設けて円形状に削り取っている。
15-11	工具	籠柄柄	Y-3	20.6	12.2	2.9	—	片面彫刻により削り形状はよくない。先端部は欠如しているものの加工の跡跡がわずかに残っている。
15-12	工具	笄柄	X-6、土器群120	11.8	2.0	3.5	—	笄柄部の先端部は片面から直角に中央付近まで切り込みを施し、そこから先端部まで半らに削る。

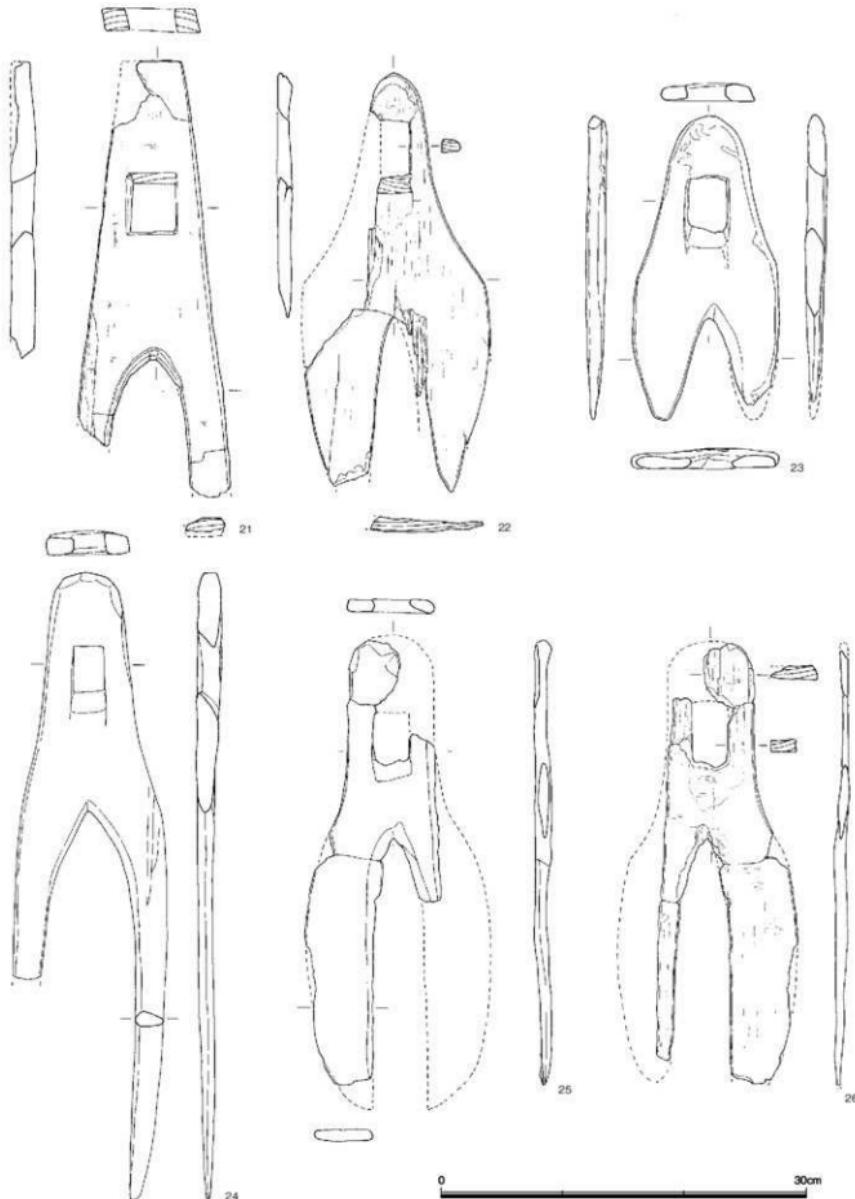


第15図 42次調査区出土の木製品1 (1/4)

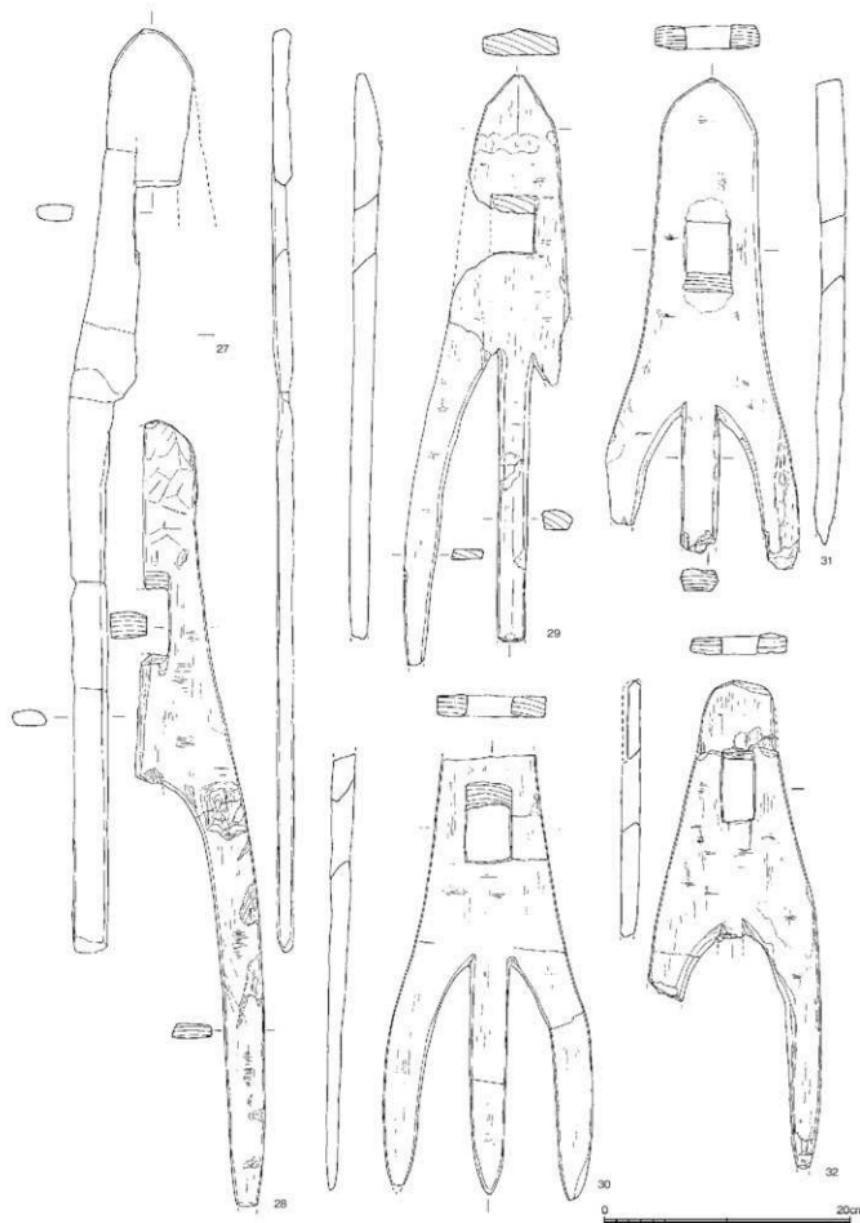
件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	肩厚	加工分類	備考
16-13	農具	平鋤	Y-3. 土器群136	29.4	13.5	1.4	板目	頭部は板やかなえみを持ち、上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。先端部に向て緩やかに外側に開く。
16-14	農具	平鋤	Z-2	27.3	9.5	1.6	板目	上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。中央付近で小さな扉を持つ先端部に向て外側に開く。
16-15	農具	平鋤	X-4	32.0	9.2	1.85	板目?	上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。中央付近で小さな扉を持つ先端部に向て外側に開く。
16-16	農具	平鋤	Y-3	残存長31.1	身部:13.6 頭部:7.1	1.2	板目	上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。中央付近の頭部から緩やかに先端部に向て開く。
16-17	農具	平鋤	W-3-4. 土器群106	残存長27.0	10.0	1.2	板目	2方向に削りれている。上面には方形状 (3.8×3.0cm) の柄孔がある。上面付近には肩部が明確に削り出され、そのままで外側に開き頭部となる。
16-18	農具	平鋤	Y-3. 土器群115	残存長23.0	11.3	1.6	板目	2方向に削りている。上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。先端部は丸く側面に広る。
16-19	農具	平鋤	Y-3	残存長31.2	11.2	1.35	板目	2方向に削りている。上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。先端部は丸く側面に広る。
16-20	農具	平鋤?	Z-1	20.5	8.7	1.3	—	上面付近から緩やかに外側に開く。先端部は丸い刃となる。
17-21	農具	二又鋤	Z-3. 土器群165	35.6	12.0	2.0	板目	3方向に削りながら先端部に刃をもつ。刃部は斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。頭部は丸く側面に広る。
17-22	農具	二又鋤	X-4	34.3	9.9	1.2	板目	2方向に削りている。上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。上面付近には下方へ翼端部に向て刃をもつ。そこから翼端部に向て外側に削り出され、そのままで外側に開き頭部となる。
17-23	農具	二又鋤	Z-2	24.9	12.0	1.5	—	刃部は斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。頭部は丸く側面に広る。
17-24	農具	二又鋤	—	51.4	基部幅:6.0 ~10.5	2.0	板目	刃部は斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。
17-25	農具	二又鋤	—	残存長36.3	基部幅7.2	1.2	—	刃部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
17-26	農具	二又鋤	Y-2. 土器群101	36.1	9.0	1.3	板目	刃部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
17-27	農具	三又鋤	D-6	75.7	—	1.5	—	1本の刃のみ残存する。刃部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
17-28	農具	三又鋤	Z-3	64.2	8.3	2.1	板目	使用されて多くの刃がある。2本部欠損。刃部は丸く側面に広る。
17-29	農具	三又鋤	W-6. 土器群123	48.3	9.8	2.2	板目	2方向に削りている。1刀部欠損。頭部は丸く側面に広る。
17-30	農具	三又鋤	X-5	36.4	12.7	1.7	板目	上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。
18-31	農具	三又鋤	W-6. 土器群123	46.0	15.3	2.2	板目	3方向に削りている。上面には斜め上方向へ方形状の柄孔を有する。
18-32	農具	三又鋤	Y-3. 土器群115	39.8	13.4	1.75	板目	頭部は丸く側面に広る。
19-33	農具	又鋤	X-3	19.3	身:9.3 頭部:6.2	—	—	2方向に削りしている。非常に薄削りの悪い。頭部部は丸く側面に広る。
19-34	農具	又鋤	X-4	19.1	9.1	1.55	板目	頭部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
19-35	農具	多又鋤	Y-3	31.8	7.1	1.6	板目	頭部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
19-36	農具	多又鋤	Y-2	30.2	11.9	—	—	刃は一本のみ残存する。頭部は丸く側面に広る。
19-37	農具	又鋤	Z-2	16.4	5.6	—	—	上部のみ残存。頭部は丸く側面に広る。
19-38	農具	三又鋤	W-6. 土器群120	25.8	11.8	1.85	板目	刃部は丸く側面に広る。頭部は丸く側面に広る。
19-39	農具	又鋤	D-7	残存長21.1	残幅7.2	1.9	—	頭部から翼端部に向て緩やかに外側に開く。翼端部と刃部との間は明確でない。方形状の柄孔を削る。
19-40	農具	又鋤	Y-2. 土器群107	27.1	4.6	1.7	—	頭部は丸く側面に広る。頭部から翼端部に向て緩やかに外側に開く。翼端部付近では外済剥離に附る。
19-41	農具	二又鋤	Y-2. 土器群107	48.4 (回復元)	頭部幅:6.1 (復元)	—	—	頭部は丸く側面に広る。
19-42	農具	鋤先 (部分)	Z-3	28.3	5.9	1.7	板目	刃部と上部の一部が残存する。頭部と刃部の僅は明確である。
19-43	農具	三又鋤	X-3. 土器群135	34.4	7.5	1.8	板目	頭部から翼端部に向て緩やかに外側に開く。翼端部付近では外済剥離に附る。
19-44	農具	鋤先 (部分)	Y-4	27.2	2.1~3.2	1.6	—	頭部が、輕々と推定でき。また加工の仕方などから三又鋤と考えられる。(刃部分) 大型のものか。
19-45	農具	三又鋤	Z-1	残存長26.3	8.1	1.9	—	刃部、一部残存。



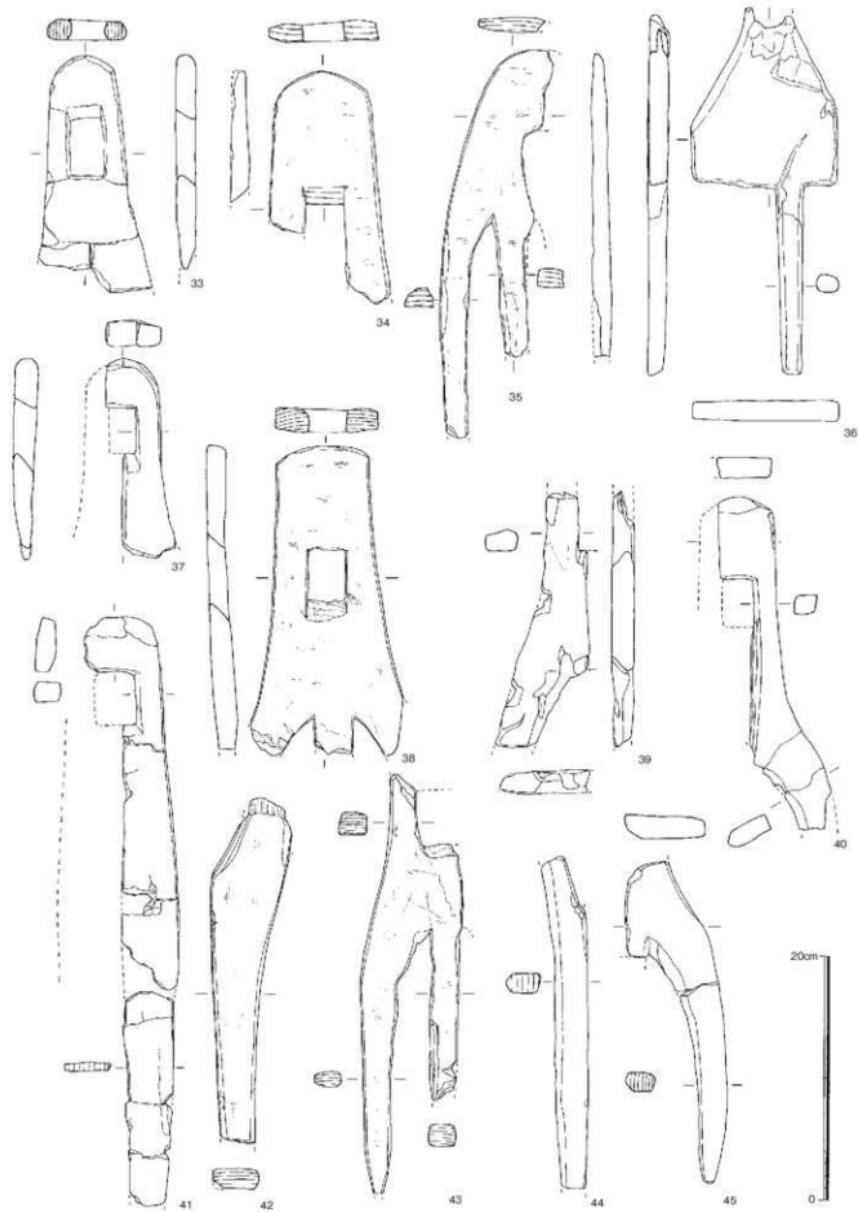
第16図 42次調査区出土の木製品2(1/4)



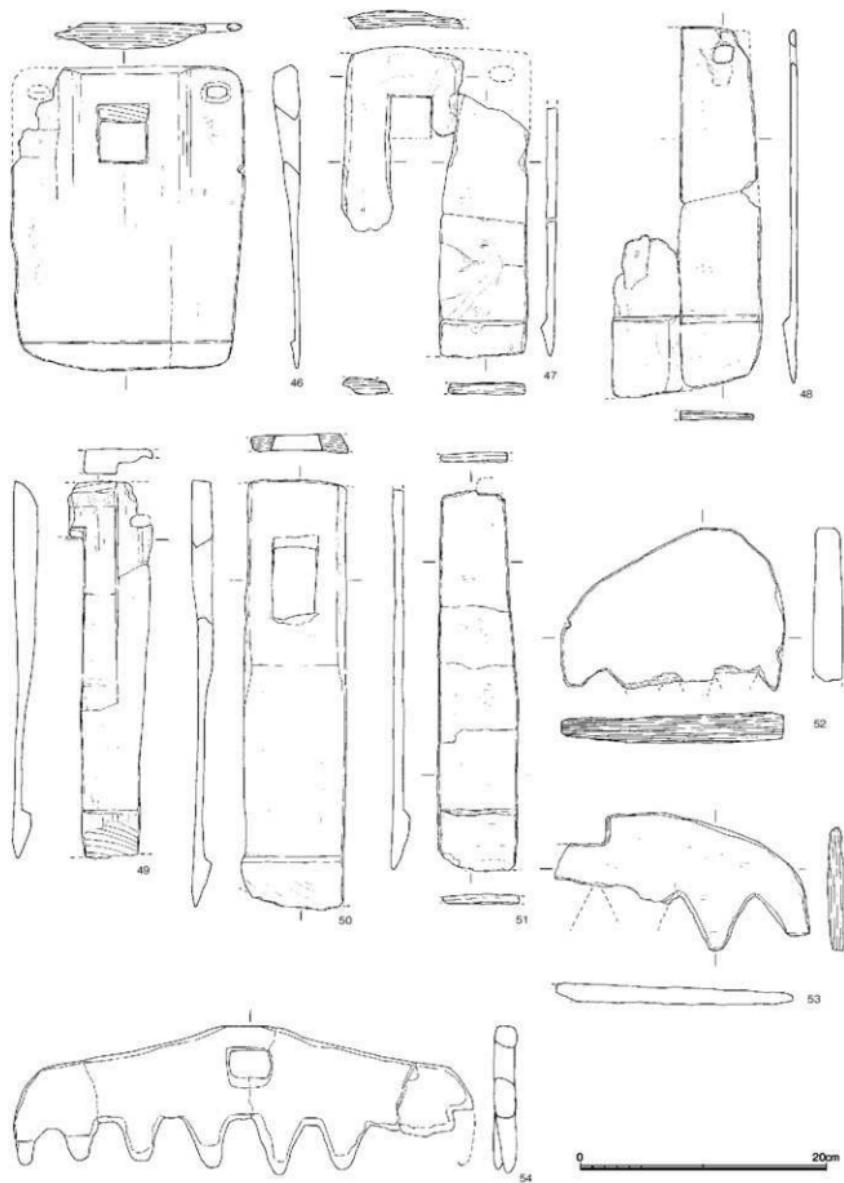
第17図 42次調査区出土の木製品3 (1/4)



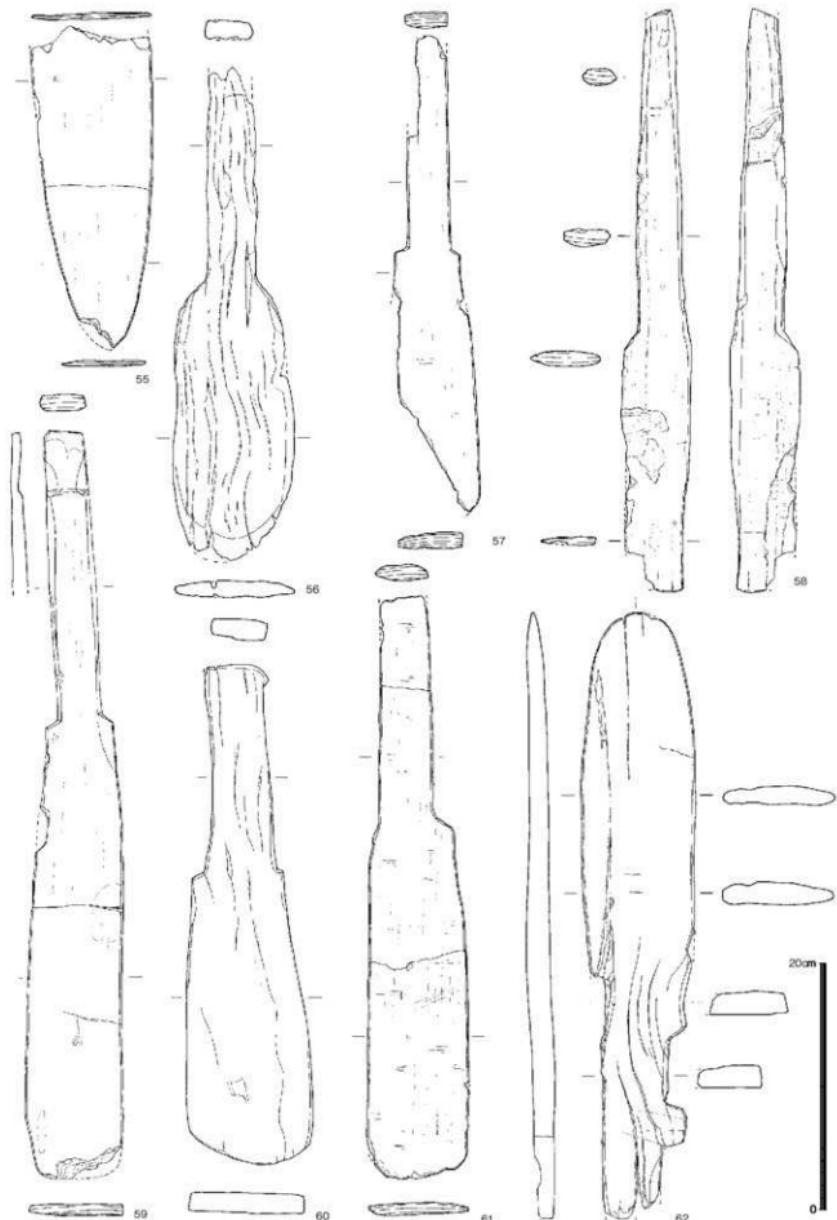
第18図 42次調査区出土の木製品4(1/4)



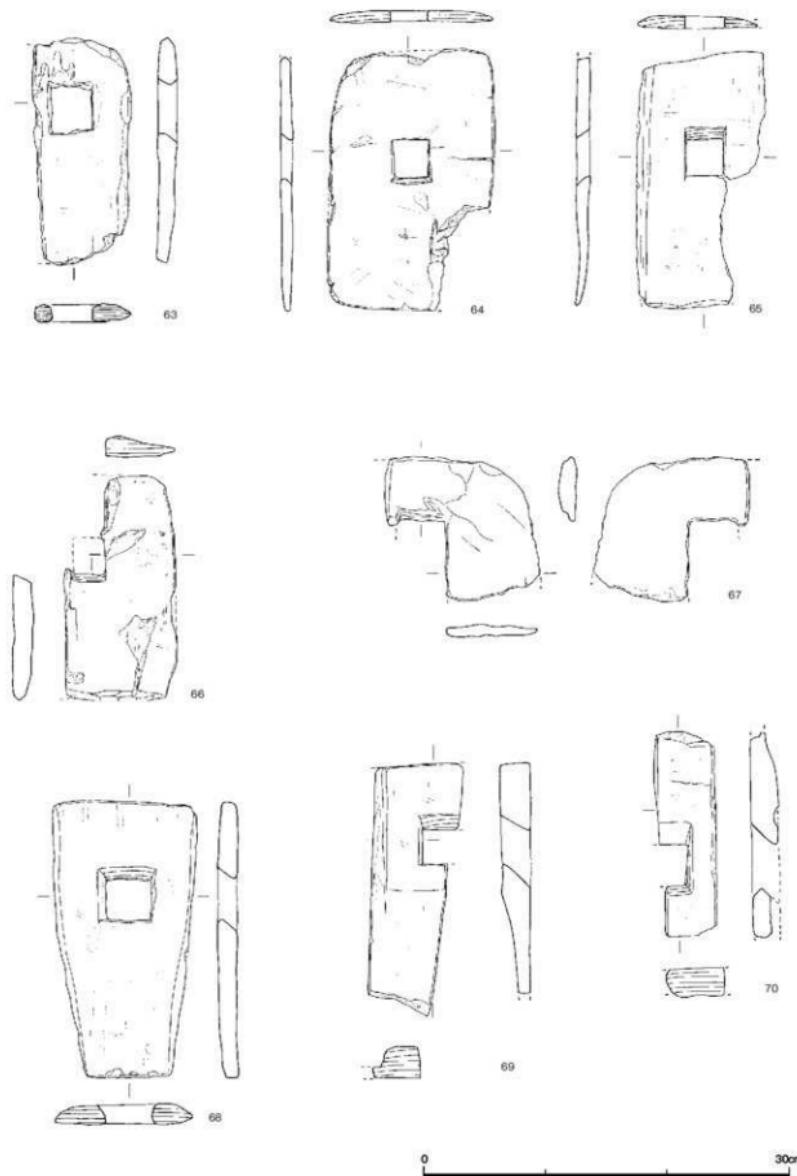
第19図 42次調査区出土の木製品5 (1/4)



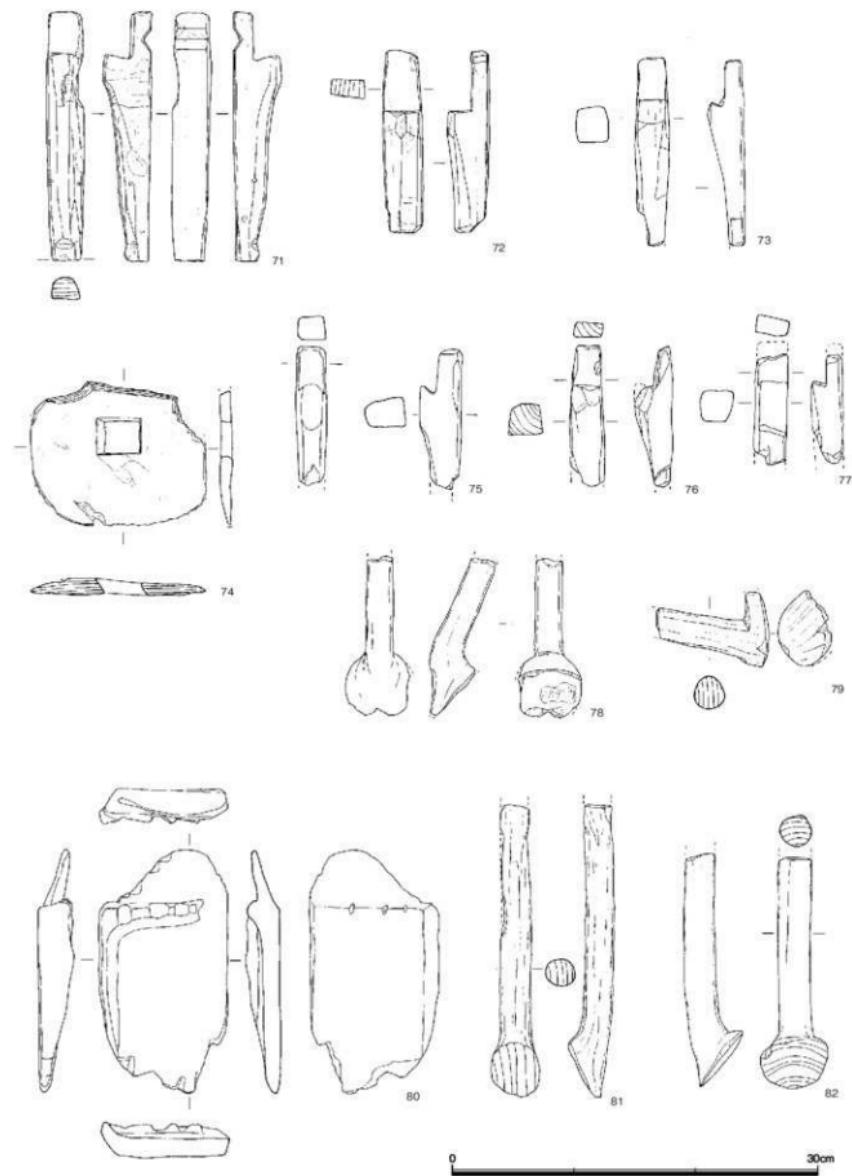
第20図 42次調査区出土の木製品 6 (1/4)



第21図 42次調査区出土の木製品7 (1/4)



第22図 42次調査区出土の木製品8 (1/4)



第23図 42次調査区出土の木製品9(1/4)

件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
20-46	農具	平鋤（赤条型）	X-4、土器群106	25.0	19.0	2.1	板目	左右に小孔があったようだ。片方は欠損。絞状のものによる縫跡痕か。刃部の先端は鋸く。表面は三角形となる割りだしがある。低い縁部に斜め上方に向へ方形状の孔を持つ平鋤。
20-47	農具	平鋤（赤条型）	X-5	25.4	15.2	1.35	板目	3孔に割りだしている。方形状の柄孔が残存する。刃部の先端は鋸く。表面は三角形となる割り出しがある。
20-48	農具	平鋤（赤条型）	X-3、土器群135	29.2	12.2	1.4	板目	中段部が斜面として先孔があり両側の小孔で斜縫縫とするタイプのかつら刀鋤。刃部の先端は鋸く。表面を三角形状にする割り出しがある。
20-49	農具	平鋤（赤条型）	Y-3	30.8	5.4	2.0	板目	下部に斜めつく赤条型、小孔が残存する。刃部の先端は鋸く。表面を三角形となる割り出しがある。
20-50	農具	平鋤（赤条型）	W-5、土器群123	34.9	8.4	1.75	板目	中段部が斜面として先孔があり両側の小孔で斜縫縫とするタイプのかつら刀鋤。刃部の先端は鋸く。表面を三角形状にする割り出しがある。
20-51	農具	平鋤（赤条型）	X-6、土器群120	31.1	6.5	1.6	板目	刃部の先端は鋸く。表面を三角形となる割り出しがある。小孔が微く現存する。
20-52	農具	さら入（把）	Y-3	13.2	18.2	2.4	板目	5孔の箇所があったたったと思われる。裏面は傷が多い。
20-53	農具	さら入（把）	X-4	20.8	10.1	1.5	板目	方孔のササガラだろうか。
20-54	農具	さら入（把）	Z-2	37.6	12.0	1.8	—	柄孔は横長・方形状で、斜め上方に向へ横やか角度で削る。裏面は横長で存在している。おそらく全体で8孔と思われる。
21-55	農具	鋤	X-6	残存長26.3	9.4	0.6	板目	刃部の先端はやや込みのある尖端部を有する。上部には小さな孔が中段よりやや外側に寄った位置に1箇所ある。
21-56	農具	鋤	E-1	残存長40.4	刃部幅1.0	刃部厚1.4	—	表面の磨滅が著しい。刃部は長楕円形を呈し、先端は丸みを持つ。
21-57	農具	鉈柄平鋤	W-5	残存長39.0	6.2	1.4	板目	柄孔・刃部との境目にすき面は鋸く。外側に開き、そちらに外側にやかましく引きながら刃部の先端近くまで至る。
21-58	農具	鉈柄平鋤？	W-5、土器群123	残存長47.8	5.7	1.4	板目	側面はていねいに墨取りしている。柄孔・刃部の邊は社的明瞭な縫跡となる。いっそ外側に開き、そのまま直角で刃部の先端を差す。先端はわずかにカーブしている。
21-59	農具	鉈柄平鋤	X-4	61.0	8.0	1.35	板目	2孔に割りだしている。柄孔・頭部の縫跡は斜めで削り出している。柄孔と刃部との境目の縫跡は直線的に切り出し、そのまま斜めに引きながら刃部の先端へ至る。先端は角に丸みを持たせている。
21-60	農具	鉈柄平鋤	Y-3	40.9	身幅:9.4 頭部:5.5	1.8	板目	なすのよろにより刃部の下部がやや膨らむ形を呈している。柄と刃部の境の肩部に明瞭に彫りこむがされている。乾燥しているのか丸みを帯びていて、堅い。
21-61	農具	鉈柄平鋤	W-6、土器群120	残存長47.6	8.3	1.6	板目	3孔に割りだしている。柄孔・刃部の縫跡は明瞭につくられたさといふ。しかし片方だけである。刃部先端へ僅かに幅を広げて丸みを帯びていて、その先端部が丸みを帯びていて、刃部の縫跡が斜めで削り出された。柄孔と刃部の縫跡をつなぐ肩部の縫跡は直線的に引き出されている。先端は丸く、裏面の表面の欠落が著しい。かたひらを使用している。
21-62	施設器具類	加工木材	Y-2、土器群136	残存長49.7	9.2	1.9	—	表面状態は良好でない。方形状の柄孔を持つ。
22-63	農具	平鋤	Y-3、下部黒色土	18.6	残存幅8.1	1.7	板目	表面状態が悪い。方形状の柄孔を斜め上方に向ける。刃の先端は尖らず。
22-64	農具	平鋤	W-6、土器群123	21.1	13.4	1.1	板目	方形状の柄孔を斜め上方に向ける。
22-65	農具	平鋤	X-2	21.0	10.2	1.1	板目	方形状の柄孔を斜め上方に向ける。
22-66	農具	平鋤	X-5	18.5	9.1	1.65	板目	表面状態は良好でない。方形状と思われる柄孔がある。
22-67	農具	泥鋤？	Z-1	11.8	12.8	1.5	—	方形状の柄孔を持つ。
22-68	農具	平鋤（部分）	X-6、土器群120	22.7	11.8	1.6	板目	裏面に凹凸状を呈し、方形状の柄孔を斜め上方に向ける。
22-69	農具	平鋤（部分）	X-3、土器群135	20.7	7.2	2.6	板目	中央部が斜面としているタイプの歓か。方形状の柄孔を斜め上方に向ける。
22-70	農具	平鋤（部分）	X-4	16.9	4.9	2.3	板目	方形状と思われる柄孔を斜め上方に向ける。
23-71	農具	鉈頭組合せ真	Z-2	20.4	3.1	3.9	板目	泥鋤・鉈頭組合せ柄平鋤の柄の一部で、身身および泥鋤の鉈頭部にあたる。
23-72	農具	鉈頭組合せ真	W-6、土器群119	14.9	3.2	3.3	板目	泥鋤・鉈頭組合せ柄平鋤の柄の一部で、身身および泥鋤の鉈頭部にあたる。
23-73	農具	鉈頭組合せ真	X-4	15.4	2.8	15.2	—	やや乾燥してヒビが入るが身のついた広葉樹を使用。
23-74	農具	泥鋤	Z-3	残存長11.8	14.4	1.3	板目	泥鋤・土器群115品で泥鋤・鉈頭組合せ柄平鋤の柄と組合せられる部位。
23-75	農具	鉈頭組合せ真	Z-1	11.4	2.6	3.4	—	無い櫻などが用いられている。
23-76	農具	鉈頭組合せ真	Y-2、土器群107	11.5	2.9	3.0	芯あり材	泥鋤・鉈頭組合せ柄平鋤の柄の一部で、身身および泥鋤の鉈頭部にあたる。
23-77	農具	鉈頭組合せ真	Z-1	9.1	2.6	2.6	—	状態良くなく残りも悪い。やわらかい材質。
23-78	農具	鉈頭（部分）	Y-3	13.4	5.1	4.0	—	柄頭の部分。
23-79	農具	木柄（部分）	X-4	9.2	6.1	4.3	板目	柄頭の部分。
23-80	魚具	アカトリ（部分）	Z-2	19.8	10.6	2.9	—	
23-81	農具	鉈柄（部分）	Y-3、土器群115	23.8	4.0	3.2	芯あり材	柄頭の部分。
23-82	農具	鉈柄（部分）	Y-3	18.8	2.7	2.6	芯あり材	柄頭の部分。芯なし割り材。裡材か。

たとされる。その他は斧の柄で鉄斧の袋部を装着するための段を有するものが多くを占めており、石斧用の柄はみられない。中期後半以降に鉄製利器の利用が普遍化した段階と考えられる。8や9は斧の柄の未製品である。

42次調査区出土の木製品2～9（第16～23図）

起耕具である鍬には平鍬、二又鍬、三叉鍬、多又鍬などがある。方形に近い形状で肩部に穿孔のある平鍬（46～51）は糸島地方の遺跡で多く出土することから糸島型とされるタイプである。

木柄には泥除を装着するための鍬類組合せ具の部材（71～77）がみられる。74は泥除とみられる。同様の鍬類組合せ具の部材は福岡平野では那珂久平遺跡や雀居遺跡などでも出土している（福岡市1987・2003）。整地具であるサラ工には6と8の歯をもつものがある。

【参考文献】

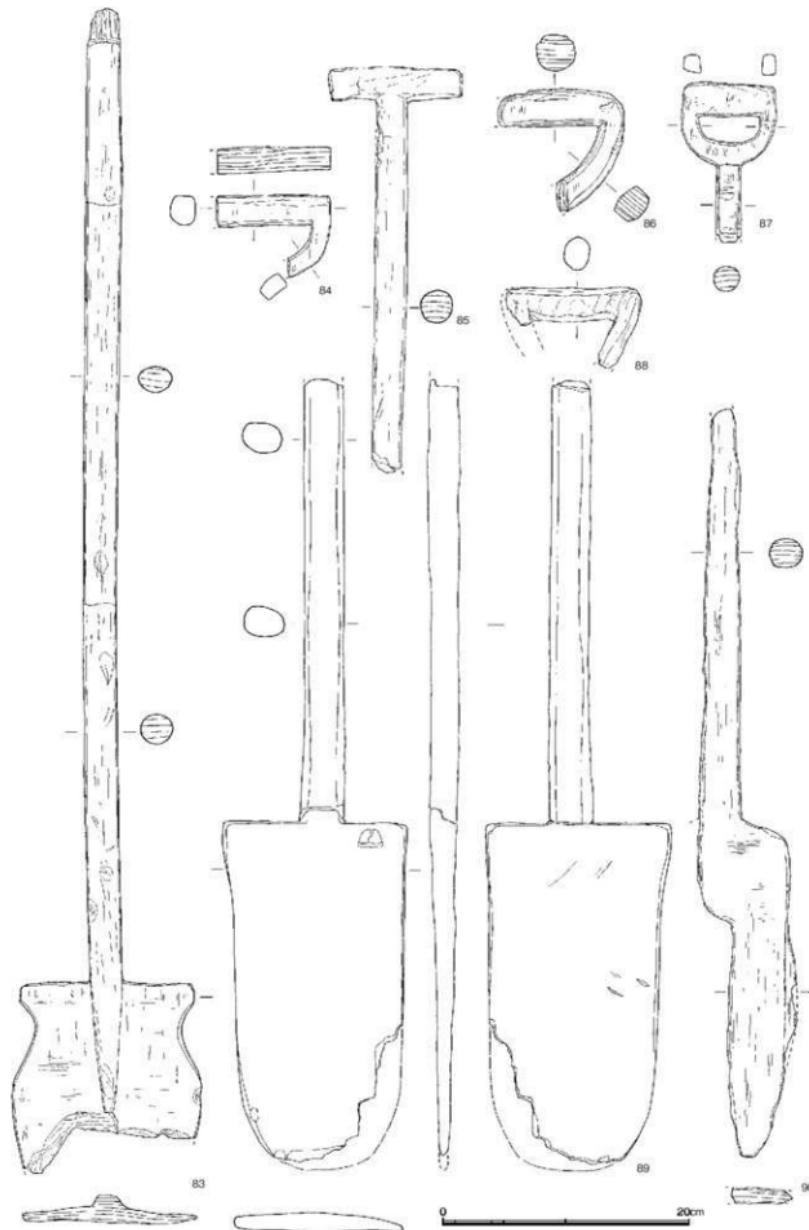
福岡市教育委員会1987「那珂久平遺跡II」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第163集

福岡市教育委員会2003「雀居9」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第748集

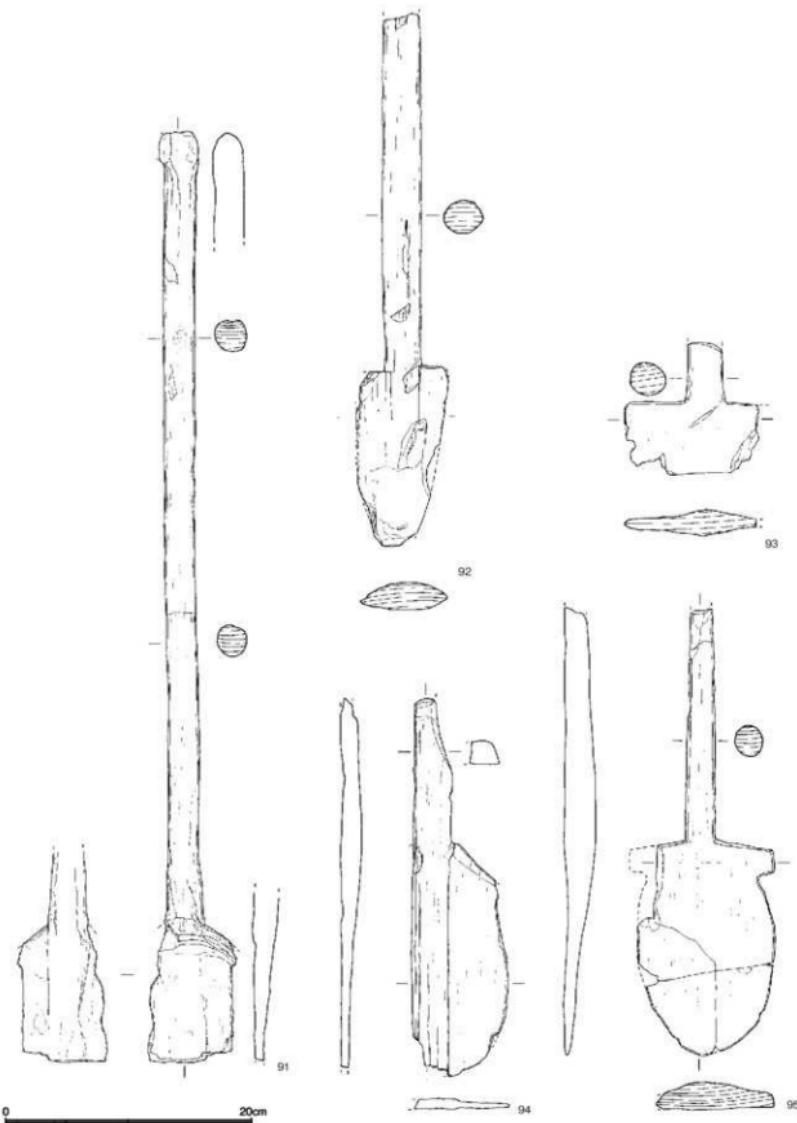
42次調査区出土の木製品10～12（第24～26図）

鍬には平鍬、二又鍬、三叉鍬がある。鍬の柄にはT字形とU字形の二種があり、後者のほうが量的には目立っている。また鍬と鍬を団化した数で単純に比較すると1:2となり、鍬が倍近くを占める傾向がうかがえる。

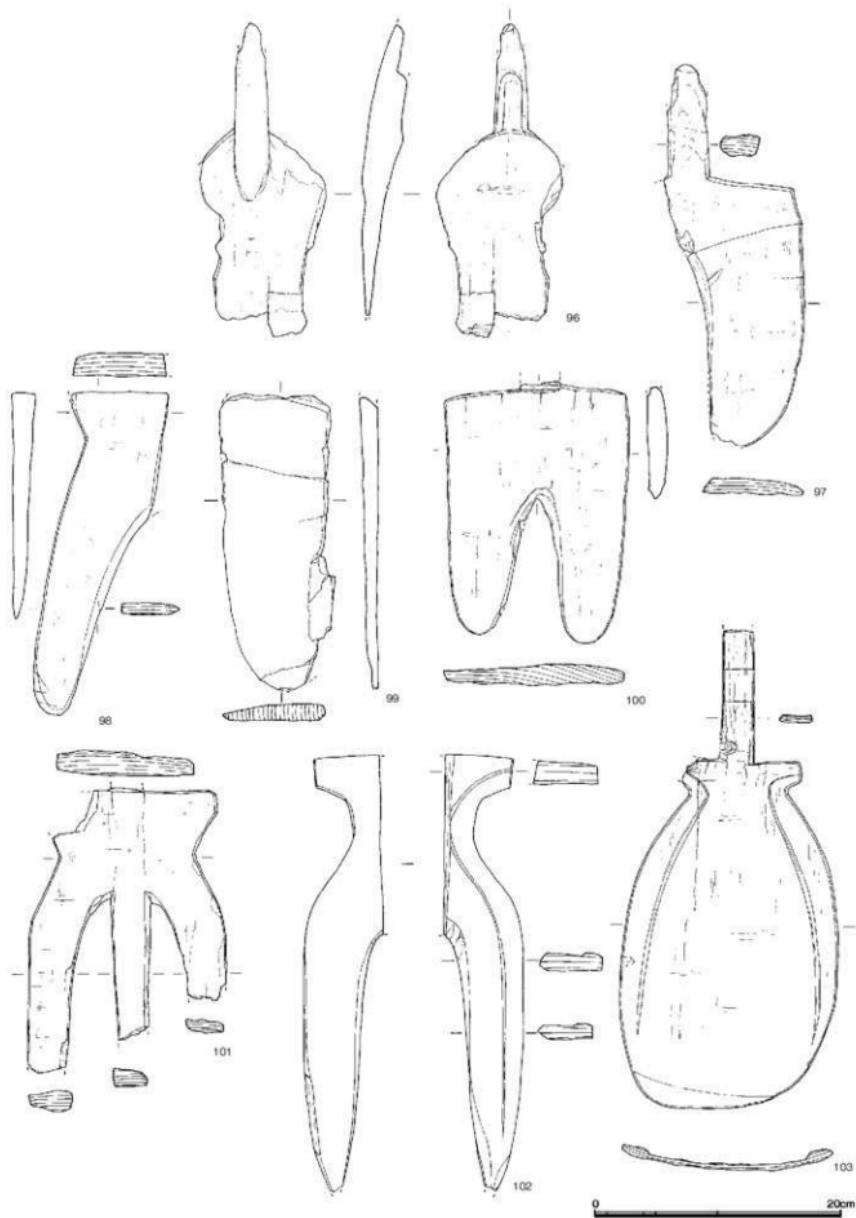
件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
24-83	農具	鍬	Y-3	残存長95.1	刃幅15.4	2.4	板目	一本造りの鍬。上部両側面に括れをもつ。柄の先端は万能の中央付近まで達している。
24-84	農具	鍬の柄	Z-2. 土器群136	残存長9.4	残存幅6.7	2.2	板目	把手表面は円形。把手の裏の幅は約7.5cmである。
24-85	農具	鍬の柄	X-6. 土器群120	残存長33.3	2.6	2.6	板目	T字状の把手。
24-86	農具	鍬の柄	Y-3	残存長10.0	残存幅10.4	3.1	板目	把手表面は円形。把手の裏の幅は約8cmである。
24-87	農具	鍬の柄	X-6. 土器群119	残存長13.0	7.6	1.8	板目	把手表面は円形。裏の幅は約5cmである。
24-88	農具	鍬の柄	Z-2. 土器群136	残存長9.4	6.7	2.2	—	把手表面は橢円形。把手の裏の幅は約6cmである。
24-89	農具	平鍬	Z-1	残存長64.0	刃残存15.2	刃部3.2	—	刃部の先端は丸みを持つ。
24-90	農具	二又鍬	X-4. 土器群106	残存長61.3	刃残存5	刃部2.2	板目	鍬の鋸歯をもつ。
25-91	農具	平鍬	W-4	残存長76.1	刃残存6.8	刃部2.4	板目	柄の先端は刃部の中央付近まで達している。
25-92	農具	平鍬	X-2. 土器群134	残存長43.5	刃部7.2	刃部2.7	板目	柄の狭い握り。
25-93	農具	平鍬	Z-2	残存長10.8	刃残存11.1	刃部2.5	板目	刃部は両面の中央部が外側より後後に削みを残す。
25-94	農具	平鍬	Y-3. 土器群115	残存長30.8	刃残存7.9	刃部1.7	板目?	2片に割れている。
25-95	農具	平鍬	X-4. 土器群106	残存長36.6	刃部11.2	刃部2.5	板目	上部両側面に括れをもつ。
26-96	農具	平鍬	X-6. 土器群119	残存長25.7	刃残存10.0	刃部3.0	削物	柄の接合部が身の背部につく。
26-97	農具	二又鍬	X-6. 土器群120	31.2	刃部10.5	刃部1.4	板目	2片に割れている。
26-98	農具	二又鍬	X-6. 土器群120	残存長26.3	刃残存7.2	刃部2.0	板目	三叉の鍬であろう。
26-99	農具	二又鍬	Y-2. 土器群108	残存長24.2	刃残存9.4	刃部1.5	—	薄いづくり。
26-100	農具	二又鍬	W-5. 土器群112	残存長21.3	15.0	1.7	板目	翼部から直線的にのびて中央部は深く抉れる。
26-101	農具	三叉鍬	W-5	残存長23.3	刃残存16.1	2.2	板目	上部両側面に括れをもつ。
26-102	農具	三叉鍬	X-6. 土器群120	残存長35.6	6.4	2.35	板目	上部両側面にふかく括れを刻む。片側の面に段を有す。
26-103	農具	平鍬	W-5. 土器群123	残存長39.4	刃部17.7	刃部0.75	板目	身の翼部はすばり、先端は丸くなる。両側面は肥厚する。



第24図 42次調査区出土の木製品 10 (1/4)



第25図 42次調査区出土の木製品 11 (1/4)



第26図 42次調査区出土の木製品 12 (1/4)

型式では95・98・101・102・103のように上部に括れをもつものや、102・103のように縁部を肥厚させたものなどがある。また金属製の鋤先を装着するタイプは出土していない。

42次調査区出土の木製品13(第27図)

横桟は105や111のように把手と桟身の境が明瞭な段をもつ砧状のものや、境目が明らかでないものなどがある。後者には杵と区別がつきにくいものもあるが、側面の叩打痕が認められたかどうかを分類の目安とした。

42次調査区出土の木製品14(第28図)

堅杵は112・113のように持ち手の中央部が幅広くなるものがある。これは前期の持ち手の中央が算盤玉状になるタイプが退化した形態であり弥生中期におさまるものである。

42次調査区出土の木製品15・16(第29・30図)

臼118は、安定感のあるずっしりしたタイプで受部の6割強を遺存する。119の台部はさらに大きいが、バランスは118のほうがよい。121～123は臼の底が抜け落ちたものと考えられる。

42次調査区出土の木製品17・18(第31・32図)

刳物容器の脚は、日本海側の遺跡に多くみられる長い併行する2脚を有するもの126・129と半円形の4脚で支えるもの125とに大別される。128は三方を連想させる形状で、透かしを入れた高い脚を有している。受部にある突起は仕切りの名残である。130の槽にも受部中央に仕切りが残っている。

42次調査区出土の木製品19(第33図)

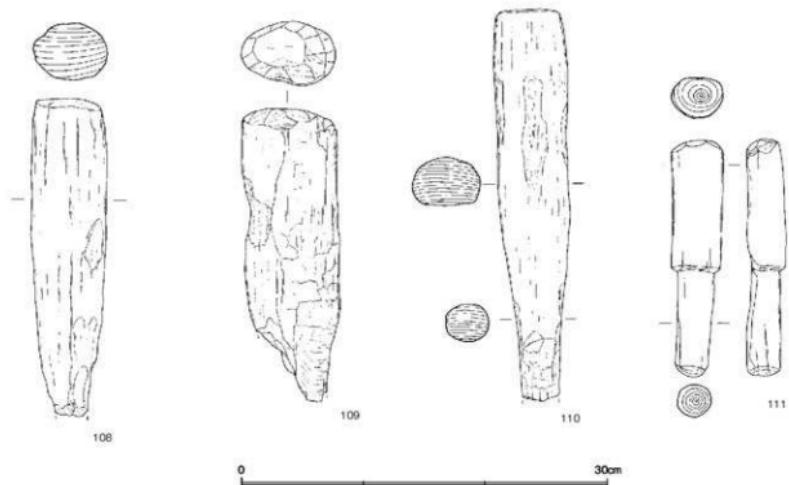
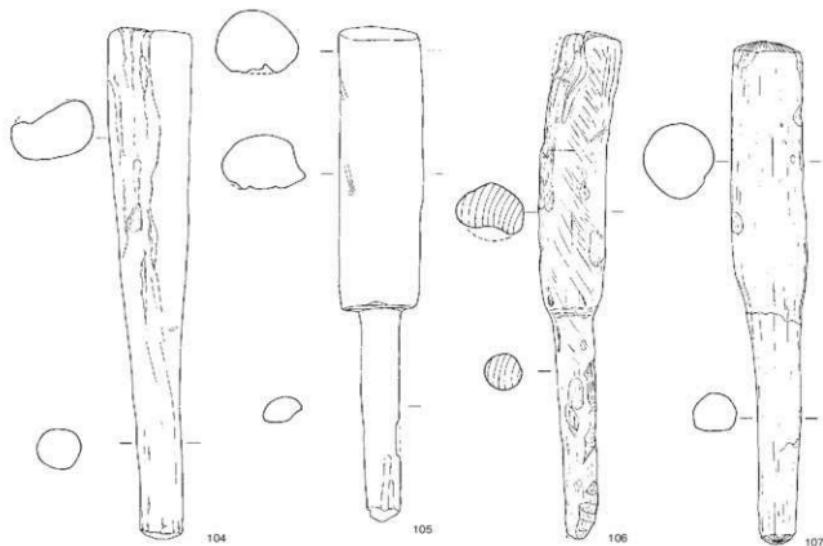
131は刳物容器の椀を想定したが杓子の受部である可能性がある。133は把手を削り出したもので精巧なつくりである。134の容器は側面の弯曲から舟をかたどった舟形木製品と考えられる。136や137は遺存状況がよくないが、刳物の鉢と盤とした。

42次調査区出土の木製品20・21(第34・35図)

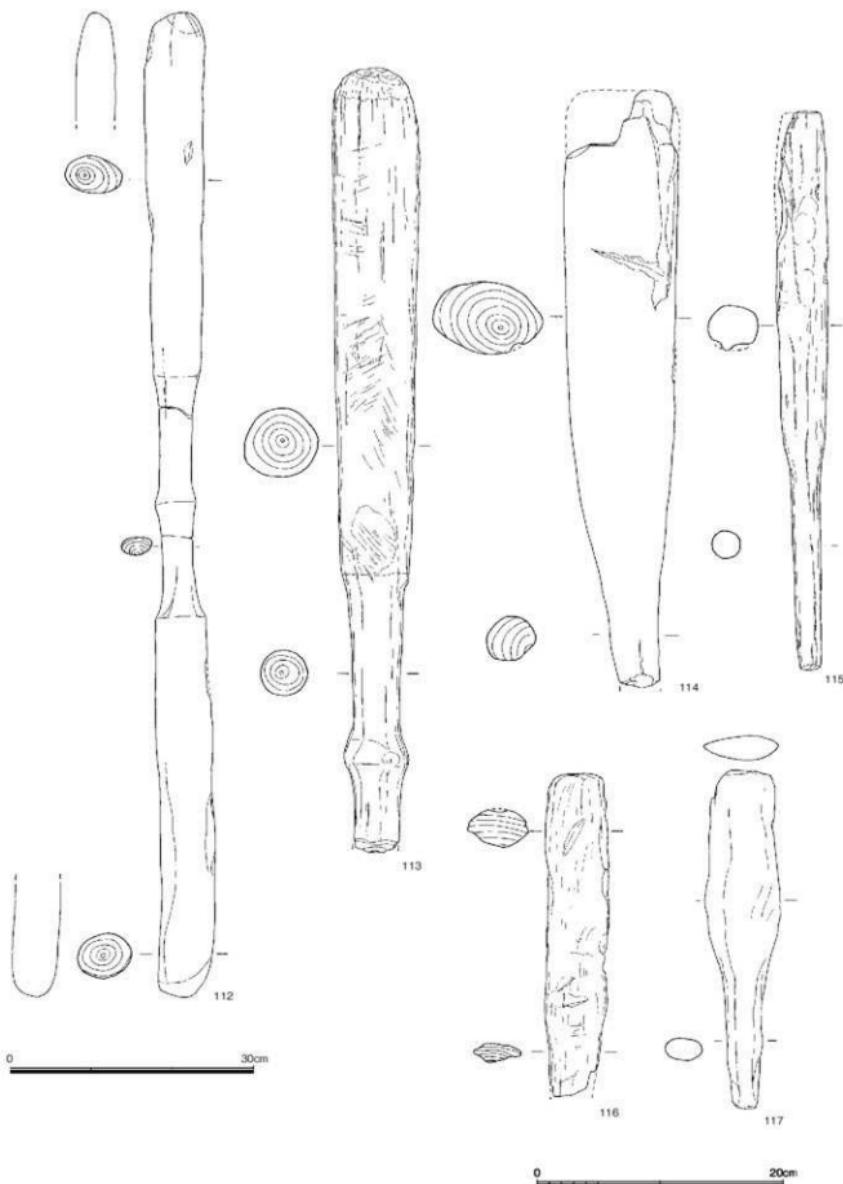
139は平面形は長方形の刳物の槽である。140は梢円形の槽で調整は粗い。

141は把手付きの作業台である。143は小型の槽の未製品である。144の槽は把手付きでこちらも未製品のようである。

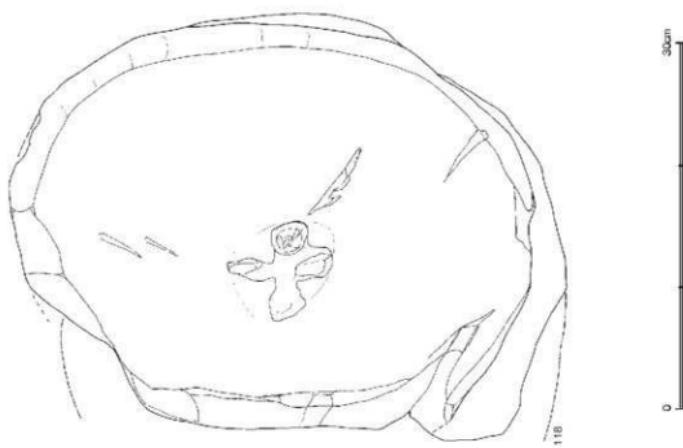
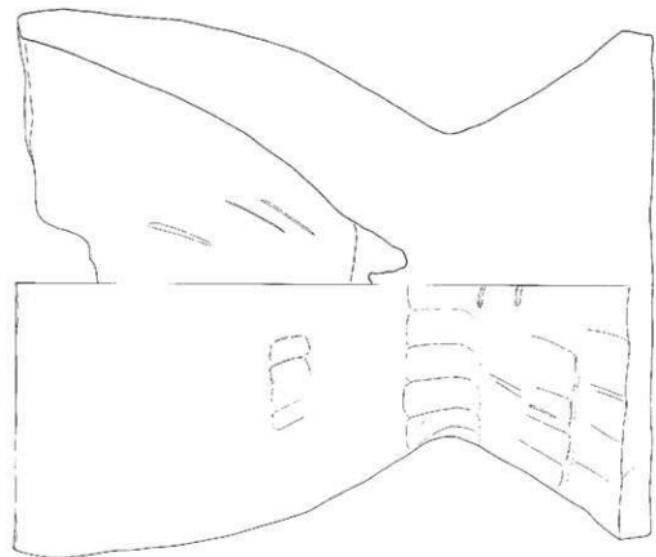
件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
27-104	植鉢	横桟	Z-1. 土器群108	41.8	6.2	5.0 厚さ:3.8	叩き部幅:5.0 厚さ:3.3	一 叩き部先端は平らにつくられる。持ち手と叩き部の境に明確な区切りはない。若干切れ込みがみられる。叩き部は堅方に握り込みやすい位置する。側面本体がわかりづらい。
27-105	植鉢	横桟	Y-3	40.4	—	—	—	把手と身の境に明確な段を有する。
27-106	植鉢	横桟	W-6. 土器群123	41.5	5.5	5.0	芯去り材	身の反対側は半分だけしている。
27-107	植鉢	横桟	Y-3	41.2	5.6	6.0	—	把手と身の境の段は不明顯。
27-108	植鉢	横桟	X-6. 土器群120	26.0	6.1	4.5	芯去り材	把手と身の境の段は不明顯。
27-109	植鉢	横桟	W-5. 土器群123	24.0	7.9	5.3	—	芯持ち材か芯あり材かわからない。先端部をノミ抜工具で加工している。この箇のたてが部分が黒く焦げ焼けしている。
27-110	植鉢	横桟	X-5	31.9	5.6	3.9	芯去り材	把手と身の境の段は不明顯。
27-111	植鉢	横桟	X-6. 土器群120	19.4	身幅:4.2 柄幅:2.9	身厚:3.2 柄厚:2.6	芯持ち材	小型の横桟で把手と身の境の段は明確。材はやわらかく相色は明るめ。



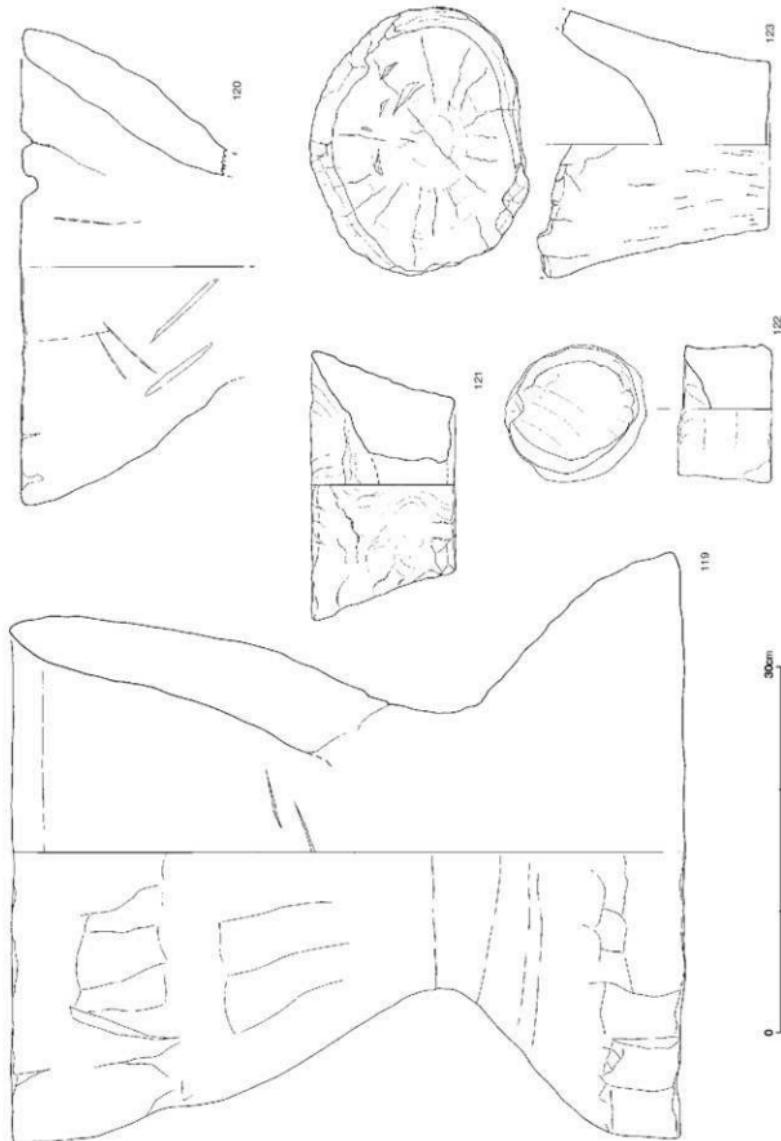
第 27 図 42 次調査区出土の木製品 13 (1/4)



第28図 42次調査区出土の木製品 14 (1/4)



第29図 42次調査区出土の木製品 15 (1/4)



第30図 42次調査区出土の木製品 16 (1/4)

42次調査区出土の木製品22 (第36図)

145は精巧な剖物の高杯で、円柱状の5脚によって支えられたと推定される。146の漆塗りの容器は、黒漆の上から朱漆を丁寧に塗りあげたもので韓国の釜山に類例がある(東亞細亞文化財研究院 2008)。欠損部は脚柱から圓錐状に広がる台部を有したと推定される。

147は下膨れの杯に把手を割り出したジョッキ形の剖物容器である。黒漆で下塗りを行った上から朱漆で斜目格子の模様が描かれている。148・149は漆塗りの部材である。用途や形状は不明である。

151の器形は不明。黒漆の上に朱漆で日章旗のような図柄が描かれている。

152～156は黒漆を塗布した薄造りの木製容器である。奺の一種で、本来有蓋であったと推定される。

【参考文献】

(財) 東亞細亞文化財研究院・大韓住宅公社釜山地域本部 2008 「釜山古村宅地開発事業地内文化遺跡発掘調査現場説明会 (3次)」『(財) 東亞細亞文化財研究院発掘調査現場説明会』第143集

42次調査区出土の木製品23 (第37図)

157は小型の剖物の桶で下部の段に底板の円盤もしくは小判形の板が嵌るものである。160は高杯の脚台部で透かしの窓がめぐるものである。165は小型臼の未製品で受部の加工痕が鮮明である。底部に突起がみられる。

42次調査区出土の木製品24・25 (第38・39図)

容器の蓋や底板で、166・167・168は把手や紐通しの孔があることから蓋である。170は把手を有する团扇形である。180のように側面に木釘の痕跡があるものは桶の底板とみられる。169も楕円形の桶の底板の可能性がある。181は丁寧な仕上げの剖物の蓋である。

42次調査区出土の木製品26～29 (第40～43図)

掬い具の杓子は把手の位置によって縦柄、斜目柄、横柄に大別される。杓子の受部には丸底と平底の2種がみられる。182や189は未製品である。195や198はT字形の把手を有するもので、52次

26-112	杵・臼	堅杵	X-7	121.1	持ち手部：3.8~5.1	持ち手部：2.0~3.2	芯持ち材	持ち手長さは29.4cm、上の持手部分の長さ：45.2cm、幅：6.4~7.3cm、厚み：5.0mmを測る。下の持手部分の長さ：46.5cm、幅：6.3~7.0cm、厚さ：6.0mmを測る。
26-113	杵・臼	堅杵	W-5. 土器群112	64.0	7.0	6.3	芯持ち材	この図面(片側)のみに鉛金装飾のものの僅跡あり、横方に使用したのだろうか。先端も片側削れている。たて杆に思われるが片側に使用済み。
26-114	杵・臼	堅杵	Y-2	48.8	9.2	5.8	芯持ち材	やや表面削減する。大きさは重量とともにかなりいい。持ち手と凹きを正面に複数ある。裏は欠けている。径が細い。
26-115	杵・臼	杵?	X-4	45.5	4.15	3.7	—	芯持ちか芯立りかわからない。裏は欠けている。径が細い。
26-116	杵・臼	杵?	W-6. 土器群123	26.2	5.1	2.9	—	心先材、椎核の可能性あり。
26-117	工具	叩き板?	X-6. 土器群120	27.7	タクキ幅：6.1	1.7~2.0	—	裏面は摩耗が著しい。
29-118	杵・臼	臼	X-3	基高：52.2	復元口径：42.6	復元底径：41.4	—	底径：41.4 (復元)、周囲：54.6、口径：42.6 (復元)、(復元)、柄高 (最小)：24.6 (復元)、柄高 (最大)：45.0 (復元)、内底厚：2.0~10.0 (上部)、口幅 (上口)：1/2.2、底幅 (下口)：1/3.2、中心部に穴があり、芯部は5.0穴が開いている。外底部内側ともになじみを加工。台面部は加工無し。平底タイプ。
30-119	杵・臼	臼	X-7	基高：56.0	復元口径：42.7.6	復元底径：47.7	—	台面は平底。他に2点破片があり接合はできる。
30-120	杵・臼	臼 (口縁部)	Z-2	残高：17.0	復元口径：38.8	—	—	外底部に加工痕 (隙) がみられる。
30-121	杵・臼	臼 (部分)	Y-2	基高：11.7	復元口径：21.6	底径：14.0	—	機きくぼみが抜け落ちたもの。やや棒内側で、全体の2/3を溝。
30-122	杵・臼	臼 (部分)	X-5	基高：7.4	口径：10.5	底径：10.2	—	機きくぼみが抜け落ちたもの。正面から若干棒円形、内側くぼみをつくる。底部は平ら。
30-123	杵・臼	臼 (部分)	W-5	残高：19.0	底径：12.2 X13.7	底厚：16.65	剖物	機きくぼみが抜け落ちたもの。全体に黒く火を受けたか。外底部は棒円形状を呈する。

調査では同型式の土製品が出土している。

杓子の柄には200のように先端部が笠状になるものやT字形、木葉形のものなどがある。柄の先が大きく湾曲するのは横木などに掛けやすくなるためともいわれている。木葉形のなかにはふたつの正円が中心で交叉した形状のものも存在する。214の柄は頭部が欠損したためか未製品となっている。201・202は全体に黒漆が塗られている。

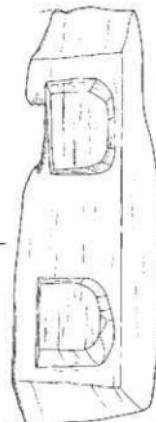
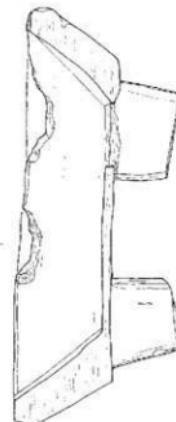
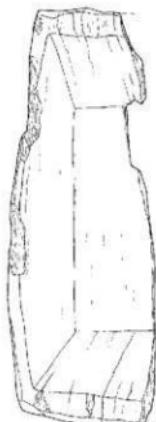
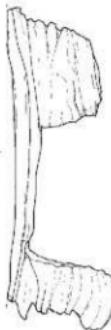
42次調査区出土の木製品30 (第44図)

221～223は木製の紡錘車である。224は穿孔がみられないで未製品。225は枝を削り出したもので箒である。226は編み錠で、中央の溝に縄を結んで使用した。227～229は櫛などの栓。230・231は火鉢臼である。230の側面に溝は切られているが、使用痕はみられない。232は櫛の破片である。桿材を使用した例が多い。236・240・241は建築部材の栓と考えられる。

42次調査区出土の木製品31 (第45図)

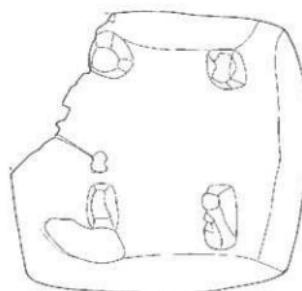
組合せ式案の部材である。案の上板は通例刃物の痕跡が多くみられる。242・243・244は刃物の痕跡から組合せ式案の上板の部材と推定される。242の両端は押さえ板の棟がおかれていた箇所である。脚を固定する脚孔は欠損している。247は両面とも刃物痕跡が観察されなかったことから案の部材でないのかもしれない。246・248・250は棟である。251の脚部は抉りのあるほうが外側となる。

件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
31-124	容器	圓付容器	X-4. 土器群106	26.6	7.5	9.0	削物	圓を造りだしている。
31-125	容器	圓付容器	W-6. 土器群123	34.3	12.1	13.5	削物	精製品。半月状の開口がついている。開口にはノミの加工痕あり。
31-126	容器	圓付方型鉢	Z-2	27.3	7.2	4.9	削物	削成の容器。半分に削りている。縫員の低い側を有する。
31-127	容器	圓付容器	W-6. 土器群123	23.0	23.0	0.5~1.0	削物	ほぼ正方形の容器。開口は4つ残るがひとつを除いて先端部を欠く。
32-128	容器	圓付盤	Z-2	31.0	12.3	基 0.4~ 1.3	削物	精製品。中央部に圓状の脚孔(切り口)を持つ(幅1.4~2.2cm)。周縁はすくめ孔をもつ、三方のようなもの。
32-129	容器	圓付鉢	W-5. 土器群123	20.2	13.4	3.4	削物	裏面の両端に造りだしの無い開口つく。
32-130	容器	椎	Y-3. 土器群136	43.6	21.8	1.6	削物	中央部の削り込みの跡は残されている。裏面に立っていただけが尖部だけ完全に歪んでいる。直中に仕切がありだされているのが先端が欠けている。13片(大4、小8、棒1片)。
33-131	陶い具	杓子(部分)	W-4	器高:10.1 口径:21.0 ~23.7	—	1.5	削物	やや椎円形状を呈し、底面は丸みを持つ一部が欠損している。道は良かず、質は良好ではない。
33-132	容器	削物容器	X-5	皿長:29.9 皿幅:19.4	—	1.6~2.3	削物	底面には圓形のよな加工ではなく、平らに調整する。
33-133	容器	把手付容器(部分)	W-5. 土器群123	把手最大 長:14.0	把手幅:7.7 厚:2.2	把手最大 厚:2.2	削物	把手は4つあるが握りこなせるのは2片のみ。裏面が黒くかじられない。容器は底面がくぼむくらい。鋸工工具がのこっている。1片(2片認定、2片未認定)
33-134	容器	舟形木製品	W-6	36.0	6.0	1.1	—	内部や内側表面にこみ抜き器か、外側に掌なづき、手持ちをくりぬいたのかうら削り欠けられた部分が多い。
33-135	容器	小型容器	W-4	9.1	9.1	1.1	削物	彌のしまの舟のような容器か。外底の中央部分は平らだが両端はや上方に向かって上げる。
33-136	容器	削物鉢(部分)	Y-3. 土器群136	残存長:18.7 残存幅:5.6	—	0.9	削物	上面及び片側面は欠損している。
33-137	容器	削物盤(部分)	W-5. 土器群112	19.6	10.8	0.55	削物?	上面は欠損する。底面には厚みはなく、凸台のような加工もなく平らに調整するための内側底面形状の容積が想われる。
33-138	容器	椎(部分)	X-3. 土器群135	残存長:27.4	9.0	1.4	削物	内部とも横方向の調整工具痕あり。底部は内窓式味にそりこぐり、側面に絞りを設けている。
34-139	容器	椎	Z-2	47.0	残存幅:13.0	—	—	削成し、側面に削り跡が詰められる。底部は側面にそりこぐり加工された。
34-140	容器	椎	Y-3	47.6	23.7	1.6	—	裏面は平らに加工。取手の内側も平らに加工。(イカ)、また表面は何も加工せず四角い底のままの未製品と利潤がある。
35-141	工具	作業台	Z-1. 土器群109	46.7	22.2	13.1	—	裏面は平らに加工。裏面に削り跡が詰められる。
35-142	—	板状木製品(鉋あり)	X-4. 土器群133	45.0	15.2	2.8	板物	直角形で平らの板状を呈し、短辺には凸(4.3×3.5cm)を削り出した箇所がある。長辺には浅い削り痕(2.5×0.5cm)がみられる。
35-143	容器	削物容器の未製品	X-4	26.8	18.6	4.6	削物	外側は、整形のために削りが施されているが、内側は削りの跡が認められる。
35-144	容器	椎(未製品)	Y-2. 土器群108	残存長:31.0	32.3	6.8	—	方形状を呈し複数の隅には断面が方形状に古い突起が削り出されている。反対側の隅にはこのような加工は見られない。



124

125



126

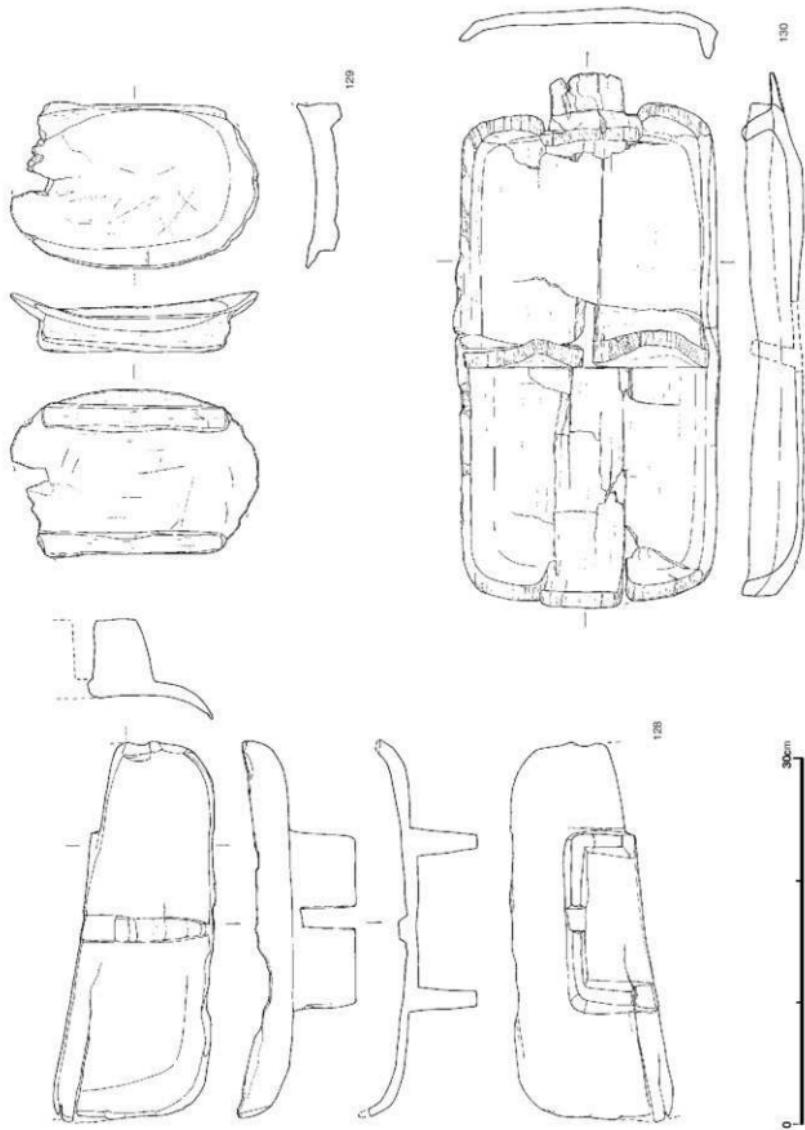
20cm



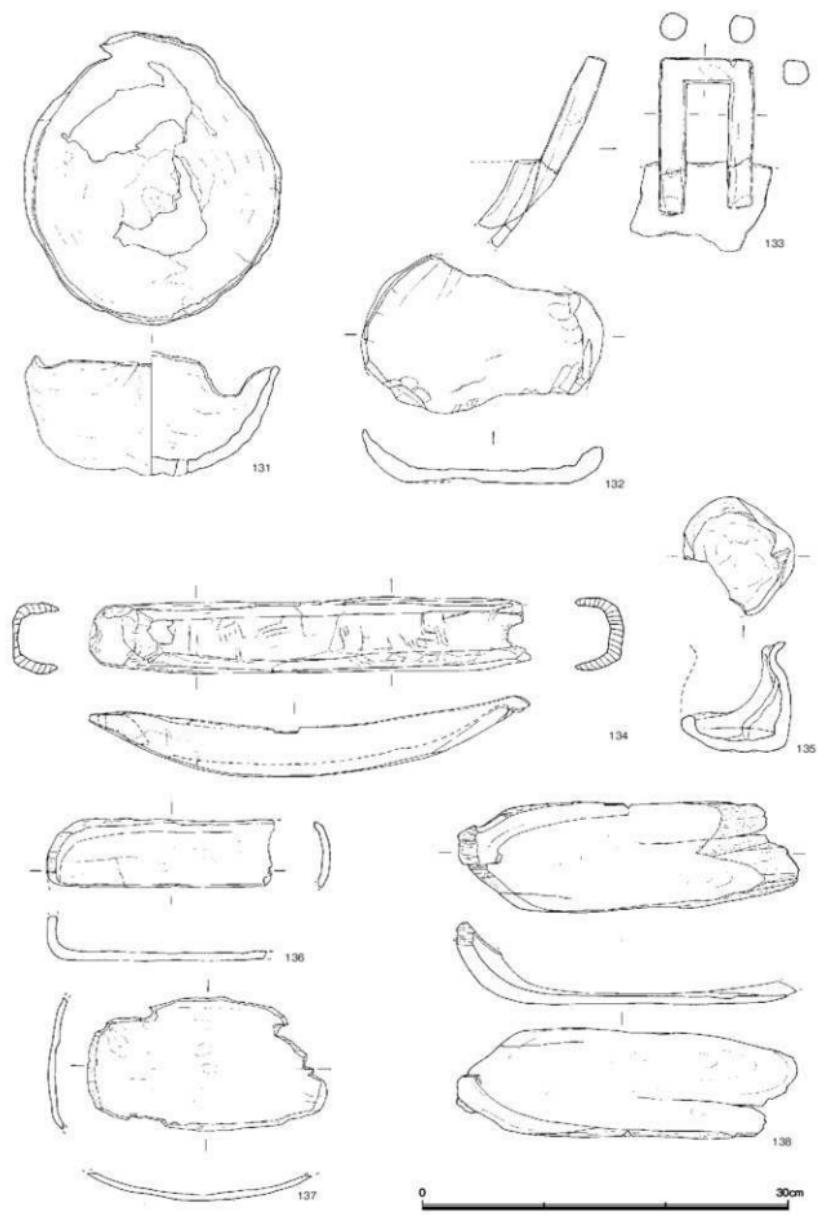
127

0

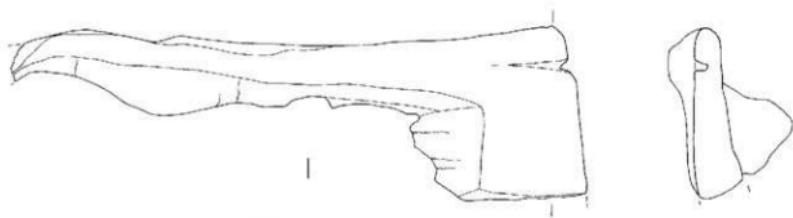
第31図 42次調査区出土の木製品17(1/4)



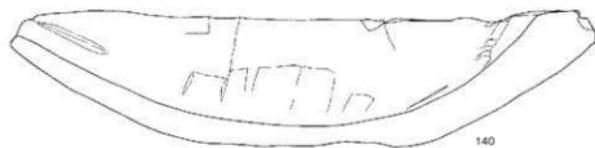
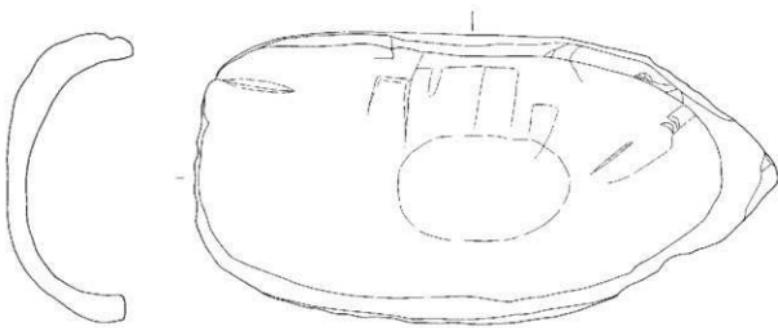
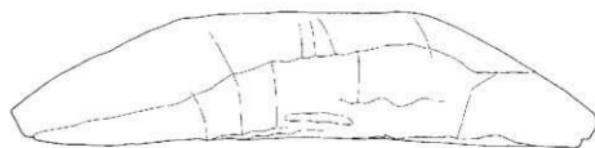
第32図 42次調査区出土の木製品 18 (1/4)



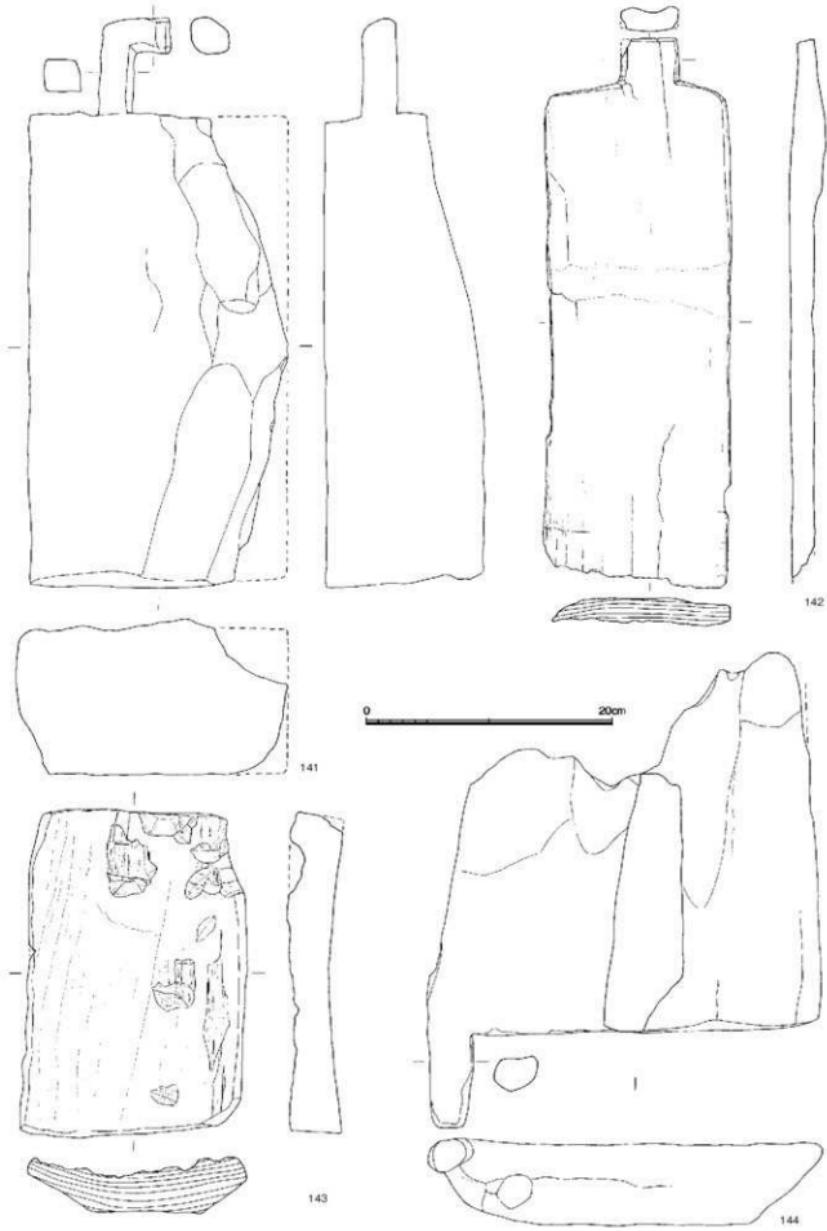
第33図 42次調査区出土の木製品 19 (1/4)



0 20cm

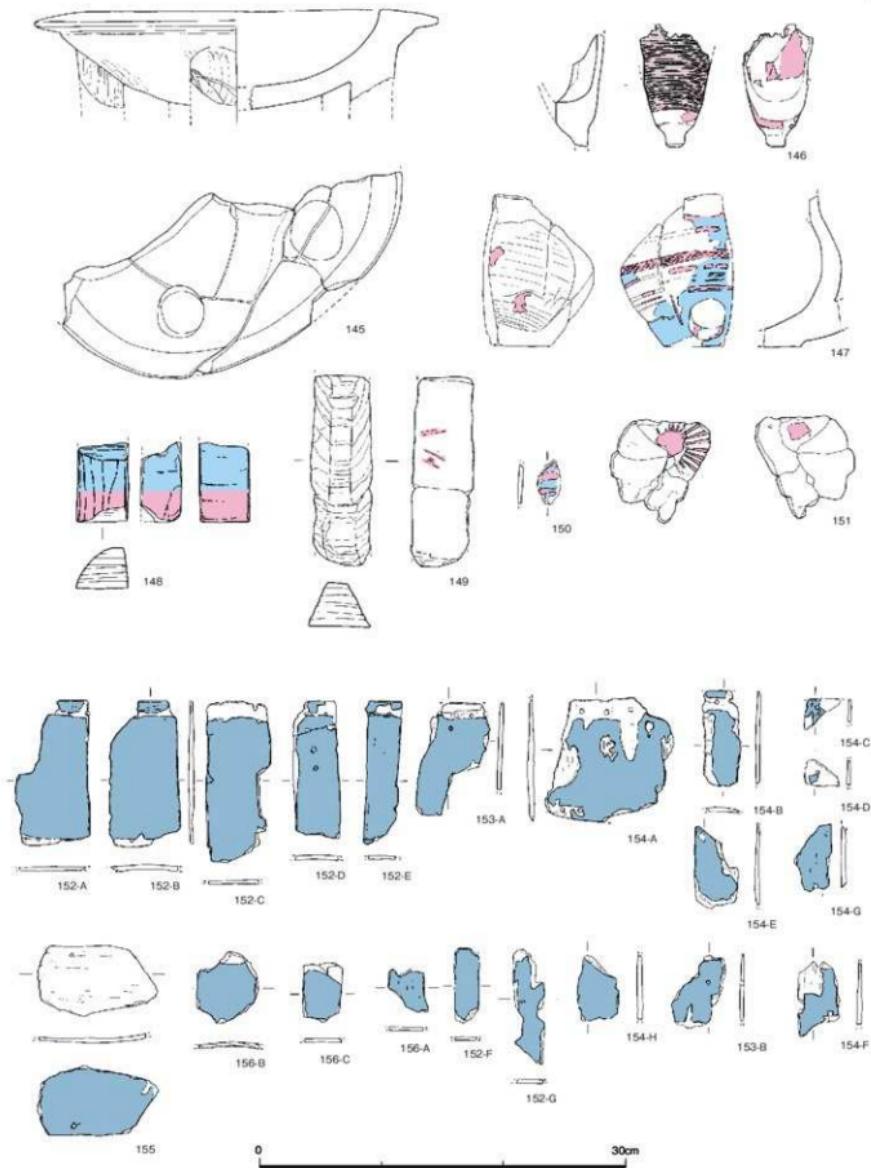


第34図 42次調査区出土の木製品 20 (1/4)



第35図 42次調査区出土の木製品 21 (1/4)

件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	肩厚	加工分類	備考
36-145	漆塗容器	五層の高杯	Y-3, X-6-N, 土器群120	復元口径： 33.0	復元高： 8.1	—	—	材は軽くやや黒茶色の木、木目は観察しやすい。脚は残らず底元のみ漆跡あり、蓋ぐ開口部を丁寧に仕上げる。頸片付点(2点接合点不規)
36-146	漆塗容器	有脚杯	Z-2	10.0	—	—	—	輪吉古村に類似あり。
36-147	漆塗容器	把手付き容器	X-6, 土器群120	復元高： 12.4	復元幅： 9.1	1.0~1.7 底径：1.5	—	I型の発掘。舟生中期一期地蔵。朱漆が剥がれていますとこで、復元時は漆を塗り直す。内側にも朱漆があつた。
36-148	漆塗製品	不明木製品	X-4, 土器群106	6.5	4.2	3.3	—	漆を多く剥がしているようだ。漆面を剥がしてあらわかに不透明。表面は漆透り(黒と赤)調製にも可能性がある。
36-149	漆塗製品	不明木製品	W-6, 土器群123	15.5	5.0	3.6	—	木の樹脂で、もって漆が残っている。朱漆の高い点があり、黒漆の底存在か、2段に分かれている。何に使ったかは不明。裏面の上に赤漆の文様があつたらしく。
36-150	漆塗容器	木製容器の破片	V-7-N, 土器群125	寸法：2.6 x 1.9	—	0.4	—	黒漆のち赤漆を施していると思われる。
36-151	漆塗容器	木製容器の破片	X-6, 土器群120	—	—	1.4	黒漆の上に赤漆で日章旗のような絵が描かれている。カーブあるので容器の側面部かな。裏面にも朱漆が残ります。上下に0.2~0.25cmの孔があり、裏面には黒漆の痕跡がある。	
36-152	漆塗容器	木製容器の破片被片	X-4	④11.9	6.0	0.35	—	下方に0.2~0.25cmの孔あり。うらの上方にのみ黒漆が残っています。
				⑤12.0	5.8	0.5	—	裏面側から底廻。0.2cmの孔ひとつ。もうひとつ上方にあるかもしないが不明
				⑥13.2	5.3	0.35	—	上方に0.25cmの孔が2つあります。裏面上方に黒漆が残る。
				⑦11.3	3.9	0.35	—	上方に0.3cmの孔が2箇所ある。裏面上方に黒漆が残る。
				⑧11.7	2.9	0.35	—	黒漆がこのこ。
				⑨6.0	2.0	0.3	—	黒漆がこのこ。
				⑩9.5	2.5	0.35	—	黒漆がこのこ。
36-153	漆塗容器	木製容器の破片被片	X-4	Ⓐ9.3(B) 5.9	Ⓐ5.9(B) 4.3	Ⓐ0.35(B) 0.35	—	片面のみ黒漆をまぶ。Aには5箇所に穿孔。Bには1箇所がある。
36-154	漆塗容器	木製容器の破片被片	W-5, 土器群123	Ⓐ10.3	10.6	0.55	—	片面のみ黒漆をまぶ。Aには5箇所に穿孔。Bには1箇所がある。
				Ⓑ7.8	3.0	0.35	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓒ2.5	2.8	0.25	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓓ2.1	2.6	0.25	—	片面のみ黒漆をまぶ。Aには5箇所に穿孔。Bには1箇所がある。
				Ⓔ6.7	3.7	0.4	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓕ6.2	3.5	0.45	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓖ5.5	3.1	0.45	—	片面に黒漆がこのこ。
36-155	漆塗容器	木製容器の破片被片	Y-3	9.5	5.7	0.35	—	片面のみ黒漆をまぶ。Aには5箇所に穿孔。Bには1箇所がある。
36-156	漆塗容器	木製容器の破片被片	X-5	Ⓐ3.5	3.0	0.25	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓑ5.8	5.0	0.35	—	片面に黒漆がこのこ。
				Ⓒ4.9	3.2	0.25	—	片面に黒漆がこのこ。
37-157	容器	桶	Z-2	17.8	7.0	0.9	制物	計量桶の木目材。底跡が見えないほど丁寧な調整で両面に加工している。一方の端の7cm程で毎2~3cmの突起を削り出している。
37-158	容器	引物桶	X-6, 土器群119	—	—	—	引物	低身付の桶か、劣化が著しい。
37-159	容器	高杯の底部	X-4, 土器群106	復元高：5.5	復元口径： 26.4	—	—	杯底の1/8が残存する。口縁部上面は平面に底部は柱状に削り加工する。
37-160	容器	高杯の脚台部	Z-2, 土器群136	底径：16.4	—	—	—	円柱状の脚台に透かし窓をもつ。脚の断面は三角形。
37-161	容器	引物桶	W-5, 土器群123	復元口径： 12.6	—	—	引物	残存1/3.残部部分に丸を足。脚を造りだしているように入れよがよくわからない。底面の厚さについてよくわからない。
37-162	容器	引物桶	W-5, 土器群123	口径：約13.8	—	—	引物	片側が分離しているが子母式にしたかったのか。内部は斜めに鋸入。工具痕が残る。外側は多角形の底部を削りだし廢きわいかげか?
37-163	容器	引物桶	Z-2	口径：約 12.2	—	—	引物	口縁部の削り落し感。底盤もかなりにくく不安定に固定して実物やわらかに変更された。
37-164	容器	引物桶	B-1	15.9	8.5	0.6~2.0	—	底盤に穴をもつ。小型臼の未製品。
37-165	杵・臼	小型臼の未製品	W-5, 土器群123	高さ：14.8	口径：17.0	—	—	把手の左右に持ちやすさるためにかくぼみを造る(方形)4x4-2つ
38-166	容器	畫形容器	X-2	19.0	18.2	1.0~2.3	—	2片に割れている。中央に長方形の孔を穿つ。
38-167	容器	畫形容器	Y-3	20.4	16.7	1.3	絆目	把手をばび中央部に削り出す。
38-168	容器	畫形容器	W-5, 土器群120	26.9	11.6	3.55	—	把手をばび中央部に削り出す。
38-169	容器	容器底板？	W-5	25.2	11.7	1.25	絆目	前に底板が間に設められる。
38-170	容器	畫形容器	Y-3	32.7	13.7	2.1	—	把手は先端部が鋸状に広がる
38-171	容器	畫形容器	Y-3	27.3	17.1	1.2	—	うすくくるが丈夫な材を使用。



第36図 42次調査区出土の木製品 22 (1/4)

245は小型の組合せ式案で、上板を欠くが脚と棟が固定された状態で出土した。

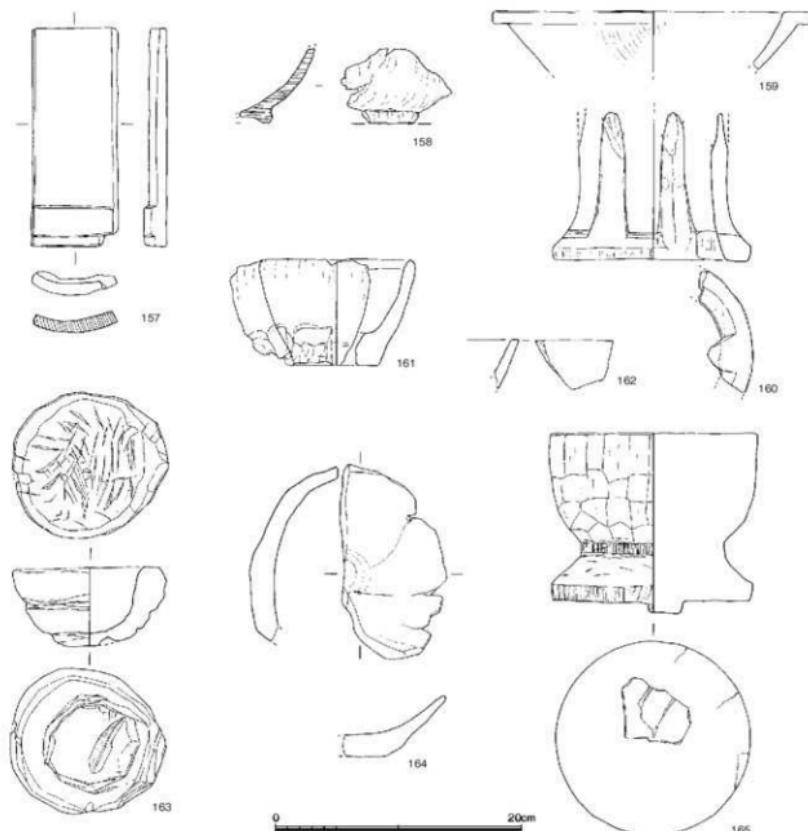
組合せ式案は旧国名でいえば筑前、筑後、肥前、豊前、肥後の各地域を代表する拠点集落において出土が確認された(下村2001)。福岡平野の雀居遺跡で原形を保った状態で出土して以来、各地で部材が追認された。糸島地方では今宿五郎江遺跡でまとまって出土しており、本調査区でも複数の案の部材が確認された。このほか壱岐の原の辻遺跡でも出土している。

【参考文献】

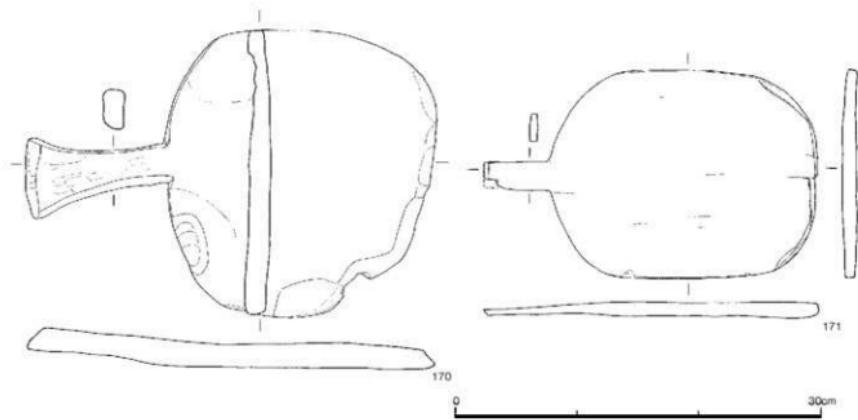
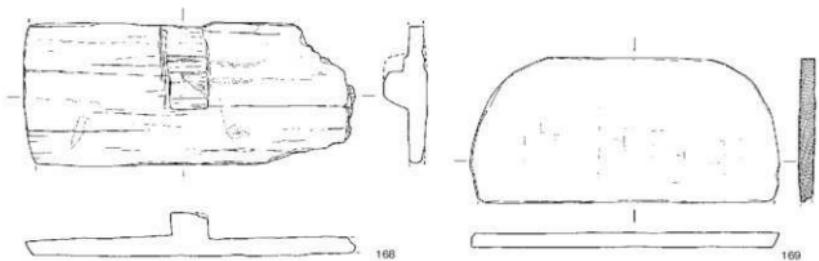
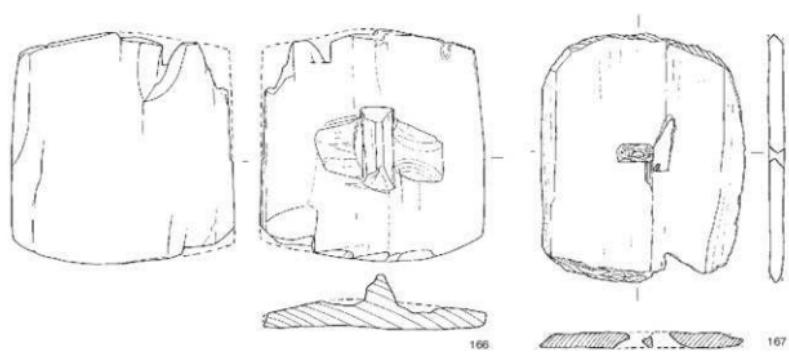
下村 智2001「安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」と木製机」『アジア歴史文化研究所報』第18号

長崎県教育委員会2005「原の辻遺跡 総集編Ⅰ」「原の辻遺跡調査事務所調査報告書」第30集

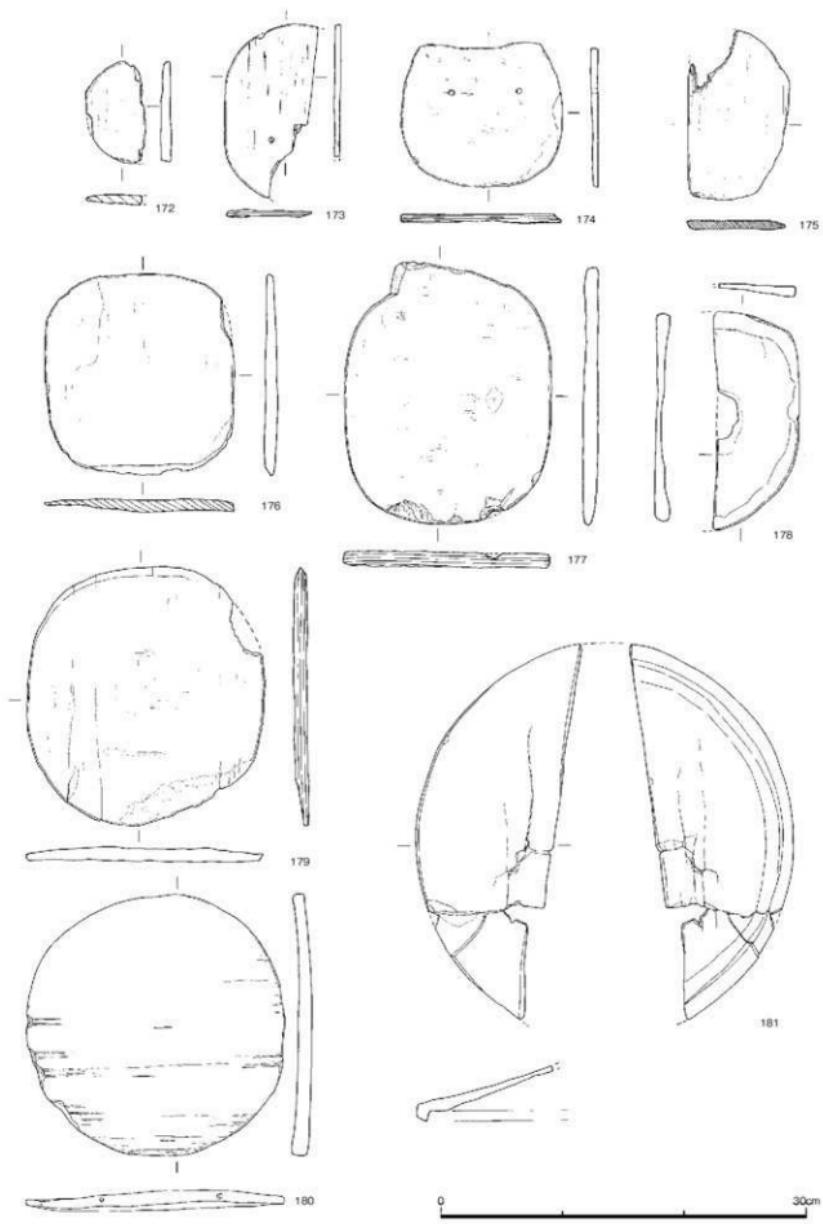
木の文化研究会2009「組合せ式案資料集」福岡市埋蔵文化財センター



第37図 42次調査区出土の木製品 23 (1/4)



第38図 42次調査区出土の木製品 24 (1/4)



第39図 42次調査区出土の木製品 25 (1/4)

42次調査区出土の木製品32(第46図)

252は長侧面に2カ所臍孔がある。253は椅子の座面と推定される。絵画のある琴が出土したのは、この木製品の直下である。

42次調査区出土の木製品33(第47図)

255・256は編台の目盛板の部材と推定される。長侧面の浅い凹部は縄を固定するための切り込みである。257は角型田下駄の枠の部材と考えられる。259は椅子の一部か。

42次調査区出土の木製品34・35(第48・49図)

261・262・263・265の方形や円形の有孔円盤はねずみ返しである。第53・54図の柱材などと組み合わせて使用されたと推定される。264は舟の舳に付ける波除板の可能性がある。

42次調査区出土の木製品36(第50図)

266・267はともに部位などは不明だが建築部材とした。266は側面にコ字の切り込みがある。267は一方には50cmほどの細長い溝が切られている。その反対の面は方形の大小の臍孔が刻まれている。

42次調査区出土の木製品37(第51図)

268～275は、又柱の部材、もしくは柱材を杭に転用したものである。

42次調査区出土の木製品38(第52図)

276は又柱の部材である。277は不明の板材。278・279は柱の転用材か。

42次調査区出土の木製品39・40(第53・54図)

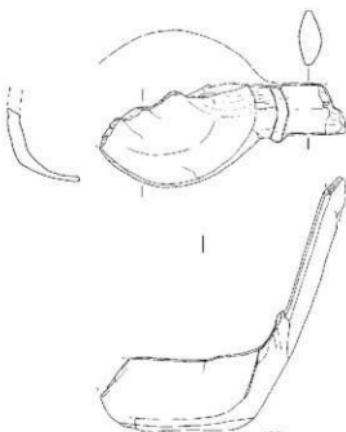
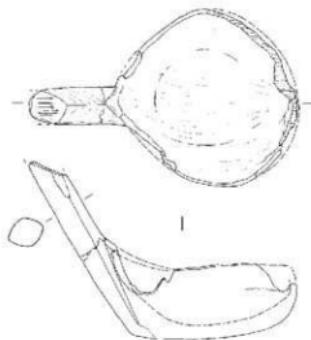
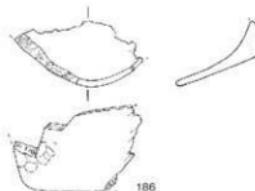
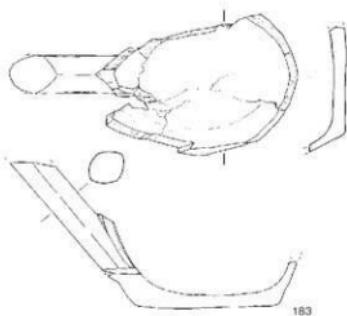
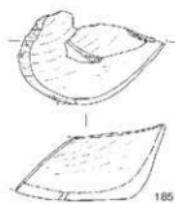
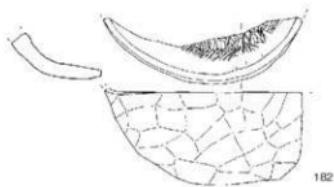
280～285は柱材である。上部の細く削り出した箇所はねずみ返しなどを固定する受部と考えられる。287・288は高床建物などに用いられた梯子の部材である。

42次調査区出土の木製品41(第55図)

289～295は建築部材に用いられた垂木や垂木を転用した杭などの棒状木製品である。

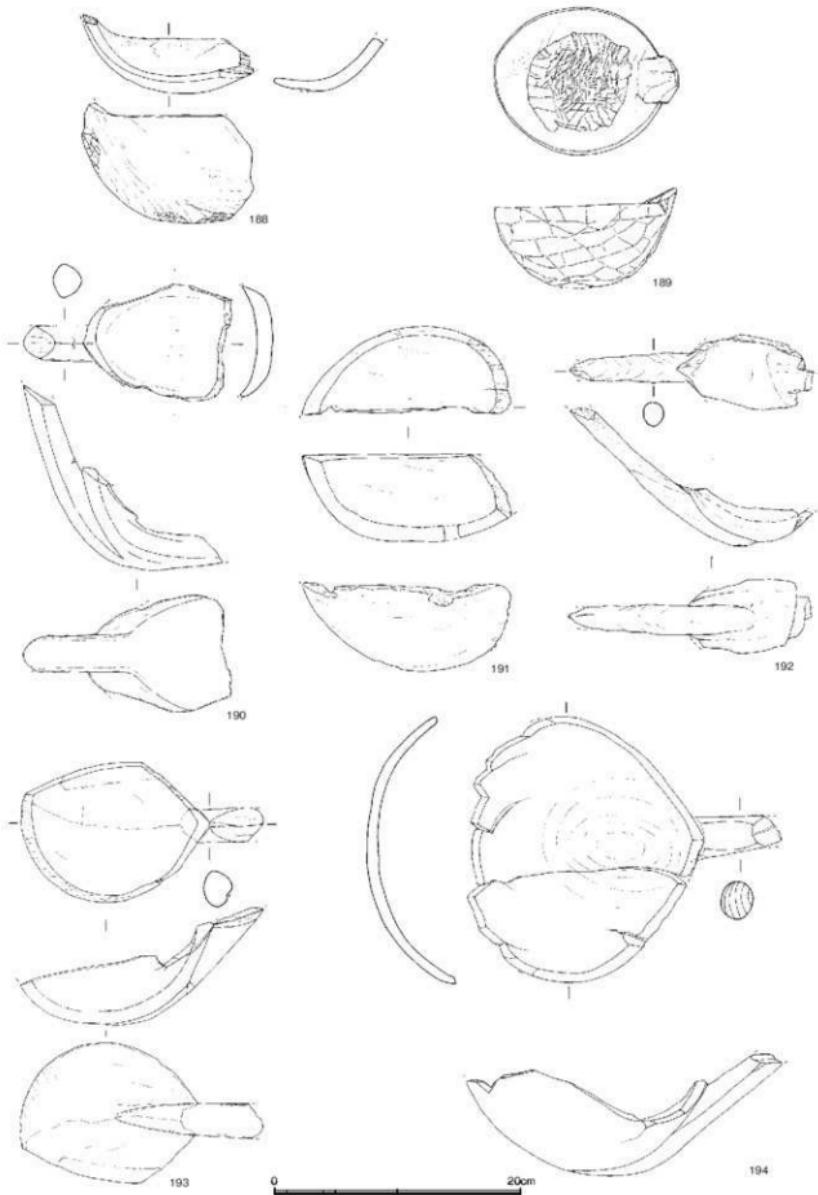
件名	種別	名様	出土地点	全长	身幅	身厚	加工分類	備考
39-172	容器	容器の蓋	D-1	8.3	4.7	0.65	板目	何かの底か。裏面に墨で描いてある。
39-173	容器	容器の蓋	W-5. 土器群123	14.3	7.1	0.5	板目	孔があいている。後世のものか。
39-174	容器	容器の蓋	Y-3	11.8	13.2	0.75	板目	上部が削り出すするものの円錐形に近い形状。径0.4cmの穿孔が並列の位置に2箇所ある。
39-175	容器	容器底板?	W-5. 土器群112	13.9	8.2	0.8	—	一端が欠け、片面が直線的な形状をなすが全体的に僅円形となる。
39-176	容器	容器底板?	W-5. 土器群123	16.5	15.5	9.5	—	板目か板目か、片面が分離し。
39-177	容器	容器底板?	Y-3. 土器群136	21.5	17.0	1.3	板目	分離して破れて、遺存状態は良好。上部は一部欠損している。
39-178	容器	容器底板?	X-5	17.8	7.0	0.3～1.2	—	半円形に削るが円錐形の木製品。用途不明。中心部に墨で一つくりか。表面はやや墨く墨脱りをつけても、表面が黒くなっているのがやや黒化しているか?裏面には墨脱り加工はみられない。
39-179	容器	容器底板	W-6. 土器群123	21.0	19.5	1.1	板目	丁寧に削っている。
39-180	容器	容器底板	X-6. 土器群120	直径:16.2 ~21.5	—	1.2～1.3	—	削跡の底板か。底面底が確認できる。目の細かい材。
39-181	容器	円形木製品(蓋)	W-6. 土器群123	30.6	13.5	—	—	外側を磨き上げた精製品。赤茶葉色、内面は緑(1cm)をつく。

団	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
40-182	陶い具	杓子 (未製品)	Y-3	16.3	3.8	1.4	削物	表面に工具痕がある。内側にも長いノミの跡痕がある。
40-183	陶い具	杓子	W-5	現存長23.1	現存幅10.4	2.5	削物	底部は平らで安定している。縦柄がつく。
40-184	陶い具	杓子	Y-3	21.8	14.5	本厚:2.9 柄:3.0	削物	2方に割れている。明確な様がある。火を受けて黒い。縦柄がつく。
40-185	陶い具	杓子	W-4	12.0	7.7	1.25	削物	2方に割れている。縦柄が。
40-186	陶い具	杓子	Z-3	10.5	5.3	1.7		磨溝しているが工具痕が若干認められる。同一個体で複合不通の小穴が1つある。
40-187	陶い具	杓子	W-5	20.1	現存幅7.9	2.2	削物	身の半部が欠損する。身近くの把手には凸状の段が残されている。身の深さは4.9cmである。縦柄がつく。
41-188	陶い具	杓子	X-4、土器群106	14.1	4.4	1.1	—	底面から側面にかけて一部が残っている。外側には工具痕あり。
41-189	陶い具	杓子 (未製品)	Y-3	口径:15.0	高さ:8.0	約5.0	削物	右側に小さな把手のものを丁寧につくりだしている。縦柄がつく。
41-190	陶い具	杓子	X-6、土器群120	現存長17.0	高さ:15.2	3.8	削物	縦柄がつく。
41-191	陶い具	杓子	Y-3	17.1	6.9	—	削物	横半分くらいに割れている。
41-192	陶い具	杓子	X-6、土器群120	20.0	6.0	—	削物	斜目柄がつく。
41-193	陶い具	杓子	W-5、土器群123	20.0	11.3	3.3	削物	
41-194	陶い具	杓子	X-6、土器群119	25.8	21.6	0.9	削物	柄に横から来る先端部まで長さ19.1cm。柄先端:欠 手手、欠。裏面も丁寧に調整。木目が明瞭。やわらかく暗る特徴。
42-195	陶い具	杓子	X-7	15.5	10.5	2.6	削物	3方に割れている。斜目柄がつく。
42-196	陶い具	杓子	W-5、土器群123	19.1	5.5	10.2	削物	7cmくらいの幅で浅い溝を施す。細い北縫が入っている。V字形の割れがある。斜目柄がつく。
42-197	陶い具	杓子の柄	X-6、土器群120	13.8	6.5	1.95	削物	柄に丁字形をして横を削り出している。斜目柄がつく。
42-198	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	7.8	4.2	2.1	削物	芯持ち材を削って造りだしている。斜目柄がつく。
42-199	陶い具	把手付容器	W-6、土器群119	14.8	4.4	1.45	削物	横柄がつく。
42-200	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	31.9	5.1	2.5	削物	先端は欠損。丁寧につくりである。表面はすべすべしてきれいに磨いてある。中央部に縫合部がある。
42-201	陶い具	杓子 (黒漆塗り)	Z-3	8.4	4.7	1.2	削物	3方に割れている。身も柄も内外共に黒漆が塗られている。縦柄がつく。
42-202	陶い具	杓子	W-5	現存長14.5	現存幅7.4	最大厚2.05	削物	裏面を削っているのが全体に黒色を呈する。側面上方は欠損している。身部の残りは全く、全体的に楕円形を呈する。身部の最奥い地位は身部の先端に近い所にある。縦柄がつく。明らかにやわらかく柔らかい印象。身の側面の部分が割りが悪いが片側は深みを持たないつくりか。縦柄がつく。
42-203	陶い具	杓子	W-5、土器群123	17.5	14.5	胴厚0.7	削物	深く大きな杓子の様だ。片側微面しか残っていない。縦柄がつく。
42-204	陶い具	杓子	W-4	26.7	9.9	2.2	削物	縦柄がつく。
43-205	陶い具	杓子の柄	X-2、土器群134	現存長14.5	7.1	5.7	—	縦柄の頭部
43-206	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	現存長9.6	7.7	3.0	—	縦柄の頭部
43-207	陶い具	杓子の柄	X-6、土器群120	5.7	3.8	1.4	—	縦柄の頭部
43-208	陶い具	杓子の柄	X-5	6.9	6.3	2.1	—	縦柄の頭部
43-209	陶い具	杓子の柄	X-6、土器群120	8.6	9.5	1.5	—	縦柄の頭部
43-210	陶い具	杓子の柄	W-6、土器群123	13.9	8.5	1.6	—	やわらかくくだやすい材。頭部は筋長い葉状。柄は伏根部分のみ残る。縦柄の頭部。
43-211	陶い具	杓子の柄	Y-3	9.7	6.8	5.4	—	欠損は見られないけどそのものと見られるので特に複数で見られる。頭部は筋長い葉状。柄は伏根部分のみ残る。M字やわらかく伏根の材。柄が頭部中央から少し外側部分に折りたてている。状態も結構よく保たれており、本柄から、203と同地點で発見されているが別のものと考える。縦柄の頭部。
43-212	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	17.3	—	—	—	
43-213	陶い具	杓子の柄	X-4、土器群106	23.9	—	—	—	縦柄の頭部
43-214	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	22.8	3.8	3.9	削物?	杓子の柄で削物か、金属等工具で全体を切削している。
43-215	陶い具	杓子の柄	X-6	16.5	2.5	2.6	芯持ち材	芯持ちの素材、縦柄の頭部。
43-216	陶い具	杓子の柄	Z-2	21.0	11.0	4.5	—	柄の内部には段を設ける。柄の断面は円形状となる。斜目柄がつく。
43-217	陶い具	杓子の柄	Z-2、土器群136	現存長26.7	2.8	3.0	芯去り材	先端は欠損。頭部には二次焼成痕がある。縦柄の頭部。
43-218	陶い具	杓子の柄	X-2、土器群134	現存長24.6	6.0	2.8	—	先端は欠損。両側に棱線が入っている。縦柄の一端。
43-219	陶い具	杓子の柄	X-6、土器群119	23.8	2.6	2.4	芯去り材	縦柄の一端
43-220	陶い具	杓子の柄	W-5、土器群123	—	—	—	—	縦柄の一端
44-221	結縫具	木製結縫率	Y-2	3.7	3.9	0.7	枉目?	中央部が縁より厚く加工され、穿孔には木棒が通るとのと思われる。
44-222	結縫具	木製結縫率	Y-2、土器群115	直径:6.5 —7.3	—	0.5	—	孔の断面を見ると中心が膨らむことがわかる。身のつまつた材。
44-223	結縫具	木製結縫率	Z-Y-2	高x幅:4.8x5.2	—	—	—	中央に木棒が残る。中心部の棒:1.1cm、幅0.5x0.3cm
44-224	結縫具	木製結縫率未製品	Y-2	5.2	4.7	0.7	—	2cm。もともとは下方が平らで上が少しくらみをもつていたようだ。
44-225	装身具	簪?	W-5、土器群123	12.4	0.7	0.6	—	円筒状の断面を呈し、表面に削り加工を施す。先端部は前で曲面取りをして、先端を尖らせる。

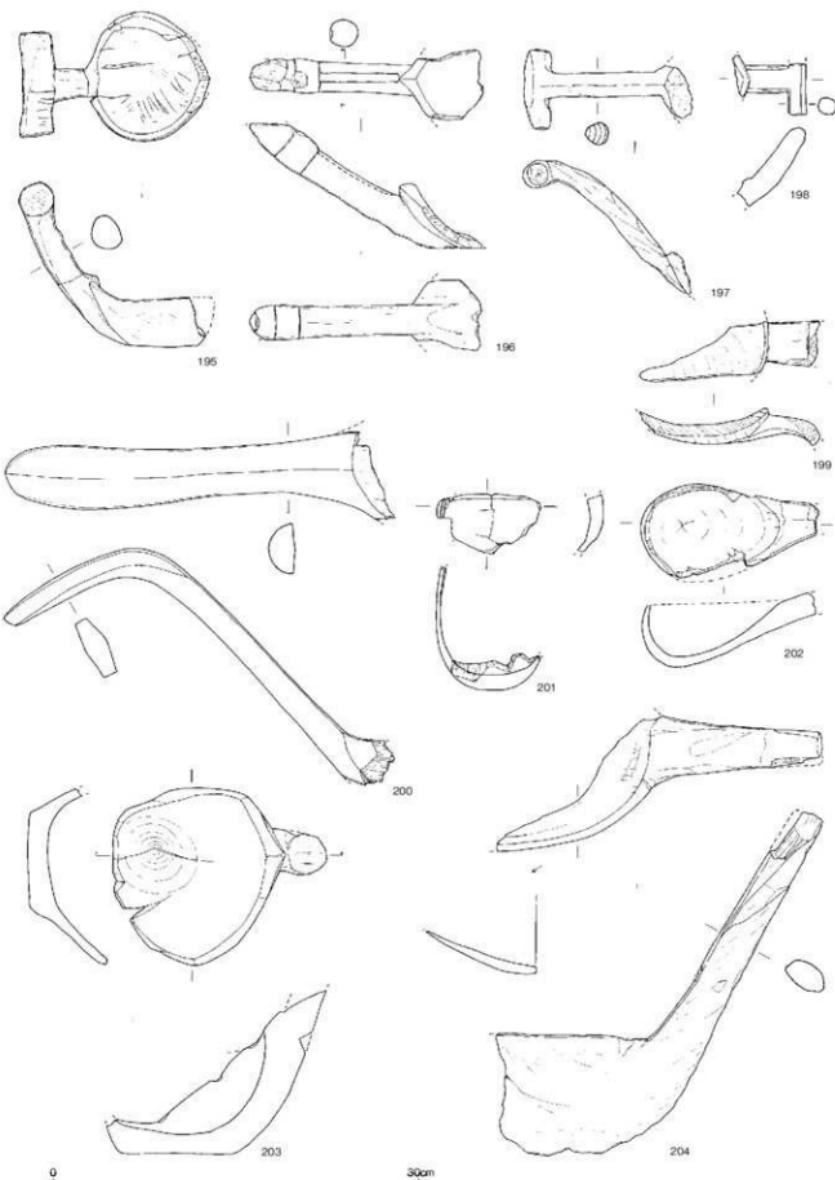


0 20cm

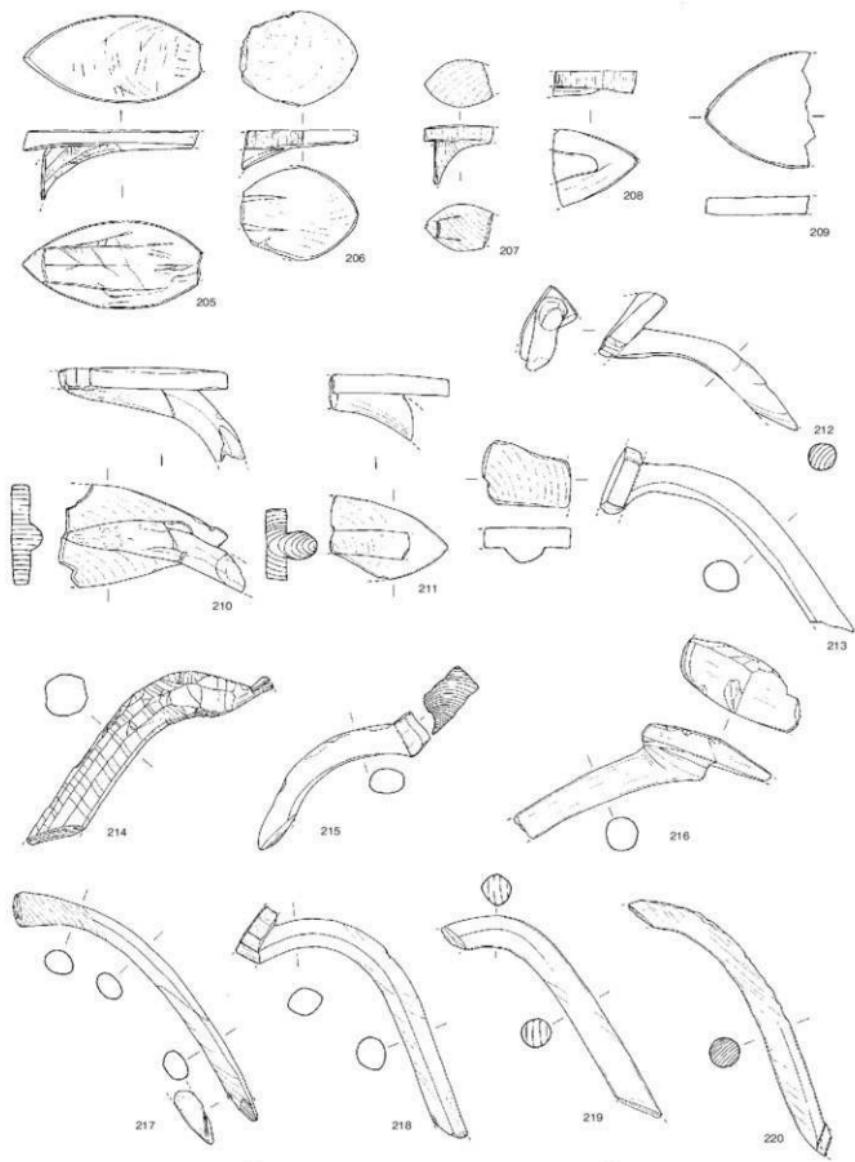
第40図 42次調査区出土の木製品 26 (1/4)



第41図 42次調査区出土の木製品 27 (1/4)



第42図 42次調査区出土の木製品 28 (1/4)



第43図 42次調査区出土の木製品 29 (1/4)

42次調査区出土の木製品42・43(第56・57図)

296は、水かきの部あるいは刃部の厚みと形状などから、柄と水かきの部分(船)からなる舟の推進具とする。柄の断面は梢円形状で、頭部は丸く削って加工している。船は、柄の付け根から緩やかに外側に開き、最大幅の地点で反転して内傾する。厚み1.9cmと薄い。

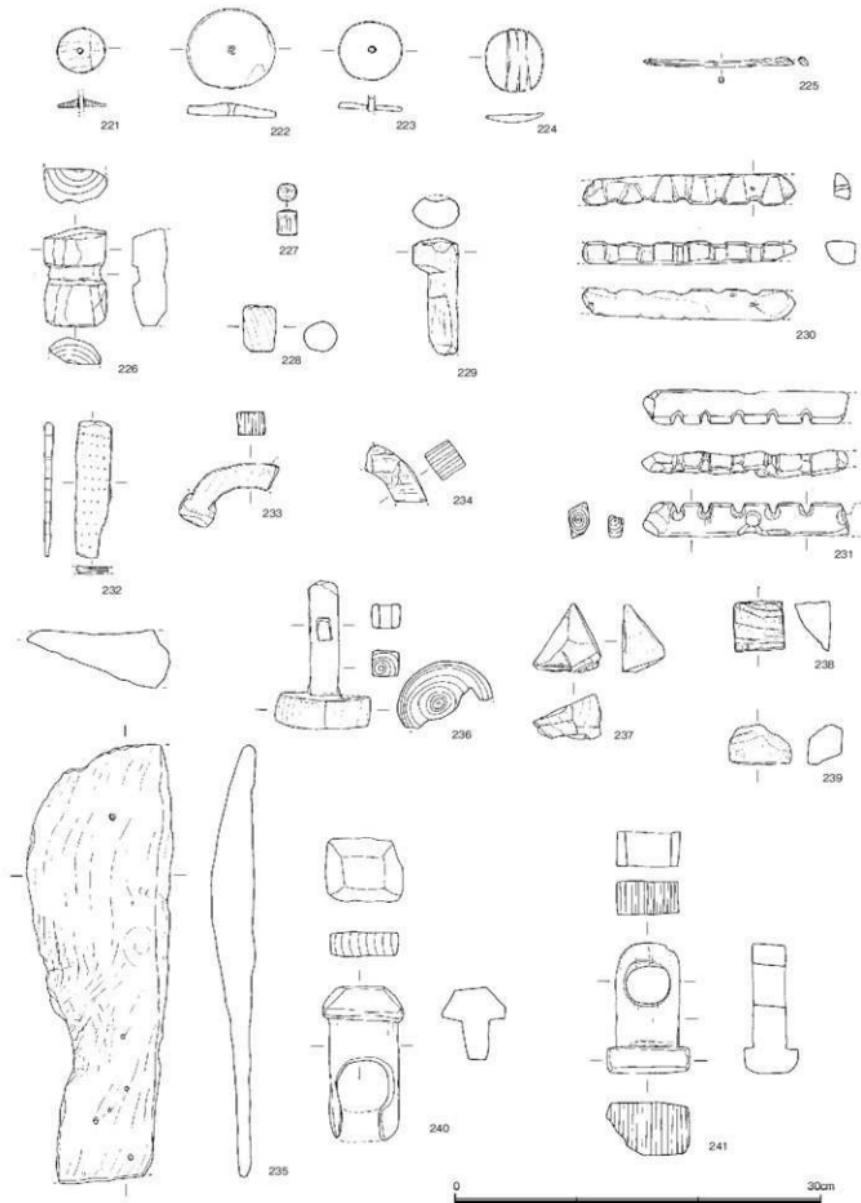
297の板材は幅が1mの準構造船用に用いられた仕切り板と思われる。図の右側は欠損している。しかし残存部分から上端は直線、下端は弧となる半月状を呈していたものと推定される。上面に近いところには2箇所に膣孔があり、右側は磨滅が著しい。左側の孔は、梢円形の形状を遺し、この孔を通る細い溝が、上端から下端まで施されている。298も準構造船の仕切り板と思われる半月状の板材である。下端付近には弧に沿って3箇所に膣孔が穿たれている。左の二つは梢円形状で、他の一つは、梢円形状より両端が細くなった形状を呈している。これら2例の板材は、船体の内側に横方向に設置されていたもので、下端の弧は、丸木の内側を削った形状に沿って、加工されたものである。そのため舟は、両端からの中心線が偏り、不安定な造りとなっている。膣孔は、仕切り板を舟底に固定するための紐の通しの孔と考えられる。一本から割りぬいた丸木舟であれば、船体構造からして、仕切り板(隔壁板)は不必要であるが、舟の浮力を大きくして、容積を大きくするには、木肌を薄く加工した数枚の板材を組み合わせて、接合が必要となる。薄く組み合わさった外板を水圧から保護するため、今回出土した仕切り板が存在したものと考える。このことは、船体構造史からして丸木舟から準構造船への変換点を示すこととなる。

299は漁労具のたもあみの枠である。小枝の細い筋を落して、輪状に曲げて加工したものである。

300は櫂の柄と船の一部である。船の形状は、柄から緩やかに両側に開き、最大幅の地点から内傾する。船の厚みは薄い。

301は櫂である。柄の頭部付近は円形状であるが櫂の先端部に沿って次第に扁平状となる。同時に幅も次第に広がり端部近くで再び幅を狭くして丸い先端となる。櫂のなかほどからやや下がった先端

件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
44-226	編み具	編み縄		X-6	8.0	5.1	—	—
44-227	容器	栓?	W-5. 土器群123	2.1	径1.5×1.6	—	—	円柱形表面にはノミ痕がみられる。
44-228	容器	栓?		X-2	3.7	2.7~2.75	2.4	—
44-229	容器	栓?	W-5. 土器群123	9.6	3.7	2.7	—	上部幅広、下部幅狭
44-230	発火具	火薬臼	X-6. 土器群120	17.4	1.9	2.3	栓目?	なんかの栓か、漆塗か、使用痕。
44-231	発火具	火薬臼	X-4	16.9	2.6	1.7	芯持ち材	6~7所の発火部が割りだしているが火薬槽をあてた痕は確認できない。△状の凸起をつくらが火薬槽で埋ませたうちは残存部分に残してない。舟通縫跡2次と似た板状の物で、その上に火薬臼が置かれていたと思われる。
44-232	—	不明木製品	Y-3. 土器群136	11.2	2.6	0.8	板目	芯持材の裏材、漆剥げ、片面カットの跡がありすべて使用しているようだ。日の出痕は直径1.1~1.2cm、V字の切入込みもそれを上に目打ちする。1~2対反対に斜U字でつくり口を1~2持つ。うち片面は何もない。
44-233	容器	木柄?	Z-2	8.2	1.8	2.2	—	—
44-234	容器	不明木製品、木柄?	W-5. 土器群123	6.4	2.2	2.5	—	半径6.5cmの環状、高杯の裏部か。
44-235	武具	短手の未製品?	W-5. 土器群123	35.8	12.0	3.5	—	桙目が板目かわからない。うらを見ると丸が3mm程であらわしている
44-236	建築部材	栓	Y-3	并手背面四角形 高さ: 9.3 幅: 2.3 厚さ: 1.9~2.0	—	—	芯持ち材	明らかにやわらかい木。木目は見えやすい。経通しのある持ち手と円台をつくる。工具か。南方通縫186~189間に記載
44-237	不明木製品	残材	X-6. 土器群120	5.6	5.5	3.4	芯持ち材?	残材。加工痕が鮮明にのこる。
44-238	不明木製品	残材	W-5. 土器群123	4.1	4.0	3.0	—	残材。加工痕が鮮明にのこる。
44-239	不明木製品	残材	X-6. 土器群119	3.3	5.0	2.8	—	残材。加工痕が鮮明にのこる。
44-240	建築部材	栓	Y-3	12.7	6.4~6.6	—	栓目	栓目。桙木取り。頭部に星型のような形をつくる。241と同様。
44-241	建築部材	栓	Y-2	10.7	最大: 6.7 最小: 5.2	4.4	—	桙木取り。240と同様。円形のホゾ穴をもつ(3.4X3.8cm)



第44図 42次調査区出土の木製品 30 (1/4)

部寄りの地点から先端まで片面のみではあるが、中央部に緩やかな突起(稜)を削り出す。

302はアカトリで、いわゆるアカ(船内にしみ出た水)をかき出すための掬い具である。匙部は先端部付近を除いて、遺存状態は良好である。柄の頭部は欠損しているものと思われる(林田憲三)。

42次調査区出土の木製品44(第58図)

303～307は、一方向に段を削り出した棒状木製品である。308～311は自然木の枝分かれの箇所を加工したもので、儀器である蓋類似品に分類される。

42次調査区出土の木製品45・46(第59・60図)

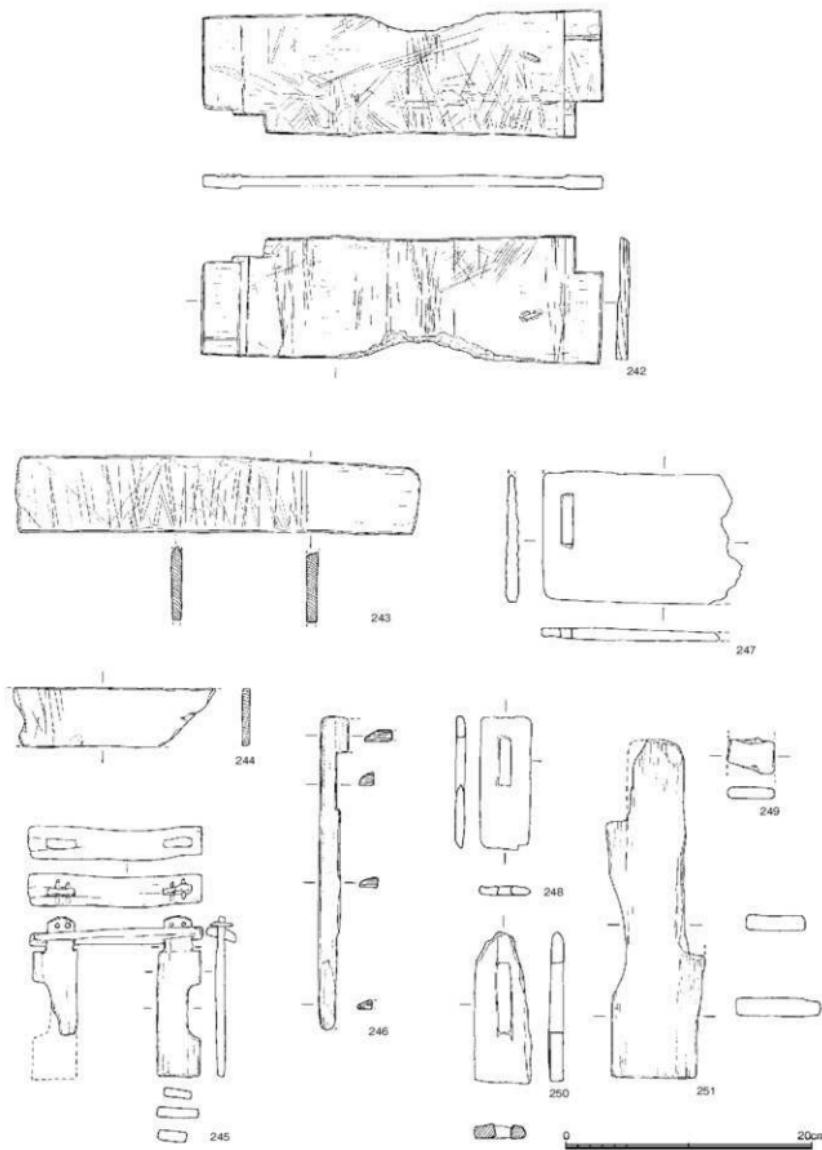
312～321はイスノキなどの黒色の硬質の材を使用したもので、ヤスの部材と推定される。312にみられる基部の面取りから3本を単位で縛綴して大型魚の漁に用いたのであろう。333～336は断面が扁平であることからアワビオコシなどの用途が想定される。ヤスと同様、硬質の材を使用している。

42次調査区出土の木製品47(第61・62図)

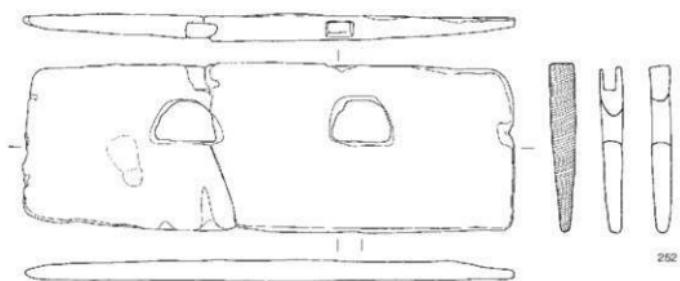
247は、下端部に並ぶ木釘の痕跡から箱作りの琴の側板と考えられる。スギの柾目板を加工したもので長辺は88.5cm、短辺は残りのよい箇所で18.8cm、天板は出土していないが側板の枘孔の位置から短辺は本来30cm程度だったと考えられる。内側には小口板を固定するための溝が彫られており、木釘の痕跡がみられる。

琴は、農耕にかかわる水辺の祭祀や力ミ寄せの神事に用いられた楽器と考えられ、板作りと共に鳴槽をもつ2種類に大別される。さらに共鳴鳴槽の琴は天板の下に材を削り抜いた槽を置く「槽作り」と底板に側板から上板を削り抜いた部位を被せた「甲作り」、上板と側板、底板、小口板を組み合わせ

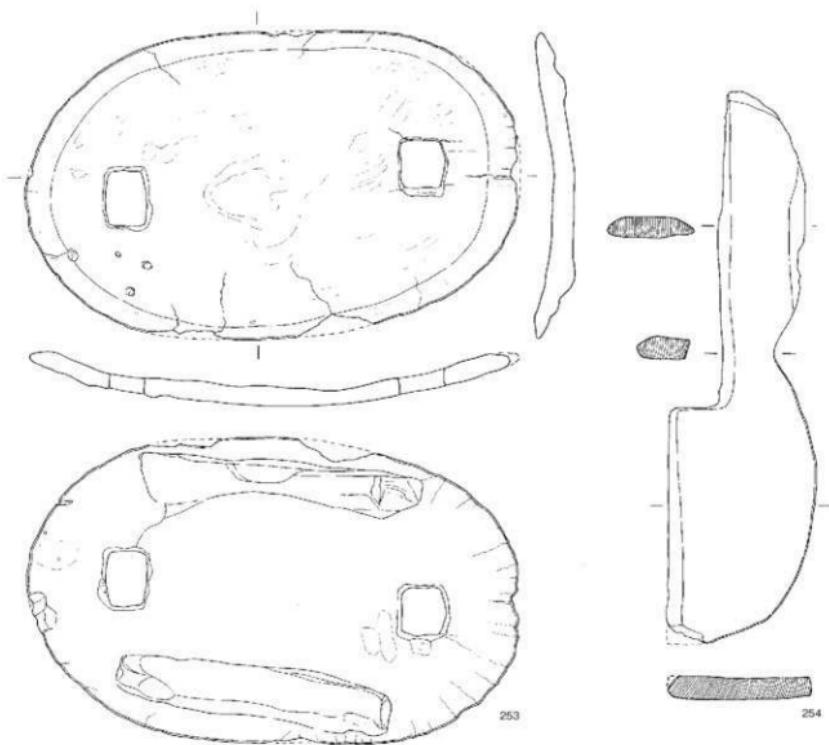
件名	種別	名種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
45-242	机	組合式木製案(天板)	Z-2	32.7	10.3	1.1	板目	表もうちも西面に細かい繩が入っている。裏もうちも上下に縦を走っている。矧、工具を用いる。
45-243	机	組合式木製案(天板)	Y-3	33.0	6.2	0.9	柾目	片面にのみ使用済み。脚部がある。もう一方は完全然も観察できない。少し彫刻しているようだ。真直ではある。
45-244	机	組合式木製案(天板)	Z-1	16.5	4.8	0.6	—	裏合板材の裏片などと考えられる。片面・縫割痕がこのように見える。
45-245	机	組合式木製案(脚+棟)	Y-2	—	—	—	柾目	裏合板材。脚部がある。脚と棟の間に杭の天板があつたと考える。木案は各脚に2本ずつもつ。材の色は明るい。スギなどの柱状樹か。
45-246	机	組合式木製案(棟)	Y-3	25.7	2.2	1.0	板目	上部先端付近には長方形の穿孔が加工されたと思われる。側面には削取りが施されている。
45-247	机	組合式机・天板	Z-1	16.4	10.6	1.1	—	裏面とも刃物痕跡はみられない。
45-248	机	組合式木製案(棟)	Z-1	10.9	4.2	0.7	—	
45-249	机	組合式木製案(脚か)	Z-1	3.0	3.8	0.9	—	
45-250	机	組合式木製案(棟)	Z-1	12.4	4.7	1.3	柾目	長方形の穴があく棒状の板材。側面削化がみられる。
45-251	机	組合式木製案(脚)	Y-3	27.8	4.9～7.0	1.3～1.5	柾目	削り込みのあるほううが外側。
46-252	—	不明木製品	Y-3	40.5	13.9	2.0	—	
46-253	椅子	椅子の受部	X-6. 土器群120	40.2	25.1	2.3	削物	裏面に方孔があけられているが軸が若干ずれてているようだ。数ヶ所小さな方孔があいているが何のためかわからない。裏に削工痕あり。(ノミ巻か?) 長辺方向両側に2つ段を削している。矧、脚か。同時に、低い脚をついていた。
46-254	—	用途不明木製品	Z-1	45.3	12.2	—	—	
47-255	櫛み具	櫛台	X-6. 土器群120	55.6	4.9	1.65	板目	櫛台の目盛板。上面の切り込みは糸の痕跡。
47-256	櫛み具	櫛台	X-4. 土器群106	残存長47.3	6.5	1.6	板目	側面2箇所に縫跡と思われる跡がある。
47-257	農具	角型田下駄の枠	W-5. 土器群123	残存長45.5	8.2	2.7	—	横の内側に彫り出しているが左側に向かってどんどん細くなっている。穿孔が1箇所ある。
47-258	建築材?	板状木製品	Y-Z-2	25.9	23.3	1.45	柾目	裏面の右側に貫通しない孔が4箇所ある。側面にも貫通していない孔が4箇所ある。
47-259	椅子	椅子の受部	Y-2	42.3	14.0	1.3	柾目	側面には調節状の段がついている。
47-260	建築材	用途不明木製品	Z-2. 土器群136	残存長85.0	4.3	1.5	芯持ち材?	裏面が欠損。2箇所に方形の孔がある。



第45図 42次調査区出土の木製品 31 (1/4)



252

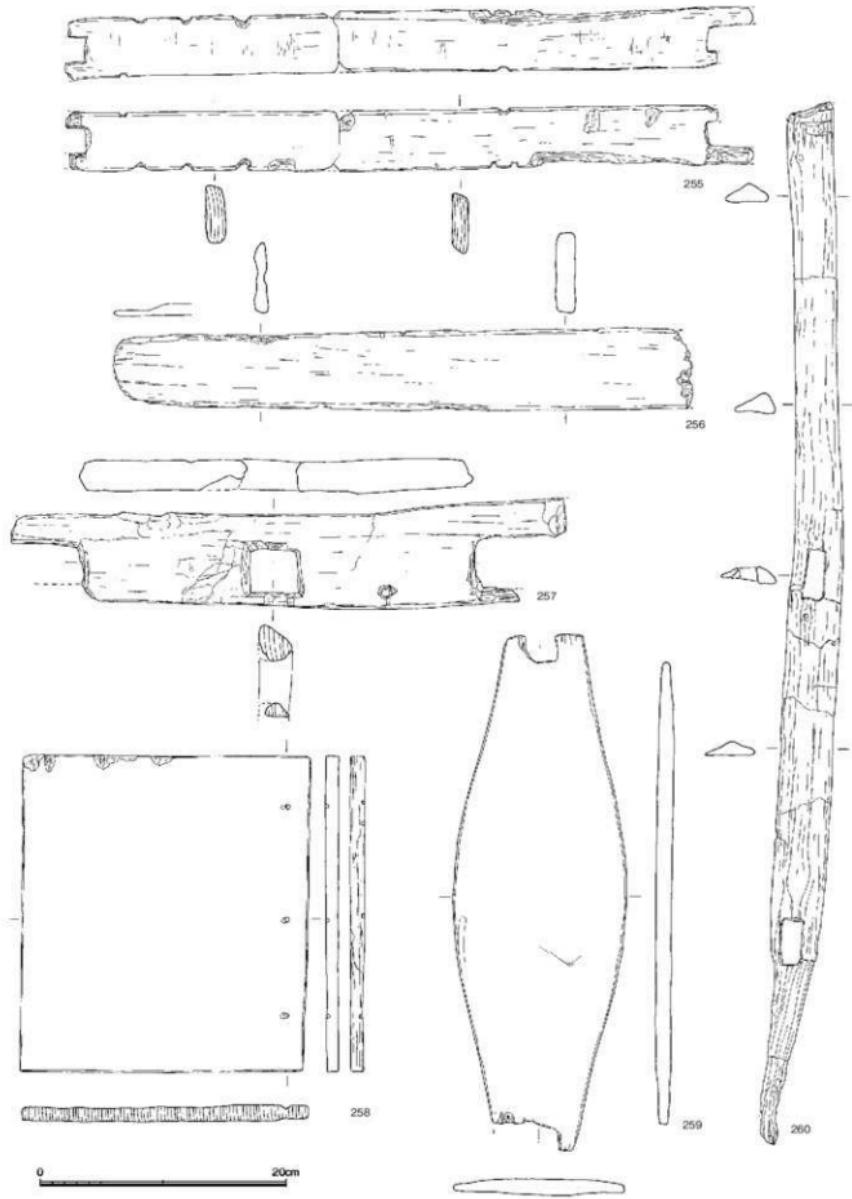


253

254

0 30cm

第46図 42次調査区出土の木製品 32 (1/4)

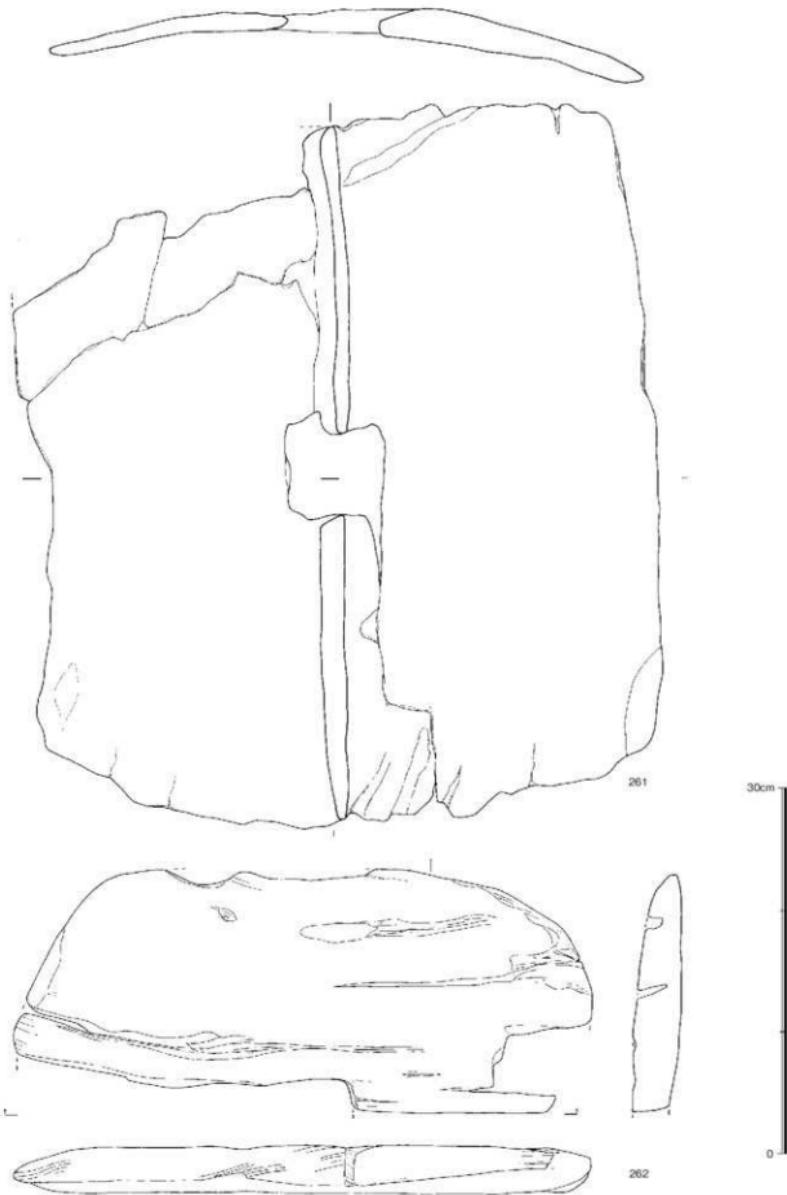


第47図 42次調査区出土の木製品 33 (1/4)

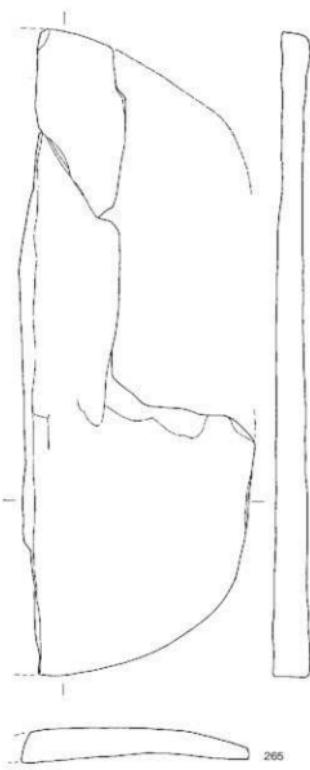
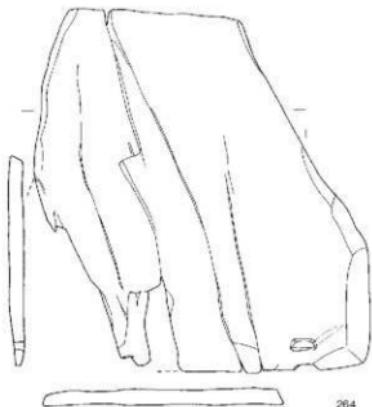
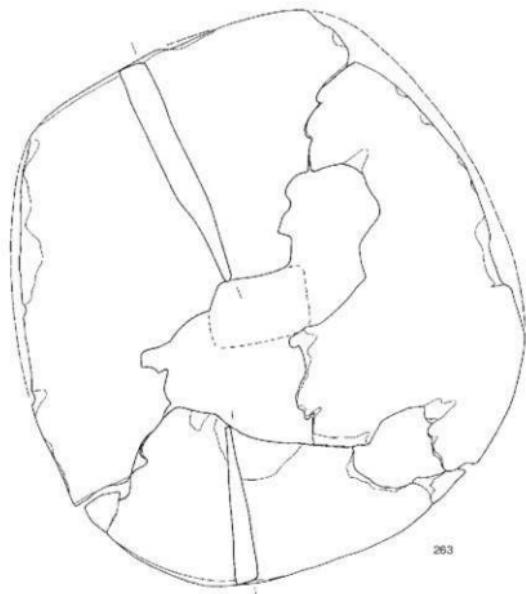
た「箱作り」に分類できる(笠原2004)。本例は側板下端の小口部に6ヶ所の木釘痕跡が見られるところから、「箱作り」と推定される。

特筆すべきは、この琴の部材に中央の円形の透かし孔をはさんで左側に「シカ」、右側に「台形の屋根をもつ2棟の建物」、勝孔寄りに「弯曲する胸部から派生する2本の脚をもつ動物」が線刻と板を剥離する技法をあわせて描かれていることである。画題は、右方向に疾走する2頭のシカ、透かし

種別	種別	基準	出土地点	全长	身幅	身厚	加工分類	備考
48-261	建築材	ねずみ返し	Z-2	53.0 (復元)	59.4	2.5 (最大)	—	比的薄く渦曲した形。穴は四角。材はもろく、くずれ。
48-262	建築材	ねずみ返し	Y-2	47.6	19.4	4.0	—	加工痕あり。
49-263	建築材	ねずみ返し	Z-2 最大: 70.2 最小: 54.0	—	4.0	—	残存状態あまりよくない。	
49-264	舟材	遮蔽板?	Y-3	44.3	41.4	2.1	—	ホゾ穴をもつか、状の本製品。ホゾ穴から外側に薄く複数あり、縫合などで繋がっていた。
49-265	建築材	ねずみ返し	Y-3	78.4	26.9	2.6~4.3	—	外側、厚みを調整する加工や表面加工は丁寧に仕上げている。
50-266	建築材?	不明木製品	Y-2	291.7	最大厚11.4	最大厚5.1	—	6箇所ほどの十字型ホゾと3箇所ハメ込み式の加工が見られる。表面剥離が残る。
50-267	建築材	柱材	Z-1、土器群109	289.0	20.8	6.0~7.0	—	右側の表面には7×5の大きさ穴と4×3の小さなホゾ穴がつくっている。ひとつの大ホゾ穴とふたつのホゾ穴をひとつのまとめてるとすると、4×4の約4cmの間隔をあけて施される。左側の表面には4つの複数の縫合加工がつくられる。いずれもややくずがんだライン(スリットライン)をもつ。
51-268	建築材	柱材	Y-2	48.9	基部: 3.9	—	—	柱材を利用した机か建築材か
51-269	建築材	柱材	Z-1	51.9	5.1	5.5	—	柱分かれを利用してした机か建築材か
51-270	建築材	柱材	Y-3	72.4	9.2	8.4	—	断面多角に加工、下部は削平。
51-271	建築材	柱材	Y-2	17.8	3.1	3.1	—	机先、破片
51-272	建築材	柱材	X-5	65.3	12.5	2.8	—	井筒のような造りたがきノ穴から先端部の長さがありにいため不明。未製品とも考えられるが先端に加工がみられる。
51-273	建築材	柱材	Z-2	56.8	3.8	—	—	前半柱分かれ部分を利用した柱を切り落としている。建築用材は以上のように加工よくくみられるが荷重を支える柱材としては適さない。
51-274	建築材	柱材	Y-2	53.2	基部: 4.9	4.6~5.1	芯持ち材	柱分かれを利用してした机or建築材。下部は机利用のように加工される。
51-275	建築材	柱材	Z-2	22.9	4.1	4.1	—	机先、破片
52-276	建築材	柱材	Y-3	残存長60.5	16.8	6.0	芯持ち材?	工具の先端部(二又鉗)を丁寧に削りこんでいる。また、先端部は火受けしている。
52-277	建築材	柱材	Y-3	残存長59.1	16.3	2.7	芯持?	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプ。断面は方形である。ねじみ直しの跡をもつ。
52-278	建築材	柱材	X-4、土器群106	残存長34.2	14.0	9.2	芯持ち材	裏面には火受けと思われる複数がある。ねじみ直しの跡をもつ。
52-279	建築材	柱材	Y-3	残存長52.5	14.8	14.3	芯持ち材	木打削の工具(手斧等)に加工し、角形(約10度)となつてある。裏面には火受けと思われる複数がある。
53-280	建築材	柱材	Y-2	残存長130.0	16.6	16.0	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプ。断面は方形である。ねじみ直しの跡をもつ。
53-281	建築材	柱材	Z-2	残存長123.0	14	11.0	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプではない。前面は方形となる。全体に丁寧な彫塑を施す。ねじみ直しの跡をもつ。
53-282	建築材	柱材	Z-2	残存長118.8	15.4	12.2	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプ。断面は方形である。裏面に削いた跡がある。ねじみ直しの跡をもつ。
53-283	建築材	柱材	Z-2	残存長121.0	19.0	16.6	—	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプ。断面は方形である。ねじみ直しの跡をもつ。
54-284	建築材	柱材	Z-2	残存長206.0	17.0	15.4	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプではない。ねじみ直しの受けをもつ。
54-285	建築材	柱材	Z-2	残存長118.1	12.0	11.2	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、段差。(復元部は太くくる)のあきタイプ。断面は方形にちがう。
54-286	建築材	柱材	Z-2	残存長93.2	17.8	13.0	芯持ち材	横の組込式加工の凸部は、欠崩している。
54-287	建築材	橋子	X-6、土器群120	残存長72.1	14.5	最大厚8.0	芯持ち材?	3列のステップが遺存する。
54-288	建築材	橋子	X-4、土器群110	残存長120.7	18.0~20.0	6.0	芯持ち材	4段のステップが遺存する。ステップの厚みは6.6~8.8cmを測る。
55-289	建築材	棒状木製品	Y-2、土器群106	71.2	4.0~4.5	2.0~4.0	—	ぐの字加工を持つ棒製品。加工痕はつきり残る。垂木。
55-290	建築材	棒状木製品	Z-1、土器群109	52.2	3.5	3.2	—	先端部加工あり。垂木
55-291	建築材	棒状木製品	X-3	35.6	5.5	5.1	—	頭部は尖状に加工、ぐの字の割り込みを持つ。裏面は削平。
55-292	建築材	棒状木製品	Y-2	57.6	4.2	3.3	—	先端欠如
55-293	建築材	棒状木製品	Z-1、土器群109	48.4	7.1	—	芯持材	支離れゆるやかにそる。柱分かれ後すぐに切り落とし加工があり、木材または机のようなものとし利用されたか
55-294	建築材	棒状木製品	O-3	72.8	2.2~2.6	2.5	芯持材	堅い身のついた木材
55-295	建築材	棒状木製品	X-3	90.8	2.9~3.5	2.0~3.1	芯持材	身の堅い材。33と同様過物だろう。先端を枕材に尖らせている。分割し破片となる。

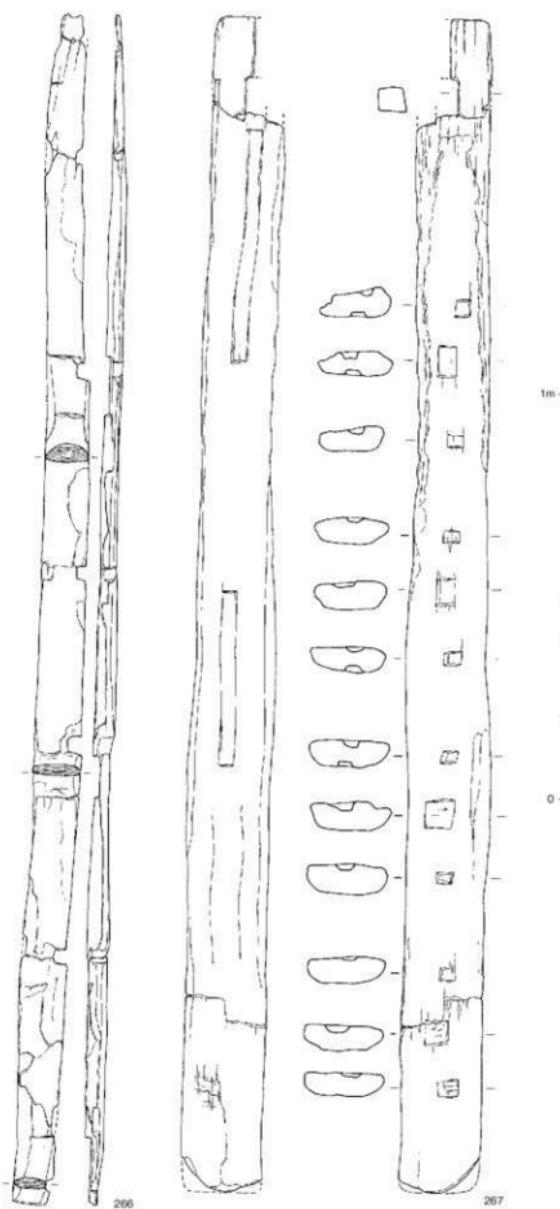


第48図 42次調査区出土の木製品 34 (1/4)

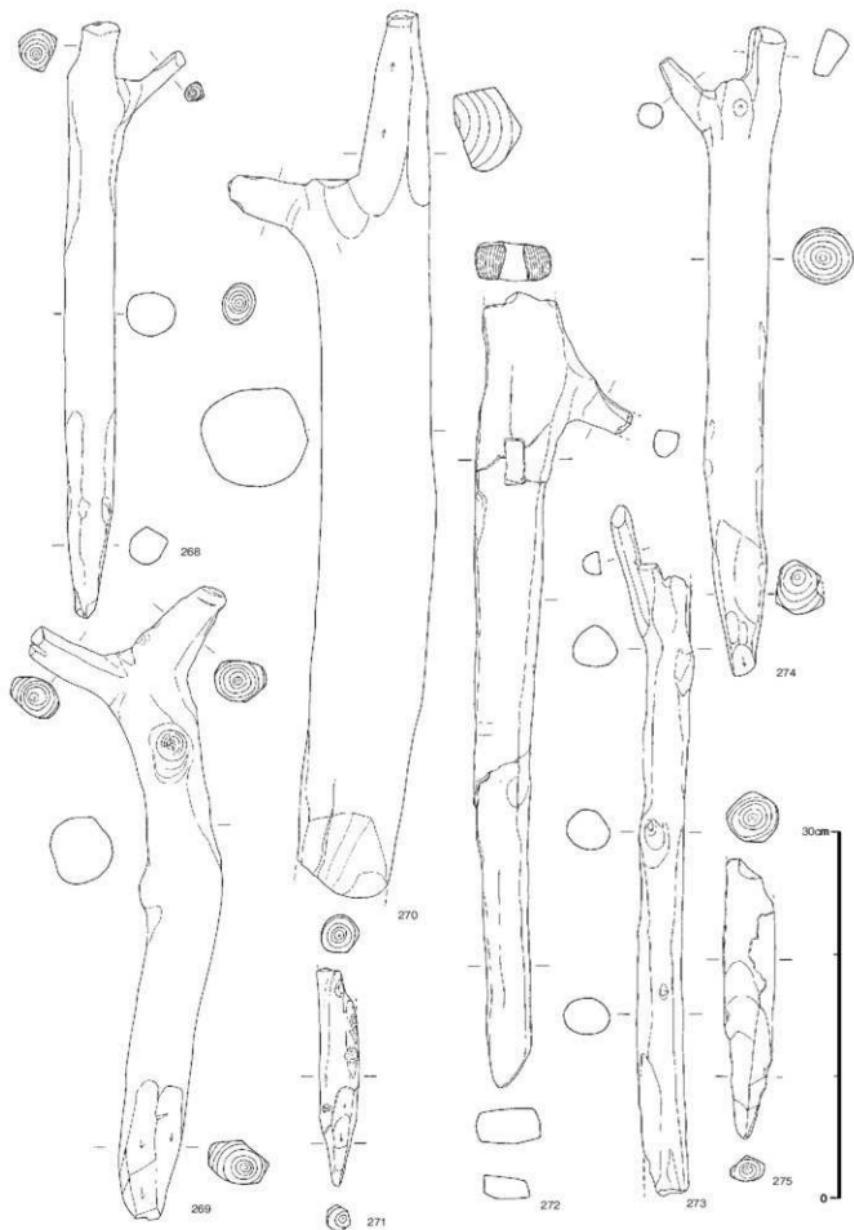


0 50cm

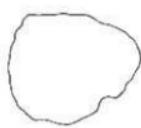
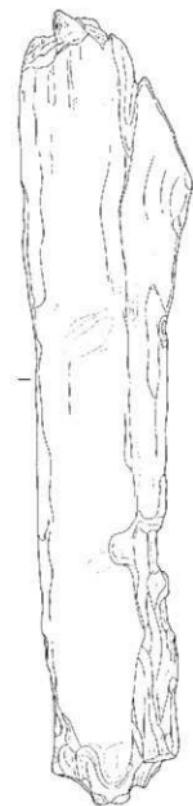
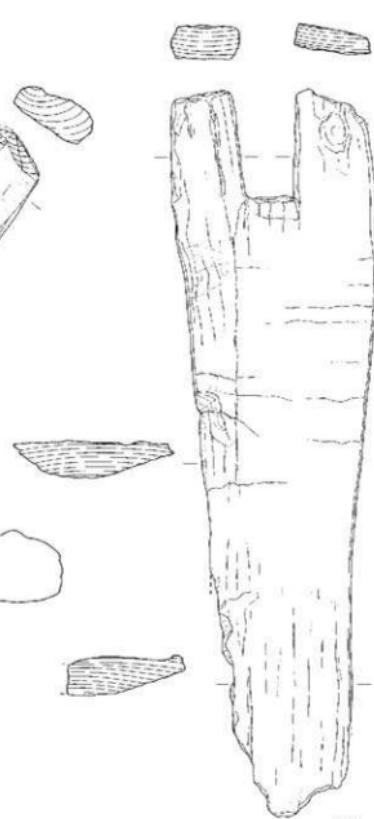
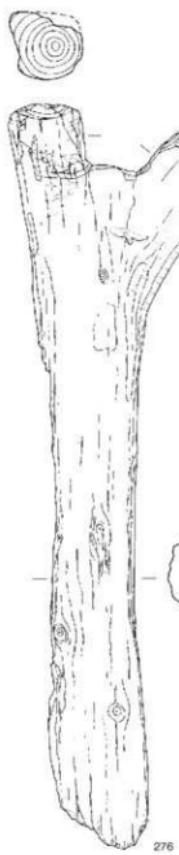
第49図 42次調査区出土の木製品 35 (1/6)



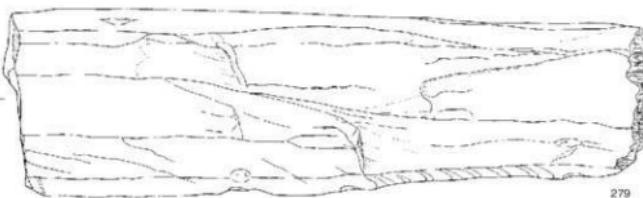
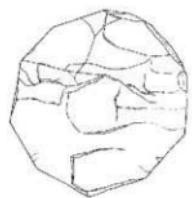
第50図 42次調査区出土の木製品 36 (1/12)



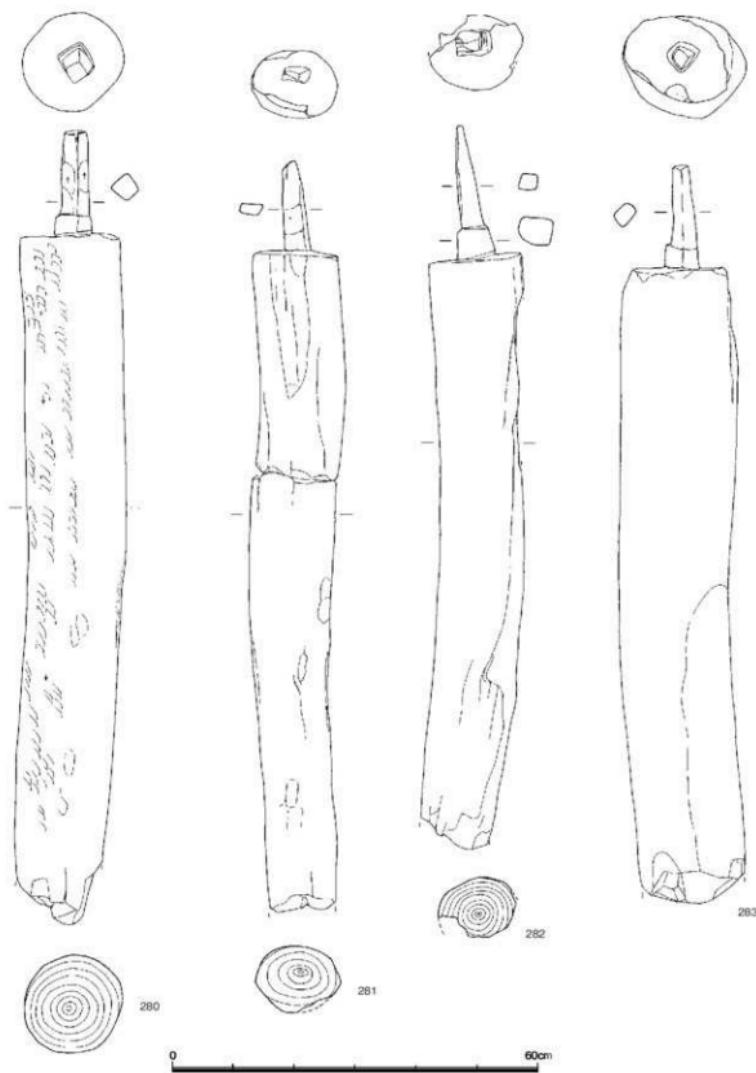
第51図 42次調査区出土の木製品 37 (1/4)



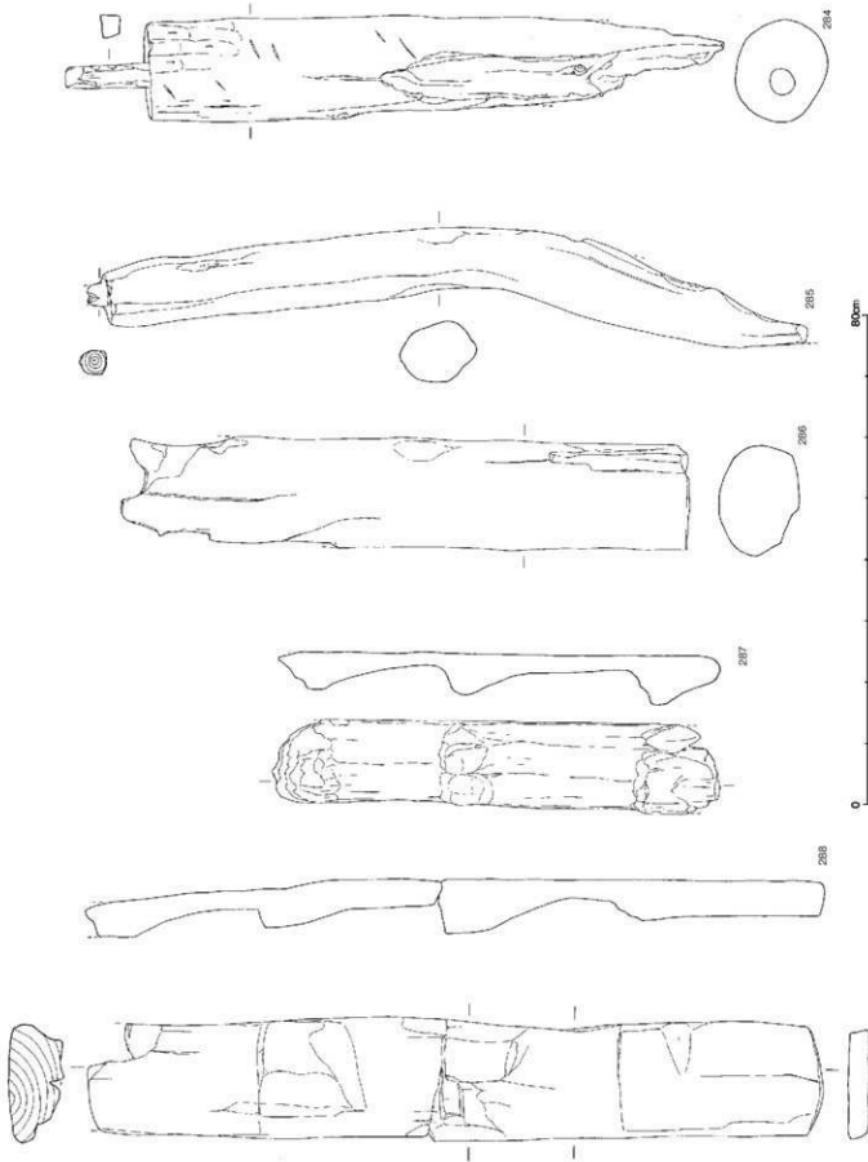
0 30cm



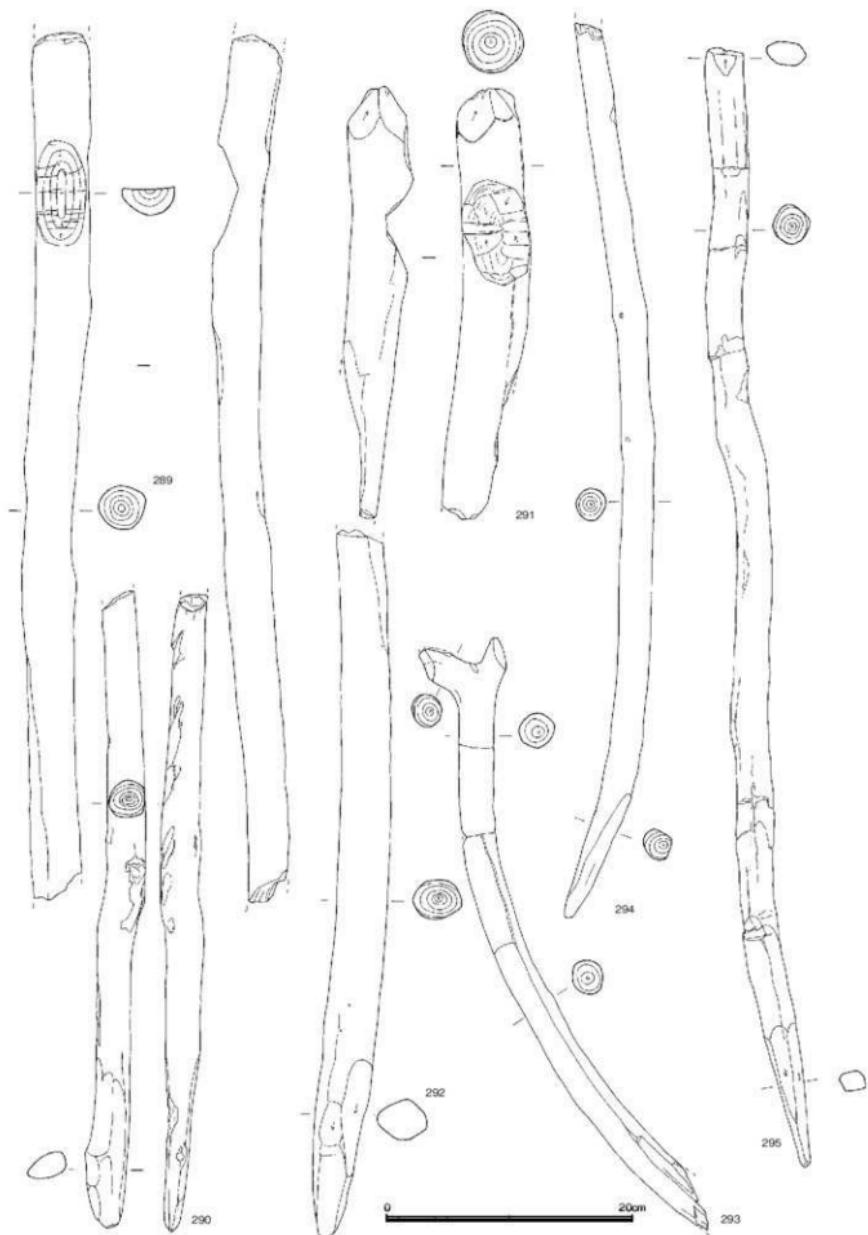
第52図 42次調査区出土の木製品 38 (1/4)



第53図 42次調査区出土の木製品 39 (1/8)



第54図 42次調査区出土の木製品 40 (1/8)



第55図 42次調査区出土の木製品 41 (1/4)

孔の右手の大小2棟の建物は台形の屋根から寄棟構造でそこから3条と4条の柱が伸びているので柱間2間と3間の建物である。右側の動物は類例との比較からトリの胸から脚にかけての表現と考えられる。

2頭のシカの前後の脚部は各2本の線刻で表わされている。ただ角の有無は判然としない。2頭のシカ間ににはシカの前後の脚部が観察されるので、上部に少なくとももう1頭のシカが描かれていたであろう。小林行雄が嘴矢とする原始絵画の研究によって、銅鐸や土器にも多く描かれたシカは穀靈や地靈の化身と考えられてきた(小林1943)。また北部九州では櫛柄に描かれた画題にシカが登場することから再生や復活を象徴する動物として位置づけられてきたことがわかつてきる。

透かし孔の右手に描かれた大小2棟の建物中、大きいほうの建物は、柱間3間の大型建物で、急勾配の屋根と柱が明瞭に表現されている。その左上の小さいほうの建物は、柱間2間で表現されている。

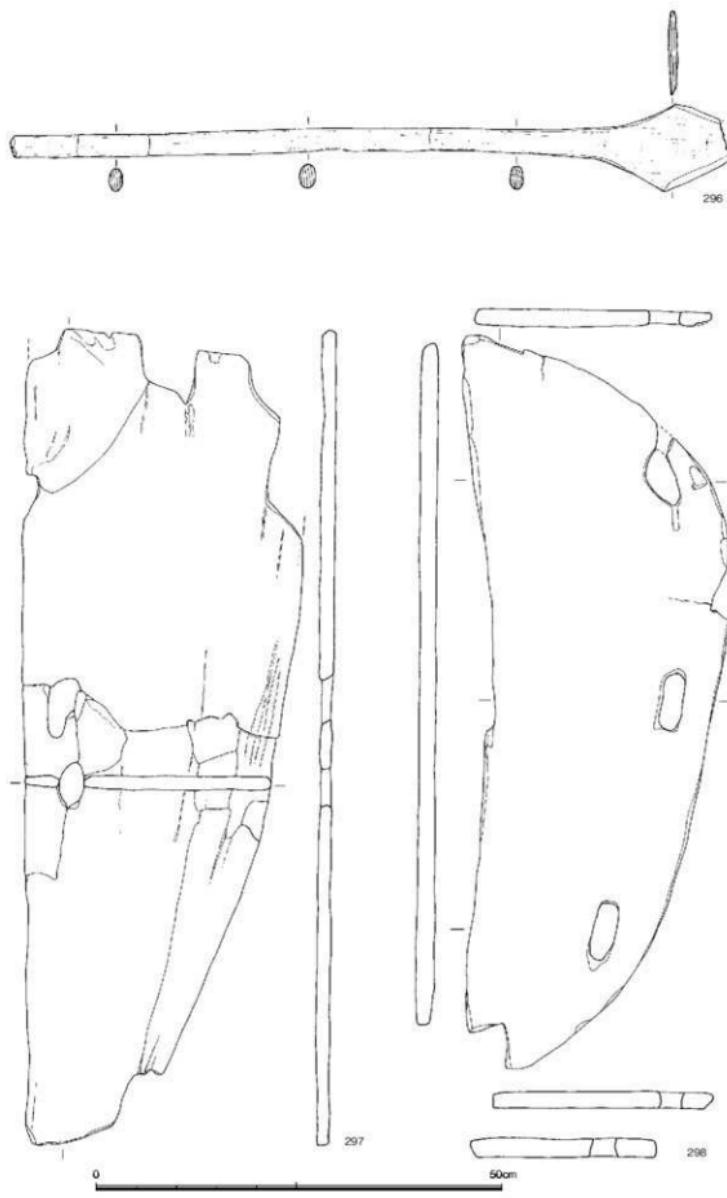
北部九州において弥生時代の建物を描いた資料はきわめて少なく、中期前葉の櫛柄に描かれた大木遺跡(福岡県筑前町)の高床建物群が知られる程度であった(佐藤1998)。2棟いずれの屋根も逆台形を呈していることから、寄棟づくりの屋根倉式の高床建物と推定される。

つぎに琴の中央部にある円形の透かし孔について述べる。これまでの姫原西遺跡(島根県出雲市)や、出雲の神社(出雲大社・熊野大社・神魂神社)で神事に使われている琴板などで、日月を円形と三日月状の透かし孔で表現したものがある(足立2003)。透かし孔の本来の機能は、響孔であろうが、円形は三日月と対峙する主題として日輪または満月の象徴と推定される。

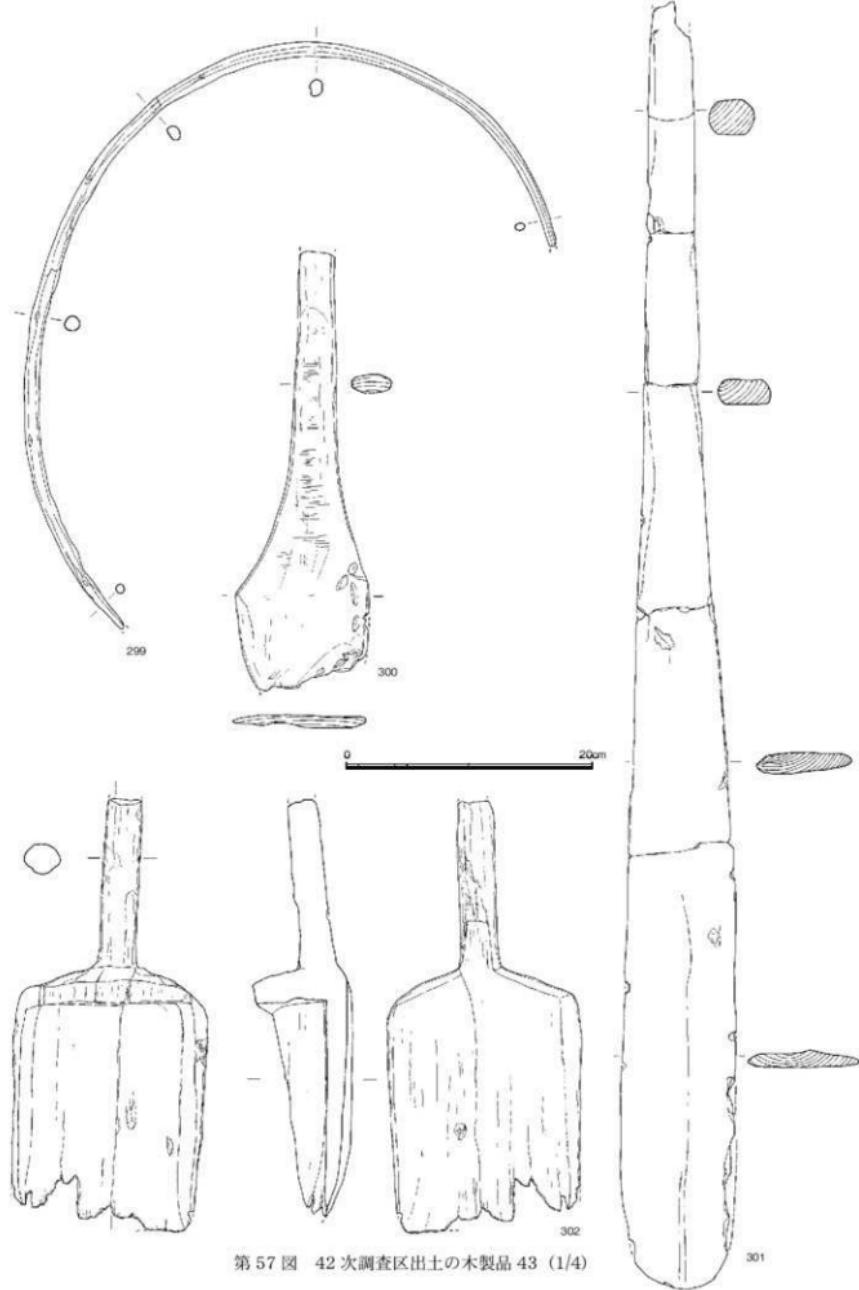
絵画を描いた琴や木板は福岡県内では糸島市、佐賀県、島根県、鳥取県、岡山県、兵庫県、石川県などで出土しているが(ニューサイエンス社(編)1998)、ひとつの部材に「シカ・建物・トリ・天体(月または太陽)」の4つの画題を描いた琴・琴板としては初例である。この部材の周辺で、対になる側板など関連部材の検出につとめたところ、52次調査区でトリと月状の透かし孔のある別個体の琴板の側板が確認された(第4図-2)。

弥生時代の琴には意図的に割られたものや、焼かれた痕跡のあるものがある。本遺跡の琴にも、人為的に割られた痕跡や焦げた痕跡が認められた。破壊をうけた琴について、中川律子は出土資料を検証し、琴を意図的に破壊する理由として、1. 特定の奏者以外の使用を不可能にするため、2. 琴としての機能を失わせるため、3. 使用目的が終わると再利用できなくなるため、とする3つの状況を想定した(中川2009)。

件名	種別	基種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
56-296	舟材など	櫛状木製品	W-5、土器群123	89.8	10.4	1.9	板目	ノミ痕あり。柄は円形状に加工を施し、縫は扁平に削る。柄からうきの縫は大きめ外側へ開く箇所で示され、最大幅の点で内側へ垂ります。
56-297	舟材	舟の仕切り板	Z-2	100.4	最大幅34.6	1.8	—	半円形を呈する。下端のカーブは丸木船の船底の形に沿って加工を施している。上端はほぼ直線的に加工。上部のうきの縫所は円形状の穿孔化である。縫をさすための孔でどちらも2つあります。
56-298	舟材	舟の仕切り板	Z-2	89.8	33.2	2.4	—	丸木舟の船底の形に沿って半円形に加工されているが中央部は左に寄っている。3箇所に櫛円形状のはぞ穴をもち、船底に仕切り板を固定するために加工されたものと思われる。堅い木舟・舟の仕切り板・舟の縫。
57-299	舟の道具	網杓	Z-2	残存長91.0	80.9×1.5	—	—	網杓は50cmのバーベルを使用して縫を落し、櫛円形に削り下げるものです。
57-300	舟の道具	櫛状木製品(縫?)	X-4	36.0	11.0	1.5	板目	柄は中央部から先端部にかけて大きく欠損する。両端をわずかに前に刃面を削り、櫛円形の形状となる。柄からうきへは縫やかに最大幅地点まで外側に開き、この地点より内側へは僅かに縫を狭くするものと思われる。縫は扁平な表面となる。
57-301	舟の道具	櫛状木製品	—	105	9.2	1.5~1.8	板目	柄の先端部付近は円形状であるが他の先端部に沿って次第に横幅を広げて、最終的には舟の縫の形となる。縫の内側を削り、縫を狭くして長い先端となる。縫の中央からやや下がりて先端部を削り、縫を狭くする点から舟の縫の形のみであるが、中央部にややかく突起(縫)を残り出る。
57-302	舟の道具	アカトリ	X-4、 土器群106	35.5	15.9	8.0	削物	縫の内側にしだみ出た舟をすく取るための木製の匙といえるものである。底部は先端部を削いて、残存状態は良好である。

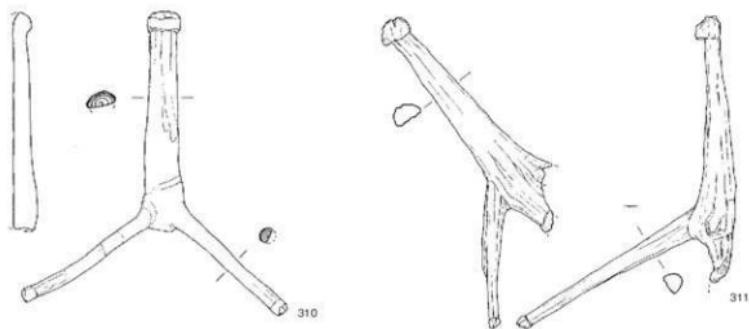
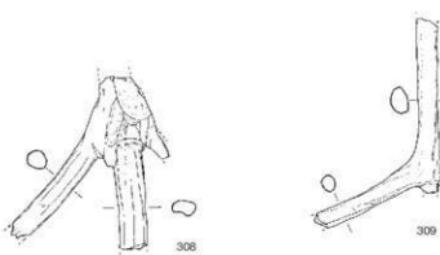
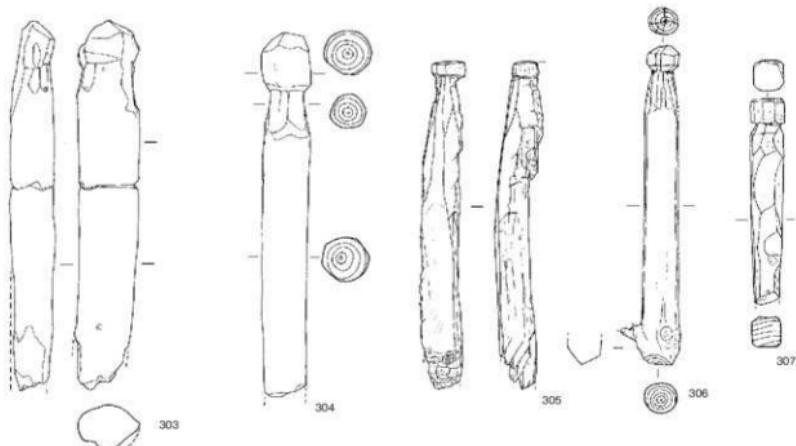


第56図 42次調査区出土の木製品 42 (1/6)



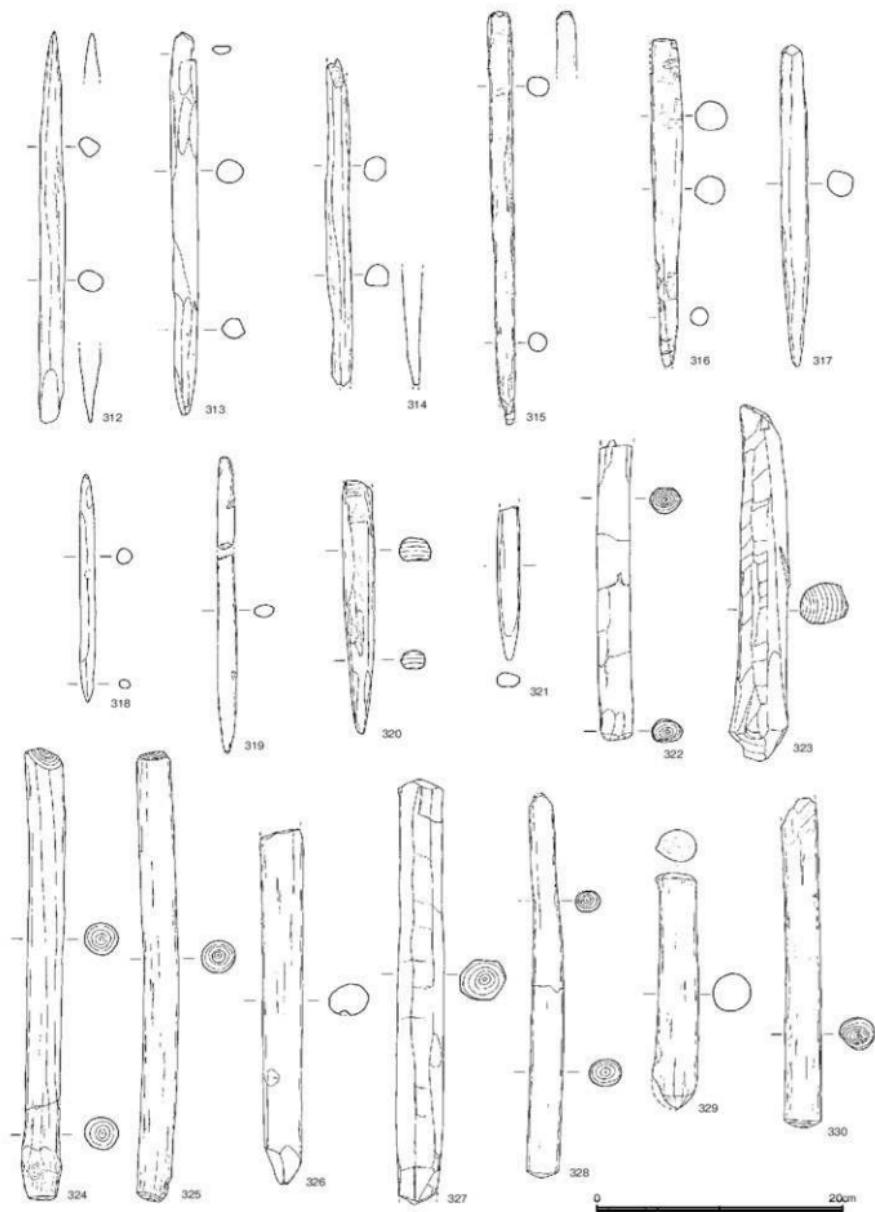
第57図 42次調査区出土の木製品 43 (1/4)

件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
58-303	施設器具材	棒状木製品(段あり)	Z-2	30.2	5.0	3.6	—	
58-304	施設器具材	棒状木製品(段あり)	Z-1. 土器群109	29.7	2.9~4.0	2.8~3.6	芯持ち材	縫かけを持つ丸材(芯持ち)。桃六町ツイジ第92集団21Bに伝した形狀の例がある「机」。
58-305	施設器具材	棒状木製品(段あり)	W-6. 土器群120	26.9	3.3	2.9	芯持ち材/芯去り	棒状だ。芯持ち〇〇芯去り〇。新しい刃の工具で削っている。
58-306	施設器具材	棒状木製品(段あり)	W-5	26.1	3.4	2.8	芯持ち材	面取りしているように削っている。丁寧に先を尖らせていく。二本の削が出来ているようだ。
58-307	施設器具材	棒状木製品(段あり)	Y-3	16.9	2.65	2.6	—	柄はかなり長い。ノミで削っている。先端はきれいに面取りしている。頭の先は尖ったい。
58-308	儀器	量規似品	X-6. 土器群120	14.1	7.5	—	—	頭部を欠く。
58-309	儀器	量規似品	X-5	16.9	3.4	2.3	—	頭部を欠く。
58-310	儀器	量規似品	Y-3	25.0	2.4~3.3	—	芯持ち材	製い芯持ち材。表面にも丁寧な加工が残る。
58-311	儀器	量規似品	W-5. 土器群123	25.6	4.0	1.4	—	四つ又か、2ヶ所の先端が丸く通りだされている。
59-312	漁具	刺突具	X-5	31.9	2.1	1.7	—	この図のうちにある方は横方向にキス多い。使用歴か、芯持ちか芯去りか不明
59-313	漁具	刺突具	X-6	31.2	2.3	2.0	—	身のこままた尖り材。引っかけのある棒状木製品。先端鋭形加工。
59-314	漁具	刺突具	X-6. 土器群120	26.7	1.95	1.9	板目	うらは1/3程度まで平らに削っている。
59-315	漁具	刺突具	X-5	33.9	1.75	1.45	—	両端とも先は若干削られている。
59-316	漁具	刺突具	X-2	26.8	2.5	2.4	—	芯去りか芯持ちだろう。
59-317	漁具	刺突具	Y-3	26.3	2.05	2.05	—	芯去りか芯持ちかわからない。
59-318	漁具	刺突具	X-4	18.8	1.2	1.2	—	
59-319	漁具	刺突具	W-4	24.6	1.6	0.9	—	結合箇所なし。
59-320	漁具	刺突具	Z-3	20.8	2.7	1.9	芯去り材	鋭利な刃をもつ金属の工具で削て面を造っている。
59-321	漁具	刺突具	Z-1	12.7	1.8	1.2	—	ヤヌ
59-322	施設器具材	棒状木製品(段なし)	Y-2	25.1	2.6	2.1	芯持ち材	身の堅い芯持ち材
59-323	施設器具材	棒状木製品(段なし)	X-4	29.1	4.0~4.5	3.4	—	丸か? 縮な加工・調整が残り両端を凸状にする。明るい年輪は縮か見えてる。
59-324	施設器具材	棒状木製品(段なし)	X-4	37.0	3.2	2.7	芯持ち材	2/3に削っている。下の先端部の平面と曲面の彫減の状況から他のものと差し込まれていたものと思われる。
59-325	施設器具材	棒状木製品(段なし)	X-4. 土器群106	36.9	2.9	2.8	芯持ち材	上端部は平らに削り加工をしている。
59-326	施設器具材	棒状木製品(段なし)	Z-3	29.1	3.5	2.7	芯去り材	上端部は丸削する。下端部は側面を削りながら先を尖らせている。
59-327	施設器具材	棒状木製品(段なし)	Y-2	34.8	3.7	3.3	—	加工痕・跡の残りが良い・棒材・片断部削化。身のつまつた材・画面・多角形を呈す。
59-328	施設器具材	棒状木製品(段なし)	Z-2. 土器群136	31.4	2.6	2.2	芯持ち材	両端部は一部だけねじねじが丸みを帯びる。
59-329	施設器具材	棒状木製品(段なし)	Y-4	19.2	3.6	3.5	芯持ち材?	芯ありか芯持ちかどちらも。上面には鋭意した複数の凹みがある。下端部は側面削りしているが先端に向って斜面取り削りが施されて、先端が丸んでいる。
59-330	施設器具材	棒状木製品(段なし)	W-6. 土器群120	27.0	3.0	2.5	芯持ち材	丁寧に削らしている。
60-331	農具	泥除柵器具	Z-1	25.4	2.8	3.7	—	組合せ式柵脚の先端部付近
60-332	施設器具材	不明木製品	Z-1	残存長26.6	3.0	1.1	柱目	へら状の木製品
60-333	漁具	棒状木製品	X-2. 土器群134	残存長30.7	2.5	2.2	—	面取りを行い、上端部は扁平である。表面は長方形状となる。
60-334	漁具	棒状木製品	Y-2. 土器群136	34.8	2.8	1.5	—	先端部は扁平、頭部は面取りを施す。
60-335	漁具	棒状木製品	X-4	20.1	2.4	0.9	—	アビビ起し
60-336	漁具	棒状木製品	Z-2	残存長26.2	4.2	1.3	—	アビビ起し
60-337	漁具	刺突具	X-5	残存長23.8	1.6	1.6	—	断面は方形状であるが、先端部の表面は角円形状となり、先端は尖っている。ヤヌ。
60-338	—	不明木製品	X-6. 土器群118	14.6	4.4	3.1	—	
60-339	—	木籠?	Y-4	10.6	2.6	2.3	芯持ち材	
60-340	漁具	棒状木製品	W-5. 土器群123	残存長37.4	3.1	1.25	板目	調整工具で丁寧に表面を削り、加工している。アビビ起し、真直ぐではないが、身も裏も凸凹があり、裏面的に削り、加工したものらしい。アビビ起し。
60-341	漁具	棒状木製品	X-5	26.7	2.1	1.0	—	表面は丸削ではなく、身も裏も凸凹があり、裏面的に削り、加工したものらしい。アビビ起し。
60-342	漁具	棒状木製品	Y-4	28.0	2.3	1.3	—	両端とも欠削していない。アビビ起し。
60-343	漁具	棒状木製品	W-5. 土器群123	39.6	3.25	2.4	芯持ち材?	丁寧に表面を削り加工を行う。表面は楕円形状を呈す。
60-344	—	不明木製品	X-4. 土器群106	16.4	4.0	3.2	—	
60-345	漁具	刺突具	Y-4	残長14.2	2.1	2.0	—	ヤヌ
60-346	—	机の先端	Z-2	9.0	6.3	5.3	芯持ち材	芯持ち材の両端を部に向かって斜めに加工。

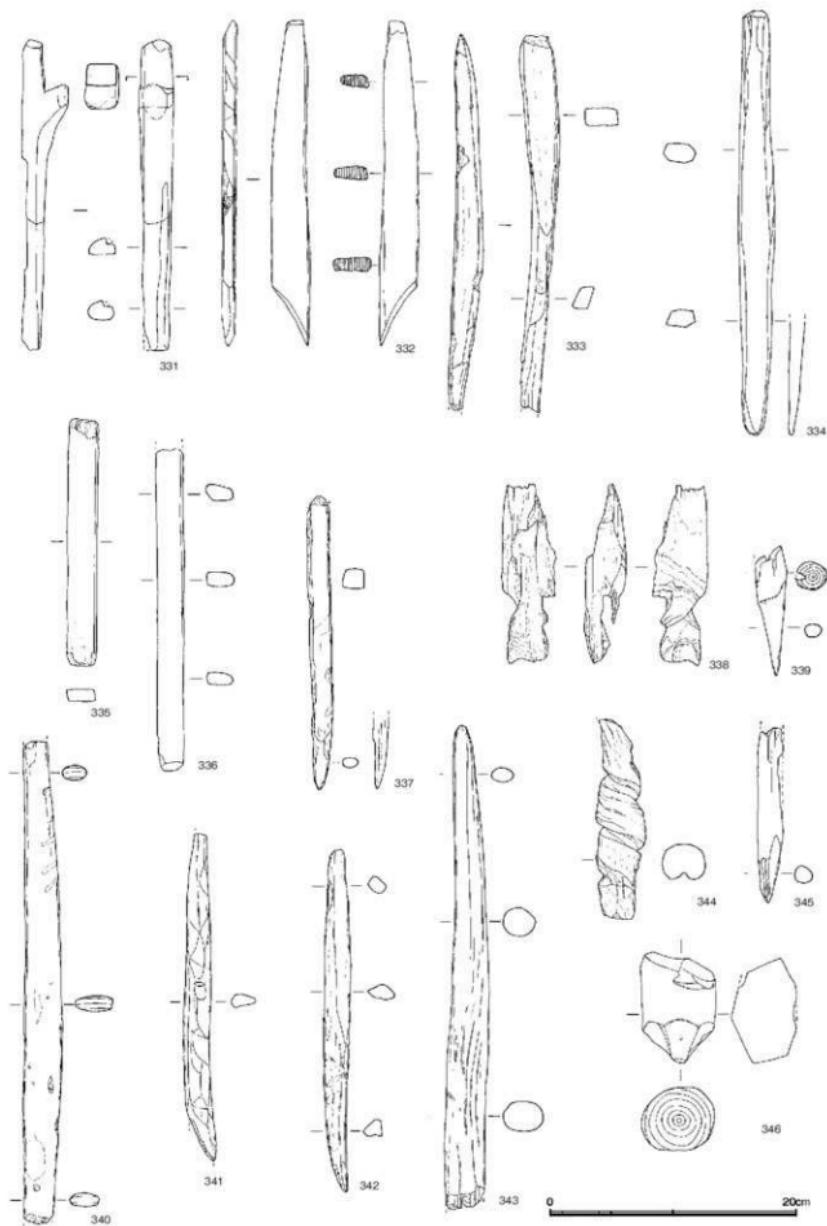


0 30cm

第58図 42次調査区出土の木製品 44 (1/4)



第59図 42次調査区出土の木製品 45 (1/4)



第60図 42次調査区出土の木製品 46 (1/4)

【参考文献】

- 足立克巳2004「琴板 一絵画のある箱形木製品」『島根考古学会誌』第20・21集合併号、島根考古学会
橋本裕行2006『樓閣絵画の再考』『原始絵画の研究』六一書房
笠原 淩2004『埋もれた楽器』春秋社
小林行雄1943「第四様式における原始絵画」『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊、京都帝国大学考古学研究室
中川律子2009「日本音楽考古学研究の現状と琴研究」『木・ひと・文化 ~出土木器研究会論集~』出土木器研究会
ニューサイエンス社(編)1998「特集 弥生時代の絵画木板」『考古学ジャーナル』No.432
岡部裕俊1997「福岡県前原市上鍬子遺跡出土の人物線刻板について」『考古学ジャーナル』No.416、ニューサイエンス社

42次調査区出土の木製品48(第63図)

248は琴の上板で、長辺にそって孔が並ぶことから共鳴槽付の構造と考えられる。弦を結ぶための3突起が遺存している。琴の突起は5~8であることにならえば、本例の幅は倍程度あったと推定される。集弦孔にあたる個所は観察されない。裏面の突起の基部付近に小口板を固定するための溝がみうけられる。

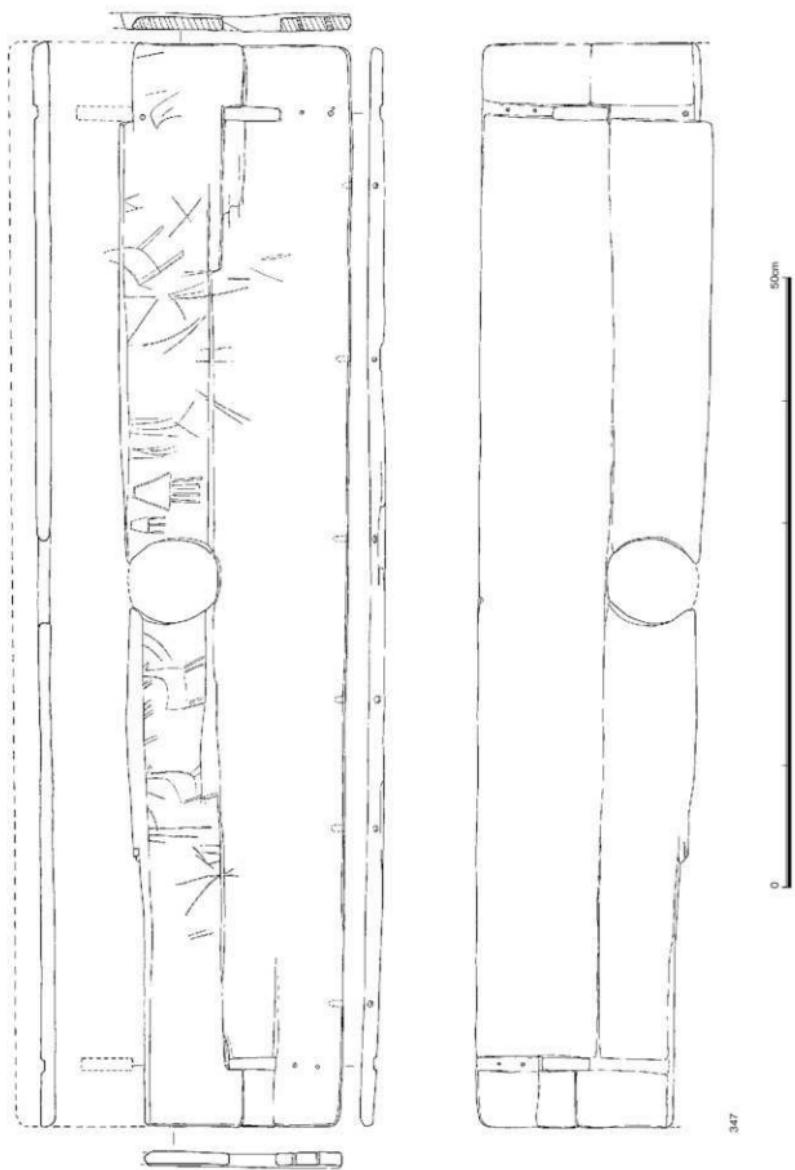
42次調査区出土の木製品49・50(第64・65図)

第64図は、突起部や内側の溝、木釘の痕跡などから判断して琴の部材と考えられるものをあつめた。多くはスギの柾目板を用いている。

第65図は、琴や案など部材を特定する決め手がないため施設器具材と総称した。



第61図 42次調査区出土の木製品
(拓本) 47-1 (1/4)



第62図 42次調査区出土の木製品47-2 (1/4)

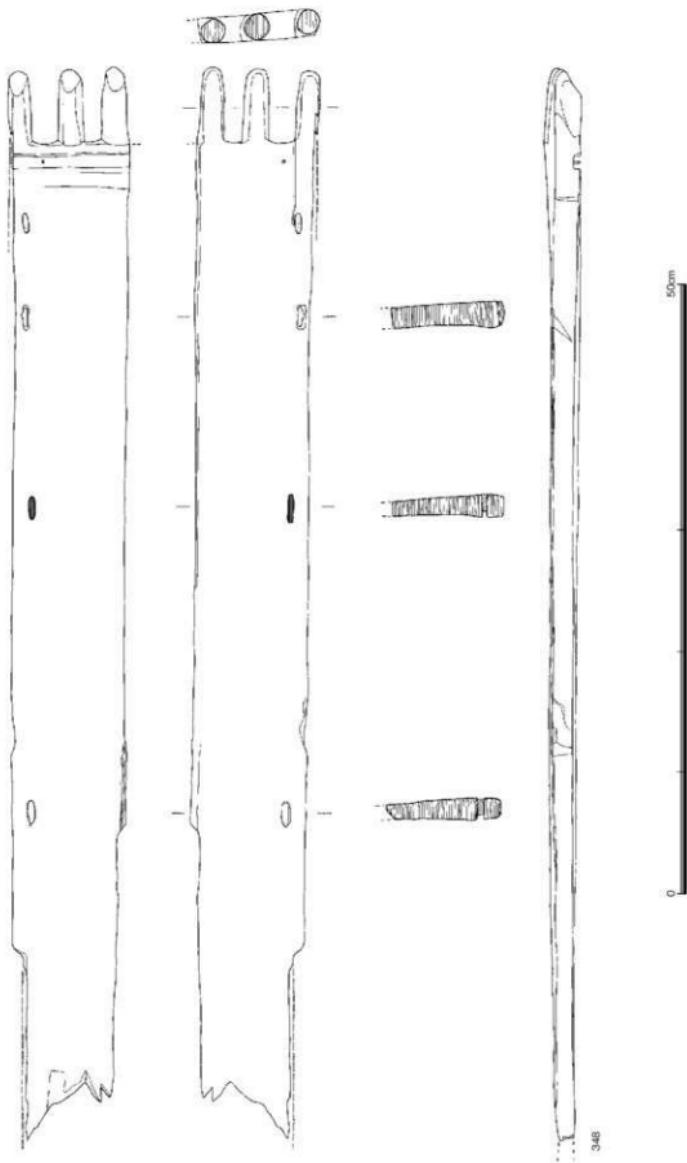
42次調査区出土の木製品51 (第66図)

土器群106は、土器の集積のなかでもっとも遺物量が多いもので、371と372はその最下層から近接して検出された。有文本製品は、文様を配した内区(径22cm)と、外側の孔列が回る外区で構成される。内区の両面には鋸歯文が向きを逆える斜線によって複合鋸歯文を構成している。複合鋸歯文は重弧文をはさんで二重に回らされて彫られており、表面には鮮やかな赤彩が施されている。径35cm程の円盤状に復元され、中心部に円形の透かし孔がある。

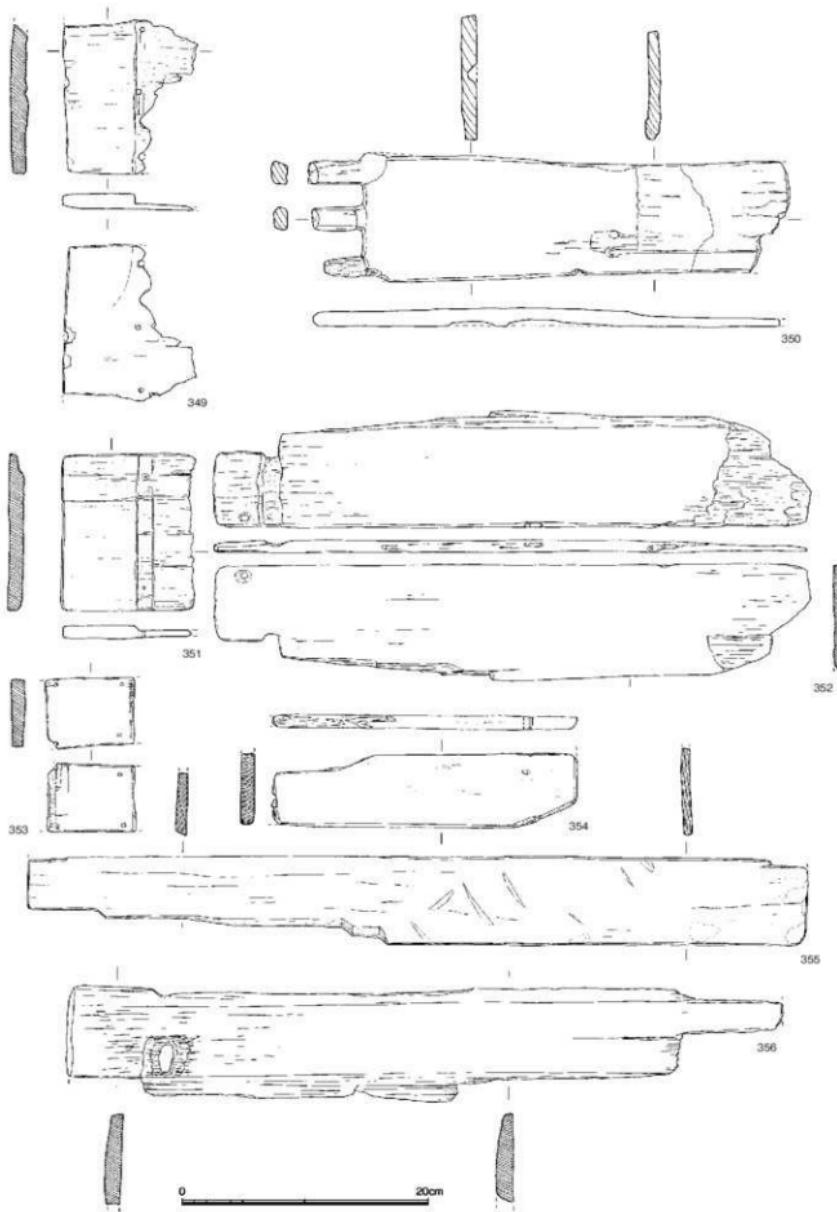
類似する文様をもつ木製品は、比恵遺跡群56次調査(福岡市1997)で検出されている。両者の文様を比較すると比恵例は鋸歯文の間に有軸羽状の文様帶がある。本例は、内外の鋸歯文を直交する線でうめる複合鋸歯文であるのに対し、比恵例では外側の鋸歯文が平行線文でうめられている点が異なる。

この木製品の用途としてはこれまで屋外標識とする案も出されてきたが、中心部の円形の透かし孔から翳とする案が再浮上した。翳とは、大型の团扇のような道具として貴人に差し掛ける一種の威儀具である。翳は扇であり、本来羽のあるものであるから、外側の孔列には色鮮やかな山鳥などの羽軸が挿入されていたのかもしれない。

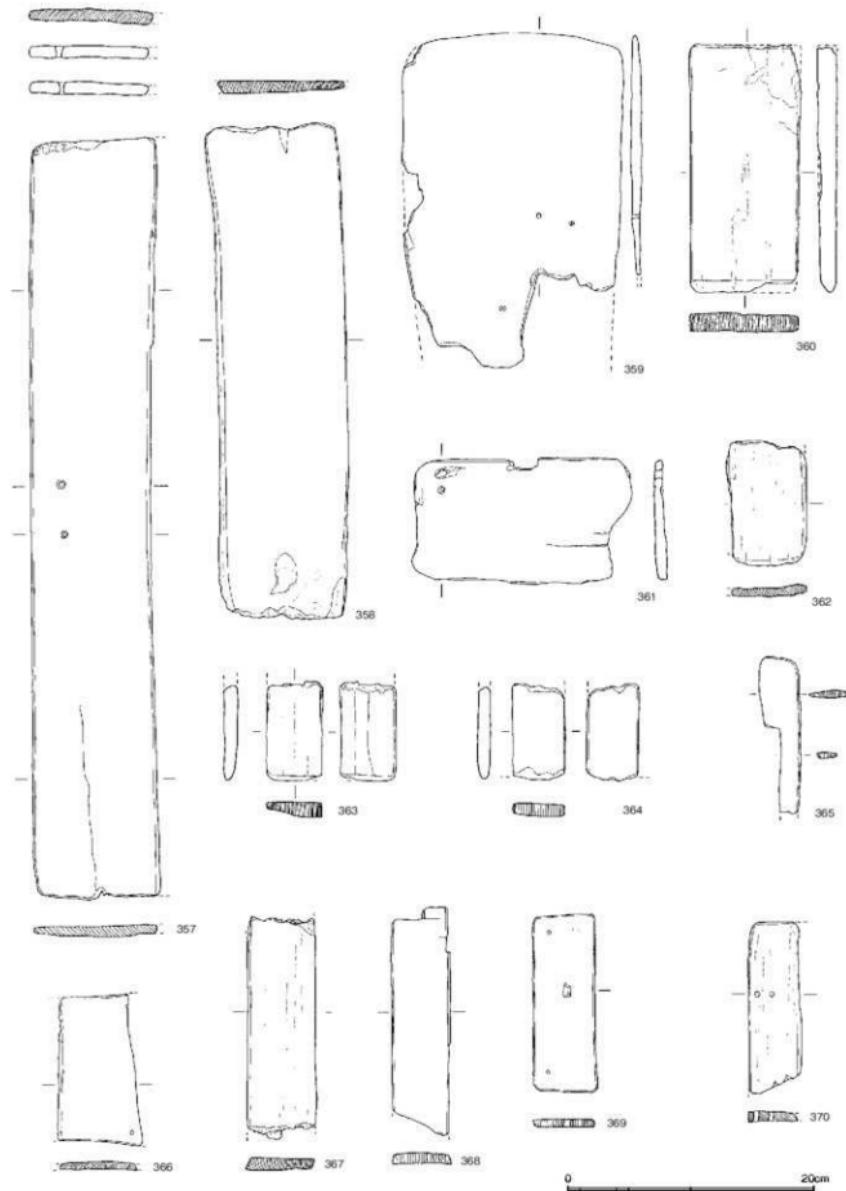
件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
62-347	楽器	琴(側板)	X-6. 土器群120	88.5	復元幅26.5 ～27.5	1.4	柱目	はそぞらは長方形。木板の残存ノゾムは5箇所(径0.3cm)。側面のホルスは6箇所(径0.4～0.5cm)。南北不規則ナゾル。1箇所より右側面にノゾムがある。左側面のノゾムの奥に2箇所の横穴がある。左側面のノゾムの奥に2箇所の横穴がある。左側面のノゾムの奥に2箇所の横穴がある。その内側には、4箇所の間ののみが空洞。裏側の背面内面には、組合せ用溝がある。
63-348	楽器	琴(天板)	Z-2	残存長87.2	9.9	1.8	柱目	側面二筋並行して南北に長方形内の孔(径0.4×高さ0.6cm)がある。右から2番目の孔跡にて他の孔には繋がり合っている。共通の縦溝をぞ闇にしたものか。右端には共通溝の小口(?)がある。左側面のノゾムの奥に2箇所の横穴がある。右側面には3箇所のノゾムが開け出されている。裏面は円形状をなし。先端部は斜めに削り出している。
64-349	楽器	琴	X-5	残存長10.9	復元幅12.7	1.4	柱目	穿孔が四箇所にあったと思われる。
64-350	楽器	琴(天板)	Y-3. 土器群115	残存長39.3	10.2	1.2	柱目	左側面には3箇所のノゾムが開け出され、表面はやえみを帯びた扇形である。中央部や近辺には2箇所に穿孔がある。
64-351	楽器	琴	W-5. 土器群123	残存長11.0	12.8	1.3	柱目	3箇所の穿孔があり、中央部の内には木板が残している可能性ある。表の左端には溝が削り出されている。隠板付近に箇所穿孔がある。
64-352	楽器	琴	X-6. 土器群120	残存長48.6	9.3	1.0	柱目	四箇所から少し内側に彎曲して位置に穿孔があり、4穿孔が内3箇所の方には木板が残されている。
64-353	楽器	琴	X-5	残存長7.3	5.7	1.1	柱目	右側面に穿孔があり、1箇所ある。研磨した跡にも小さな孔が残存する。右側の角は削りこみ研磨されている。
64-354	楽器	琴	X-6	残存長25.0	復元幅5.8	1.05	柱目	表面には使用痕からきず傷がみられる。右側の角は丸く、丁寧に加工されている。
64-355	楽器	琴	Y-3. 土器群115	63.5	7.3	0.85	柱目	穿孔は両側からされている。ノミ状のものによる加工痕がある。
64-356	楽器	琴	X-3. 土器群106	残存長58.4	復元幅9.9	1.45	柱目	2ヶ所に径0.5cmの穿孔
65-357	施設器具材	板状木製品	Z-2	61.9	10.4	—	柱目	—
65-358	施設器具材	板状木製品	Z-2	40.7	10.7	1.1	柱目	琴板?
65-359	施設器具材	板状木製品	Y-2	27.3	被片	0.9～1.0	—	目の細いしつかりした材。破片が多く残り下部につづくと思われる。左側面に穿孔がある。
65-360	施設器具材	板状木製品	X-3. 土器群135	20.4	9.0	1.5	柱目	上部の縫合部が欠損している。下端は開閉部で腰を斜めに削り落としている。左側面から腰を斜めに削り落としている。上端は開閉部で腰を斜めに削り落としている。
65-361	施設器具材	板状木製品	Y-2	17.7	10.4	0.9	柱目	木ノ穴をもつ。薄い板材。木は表面で細い密のある材。木ノ穴を2つつなげたあたよの舟孔。
65-362	施設器具材	板状木製品	X-3. 土器群106	10.2	6.6	0.9	柱目	—
65-363	施設器具材	板状木製品	Z-2	8.1	4.6	1.2	柱目	—
65-364	施設器具材	板状木製品	Z-2	7.9	4.2	1.0	柱目	—
65-365	施設器具材	板状木製品	Z-2	12.8	3.4	—	柱目	—
65-366	施設器具材	板状木製品	X-4	6.9	12.4	0.6	柱目	上方に径0.3cm位の孔2つ。下方に径0.1cm位の孔が2つ貫通している。
65-367	施設器具材	板状木製品	W-5. 土器群123	18.3	5.6	1.0	柱目	上下端は欠損しているが表面に大きな難溝は見られない。
65-368	施設器具材	板状木製品	Z-2	16.7	4.7	0.95	柱目	切れ込みが入っている。工具痕あり。
65-369	施設器具材	板状木製品	Z-3	5.2	14.6	0.7	柱目	真中にありて1.0×0.5の孔。下方に径0.3cmの孔が貫通している。
65-370	施設器具材	板状木製品	Z-3. 土器群165	14.0	4.4	0.8	柱目	真前に貫通する穿孔は上端から5.5cm程下がった位置に個々に個々に位置する。穿孔(径0.4cm)は0.8cmの距離で並列して2箇所にある。



第63図 42次調査区出土の木製品 48 (1/4)



第64図 42次調査区出土の木製品 49 (1/4)



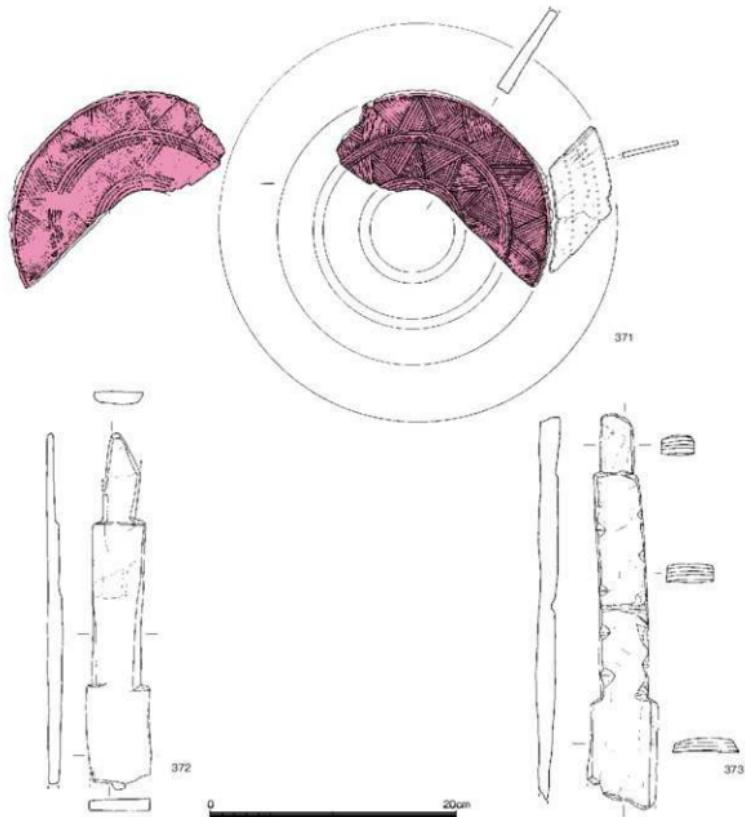
第65図 42次調査区出土の木製品 50 (1/4)

372の板状木製品は木柄の可能性があることから同一の挿図に割りつけた。373は出土地区は異なるが類例としてあげた。これらの板状木製品は、鴨都波遺跡(奈良県)で出土した儀仗形木製品の先端部の平面形に近い(樋上2006)。鴨都波例は断面が円形であるのに対して、本例は板状を呈している点が異なる。

【参考文献】

福岡市教育委員会1997『比恵遺跡群23』福岡市埋蔵文化財調査報告書第520集

樋上 昇2006「儀仗の系譜」『考古学研究』第52巻第4号、考古学研究会



第66図 42次調査区出土の木製品 51 (1/4)

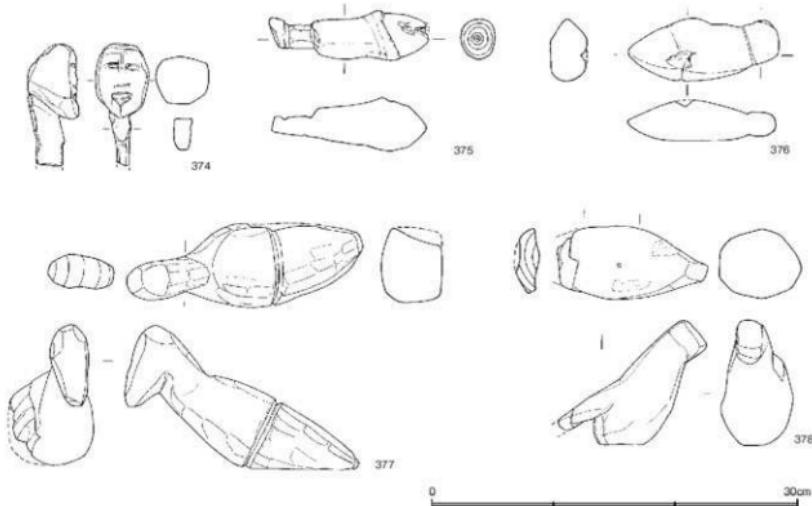
42次調査区出土の木製品52 (第67図)

第67図は、祭祀関連木製品である。

374は人面を表現した木製品で、顎が反った人面（全長6cm）に長菱形の板状の胸部を削り出している。下半身を欠いている。

弥生中期の木偶は、滋賀県内で多く出土している。周辺では今宿五郎江でコケシ状の木製品が出土した。北部九州で人面を表現した例は、武器形青銅器の茎部に顔を鋲出した人面付銅戈や上鎧子遺跡

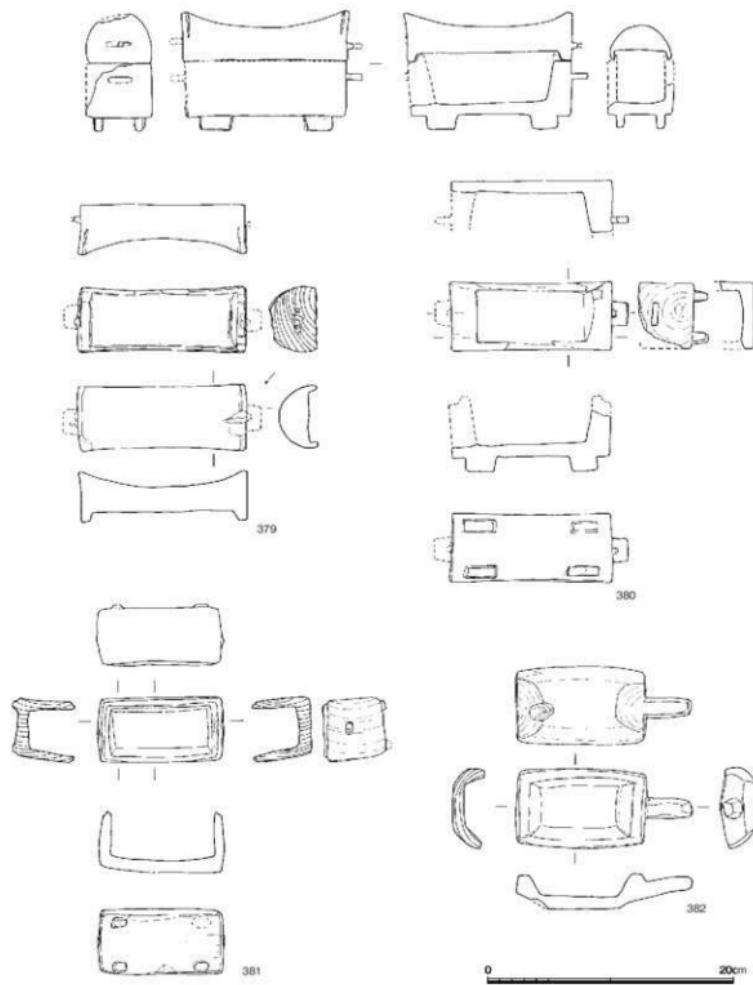
件名	種別	器種	出土地点	全長	身幅	身厚	加工分類	備考
66-371	儀器	有文木製品（職）	X-4. 土器群106	内区径：22	内区幅：7.6 厚：1.1～ 外区幅：1.2 外区厚：0.8	内区の内側 厚：1.1～ 外区厚：0.8	—	文様を配した内区と外側の丸形が通る外区から構成される。中心部には円形の透かし孔があけられている。外区の孔は0.5～0.6cm前後である。一方で内区の透かし孔の径は0.3cm程度である。内区の透かし孔は外区の透かし孔と並んで並んでいない。また赤く彩色なども施されていない外区は内区の表面には墨書きが二箇所に施されており、表面は赤く彩色が施されている。
66-372	儀器	板状木製品	X-4. 土器群106	残長：29.2	最大幅：5.2	1.2	—	木柄の可能性あり。
66-373	儀器	板状木製品	W-5. 土器群123	残存長32.4	5.7	1.8	柱目	古墳に4箇所に刻み目、左側にも違う位置にやや小さめの刻み目がある。
67-374	儀器	木偶	X-6. 土器群120	残長：10.0	頭：4.4	頭：4.2	—	口の入り込み深さ3.2cm、頭に比べ胸部は極端に細くなり、頭から下1.8cm付近で膨らむ。
67-375	儀器	男根形木製品	X-6. 土器群119	13.1	4.1	最大：4.3	芯持ち材	胸部中央付近に縫で縛った痕か。浅い窪みがある。細い縫が表面にかけて残存。
67-376	儀器	トリ形木製品	W-5. 土器群123	12.3	5.1	3.3	—	胸部若干彫、頭部には縫をかけるための溝を走らす。(幅0.5～0.6cm、深さ0.3cm)。
67-377	儀器	トリ形木製品	W-5. 土器群112	19.3	最大：6.9	—	—	羽根の先端部欠損、頭部の表面には縫で縛った跡跡。
67-378	儀器	トリ形木製品	X-4	12.2	6.0	—	芯持ち材	頭部に取手がつく。外側弁は丁寧に削る。
68-379	容器	割物箱（腹）	X-6. 土器群120	135	5.15	2.3	芯持ち / 横 木取り	表面に方形の取手が付き基盤に孔（0.3×0.4cmをもつ。底面外側の凹底部に）に直方形の孔（1.9×1.4cm）がつく。一本つくり、4箇所近くに開を持つ。蓋をめるために縫には取り出しがつく。
68-380	容器	割物箱（身）	X-6. 土器群120	残存長14.6	5.5	底径1.1	芯持ち / 横 木取り	取手は片側のみにつく。容器の中には細かな刀痕が確認できる。横のミニュニア。
68-381	容器	割物箱	X-6. 土器群120	10.3	5.3	底径0.8～ 1.4	柱目 / 横木 取	—
68-382	容器	取手付容器	X-6. 土器群120	14.5	6.5	1.1	柱目	—



第67図 42次調査区出土の木製品52 (1/4)

の顔面装飾のある戦士を描いた線刻版、原の辻遺跡の人面石などが知られているが（岡部1997）、本例には「隈取りやイレズミ」に通じる表現はみられない。

滋賀県大中の湖南遺跡出土の木偶は下半身に正面に穿孔がある。また湯ノ部遺跡の4号木偶は下半身の穿孔にシンボルの棒が挿入された状態で出土している（濱1993）。



第68図 42次調査区出土の木製品 53 (1/4)

375の男性シンボル形木製品は、人面を表現した木製品と近接して出土した。全長13.5cmのリアルなつくりである。双方に大小の男性器を表現したようにみえるが、小さいほうは別の木製品などに装着する機能があったのかもしれない。

3点のトリ形木製品が出土した。トリ形木製品は台地側から流れ込んだ遺物の延長部で検出されたことから、本来台地上に立てられていたものが土器などとともに流路に流れこんだと推定される。

377は、羽をとしたトリを立体的に彫りだしたものではほぼ完形である。胸部に回る溝は木柄と固定する機能が考えられる。378のトリは、尾部付近に角張った切り込みがある。頭部は簡略化された表現で、377とは作風が異なる。

立体的に彫りだしたトリとして、北部九州では佐賀県の託田西分遺跡や福岡県糸島市の上籠子遺跡に次ぐ発見である。トリは、稲穂をくわえて飛来した稻作の伝播にまつわる伝承や、死者の魂を運ぶ使いとされることがある。トリの絵画は西日本から北陸にかけてみられるが、サギやツルなど長足長頭の類とカモやカラスのような短足短頭の二種に大別される。本例はいずれも後者で、1のトリを巡る彫り込みは紐を結ぶための溝で、2の尾部付近の切り込みも部材を固定する機能と関連するものであろう。376は2点のトリ形木製品を参考にトリ形木製品としたが、単独の出土であればトリとする決め手に欠く。

唐古・鍵遺跡の楼閣や倉庫とされる絵画土器には屋根上に逆「S」字状のトリと推定される線刻がみられる(橋本2006)。また池上曾根遺跡のようにトリを竿状のものに固定したものは、『後漢書』や『魏志』の馬韓の条にある蘇塗との関連が注目される。渡辺 誠は、韓国の民俗例におけるソッテの意義について検証し、集落の安寧と辟邪に関するものが八割ほどを占め、豊作・豊漁祈願を大きく引き離しているとした(渡辺2001)。

【参考文献】

橋本裕行2006「樓閣絵画の再考」『原始絵画の研究』六一書房

濱 修1993「弥生時代の木偶と祭祀」『紀要』第6号、〔財〕滋賀県文化財保護協会

渡辺 誠2001「弥生の鳥竿信仰」『巨木と鳥竿』勉誠出版

42次調査区出土の木製品53(第68図)

379・380は、繊細な造りの刳物箱で、身と印籠蓋がセットになる合子である。挿図の上は蓋をした状況を復元したものである。身は底に長方体の4つの脚部を削り出している。蓋との合わせ部を欠くが、岡山市の南方遺跡の類品から四縁を削りだすと推察される(扇崎2005)。

蓋(本体との合わせ部13.5×5.2cm)は、中央がくびれた円筒形を半截した形状である。蓋と本体の短辺には、対となる位置に板状の耳を削り出している。この耳の基部中央に穿孔があるので、孔に棒状の栓を挿入することで蓋と本体を固定する構造だったと考えられる。

381は同様の容器の身である。こちらは蓋と合わさる部分が遺存している。

382は槽のミニチュアである。これらの容器はすべて同じグリットで検出された。

【参考文献】

扇崎 由2005「南方(済生会)遺跡 一木器編一」岡山市教育委員会

4まとめ

從来『魏志倭人伝』に記された伊都国の領域は糸島半島全体とされてきたが、近年では律令期の怡土郡に伊都国、志摩郡に斯馬国を充てる説が示されている(西谷2009)。

今回報告した漢代の貨幣や銅鏡金具、辰砂の粒子などの遺物は、紀元前後から約3世紀の間、この地が国内外の交易の拠点として機能していたことをうかがわせる。また報告はのちにゆするが、大小の石鍤やイルカや鯨の骨に加え、イノシシやシカの骨などもまとめて出土している。調査区の南は今津湾の奥部に面し、北の丘陵部に杜をいたぐ立地から「交易の拠点」に加えて「豊穣を祈念する祭祀の場」としての性格も兼ね備えていたと推定される。

自然流路SD02の1区から4区の遺物の出土状況をみてきたが、琴の部材や木偶、男性器形木製品、剣形木製品など祭祀関連の木製品の高い集中がみられるのが1区(第5図)である。1区は流路内にあるが、琴や木偶など祭祀にかかる木製品は約50m²という限られた範囲で出土した。一連の祭祀具や精巧な剖物容器などの検出面の標高に大きな差は見られないことから、一括廃棄された印象をうける。地下の湧水で保護されたためとはい、この場所が特殊な地点であったことを示唆している。

2区(第6図)で特徴的なのはトリ形木製品がまとめて出土したことである。2区は流路西側の岸辺(落ち際)において祭祀が行われた後、遺物が流れ込んだという印象をうける。

3区(第7図)の有文木製品は、土器祭祀に先立つ祭礼に供されたもので、木製品が役割を終えた後で、膨大な土器の集積がはじまると推定される。翳をさしかけられたのは祭祀を司る人物か、それとも不可視の存在だったのか興味深い。

4区(第8図)は建築部材や舟の部材が主体をなしており、1~3区にみられた祭祀の場としての状況はみられない。

祭祀遺物の多くは弥生中期後半に比定されると考えているが、流路という性格上、時期の逆転や混入は避けられない。個々の資料については改めて検証する必要がある。

琴に描かれたシカ・トリに象徴される農耕祭祀と木偶や男性シンボル形木製品に託された祖靈信仰や自然崇拜的な要素。両者がマツリの場において共存していたか、あるいは拮抗していたかについては、さらに論を尽くさねばならないが、本製祭祀具の研究が弥生文化の解明にとって重要な局面を担っていること、は確かである。

今後は対岸の今宿五郎江跡などとの金属器、たとえば漢代の貨幣の枚数や種類の比較、調査面積に占める銅鏡の数量の比較を行うことが必要であろう。また漆塗り容器については製作地はまだ明らかになっていない。金山古村と元岡・桑原42次漆塗り容器の製作地についても漆塗膜などの分析から年代や産地の同定がすむことが期待される。

以上の基礎データをもとに北部九州の有力な集落の出土内容の比較を通して遺跡ごとの特性を明らかにすることで倭人社会の形成過程はより具体性をおびるであろう。

報告をまとめるにあたって山田昌久、山口謙治、深澤芳樹、春成秀爾、岡部裕俊、柳田康雄、肩崎由の諸氏からさまざまご教示をいただいた。

【参考文献】

西谷正2009「伊都国・斯馬国」『魏志倭人伝の考古学』学生社

『翰苑』に記された「伊都に届り、傍、斯馬に連なる」の記述を伊都国と斯馬国を隣り合った位置関係を示す根拠としている。



1 第42・52次調査区と伊都キャンパス 南より



2 第42・52次調査区全景 北東より (1・2 平成21年3月9日撮影)



3 第42次調査区 流路 SD02（全景） 東より



4 第42次調査区 流路 SD02（南西部） 東より



5 第42次調査区 流路SD02(全景) 北より



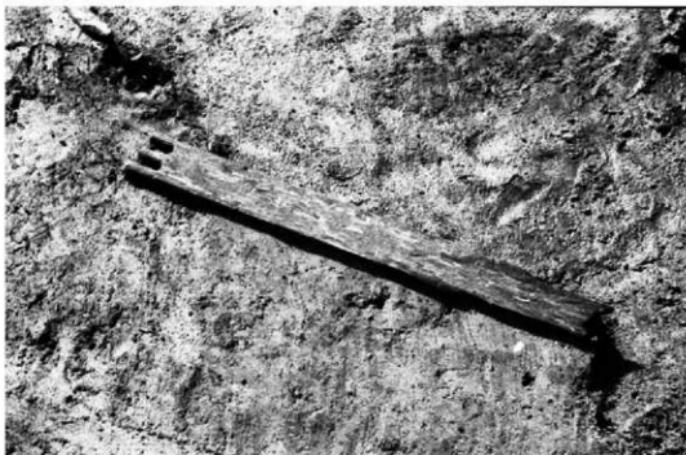
6 第42次調査区 流路SD02(全景) 南より



7 土器群 107 建築材 50-266 出土状況 1 (Y-2 区) 西より



8 土器群 107 建築材 50-266 出土状況 2 (Y-2 区) 南より



9 琴 63-348 出土状況 (Z-2 区) 南より



10 不明木製品 46-252 出土状況 (Y-3 区) 西より



11 建築材 50-267 出土状況1 (Z-1 区) 東より



12 建築材 50-267 出土状況2 (Z-1 区) 南より



13 柱材 53-281 出土状況 (Z-2 区) 西より



14 ねずみ返し 49-263 出土状況 (Z-2 区) 南より



15 椅子の座部 47-259 出土状況 (Y-2 区) 東より



16 組合式木製案 45-245 出土状況 (Y-2 区) 北より



17 小型白の未製品 37-165 出土状況 (W-5 区) 北より



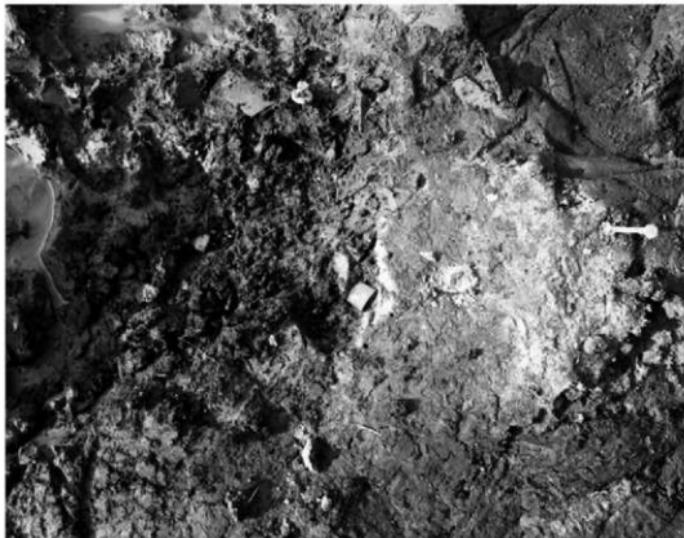
18 脚付容器 31-127 出土状況 (W-6 区) 北より



19 円形木製品（蓋）39-181 出土状況（W-6 区） 南より



20 トリ形木製品 67-377 出土状況（W-5 区） 北より



21 鞘尻金具 10-11 出土状況 土器群 106 (X-4 区) 東より



22 有文木製品 66-371 出土状況 土器群 106 (X-4 区) 東より



23 琴 62-347 出土状況 1 (X-6 区) 南より



24 琴 62-347 出土状況 2 (X-6 区) 北より



25 剣物箱 68-379・381 出土状況 (X-6 区) 東より



26 剣物箱 68-380 出土状況 (X-6 区) 南より



27 又鋤 26-100 竪杆 28-113 出土状況 (W-5 区) 南東より



28 波除板 49-264 出土状況 (Y-4 区) 南より



29 蓋形容器 38-171 出土状況 (Y-3 区) 東より



30 脚付容器 31-126 出土状況 (Z-2 区) 北西より



31 権状木製品 56-296 出土状況 (W-5 区) 西より



32 舟の仕切り板 56-297・298 出土状況 (Z-2 区) 北より



33 又鉤 17-26 出土状況 (Y-2 区) 東より



34 木製品出土状況 土器群 109 (Y-1 区) 北東より



35 木製品出土状況 土器群 109 (Z-2 区) 北より



36 木製品出土状況 土器群 109 (Y-1 区) 北より



37 遺物出土状況 1 (Y-1・2 区) 東より



38 遺物出土状況 2 (Y-1・2 区) 北より



39 遺物出土状況 土器群 123 (W-5 区) 南より



40 遺物出土状況 SD02 (Y・Z-2 区) 北東より



41 木製品出土状況 土器群 109 (Y-1 区) 北東より



42 木製品出土状況 (Y・Z-2 区) 北より



43 建築部材 54-284 出土状況 (Z-2 区) 西より



44 小形仿製鏡 11-19 出土状況 (Y-3 区) 東より



45 琴部材 64-356 出土状況 土器群 106 (X-3 区) 北より



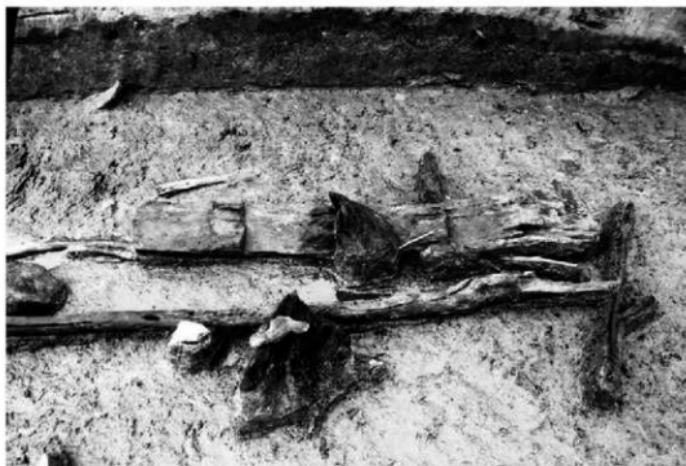
46 脚付容器 31-125 出土状況 土器群 123 (W-6 区) 北より



47 建築材 53-280 出土状況 (Y-3 区) 北より



48 木製品出土状況 土器群 109 (Y-2 区) 南西より



49 梯子 54-288 出土状況 (X-4 区) 南東より



50 平鎌 24-89 出土状況 (Z-1 区) 西より



51 木製品出土状況 (Y-2 区) 北西より



52 木製品出土状況 (Z-2 区) 南より



53 白 29-118 出土状況 (X-3 区) 東より



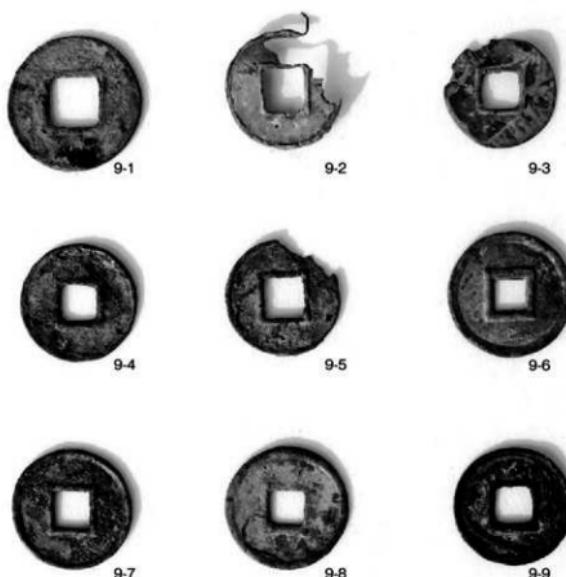
54 建築部材出土状況 (Z-2 区) 北より



55 木製品出土状況 (Z-1 区) 南より



56 木製品出土状況 SD02 南端出土 南より



漢代の貨幣（裏面）



42次調査区出土遺物 1



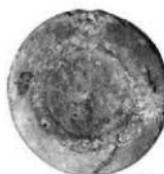
11-15



11-16



11-20



11-15



11-16



11-13



11-14



14-33



14-34

42 次調査区出土遺物 2

「シカ」

「シカ」



「高床建物」

「トリ」



62-347



45-245



45-247



45-248



63-348



63-348 (内側)



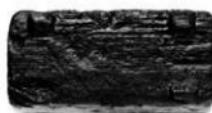
68-382



68-379
68-380



68-381 (内側)



68-381 (底部)



36-147



36-148



36-151



44-231



44-222



44-223



44-230



44-236



44-240



44-241



33-134



32-129



32-128



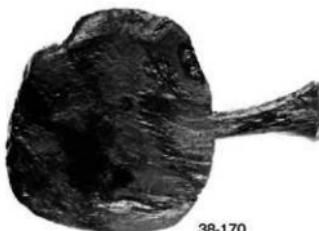
40-187



41-189



38-171



38-170

42 次調査区出土遺物 6



17-23

17-24

24-89



29-118

27-105

15-6

42 次調査区出土遺物 7



42 次調査区出土遺物 8

V 59次調査の記録

I 調査の概要

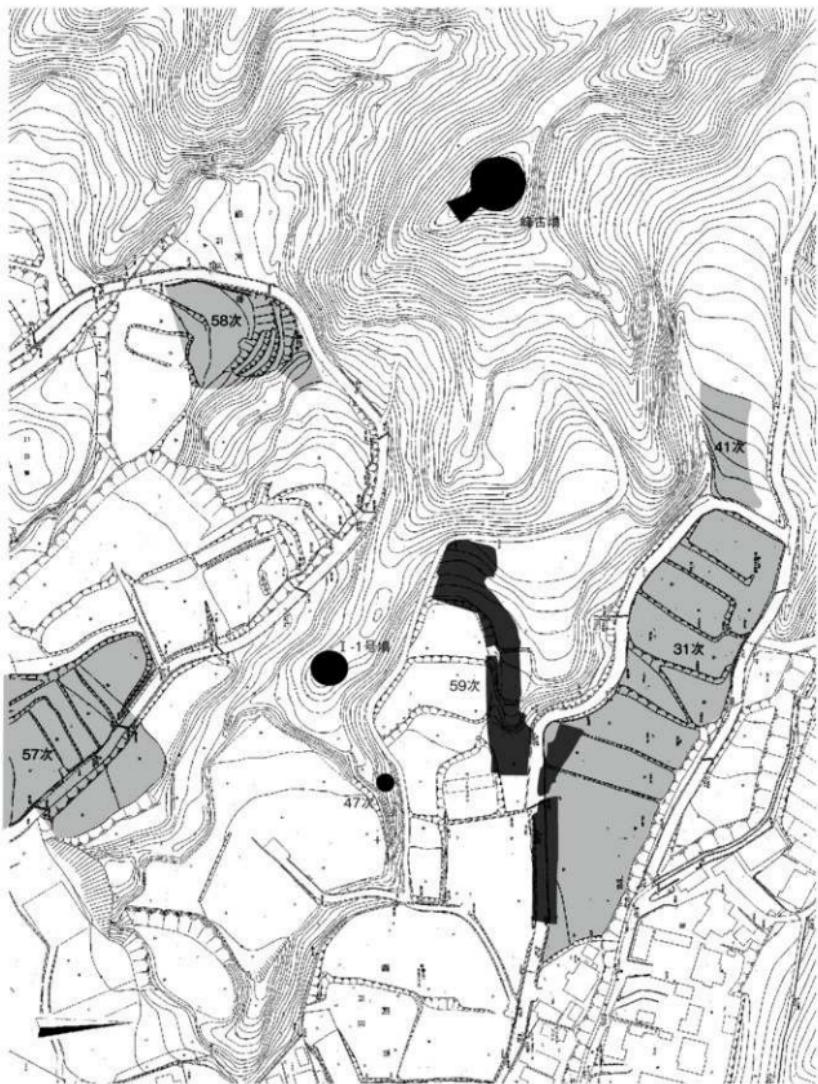
元岡・桑原遺跡群第59次調査区は、遺跡の南側に位置し、東側に開口する谷部にある。西側へ丘陵を上ると、頂上には前方後円墳と考えられている峰古墳がある。近隣では、北側で第31次調査、南側で第47次調査が実施されている。31次調査区は59次調査区の北側の丘陵を挟んで反対側に位置し、東側に開口する谷部一帯を対象として平成15~18年度に発掘調査が実施された。谷部の包含層中からは古墳時代の祭祀関連遺物、谷を埋めた整地層上では古代の掘立柱建物群、さらに鴻臚館へ瓦を供給した可能性のある瓦窯などが確認されている（市報1103集）。47次調査では、59次調査区南側丘陵上にある元岡古墳群I群1・2号墳の調査が実施された。調査前はI-1号墳は前方後円墳、2号墳は円墳と考えられていたが、調査の結果、1号墳は円墳、2号墳は近世墓の改葬墓であることが判明した（市報1064集）。

この地区は、九州大学統合移転に伴って道路と農学部圃場および研究施設の建設が計画されていたため、事前に谷部全体で試掘調査を行った。結果、谷の谷頭部で包含層、丘陵斜面上で大溝、丘陵裾部でビットが確認された。また、59次調査と31次調査の間には舗装された道路が残されているが、現在は使用されておらず、31次調査区で確認された遺構が延長する可能性が高かった。そのため、今回の発掘調査では、谷部（谷頭部と丘陵斜面および裾部）と31次調査間に残された道路部分を対象範囲とした。

調査区は、谷部を1区とし、道路部分は濁水処理用の排水溝によって2分されていたため、西側を2区、東側を3区と便宜的に名付けた。また、相手方との協議では調査終了後は埋め戻しをしないこととしていたが、谷の上流から流れてくる水がすべて3区に溜まってしまい、下流の民家側へ溢れ出す恐れがあったため、3区から南東側の濁水処理施設へと繋がる排水溝を掘削する必要が出てきた。そのため、排水溝部分を4区として設定し、排水溝掘削によって埋蔵文化財に影響が及ぶ深度まで確認調査を行った。調査面積は、それぞれ1区1,401m²、2区240m²、3区610m²、4区47m²で、総面積は2,298m²である。

調査はまず、平成24年1月23日から休憩施設や作業通路の整備、重機による盛土の除去など、事前の準備を行った。その後、4月から作業員を動員して1区谷頭部から遺構検出を行い、本格的な発掘調査を開始した。5月18日に高所作業車により谷頭部部分の全景写真を撮影したのち、丘陵斜面部の調査へ着手したが、6月中旬から7月下旬までは梅雨期の雨水対策に追われ、作業が滞った。遺構掘削を終えたのち、9月12日には1区全体の空中写真撮影（気球）を行い、1区の調査を終了した。2区と3区は、9月下旬に表土剥ぎを行い、遺構の検出と掘削に着手した。11月19日に2区および3区第1面の全景撮影を高所作業車で行い、その後、3区第2面の調査へ移行した。3区第2面では古墳時代中期の祭祀に伴う遺物が集中して確認されたため、その記録に追われた。3月14日にはすべての掘削作業と記録作業を完了し、3月15日に機材等を撤収、調査が終了した。

検出した主な遺構は、溝6条、焼土坑6基、縄文時代・古墳時代中期・古代・中世までの遺物包含層があり、遺物は縄文土器、土師器、須恵器、中国製陶磁器、石鏃、滑石製白玉、滑石製石鍋、鉄製品等がコンテナケース40箱分出土した。



第1図 第59次調査区周辺地形図 (1/2,000)



第2図 第59次調査区位置図 (1/1,000)

2 調査の内容

以下、區別に検出遺構と出土遺物について記載する。なお、出土遺物の法量等の詳細については、第6表の遺物観察表を参照されたい。

(1) 1区の調査（第3図）

1区は南北にのびる2本の丘陵間の谷部にあたり、いずれの丘陵も花崗岩風化土で形成される。前述したように、南側丘陵上には元岡古墳群I群があるが、現在は1基の円墳のみを確認するに留まる。南側丘陵の北斜面裾には細い未舗装道路が設置されており、谷の頂部まで続く。道路の法面を観察すると岩盤が露出しており、大幅にカットされていることが分かる。また、北側丘陵は段造成されており、最近まで果樹園として利用されていた。その造成により丘陵頂部は大幅に削平され、本来の地形を留めていない。谷の内部は、比較的新しい時期に行われたと思われる厚い盛土がある。試掘調査では谷部の堆積土中に遺物は確認されなかつたため、調査対象から除外した。

1区の調査では、谷に対し平行・直交するトレンチを設定して谷の堆積状況の確認を行ったのち、層ごとに遺構検出を行いながら、掘り下げていった。さらに、谷部を横断して北側丘陵斜面へ続く大溝を追いかけるように、調査区を西から東へと拡張していった。

谷

S X O 1 (第4・5図)

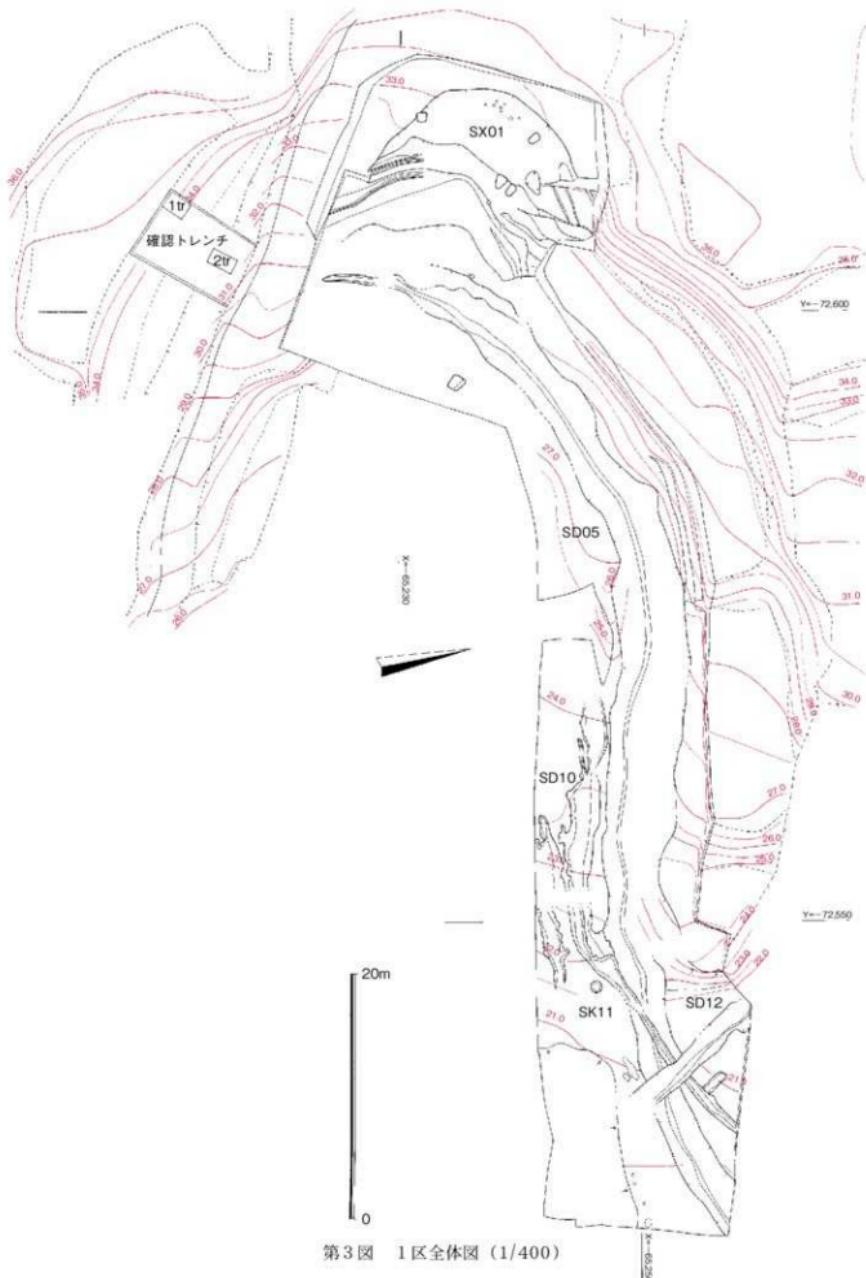
今回調査対象としたのは、谷頭部から開口部にむかって長さ約25.5m、幅約17mの範囲である。まず、表土を除去したのち、谷頭から開口部に平行方向のトレンチ（A-A'）と直行方向のトレンチ（B-B'）を設定し、土層確認を行いながら、遺構検出を行った。遺構は主に、黒褐色シルト（A-A' 断面の10層、B-B' 断面の2層）上面で検出された。検出されたのは後述する焼土坑6基（SK02-04・06・08・09）と溝SD05である。その他、谷頭付近ではピットが数基確認されたが、掘立柱建物の検出には至らなかった。黒褐色シルトの下は暗褐色シルト層などをさみ、黄橙色砂質土（花崗岩風化土）の地山となる。B-B' 断面に見られるように、本来は断面V字形に深く開析された谷であったことが分かる。堆積を繰り返しながら徐々に緩やかな谷となり、古代には製炭の場として利用されていたのであろう。

黒褐色シルト（10層）より上層（1・6・9層）には、少量ながら古墳時代から中世にいたる遺物が含まれていたが、黒褐色シルトより下層にはほとんど遺物が含まれていない。ただし、黒褐色シルト上で見つかった焼土坑の年代はAMS年代測定により8～9世紀代との結果を得たため、黒褐色シルトの堆積時期はそれより古いと分かる。よって、1・6・9層は、少なくとも中世以降に堆積したもので、出土した土器は二次的な出土と判断される。また、1点ではあるが、B-B' 断面4層から縄文土器が出土した（第35図3）。

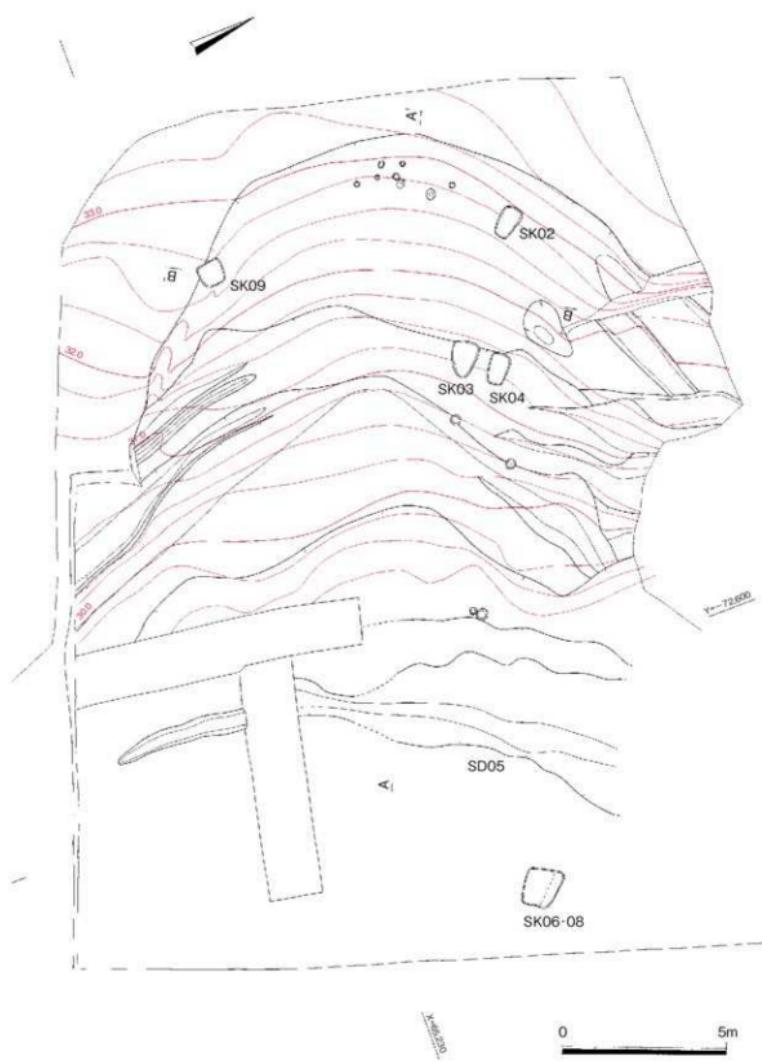
出土遺物（第6図）

3はA-A' 断面の10層、7はA-A' 断面の6層、それ以外はA-A' 断面の1層出土。

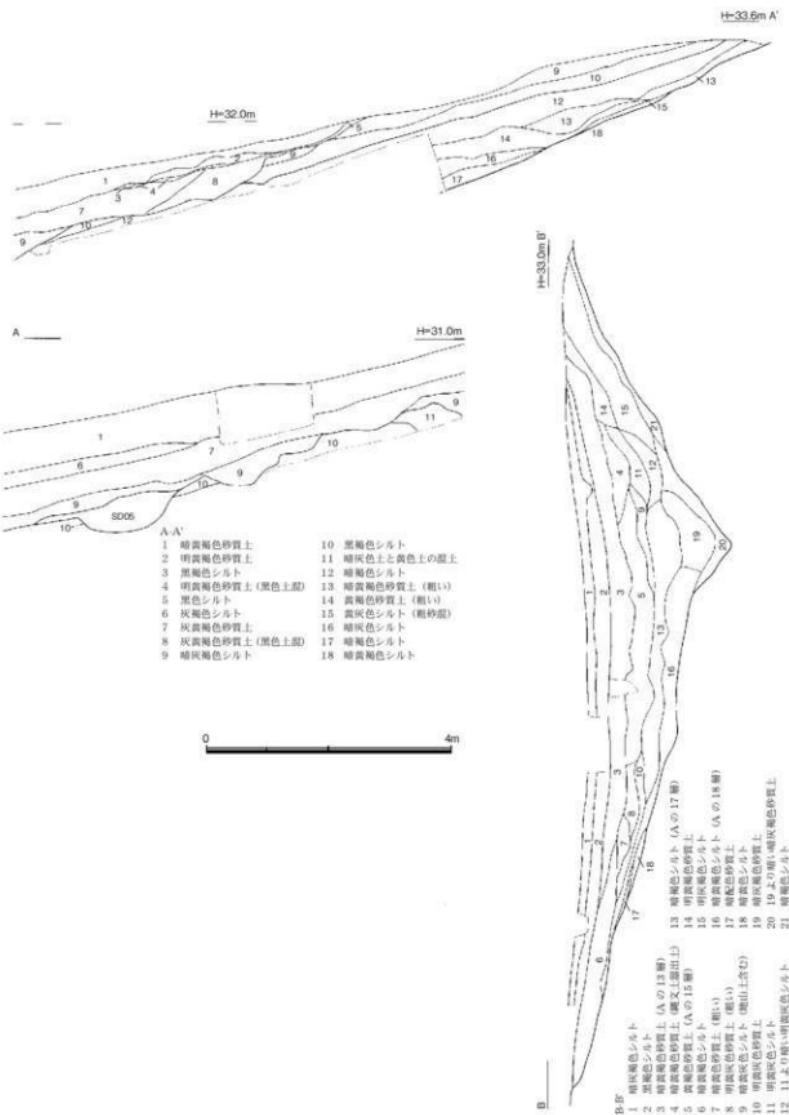
1～4は土師器。1は壺の胴部。頸部より上が欠損するが、直口壺か。外面上部には横から斜方向のハケ目、外面下部は横方向のケズリを施し、内面にはナデ調整時の指頭圧痕が残る。2は高杯で、坏下部から脚上部にかけての破片。脚部外面に荒いハケ目調整を施すが、全体に磨滅が著しく観察不能。3は直口壺の口縁部。小破片のため、傾きは不明。内外面ともにハケ調整後、ナデる。4は大型



第3図 1区全体図 (1/400)



第4図 SX01実測図 (1/150)



第5図 SX01土層断面実測図 (1/80)

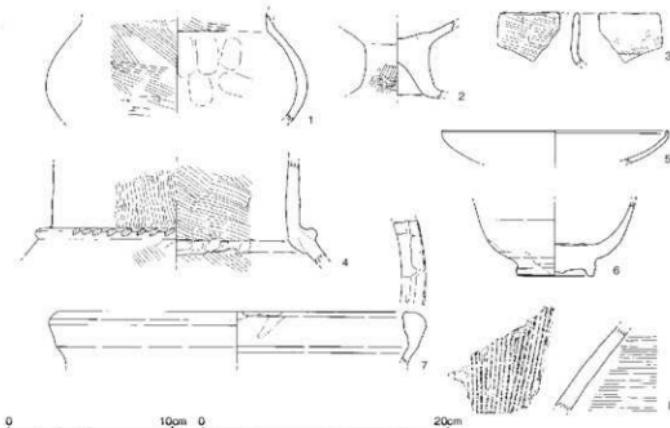
壺の頸部。胴部と頸部の接合部には粘土を厚く継ぎ足し、強く指で抑える。内外面ともにハケ調整。頸部には突帯を巡らし、刻目を施す。5は白磁の皿。口縁部は短く直立し、体部は緩やかに湾曲しながら角度を付けて底部へ伸びる。軸は白色透明で薄く、ピンホールが若干観察される。6は陶器の塊で口縁部を欠失する。高台が浅く削り出されるため、底部厚は1.5cmと非常に厚い。軸は薄く施され、外面下部から底部は露胎となる。7は陶器の鉢の口縁部。端部は断面三角形で厚さ2cmと厚い。また、口縁端部上面には目跡が付着する。胎土には白色や黒色の砂粒を含む。8は土師質の擂鉢片。外面には横方向の力き目、内面には密に撃り目が入る。

溝

S D 0 5 (第8図)

谷SX01を横断しながら北へ流れ、北側丘陵の南斜面に沿って東側に流れる大溝である。全長約90m、幅は最大で約5.8mを測る。非常に長い溝であったため、7箇所で土層断面を記録するとともに、①～⑦区に分けて遺物の取り上げを行った。

SD05は谷SX01内で検出され、谷を南北に横断したのち、丘陵斜面に沿ってカーブしながら東側へ向きを変えていく。SD05が南側へさらに伸びる可能性もあったため、南側丘陵の頂上から斜面にかけてトレンチを2本設定し、確認を行った(第11図)。その結果、丘陵上や斜面には近代以降の遺物を含む造成土が確認されたのみで、溝の延長は確認されなかった。近代以降の造成で溝が消失した可能性も考えたが、丘陵斜面の断面にもSD05の痕跡が確認されないことから、SD05が南側丘陵を横断する可能性はない判断される。南側丘陵の北斜面に沿って開口部方向へ伸びていた可能性は否定できないが、斜面は道路設置時に削平されているため、これ以上の追求は出来ない。また、東側の下流部は隣の2・3区側に伸びるが、その延長部は安全上の問題から調査が不可能であったため確認できていない。だが、延長方向から考えて、2・3区の溝SD13・14と合流すると推測される。



第6図 SX01出土遺物実測図 (4・7は1/4、その他は1/3)

土層断面をみると、シルトと砂の互層が観察できることや、鉄分が沈着するシルト層が見られるところなどから、SD05に水が流れていたことは疑いない。また、上流部分のA断面では、溝底面の幅が広く、緩やかな水の流れが想定できる一方で、B断面より下流になると、溝の底面幅が狭く深くなる傾向がある。中央部だけ壁が垂直に立つ幅狭い溝状になる部分があることからも、激しい水の流れにより花崗岩風化土が抉られたことが分かる。いずれの土層にも切り合いが見られるため、水が流れる時期と土砂が堆積する時期が繰り返されたと推測される。また、地山（花崗岩風化土）由来の大きな土塊が斜面側から流れ込んでおり、斜面の崩落土と考えられる。

水の流れが激しかったためか、出土遺物は非常に少ないが、下流にいくにつれ遺物量が若干増える。
出土遺物（第7図）

9は①区、10は②区、11は③区、12～14は④区、15～17は⑥区、それ以外は⑦区出土。

9は弥生土器の壺の肩部。外面は縱方向にハケ目を施したのち、4条1単位の櫛描き波状文を2段施す。内面胴部はヘラケズリ、肩部付近はナデや指オサエで仕上げる。

10は須恵器・長頸壺の頸部で、口縁端部は欠失する。丁寧な回転ナデで平滑に仕上げる。白色砂粒を多く含む。溝の底面付近から出土した。

11・12・14は青磁碗。11は龍泉窯系碗I-6類か。外面に縱方向の櫛目とヘラ描き文、内面にヘラ描き文を施す。釉は透明のガラス質で、体部下位まで釉が及ぶ。全体に細かい貫入がある。12・14は底部片で内外面ともに無文である。高台の削り出しが浅いため、底部が厚くなる。釉はいずれも底部まで及ぶが、疊付部はあらかた削り取る。12は胎土が黄橙色を呈し、釉は発色が鈍くて細かい貫入がある。14は透明なガラス質の釉で、細かい貫入がある。

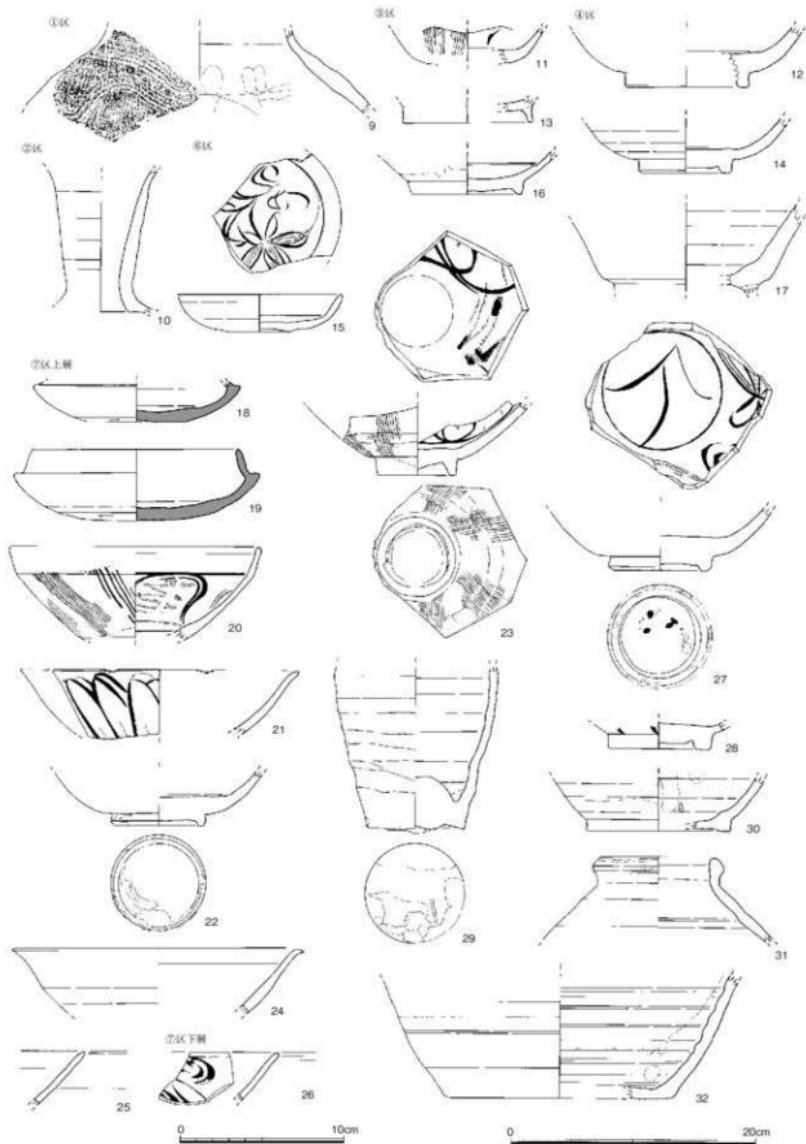
13は土師器壺の高台片。全体に磨滅が著しい。高台は細く、やや外傾する。

15・16は白磁。15は皿VII-1c類。体部は丸みを帯びて立ち上がり、屈曲部内面に沈線を施す。底部は平底で、全体に釉をかけたのち、底部のみ削り取る。底部には砂目が残る。内面見込みにヘラ状工具と櫛描きで草花文を施す。釉は透明感のあるガラス質だが、厚さにはムラがある。16は碗の底部片。底部は浅く粗く削り出すため、底部が厚く、疊付の幅は3～5mmとムラがある。内面見込には1条の沈線を巡らす。釉は外面体部下位には及ばず、非常に薄くて、光沢がない。

17は土師質土器・壺の底部片。貼付け高台の端部は欠失する。外面は磨滅するが、内面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。

18・19は須恵器蓋杯の坏身。18は受け部が短く、底部は平底、19は口縁部が直立気味で長く、受け部にはしっかりとテラスを設ける。いずれもロクロ成形で、底部に切り離し時のヘラ切り痕を残す。

20～23は青磁碗。20は同安窯系I-1b類。底部は欠失する。体部から口縁部にかけて直立気味に折れ、口縁端部は丸く收める。外面には櫛目文、内面には1条の沈線と櫛による点描文およびヘラ描きの草文を施す。釉は透明なガラス質で光沢があり、細かい貫入やビンホールが目立つ。外面体部下位は露胎となる。21は龍泉窯系の輪花碗。口縁部がやや外反する。外面には蓮弁文を施すが、彫り込みや鎬の表現が不明瞭である。釉はねばりが強くて発色が鈍い。22は青磁碗の底部。疊付の幅が3mmと非常に狭い。また、削り込みが浅いため、底部の厚さが1.5cmと厚い。内外面ともに無文。釉はガラス質で光沢があり、全体に細かい貫入が観察される。外底部内面の一部には釉が及び、目跡も確認される。23は同安窯系I-1b類。口縁部は欠失する。高台は深く削り出され、逆台形を呈する。外面には櫛目文、内面には1条の沈線と櫛による点描文およびヘラ描きの草文を施す。釉は体部下位には及ばない。磨滅が著しい。

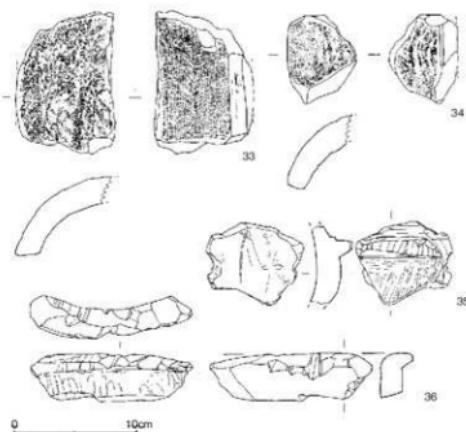


第7図 SD05出土遺物実測図1 (10・32は1/4、その他は1/3)

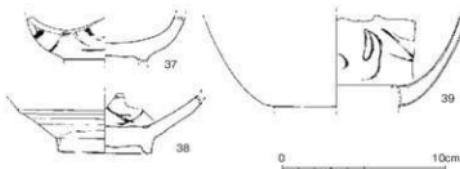
24・25は白磁碗。24はV-a類。口縁部は外方に屈折して上端部が平坦で、端部は尖る。内外面ともに無文で、内面口縁部下に1条の沈線を施す。軸は光沢が鈍く、ピンホールが目立つ。25は内面口縁部下に1条の沈線を施す。軸は透明だが光沢が鈍く、外面にはピンホールが目立つ。

26～28は青磁碗。26は龍泉窯系の口縁部片。内面口縁部下に1条の沈線とヘラ書きの雲文を施す。軸は透明のガラス質で、大きな貫入が観察される。27・28は龍泉窯系青磁碗の底部片。高台の削り込みが浅く、底部が厚さ1.7cmと非常に厚い。内面および見込みにヘラ状工具で草花文を施す。軸はガラス質で透明感があるが、全体に細かい貫入が観察される。軸は疊付の一部にまで及ぶ。外底部には炭や砂目の付着が見られる。28は外面下位に一部蓮弁文が確認される。疊付は幅1cmと太い。軸はガラス質で、全体に厚くかけられ、疊付や外底部内面の一部まで及ぶ。また、細かい貫入が全体的に及ぶ。

29～32は陶器。29は壺の体部～底部。体部には回転ナデの痕跡が強く残り、底部付近は軽く削る。外底部はヘラ切りで、全体に目跡が残る。また、内底部は空気の膨張により膨らみが生じる。軸は内



第9図 SD05出土遺物実測図2 (1/4)

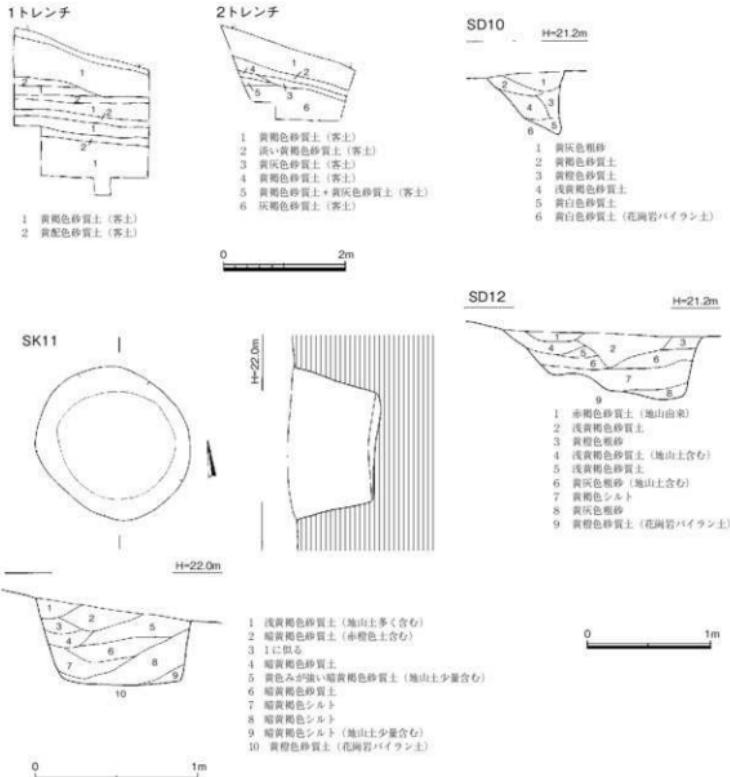


第10図 SD12出土遺物実測図 (1/3)

外面とともに全体に薄くかかるが、露胎になっている部分も多い。30は壺の底部。体部と底部に明瞭な境を有し、底部には糸切り痕が残る。内面および外面には褐色の釉がかけられるが、外面の底部付近は露胎となる。31は褐釉陶器の壺片。口縁部は短く直立し、口縁端部は断面三角形を呈す。外面には暗褐色から黄褐色の釉がかけられるが、内面は露胎である。32は鉢の底部。内面には回転ナデの凹凸が強く残るが、外面は平滑に仕上げる。3mm程度の白色砂粒を多く含む。

33・34は丸瓦片。33は凸面に斜格子目の叩き、内凹面には目の粗い布目を残す。側面凹面側には分割時の截面、凸面側には破面が未調整のまま残る。焼成は須質で、白色砂粒を多量に含む。34は外面に叩き目を残すが磨滅のため判然としない。内面には紐状の痕跡が残る。土師質。

35・36は滑石製石鍋の鍔部片であるが、36は再加工された転用品と考えられる。鍔部上面を平坦



第11図 確認トレーニチ、SD10・12土層断面実測図 (1/80・1/40) よびSK11実測図 (1/30)

にし、さらに内面に向けて斜めに削られる。また、上面にはススが付着する。

SD10 (第11図)

1区の東部に位置する溝で、SD05に沿うように西から東へ流れながら、途中から向きを北寄りにかえてSD05を横断する。後述するSD12に切られる。長さ約36m分を検出し、幅は最大2.2m、深さは最深65cmを測る。覆土は地山の花崗岩風化土由来の砂質土や粗砂を主体とし、西から東への水流が想定される。

遺物は非常に少なく、図示可能なものがないが、近世以降の所産と考えられる。

SD12 (第11図)

1区の東部に位置する溝で、SD05を北から南へ横断する。SD05とSD10を切る。長さは約11m分を検出し、幅は最大2m、深さは最深65cmを測る。覆土は地山由来の砂質土や粗砂を主体とし、北から南への水流が想定される。遺物は染付や青磁碗が出土した。近世以降の所産と考えられる。

出土遺物 (第10図)

37は染付碗。外面に濃淡で文様を表現する。内面見込みに目跡が残る。

38・39は青磁碗。38は底部片。高台は浅く雑に削り出され、断面は逆台形を呈す。内面にヘラ状工具で施文する。軸は透明なガラス質で、高台は露胎となるが、一部には軸が垂れる。ピンホールが外面に観察される。39は体部片。内面にヘラ状工具で草花文を施文する。軸は厚くて、ガラス質で光沢が強く、深いオリーブ色を呈す。全体に大きな貫入が見られる。

焼土坑

SK02 (第12図)

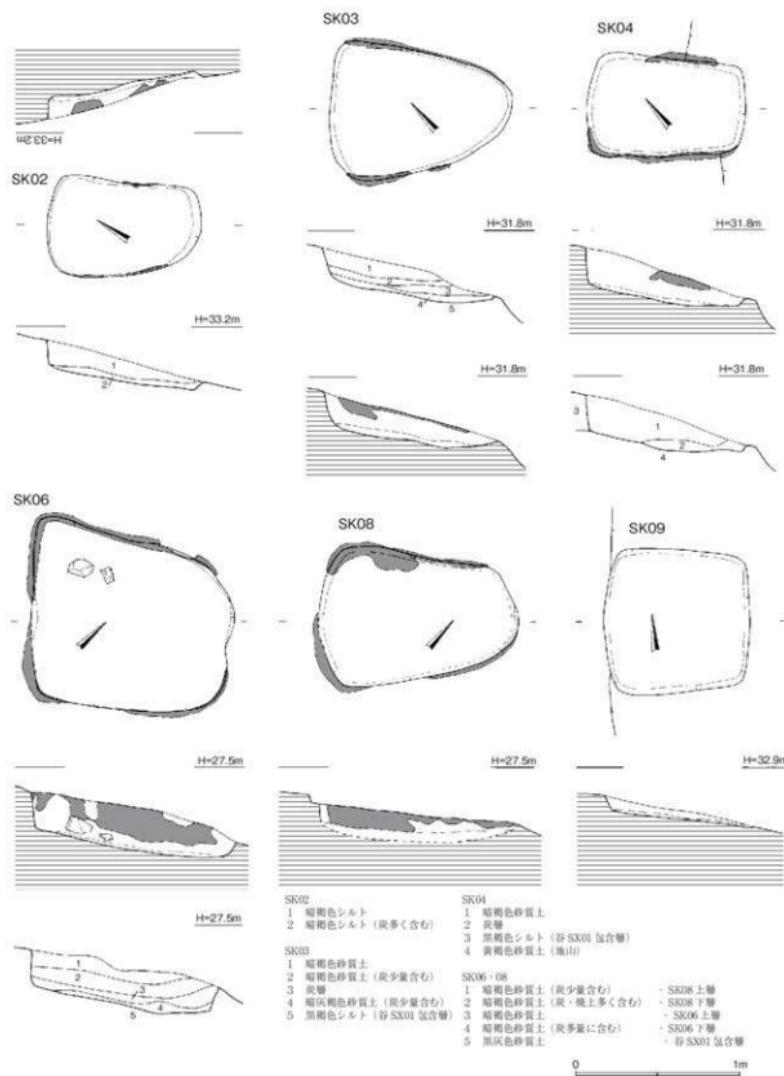
谷SX01の谷頭部の北斜面に位置し、長軸は斜面の等高線に直交する。全長96cm、幅45～61cm、残存の深さ20cmを測る。隅丸二等辺三角形を呈すが、焚口側が幅狭い。壁面は赤く被熱し、硬化する。床面は焚口に向かって傾斜する。上層には暗褐色シルト、下層には木炭を多く含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は全く出土しなかった。

SK03 (第12図)

谷SX01の北斜面、SK02の東側に位置し、長軸は斜面の等高線に直交する。全長114cm、幅35～86cm、残存の深さ20cmを測る。隅丸二等辺三角形を呈し、焚口側に頂角がくる。壁面は赤く被熱し、硬化する。上層には暗褐色シルト、焚口側にのみ炭層を挟み、下層には木炭を若干含む暗褐色シルトが堆積する。中間に炭層が確認されることから、少なくとも2回の操業が想定される。遺物は全く出土しなかった。

SK04 (第12図)

SK03のすぐ北側に隣接し、長軸は斜面の等高線に直交する。全長98cm、幅52～65cm、残存の深さ24cmを測り、隅丸方形を呈す。壁面は赤く被熱し、硬化する。暗褐色シルトが堆積するが、焚口側の床面には炭が広がる。遺物は全く出土しなかった。



第12図 SK02～04・06・08・09実測図 (1/30)

SK06 (第12図)

谷SX01のSD05より開口部側に位置し、SK08に切られる。全長125cm、幅75～105cm、残存の深さ26cmを測り、隅丸方形を呈す。壁面は赤く被熱し、硬化する。床面には木炭を多く含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は全く出土しなかったが、燃焼部の奥側から採取した木炭のうち、最外皮の残るものから試料を採取し、AMS年代測定を実施した結果、8世紀初頭から9世紀後半の年代を得た（「3. 自然科学分析」の項を参照）。

SK08 (第12図)

SK06を切り、その南壁と壁面を共有する。全長121cm、幅61～84cm、残存の深さ12cmを測り、隅丸方形を呈す。壁面は赤く被熱し、硬化する。上層には暗褐色シルト、下層には木炭を多く含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は全く出土しなかった。

SK09 (第12図)

谷SX01の谷頭南斜面に位置し、長軸は斜面の等高線に直交する。全長80m、幅65～77cm、残存の深さ8cmを測る。削平が著しいが、覆土に若干の炭を含むことから、焼土坑と考えられる。遺物は全く出土しなかった。

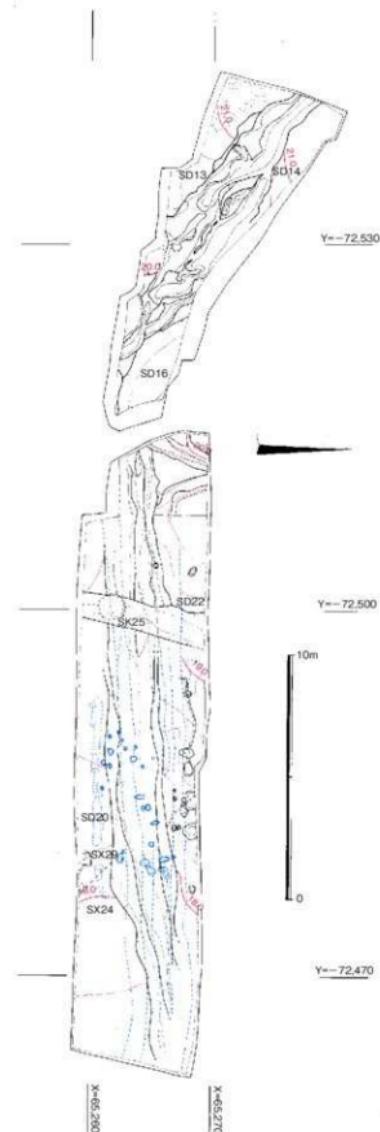
その他の土坑

SK11 (第11図)

SD10の南側で検出された略円形の土坑である。長さ98m、幅95cm、残存の深さ56cmを測り、壁面は直立気味である。遺物は全く出土しなかった。

(2) 2・3区の調査 (第13図)

2・3区は東西方向の舗装道路下を調査区とし、隣接する第31次調査で確認された遺構が伸びることが想定された。2区は1区と反対側の丘陵裾部にあたり、3区は1区と第31次調査の谷の合流部に該当する。



第13図 2区・3区第1面全体図 (1/400)

2区はアスファルトおよび碎石を除去した現況GL-30~160cm下で遺構面の地山となり、溝3条が検出された。3区はアスファルトおよび碎石を除去した現況GL-10~50cmの暗褐色シルトを第1面とし、近世以降の溝状遺構やピット等が確認されたが、明確な集落復元には至らなかった。メインとなるのは地山と遺構面とする第2面で、溝状遺構2条と、さらにその下層で谷が検出された。

溝

SD13・14 (第14図)

2区で検出された溝で、西から東へと流れる。SD13・14は別々の溝と認識され、SD14がSD13を切るが、覆土の堆積状況や溝の流れる方向などを考えると、さほど時期差はないと考えらえる。なお、SD13の西端部は第31次調査でも確認されており (SD123)、今回再検出した。溝の長さは約25.5m分を検出し、最大幅は2m、最深部で65cmを測る。覆土はシルトと粗砂が互層状に堆積し、堆積しては水の流れにより削られることを繰り返したと推測される。SD13とSD14が複雑に重なるのもそのためであろう。

SD13・14は丘陵斜面に沿って南東方向に流れるため、延長部は1区のSD05と合流すると推測される。

出土遺物 (第15図)

40~43は龍泉窯系青磁碗。40~42は口縁部片。40は外面に片彫りの鍋蓮華文を彫り込む。口縁部内面に黒色の墨のようなものが帯状に付着する。大きな貫入が全体に広がり、ピンホールが数箇所見られる。胎土は灰黄色で緻密、釉はオリーブ黄色で光沢があるガラス質を呈す。41は外面に鍋のない片彫り蓮華文を施す。貫入は大きいが、所々に細かく入る。胎土は灰色で緻密、釉は緑灰色でやや光沢があるガラス質を呈す。42は内面に片彫り草花文を施す。貫入はほとんどない。胎土は淡黄色で緻密、釉はオリーブ灰色でガラス質だが磨滅により所々光沢が失われる。43は底部。高台まで釉薬がかかり、内底部のみ露胎となるが、豊付部の釉の搔き取りが甘い。中央部には目跡を残す。胎土は灰白色で緻密、釉は灰オリーブ色で光沢のあるガラス質。

44は白磁皿の口縁部。内面の口縁端部は釉を搔き取るが、油煙のような黒色付着物が見られる。内外面ともに釉が垂れる。ピンホールが所々に見られる。胎土は淡黄色あるいは灰白色で緻密、釉は灰色を呈す。

45は龍泉窯系青磁碗の底部。外面に鍋蓮華文を施す。内面は無文。高台の削り出しが浅く、底部が厚い。外面の釉は高台まで及び、豊付部の釉の搔き取りが甘い。全体に細かい貫入が入る。胎土は灰黄色で緻密、釉はオリーブ色でガラス質を呈すが、磨滅により光沢が失われる。

46は白磁皿V-4a類の口縁部から体部。口縁部は端部が外反する。体部はやや直線的で底部に向かって丸みを帯びる。内面見込みに浅い沈線を有す。内面口縁部付近に釉垂れが見られ、外面体部下半は露胎となる。外面にはピンホールが目立つ。胎土は青みを帯びた灰色で緻密、釉は乳白色を呈し光沢がある。

47・48は白磁碗の底部。47は高台の削り出しが浅く、底部が厚い。内面見込みに沈線を有す。豊付部分に釉の削り残しが見られる。胎土は青みを帯びた白色で砂粒を微量含む。48は高台が細長く直立し、内面見込みに浅い沈線を有す。釉は外面体部下半までかかり、高台は露胎となる。胎土は緻密だが白色砂粒が少量混じり、釉は灰白色を呈す。

49は土師質土器皿。底部は磨滅により切り離し方は不明。胎土には砂粒と金雲母を含む。

50・51は平瓦片。50は凸面に元岡A1類 (『元岡・桑原遺跡群17』)、凹面に布目压痕を残す。砂

粒を多く含み、赤褐色の砂粒が見られる。やや軟質。51は凸面に斜格子目叩き（元岡B類）、凹面に布目压痕を残す。胎土は50に似る。やや軟質。50・51ともにすぐ隣接する元岡・桑原遺跡群第31次調査で検出された瓦窯で生産されたものと考えられる。

SD16 (第13図)

2区の東端に位置する溝で、北西から南東にむかって流れ、SD13・14を切る。長さ5.2m分を検出し、幅4m以上、深さは最大で1.2mを測る。覆土はシルトや砂質土を主体とし、西側には地山由來のブロックが流れ込み、東側はそれを切るようにレンズ状堆積が認められる。

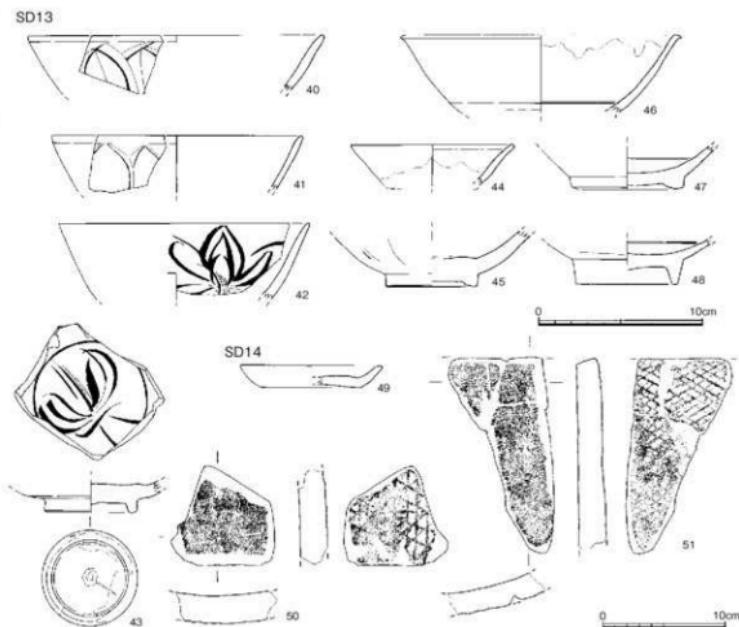
遺物は下層を中心に陶磁器や陶器類が出土した。

出土遺物 (第16図)

52～54は上層出土。55～62は下層出土。

52は白磁碗の口縁部片。口縁部は弱く外反し、上端部を平坦に仕上げる。体部は直線的である。胎土は緻密、釉はオリーブ黄色で光沢のあるガラス質を呈す。

53は同安窯系青磁碗の体部から底部、内外面に柳描き文を施す。外面の釉は体部下半まで、それ以下は露胎となる。釉はオリーブ灰色で光沢のあるガラス質を呈し、大きな貫入が入る。



第15図 SD13・14出土遺物実測図 (50・51は1/4、その他は1/3)

54は白磁皿の底部。内面見込みに浅い沈線を巡らせる。輪状高台で、全体に厚く釉がかかる。胎土は灰白色、釉は明緑灰色を呈す。

55は土師器・甕の口縁部片。外側に緩やかに湾曲し、端部は丸く收める。白色砂粒や石英を含む。

56・57は龍泉窯系青磁碗の口縁から体部。外面に片彫りの鎬蓮弁を施文するが、56の鎬がより明確である。56には貫入がほとんどないが、57は細かい貫入が全体に広がり、ビンホールが目立つ。釉は56はオーリーブ灰色を呈し、ガラス質で光沢があるが、57はオーリーブ黄色で光沢が鈍い。

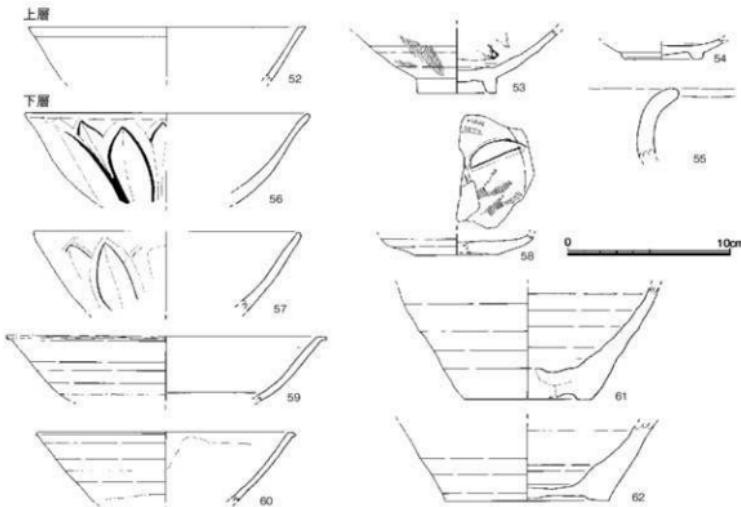
58は同安窯系青磁皿 I -2b類の底部。内面見込みにヘラによる文様と櫛点描文を施す。釉は全体にかけられた後、底部のみを搔き取る。釉は透明なガラス質であるが、磨滅により光沢が失われる。

59・60は白磁碗 V-4a類か。口縁端部が外反するが、60はより外側に突出し上面を平坦に仕上げる。59は内面は口縁下と見込みに沈線を巡らす。釉は透明感があり、外面体部下半は露胎となる。ビンホールが所々に見られる。全体に黒色化する。60は乳白色の釉で所々にビンホールが見られる。

61・62は陶器・壺の底部。61は体部を回転ナデ成形し、底部付近のみ回転ケズリで調整したのち、内面および外面体部に釉を施す。62の外底部は削り出し高台で露胎である。胎土は灰白色、釉は浅黄色を呈す。

SD20 (第13図)

3区の中央を西から東へ直線的に流れる溝で、3区の第2面で検出した。SD22・SK25に切られる。東端部ではSX24を横断しており、下層部分の掘削時にはSX24の堆積土との区別に苦慮した。検出した長さは約46m、幅は最大4.8m、深さは最深部で1.2mを測る。覆土はシルトと砂質土が互層状に堆積する。底面は比較的平坦で、SD05やSD13・14に比べると底面の凹凸がなく、比高差も



第16図 SD16出土遺物実測図 (1/3)

ゆるい。比較的穏やかな水の流れが想定される。

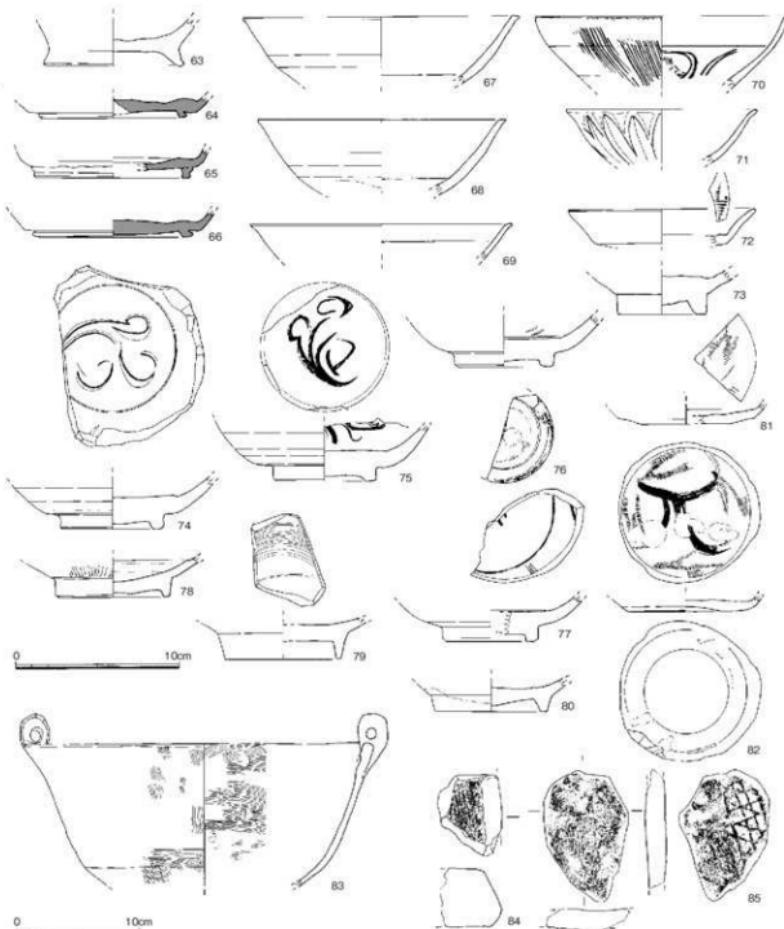
遺物は、須恵器・土師質土器・陶磁器・瓦質土器・瓦が出土した。

出土遺物（第17・18図）

63～85はSD20に伴うもの、86～94はSX24と混同して取り上げてた可能性がある。

63は土師質土器・塊の底部。高台は外側に外反し、端部を丸く収める。外底部には板状圧痕が残る。

64～66は須恵器・塊の底部。底部は回転ヘラ切り後、未調整で高台を貼り付ける。64は高台が外



第17図 SD20出土遺物実測図1 (83～85は1/4、その他は1/3)

側に外反し端部が鋭い。胎土には白色砂粒を多く含む。65は高台が直立気味だが、外側にやや反る。66は高台が短く、やや幅広く、外側に開く。

67~69は白磁碗V-4a類か。口縁端部が外反する。68は内面見込みに、69は口縁部内面に沈線を1条巡らす。67・68は釉に透明感と光沢があるが、69は乳白色で透明感がない。いずれもピンホールが目立つ。

70は同安窯系青磁碗で、内面にヘラ状工具による文様と櫛点描文を、外面には縦方向の櫛目文を施す。釉はガラス質だが、磨滅によりやや光沢を失う。

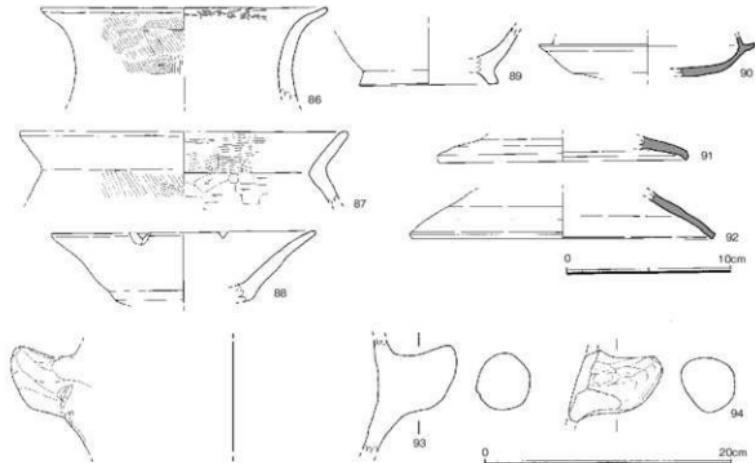
71は龍泉窯系青磁碗。外面に鎌蓮弁を施文する。釉はガラス質で光沢があり、発色がよい。貫入はない。

72は同安窯系青磁皿I類の口縁から体部片。内面見込みに櫛点描文を施す。釉は透明感があり、全体に大きな貫入とピンホールが見られる。

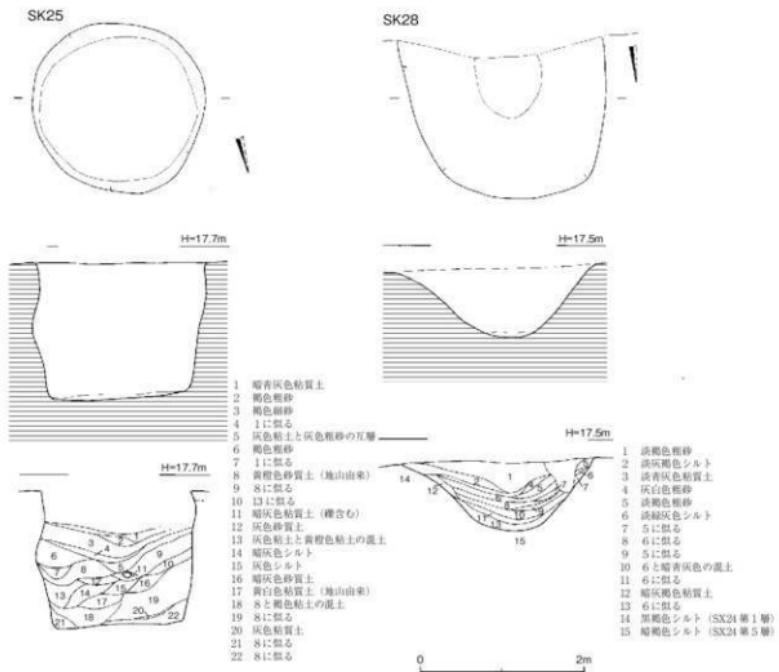
73~77は青磁碗の底部。73は同安窯系。内面見込みは無文で回転ナデの痕跡を残す。釉はガラス質で発色は良くない。外面は体部下位から高台は露胎となる。74~77は龍泉窯系で、釉は高台内部以外にかけた後、疊付部分は搔き取る。74は内面見込みに雲文状の文様を、体部に片彫り文を施す。75の外面は無文。釉はオリーブ黄色を呈し発色は良くない。全体に磨滅が著しく、光沢が失われる。76は内面見込みは無文、体部には片彫り文を施す。外底部には目跡が見られる。灰オリーブ色を呈す。77の内面見込み・体部の文様は破損のため不明。全体に細かい貫入が入る。

78~80は白磁碗の底部。78は高台の削り出しが浅く、外面には飛び鉋風の削り痕が残る。内面見込みには目跡が残り、釉を輪状に搔き取る。79は高台が細く、削り込みが深い。内面見込みには輪状に櫛目が施される。釉は体部下半まで及ばない。ピンホールが目立つ。80は高台の削り出しが深く、釉の一部は高台まで垂れる。内面見込みは釉を輪状に搔き取り、中央には目跡が残る。

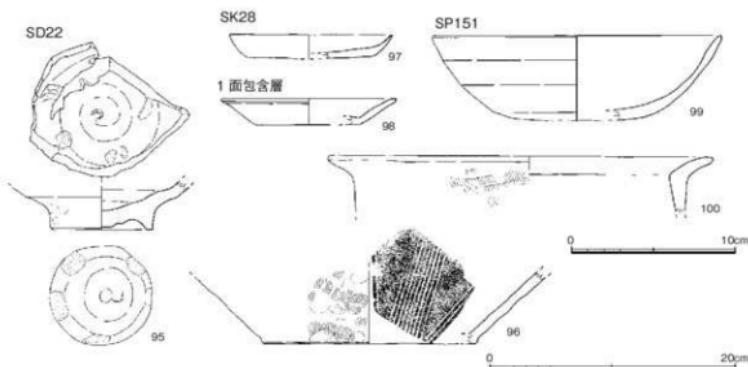
81・82は同安窯系青磁皿I-2b類の底部片。内面見込みにヘラ描き文と櫛点描文を施す。釉は全



第18図 SD20出土遺物実測図2 (93・94は1/4、その他は1/3)



第19図 SK25・28実測図 (1/40)



第20図 SD22, SK28, SP151, 包含層出土遺物実測図 (96は1/4、その他は1/3)

体にかけた後、底部のみ焼き取る。81は釉はガラス質であるが、やや発色が悪い。貫入なし。82は釉に透明感がなく、見込みには釉溜まりが見られる。外底部には砂目が残る。また、ビンホールが多く見られる。

83は土師質の土鍋。口縁端部に耳部を貼り付け、工具で丁寧に穿孔する。外面は全体に縦方向のハケ目、中位のみ横方向のハケ目を施したのちナデ消す。内面には横方向のハケ目がよく残る。外面口縁付近にはススが付着する。

84・85は平瓦片。84はいわゆる「怡土城系」瓦で、凸面に綱目が残り、側面は面取りされる。厚さ4.8cm。一部に二次被熱による変色が確認される。85は凸面に元岡A1類の叩打痕、凹面に粗い布目圧痕を残す。胎土には多量の白色砂粒のほか、褐色砂粒や角閃石を少量含む。焼成は軟質。

86～89は土師器。86は甕の口縁～頸部片。外面には縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整で口縁部のみ横方向のハケ目を残す。87は甕の口縁～頸部片。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のケズリ、口縁部内面には横方向のハケ目を残す。88は高杯の坏部。口縁はやや外反し、底部にかけて厚くなる。口縁端部にはV字状の欠損部があるが、内側からの力により生じたもので、意図的な打ち欠きの可能性もある。89は土師質土器・塊の底部。

90～92は須恵器。90は坏身（あるいは蓋か）。底部はヘラ切り未調整。外面に自然釉がかかる。91は坏蓋。端部は断面三角形。胎土は精緻で焼成はややましい。92は蓋か。破片のため、傾きには若干の不安がある。端部の断面は三角形で焼成はましい。

93・94は土師器・懶の把手部。指や工具により粗く成形される。

SD22（第13図）

3区の西側に位置する溝で、第1面で検出した。SD20と直交し、それを切る。また、南側ではSK25に切られるが、調査者の見落としにより掘削途中でその存在に気付いた経緯がある。長さは10.2m分を検出し、幅3.6m、深さは75cmを測る。覆土は粘質土と砂質土が互層状に堆積し、北から南への水流が想定される。

陶磁器や瓦質土器が出土したが、遺物は非常に少ない。

出土遺物（第20図）

95は白磁碗の底部。内面見込みと疊付に目跡が残る。釉は高台内部にまで及び、疊付の釉は一部削り取る。全体に釉のかかりが均一でない。

96は瓦質土器・捕鉢の底部片。外面は斜方向のハケ調整後、ナデ。内面はミガキ風に横方向に条痕が残る。内面の擂り目は9本単位。全体が焼成され黒色化する。

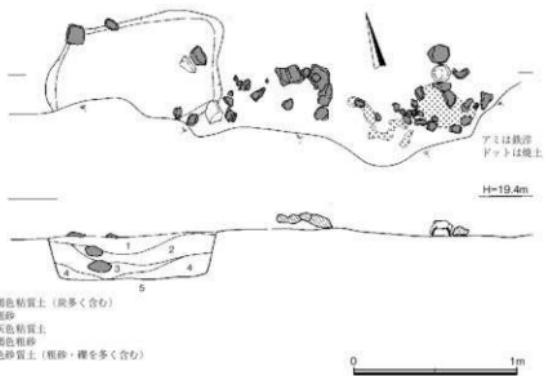
土坑

SK25（第19図）

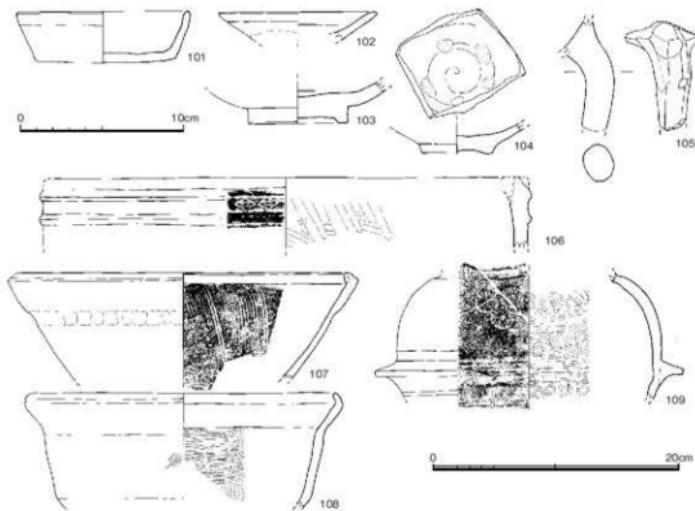
3区SD22の掘削中に認識した円形の土坑で、SD20・22を切る。直径2m、残存の深さは1.55mを測る。覆土は地山が崩落したブロックや、粘質土と砂質土の互層状堆積が見られる。遺物は出土しなかった。

SK28（第19図）

3区の南東部に位置する土坑で、SX24第1面で検出した。長さ1.95m以上、幅は2mを測り、残存の深さは86cmを測る。上層には厚く粗砂が堆積し、下層までシルトと粗砂が細かく互層状に堆



第21図 SX29実測図(1/30)



第22図 SX29出土遺物実測図(105～109は1/4、その他は1/3)

積する。

遺物は土師質土器が数点出土したのみで、非常に少ない。

出土遺物（第20図）

97は土師質土器・皿。口縁部は器壁が2mmと非常に薄い。外底部はヘラ切り。

不明遺構

S X 2 9 （第21図）

3区の南東側、SX24の西側に位置する。現代の盛土直下で検出され、地山に掘り込まれた隅丸方形の土坑と浅いくぼみで構成される。土坑内やくぼみには鉄滓が広がるため、製鉄や鍛冶関連遺構かと考えたが、被熟面がないことから、二次的に集積したものと考えられる。

遺物は、土師質土器や陶磁器、瓦質土器などが出土した。

出土遺物（第22図）

101は土師器・壺。体部は直立気味で、外底部には板状圧痕を残す。

102は白磁皿の口縁部。内面に1条の沈線が巡り、見込みの釉は削り取られる。貫入はなく、ピンホールが内外に数か所見られる。

103は龍泉窯系青磁碗の底部。高台の削り込みは浅く、底部が分厚い。高台内部と疊付部は露胎。

104は朝鮮陶器・皿の底部。内面見込みに目跡が残る。高台内部にまで釉が及ぶが、疊付部は釉を削り取る。釉は一部光沢があるが、全体的にザラついている。

105～109は瓦質土器。105は足鍋の脚部。胴部、脚端部は欠失。全体はナデにより成形される。

106は火鉢の口縁部。外面はヨコナデ成形後、二条突帯間に菱形文のスタンプを押す。内面はハケ調整後、ヘラナデ。外面は二次被熱により黒変する。107は擂鉢。口縁端部は内側に折り曲げる。擂り目は9本単位。108は鍋。体部は直線的で、口縁部は2重口縁状に「く」字状に丸く仕上げる。内外面ともにハケ調整後、ナデ消す。外面にはススが付着する。109は羽釜の胴部。肩部に花文のスタンプを押す。内面には横方向のハケ目と指頭圧痕が強く残る。

土器溜り

S X 3 2 （第24図）

SX24の第3層で検出された浅いくぼみで、長さ2m、幅4.1m、深さ10cmの範囲で確認された土器溜りである。人為的に投げ入れたというより、くぼみに自然に堆積したものと考えられる。

遺物は、土師質土器や須恵器などが出土した。

S X 3 2 出土遺物（第25図）

110～117は土師質土器・壺。ロクロ成形後、111・112・115～117は外底部ヘラ切り、それ以外は不明である。また、117の外底部には板状圧痕が残る。

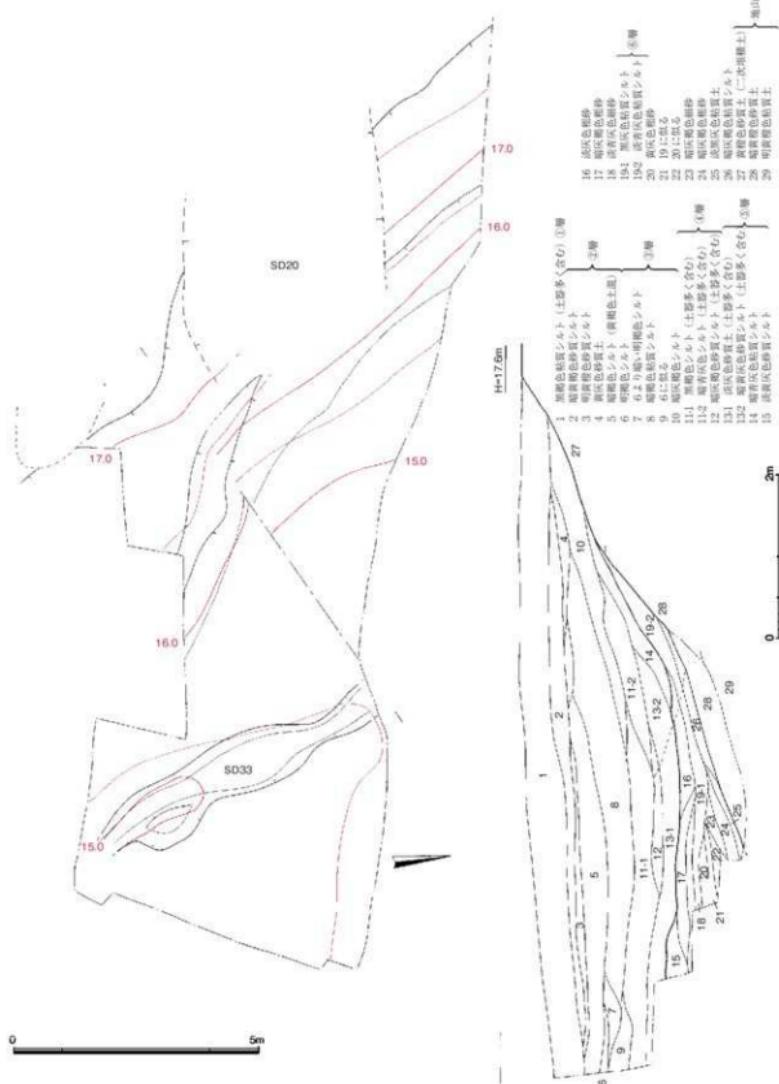
118～121は皿。全体をロクロ成形後、外底部をヘラ切り。120の外底部には板状圧痕が残る。

122は塊の底部片。底部はやや丸みを帯び、高台端部が外反する。

123は須恵器・椀の底部。ロクロ成形後、外底部をヘラ切りし、断面台形の高台を貼りつける。

124は土師質土器・甕の口縁部。口縁端部にいくつれ器壁が薄くなる。外面はハケ調整で、全体にススが付着する。また、口縁端部は二次被熱により赤変する。

125は土師器・小型甕。胴部は直線的だが中位付近でやや膨らみ、底部は丸底を呈す。口縁部は短く外反する。外面には粗いハケ目状の調整、内面には斜め方向のケズリを施す。外底部は全体的に被



第23図 SX24実測図 (1/100) および土層断面実測図(1/60)

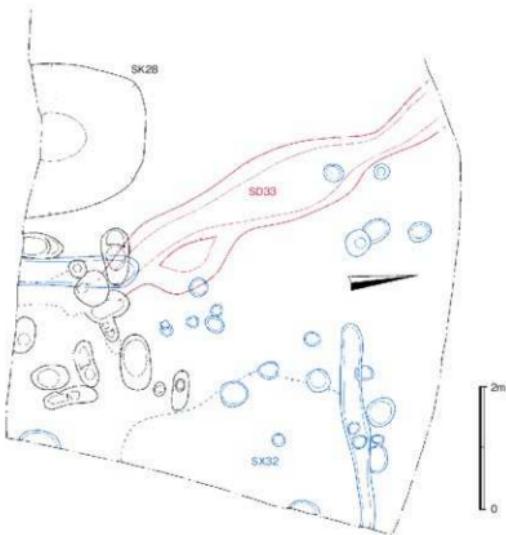
然し、器壁が脆い。

126は甕の口縁から頸部片。口縁は「く」字状に大きく開き、体部は直線的である。外面に綫方向のハケ目、内面には斜方向のヘラ削りを施す

谷

S X 2 4 (第23・26図)

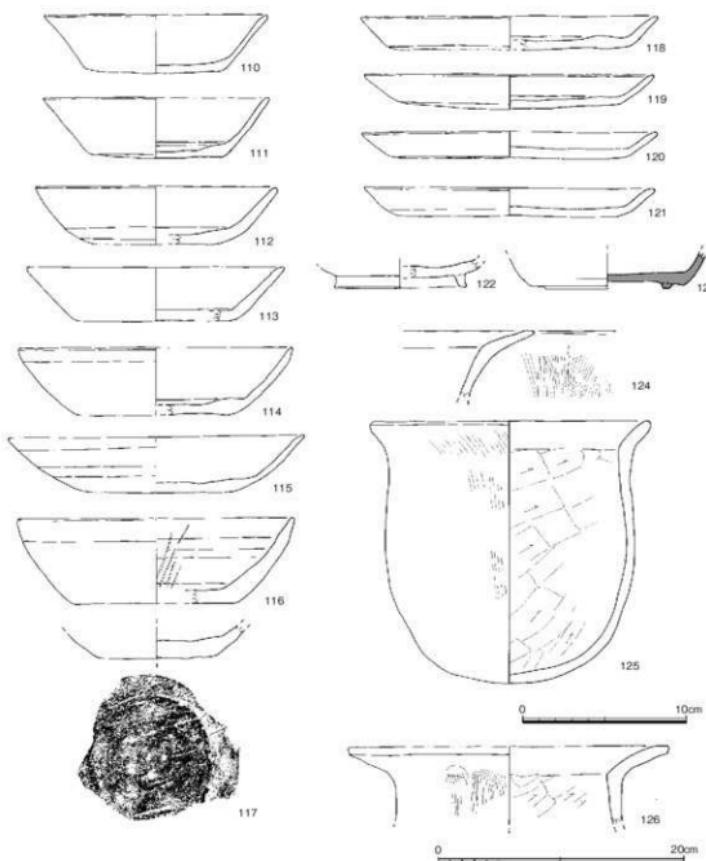
3区の東端に位置し、第31次調査区から続く谷の一部を検出した。長さ3.2m分を検出し、その深さは2.6mに及ぶ。まず、直交方向にトレンチを設け、土層確認を行った。土層断面図では細かく分層したが、大きくみると5層に分けられる。第1層は黒褐色土で、土師質土器等の破片を多く含む。第2層は黄褐色系で、遺物はほとんど含まない。第3層は明褐色系の土で、須恵器や土師質土器を含む。第4層は黒褐色から暗灰褐色で、古墳時代の土師器・須恵器を多く含む。第5層は灰色から黄灰色を呈し、やはり古墳時代の土師器・須恵器を含む。実質、第4層と5層から出土した遺物は残りがよく、両層にまたがるもののが多かったため、遺物の取り上げ時に両者の区別はできていないが、それほど時期差はないと考えられる。



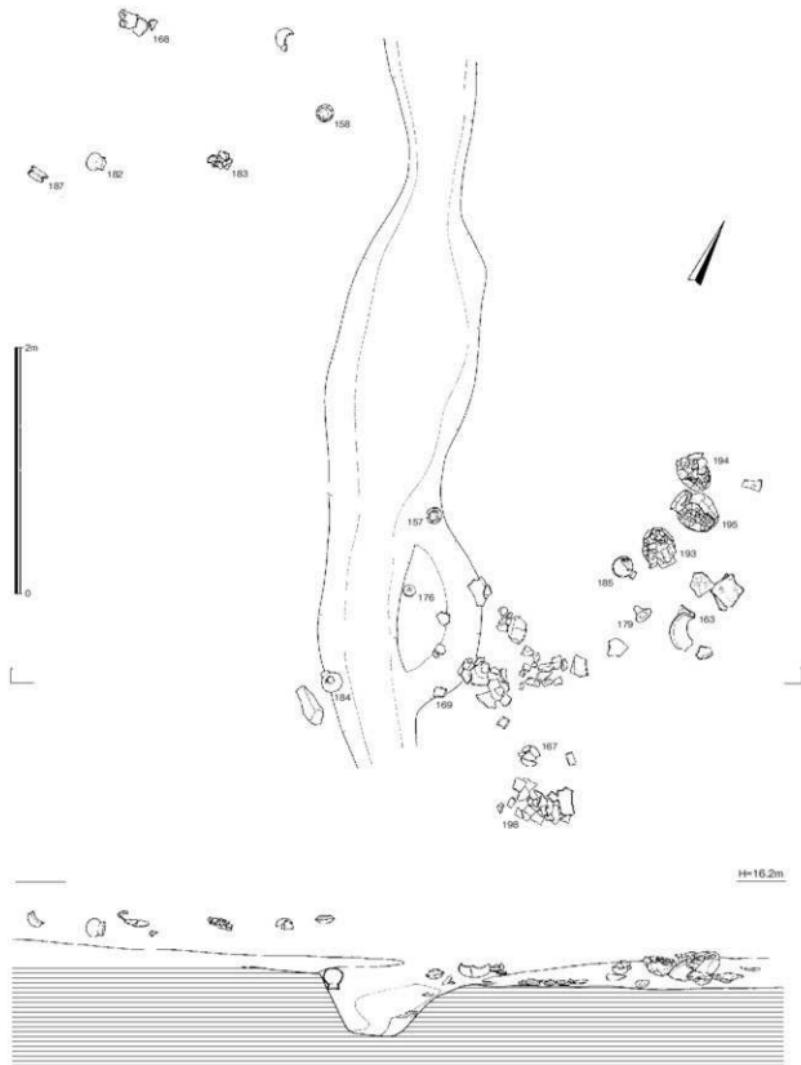
第24図 SX24内構造実測図(1/80)

土層を確認後、層ごとに掘り下げながら遺構検出を行った。第1層・3層・5層上で遺構が検出された。第1層上面ではSK28や数基のピットを確認したが、掘立柱建物の検出には至らなかった。第3層上面では、土器溜りSX32を検出した。さらに、第5層上面では、SD33を中心に基壇時代の祭祀遺構を検出した。

SD33は、長さ5.65m分を検出し、幅1.35m、深さ57cmを測る。谷の流れと並行しており、谷の最下層を細く流れる溝と考えられる。覆土は粗砂や砂質土を主体とし、溝の内部からも遺物が出土した。溝の東側で甕や壺類が集中して検出されたこと、その土器内の堆積土を洗浄した結果、滑石製の白玉が多数見つかったこと、さらに意図的に穿孔された壺類（第29図182・184）が見つかったこ



第25図 SX32出土遺物実測図 (1/3・126のみ1/4)



第26図 SX 24遺物出土状況実測図 (1/40)

とから総合的に判断すると、谷内のSD33を中心に何らかの祭祀行為が行われたと推測される。

遺物は、古墳時代から古代まで、土師器・須恵器・土師質土器等が多数出土した。

出土遺物（第27～33図）

＜1層＞

127～136は土師質土器。127～129は壺。ロクロ成形後、外底部をヘラ切り。127の外底部には板状圧痕を残す。131～134は壺。131～133はいずれも底部が広く平らで、高台は131は太く、132は接地面にいくにつれ細くすぼまり、133は太く外反する。134は底部が丸みを帯び、高台は逆台形を呈す。133は黒色土器A類で内面に横位のミガキを施す。134は黒色土器B類で、内外面ともにミガキを施すが、外面の黒色化は全面に及んでいない。135・136は皿。135は底部がやや厚く、体部は短く外傾して、口縁部を丸く收める。外底部にはヘラ切りの痕跡を残す。136は体部がやや外湾気味に立ち上がるが、高さが揃っていない。底部にはヘラ切りの痕跡を残す。

137は須恵器・蓋。天井は低く平坦で、口縁端部は断面三角形をなす。天井部はヘラ切り未調整。

138・139は須恵器・壺。138は体部から口縁まで直線的に外傾し、器高が5.5cmと高い。底部は広く平坦である。高台は断面方形でやや外に開く。139は体部中位で若干屈折する。

140・141は土師器・壺。ロクロ成形後、外底部をヘラ切り、断面台形の高台を貼り付ける。140は体部が直線的で、高台が外湾する。141は体部がやや内湾し、高台が低い。

142は土師器・小型丸底壺で、頸部以上を欠失する。胴部は球形だが、胴部最大径は中位より上にある。外面にはやや粗めのハケ目が、内面はヘラケズリを施す。胴部中～下位に幅5cmほどの黒斑が残る。また器壁は全体的に赤色化しており、赤色顔料が施された可能性もある。

＜3層＞

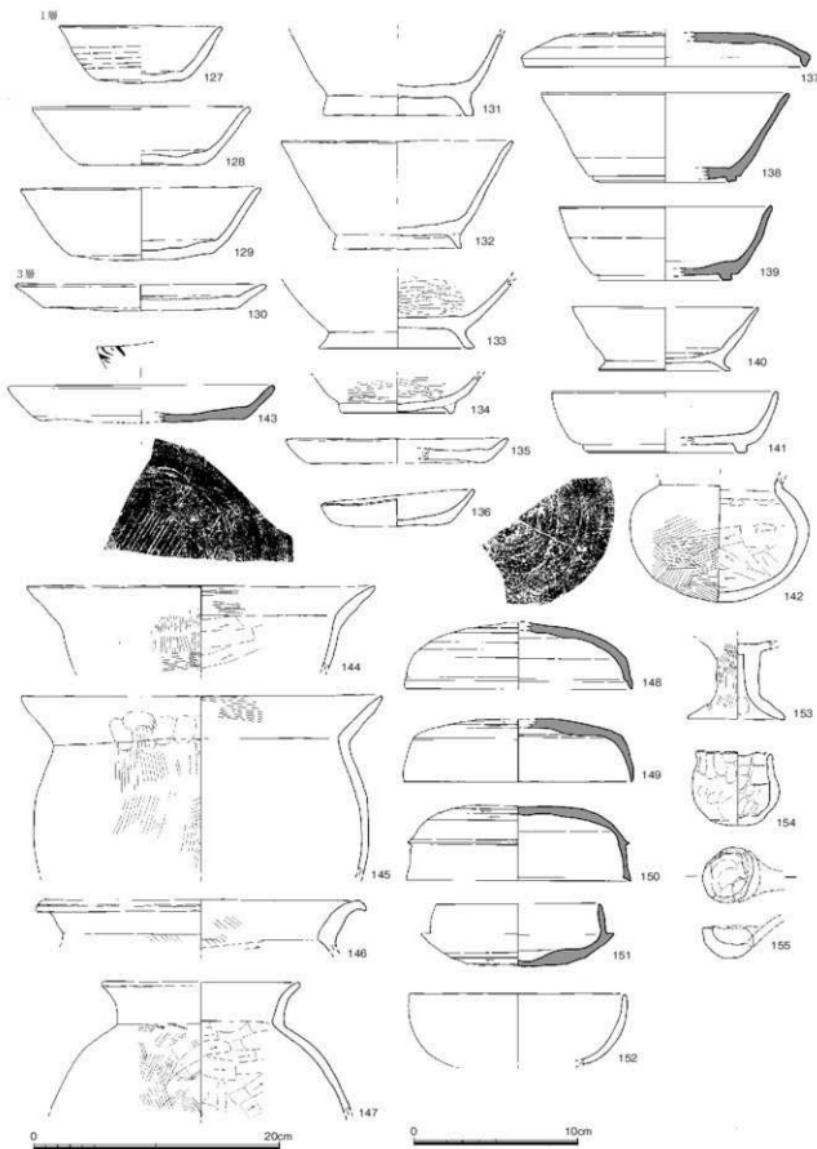
130は土師器・皿。ロクロ成形後、底部をヘラ切りする。

143は須恵器・皿。ロクロ成形後、ヘラ切りする。外底部には板状圧痕を残す。内底部は研磨により表面が滑らかで、一部に墨の痕跡が見られることから、転用硯の可能性がある。

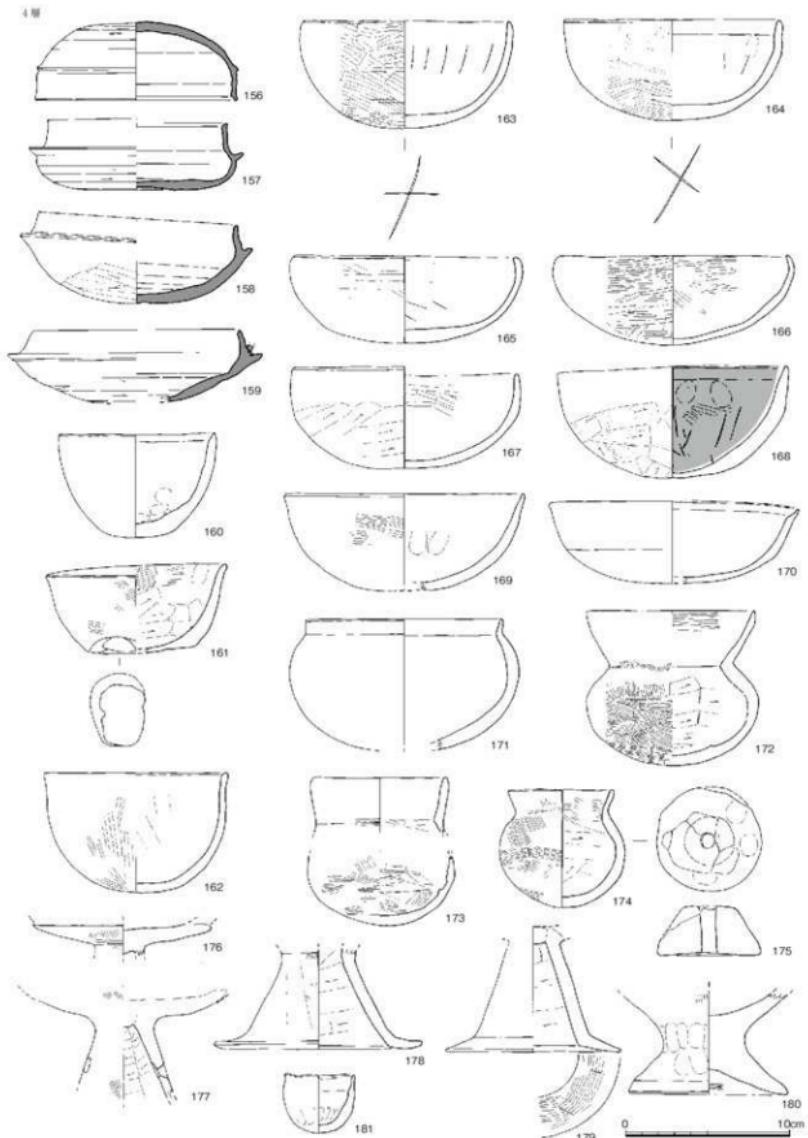
144～147は土師器・甕。144は口縁部片。口縁部が大きく外傾するが、胴部は内傾する。外面には粗いハケ目、内面には横位のヘラケズリを施す。145は口縁～胴部片。口縁部が大きく外傾し、内面には横位のハケ目を施す。外面は縦位の粗いハケ目を施す。146は口縁部片。口縁は大きく外傾し、端部は強く外反する。内面にはハケ目が一部に残る。147は口縁部が外反し、頸部はすぼまり、胴部にかけて大きく膨らむ。外面には縦位のハケ目、内面は横位のヘラケズリ。

148～151は須恵器。148～150は蓋。148は口縁端部内面に段を有し、体部はやや扁平氣味である。天井部はヘラ切り未調整で、ヘラ記号が見られる。また、天井部全体に灰かぶりが見られる。149は体部が直立氣味で、天井が広い。天井部はヘラケズリを残す。150は天井が高く、肩部下には突起が巡り、口縁端部内面に段を有す。天井部はヘラ切り未調整。151は須恵器・蓋壺の身。口縁部は直線的に立ち上がり、受け部は平坦なテラス状を呈す。外底部にはヘラケズリを残す。外面は受け部以下に灰かぶりが見られる。152は土師器・壺。

153・154はミニチュア土器である。153は高壺の脚部で、筒部が細長く、脚端部は外方に広がる。全体を手捏ねで成形後、外面をハケ調整する。154は橢形を呈し、胴部は丸みを帯び、口縁部はやや内傾する。全体を手捏ねで成形するため、指頭痕が強く残る。胴部下位に幅4cmほどの黒斑が残る。155は杓子。手捏ね成形されたため指頭痕が強く残る。



第27図 SX24出土遺物実測図1 (144・147は1/4、その他1/3)



第28図 SX24出土遺物実測図2 (1/3)

< 4層以下 >

156～159は須恵器。156は蓋坏の蓋。天井は高く、丸みを帯び、全体にヘラケズリが残る。肩部には沈線を巡らせて段を作る。口縁端部は内面に鉤状の段を有す。157～159は蓋坏の坏身。157は口縁部が高く直立し、口縁端部内面に段を有す。受け部も比較的長い。体部は浅く、受け部下が外に大きく膨らむ。底部は広く、平坦である。外面底部には回転ヘラケズリが残る。158は口縁部がやや外反し、体部から底部にかけては丸みを帯びる。内面には回転ナデが観察されるが、外面は手持ちヘラケズリを施す。全体に赤みを帯び、焼成不良あるいは意図的に赤く焼成したか。159は口縁部が内傾し、受け部は上方に上がる。体部中位より下はヘラケズリが残る。受け部付近には重ね焼きした際に付着した蓋の口縁端部が広範囲に見られる。

160～199は土師器。

160～162は鉢。160は丸底で、体部は丸みを帯びる。口縁端部は内面に段を設ける。全体をナデ調整する。外面には黒斑が残る。161はほぼ完形。平底で、体部は外湾するが口縁部付近で一度内湾し、口縁端部は外反する。外面はハケ目調整後ナデ、内面下位はヘラケズリ、上位はハケ目を施す。底部には2.5×4cmほどの孔が開くが、意図的なものかは不明。162は口縁部がやや内湾しつつ端部付近で外反する。体部は丸みを帯びる。外面は粗いハケ目、内面に工具痕を残すが、磨滅が著しい。

163～170は椀。口縁部は、163・164・168・169は直立、165～167は内湾、170は内面に段を有す。体部はいずれも丸みを帯び、底部も丸底である。外面調整は、163・165・166はヘラミガキ、167・168はケズリ、164・169はハケ目を施す。内面調整は、165～168はヘラミガキが施され、163～165には縱方向にヘラ状の工具痕が確認できる。168の内面は全面が黒色化して光沢を帯びる。また、163・164の外底部には「×」形のヘラ記号が見られる。

171は鉢。口縁は短く直立し、体部は丸みを帯び、胴部上位で最大径を測る。全体をナデ調整する。

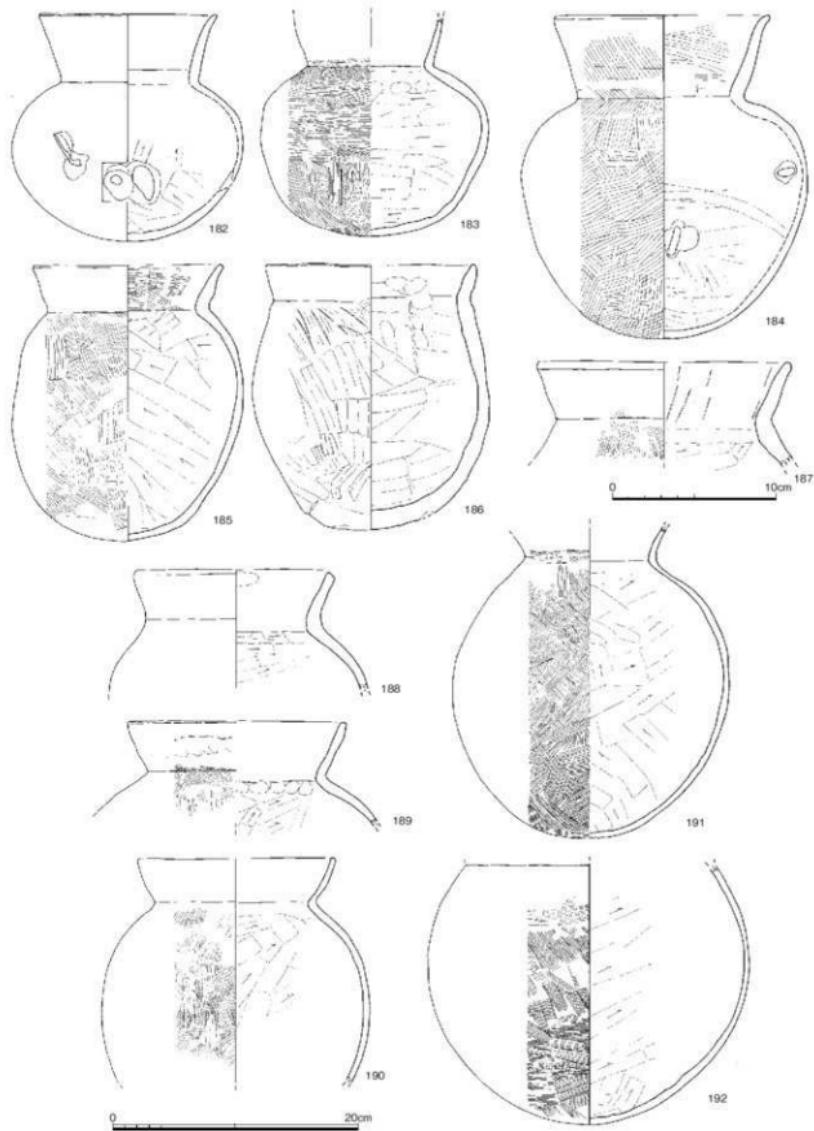
172～174は小型丸底壺。172は完形。口縁部はやや内湾しながら外に開き、胴部は肩がやや張る。胴部外面には縱→横方向のハケ目が密に残る。胴部内面はヘラ削り、口縁部内面は工具でナデする。173は接合しないが同一個体である。頭部は直立し、胴部はやや横長の球形を呈す。外面にはハケ目が残り、内面は密にヘラケズリを施す。174は完形。口縁部は短く直立し、胴部は球形をなす。外面はハケ調整後ナデ、内面はヘラケズリを施す。

175は土製の紡錘車。直径6.2cm。全面をナデ調整し、指頭痕を残す。

176～180は高坏。176は坏部の底部片。坏部上位との接合面で剥離する。外面には粗いハケ目が残る。177は坏部下位～筒部片。筒部には2か所穿孔があるが、そのうち1箇所は貫通していない。外面は全体にナデ調整するが、一部にハケ目が残る。178・179は坏部を欠失する。筒部は直線的に外傾し、端部では外方に鈍角に折れ、幅3cmほどの平坦面を作る。179の脚端部内面はハケ調整、筒部内面は横位のヘラケズリを施す。180は器台状の脚部で、筒部が短く厚い。ナデと指押さえで調整する。

181は楕形のミニチュア土器である。胴部は丸みを帯びるが、口縁部は直線的に立ち上がる。

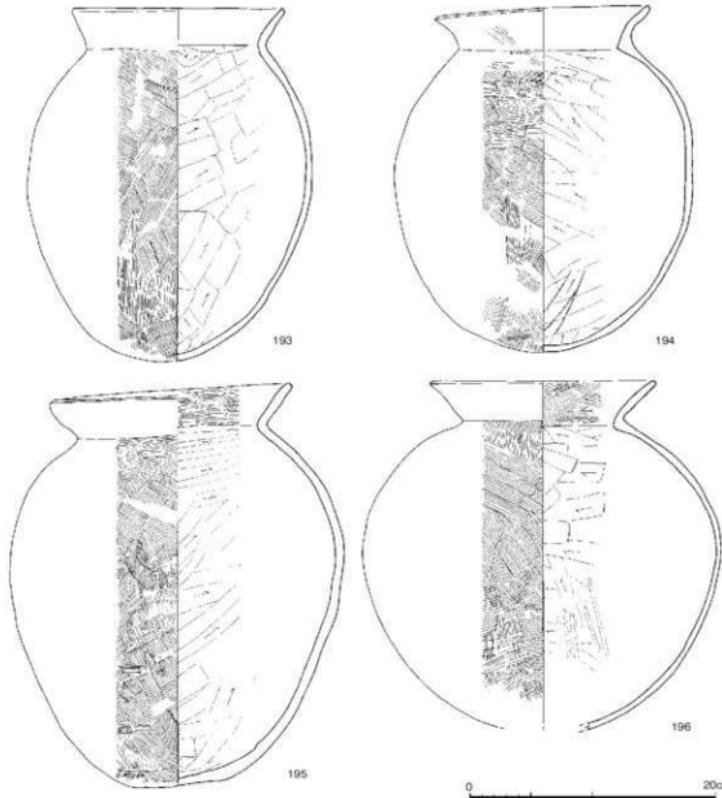
182～184は丸底壺。182は口唇部をやや欠くがほぼ完形品である。頭部は外方にむかって開きつつ、口端部はやや外反する。胴部は球形で、胴部中位よりや上まで最大径を測る。外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリで調整する。胴部には計4か所に外側からの焼成後穿孔が見られる。孔の形状は円形・楕円形・溝状など様々であるが、いずれも故意に穿孔されたものであろう。183は頭部がやや外湾しながら直線的にのびる。肩が張り、胴部は直線的に底部に向かって窄まり、底部は丸底を呈す。胴部外面は下半は縦位、上半は横位、肩と頭部の境は縦位の丁寧なハケ調整を施し、内面は横位のヘ



第29図 SX24出土遺物実測図3 (188~192は1/4、その他は1/3)

ラケズリを施す。184はほぼ完形品。頸部は外湾しながら外側に開き、口端部は外反する。胴部は肩が張りながら胴部上位で最大径となり、底部にむかって緩やかに窄まる。外面はやや粗目のハケ調整、内面はヘラケズリを施す。外面には黒斑が2か所、対称位置に残る。182と同様に、胴部に計2か所の穿孔が見られる。いずれも外側からの焼成後穿孔で、幅5mm、長さ2cmを測る。

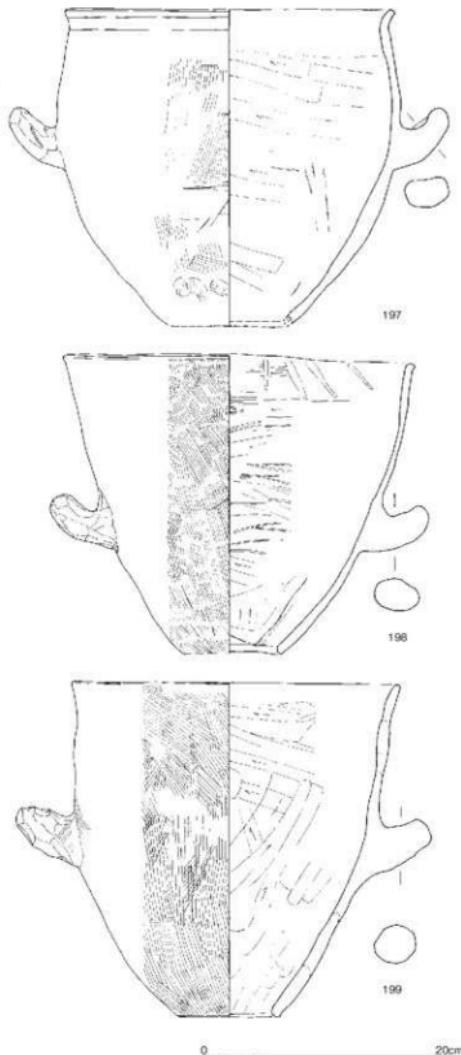
185・186は小型甕。185は口縁部が外傾しながら直線的に伸び、胴部は綫長の球形で、中位よりやや上で最大径を測る。外面は綫位のハケ目、内面は斜位のヘラケズリを施す。胴部外面全体に幅6cmほどの黒斑が残る。186は短い口縁はやや外傾し、胴部は最大径が中位より下にくる。外面は綫方向の粗いハケ目、内面は密にヘラ削りを施す。胴部下位には黒斑が帯状に巡る。



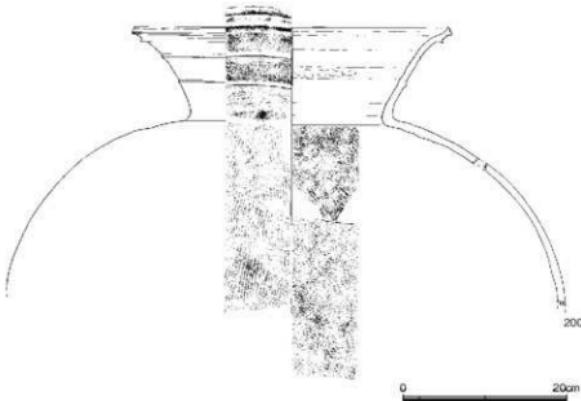
第30図 SX24出土遺物実測図4 (1/4)

187～196は大型の甕。187は口縁部が長く、外傾しながら直線的に伸びる。外面はハケ目、内面には横位のヘラケズリを施し、口縁部内面には工具痕が縦方向に筋状に残る。188は口縁部はやや外反し、口縁端部は角張る。全体的に器壁が厚い。胴部外面は工具ナデ、内面は横位のヘラケズリを施す。189は口縁～肩部で全周残る。頭部はやや内湾し、口縁部にかけて器厚が増す。胴部外面は縦位のハケ調整、内面は斜位のヘラケズリを施す。頭部と口縁部の境付近に粘土の繼ぎ目が観察される。

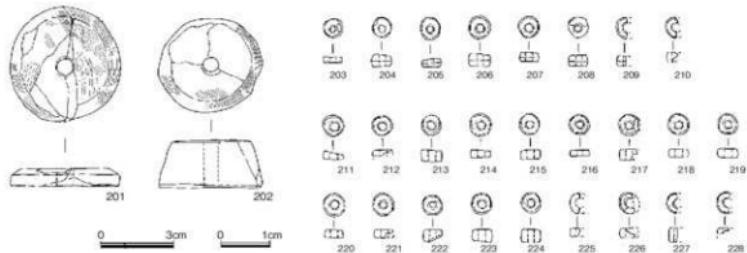
190は底部を欠失する。口縁部はやや外湾し、胴部は卵形を呈す。外面は縦位のハケ目、内面は斜位のヘラケズリを施す。胴部外面中位付近には黒斑が広がるとともに、ススが付着する。191は胴部は長卵形を呈し、口縁部は外反しながら直線的に伸びる。外面は全体に丁寧なハケ調整、内面は斜位のヘラケズリを施す。胴部の中位の一部に黒斑が残る。192は胴部のみ残存。球形を呈し、外面は目の細かいハケ目、内面は斜位のヘラケズリを施す。器壁が非常に薄い。胴部中位に幅6cmほどの黒斑が残る。外底部全体にススが付着する。193は半周残存する。口縁部は直線的に外傾し、胴部は卵形を呈す。外面は粗めのハケ目、内面はヘラケズリを施す。外面部下半にススが付着する。194は口縁部が大きく外反し、胴部は縦長の球形を呈す。外面はやや粗めのハケ目、内面はヘラケズリを施す。胴部中位付近には黒斑が帯状に



第31図 SX24出土遺物実測図5 (1/4)



第32図 SX24出土遺物実測図6 (1/6)



第33図 SX24出土遺物実測図7 (201・202は1/2、その他は1/1)

第1表 玉類計測値一覧

番号	出土遺構	直徑(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	番号	出土遺構	直徑(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)
203	SX24 R-17 (第30図193)	4.0	1.0	1.0	216	SX24 R-18 (第29図185)	4.0	1.5	1.0
204	"	4.0	1.0	3.0	217	"	(3.7)	1.0	2.1
205	"	4.0	1.0	2.0	218	"	4.0	1.2	1.7
206	"	4.0	1.0	3.0	219	"	4.0	1.5	2.0
207	"	4.0	1.0	2.0	220	"	4.0	1.5	1.7
208	"	4.0	1.0	2.0	221	"	4.0	1.5	2.0
209	"	—	1.0	2.0	222	"	4.0	1.5	2.1
210	"	—	—	2.0	223	"	4.0	1.5	2.7
211	SX24 R-18 (第29図185)	4.0	—	2.0	224	"	4.0	1.5	2.9
212	"	4.0	1.5	—	225	"	—	—	1.7
213	"	4.0	1.5	2.1	226	"	(4.0)	—	2.0
214	"	4.0	1.5	2.0	227	"	—	—	3.0
215	"	4.0	1.5	2.0	228	"	—	—	—

2/3周巡る。また、内面は底部から胴部中位付近まで黒色化する。195はほぼ完形。口縁部は直線的に外傾し、端部は角張る。胴部は逆卵形で、底部はやや平底氣味である。外面には丁寧なハケ調整、内面には斜位のヘラケズリを施す。胴部下位から底部にかけて黒斑が残る。

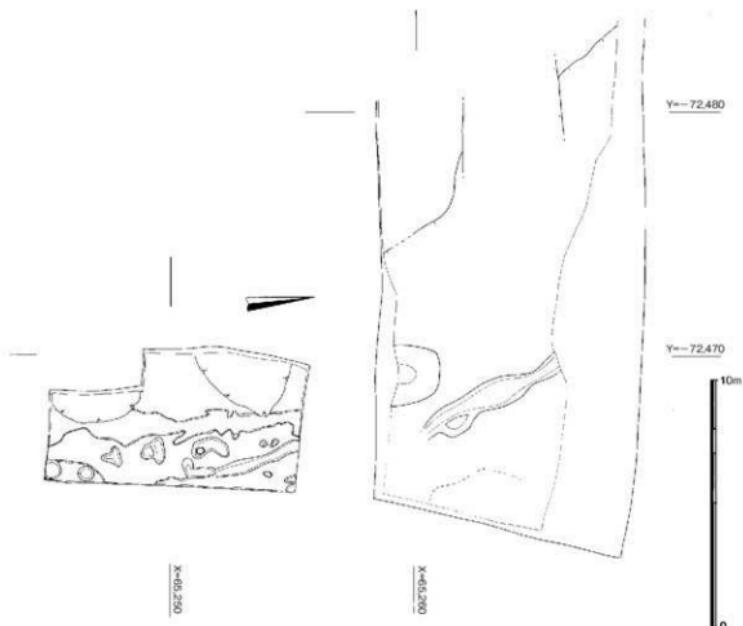
196は口縁部が大きく外反し、胴部は球形を呈す。外面は丁寧なハケ調整、内面はヘラケズリを施す。胴部上～中位にかけて幅15cmほどの黒斑が残り、その対称位置にも径2.5cmの黒斑がある。

197～199は単孔式の壺。口縁部は、197はゆるやかに外湾、198は直立、199はゆるやかに外反する。体部は197は丸みを帯びるが、198・199は直線的である。いずれも外面は縦位のハケ目、内面はヘラケズリを施す。

200は須恵器・大型壺の口縁～胴部中位。口縁下部から頸部には3条の突帯を這らせ、その間の2列に柳状工具で波状文を施す。胴部外面は縦方向の平行文叩き、内面には同心円文の当て具痕を残す。焼成は堅緻。

201・202は滑石製の紡錘車。全体を研磨により仕上げ、中央には回転により穿孔を施す。201は直径3.85～4.2cm、高さ1.9cm、孔径6mm、重量44.2g。202は直径4.55～4.65cm、高さ0.75cm、孔径7mm、重量43.6g。

203～228は滑石製の白玉。203～210は193の壺、204～228は185の小型壺の内部から検出した。直径4mm、孔径は1.0～1.5mm、厚さは1～3mmを測る。



第34図 4区全体図 (1/200)

その他の遺構出土遺物（第20図）

98は第1面中から出土した同安窯系青磁皿。内面見込みに櫛書き文を施す。釉は外底部にまでおよび、外面にはピンホールが目立つ。

99・100は第2面で検出されたP151出土。99は土師質土器・碗。底部は平底で、口縁端部は丸く收める。100は弥生土器・甕。「く」の字口縁で、外面には縦方向のハケ目を残す。口縁下には部分的にススが付着する。

（3）4区の調査（第13図）

4区は3区の南側に位置し、前述のように、調査後の漏水対策のための排水溝掘削に伴って行った確認調査区である。調査は、溝の掘削深度（GL-60～100cm）で留め、それ以下の確認は行っていない。位置関係からみて、4区にはSX24の延長が現れるはずであるが、今回の掘削深度はそこまで及んでいない。目立った遺構の検出はなかった。

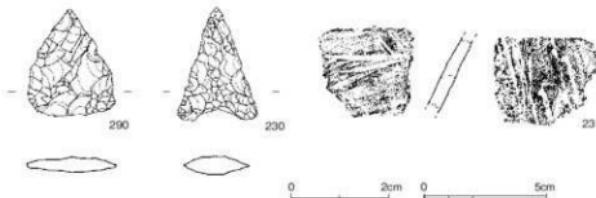
その他の出土遺物（第35図）

石器

229・230は黒曜石製の石鎌である。229はSX001の1層から出土した。平基で、三角形を呈す。長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ2.5mmを測る。230はSX24の第4層出土。凹基で、二等辺三角形を呈す。長さ2.2cm、幅1.55cm、厚さ3.5mmを測る。

縄文土器

231は鉢形土器の胴部片。外面には貝殻条痕、内面には横方向のミガキを施す。



第35図 その他遺物実測図（1/1・1/3）

3 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

1)はじめに

糸島半島に位置する元岡・桑原遺跡群の第59次発掘調査では古墳時代以降の焼土坑などが検出された。この焼土坑の時期を明らかにするために、遺構から採取された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。また、同一試料を用いて樹種同定が行われている（(2) 項参照）。

2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

焼土坑SK006の奥側（③区、燃焼部）最下層から炭化材1点が採取された（PLD-23095）。炭化材は最終形成年輪を有し、樹種はコナラ属クヌギ節である。なお、炭化材の遺存状態は良好であった。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第2表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-23095	遺跡名：元岡・桑原遺跡群第59次 遺構：SK006(③区、燃焼部) 層位：最下層	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 採取位置：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・機洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）

3) 結果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第36図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1σ暦年代

第3表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-23095	-29.19 ± 0.21	1225 ± 20	1225 ± 20	723AD(11.4%) 740AD 770AD(42.0%) 826AD 840AD(14.7%) 863AD	709AD(19.2%) 747AD 766AD(76.2%) 882AD

範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4) 考察

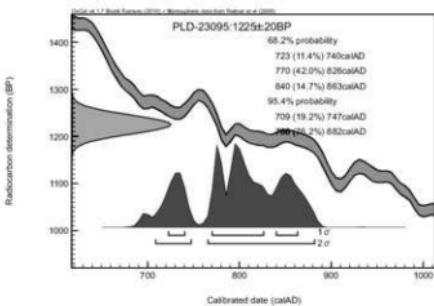
焼土坑SK006の奥側（③区、燃焼部）最下層から採取された炭化材（PLD-23095）は、709-747 cal AD(19.2%)および766-882 cal AD(76.2%)で、8世紀初頭～9世紀後半の年代を示した。これは飛鳥時代末～平安時代前期に相当する。

（参考文献）

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一（2008）繩文時代の暦年代。小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「繩文時代の考古学2 歴史のものさし」:257-269、同成社。
- 小林達雄編（2008）総覧繩文土器、1322p、アム・プロモーション。
- 工藤雄一郎（2012）旧石器・繩文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—、373p、神泉社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20、日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

文責：パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadidze・Inea Jorjoliani・中村賢太郎・小林克也



第36図 暦年較正結果

(2) 樹種同定

1) はじめに

糸島半島に所在する元岡・桑原遺跡群の第59次調査で、木炭を生産していたと考えられる焼土坑から出土した炭化材について、樹種同定を行なった。なお、試料のうち1点については放射性炭素年代測定も行われている（前項参照）。

2) 試料と方法

試料は、焼土坑であるSK002から1点、SK003から2点、SK004から2点、SK006から2点、SK008から3点の、計10点の出土炭化材である。SK002以外の焼土坑では、燃焼部付近を①、焼成部付近を③と区分して分けて取り上げられている。遺構の時期は、いずれも古代から中世の範囲内であると考えられている。また放射性炭素年代測定の結果では、SK006の③から採取された試料No.7は、8世紀初頭～9世紀後半であった（前項参照）。

計測可能な試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3) 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ）、シキ属（シキ属と呼ぶ）とコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、エノキ属、クマノミズキ類の計4分類群が産出した。クヌギ節が4点と最も多く、エノキ属が3点、アカガシ亜属が2点、クマノミズキ類が1点であった。

年輪計測の結果では、残存半径1.3cm内に4年輪みられた試料No.1のエノキ属のように、年輪幅が2~6mm程度の試料ばかりで、年輪幅の狭い試料はみられなかった。同定結果を第4表に、一覧を第5表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第37図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

i) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 1a-1c(No.2)

大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定が出来ない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属と考えられる。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強韌で耐水性があり、切削加工は困難である。

ii) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 2a-2c(No.3), 3a-3c(No.7)

第4表 炭化材の樹種同定結果

樹種	遺構 区分	SK002			SK003			SK004			SK006			SK008			合計
		—	①	③	—	①	③	—	①	③	—	①	③	—	①	③	
コナラ属アカガシ亜属	—	1									1			1	1	1	2
コナラ属クヌギ節					1						1			1	1	1	4
エノキ属	1					1		1									3
クマノミズキ類											1						1
	合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

Ⅲ) エノキ属 *Celtis* ニ科 4a-4c(No.1), 5a(No.4)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜め方向に断続的に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～2列が方形となる異性で、1～8列となる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬いが、まとまって生育しないため、現在では薪炭材などに利用される程度である。

iv) クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall. ミズキ科 6a-6c(No.6)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は10段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立となる異性で、1～5列となる。

クマノミズキ類にはクマノミズキとヤマボウシが含まれるが、材組織が類似しており、区別は困難である。そのため、両種を括ってクマノミズキ類とした。クマノミズキおよびヤマボウシは、温帯から暖帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが、一般に加工は容易である。

4) 考察

今回同定した材が出土した焼土坑では木炭焼成が行われていたと考えられており、一種の伏焼式の炭窯であったと想定される。SK003およびSK004、SK006、SK008では、燃焼部付近と考えられる土坑手前(①)に燃料材が、焼成部付近と考えられる土坑奥側(③)に炭製品が残っていると想定され、土坑手前(①)と土坑奥側(③)に分けて試料が採取された。しかし、燃焼部付近で出土する炭化材には、燃料材の他に炭製品の破片などをかき出した際の炭化材もまざっていると考えられる。したがって、今回の区分では、①の炭化材は燃料材または炭製品、②の炭化材は炭製品であったと考えられる。

同定の結果、SK002ではエノキ属が1点、SK003ではアカガシ亜属とクヌギ節が各1点、SK004ではエノキ属が2点、SK006ではクヌギ節とクマノミズキ類が各1点、SK008ではクヌギ節が2点とアカガシ亜属が1点産出した。産出したアカガシ亜属とクヌギ節、エノキ属、クマノミズキ類はいずれも重厚な樹種で、薪炭材に用いられ(伊東ほか, 2011)、特にアカガシ亜属とクヌギ節は炭化すると硬質になり、製炭に好まれる樹種である(樋口, 1993)。

土坑手前(①)と奥側(③)で分けて採取された焼土坑では、SK003で①からの材がアカガシ亜属、③からの材がクヌギ節、SK006で①からの材がクマノミズキ類、③からの材がクヌギ節であったが、SK004では共にエノキ属、SK008では共にクヌギ節がみられた。なおSK008では、区分けをされていない試料より、アカガシ亜属が1点みられた。以上の結果から、炭製品には、SK003およびSK006、SK008ではクヌギ節、SK004ではエノキ属が用いられていたと推定される。ただし、いずれも各箇所1点のみの同定であり、利用樹種の傾向までは確認できなかった。

また、SK006の③で出土したクヌギ節(試料No.7)およびSK008の①で出土したクヌギ節(試料No.8)は直径2cm、SK008から出土したアカガシ亜属(試料No.10)は直径3cmで、いずれも

小径木であった。ただ、試料は炭製品を回収された後の残渣であり、炭製品の原本および燃料材として小径木が多く利用されていたかどうかは不明である。

福岡県太宰府市の宝満山遺跡の23次調査で行われた製鉄・鋳造関連遺構出土の炭化材の樹種同定の結果によれば、8世紀前半のI区ではアカガシ亜属とクヌギ節、奈良・平安時代のII区ではクリとアカガシ亜属、平安～鎌倉時代のIII区ではシイ属とアカガシ亜属が多くみられ、薪炭材に適した樹種が多く確認された（植田、2002）。今回の元岡・桑原遺跡群第59次調査の焼土坑でも、宝満山遺跡と同様に薪炭材に適した樹種が多く確認され、同じような傾向が確認できた。遺跡周辺の森林より、薪炭材に適した樹種が選択利用されていた可能性が高い。

（参考文献）

樋口清之（1993）ものと人間の文化史71 木炭、286p. 法政大学出版局。

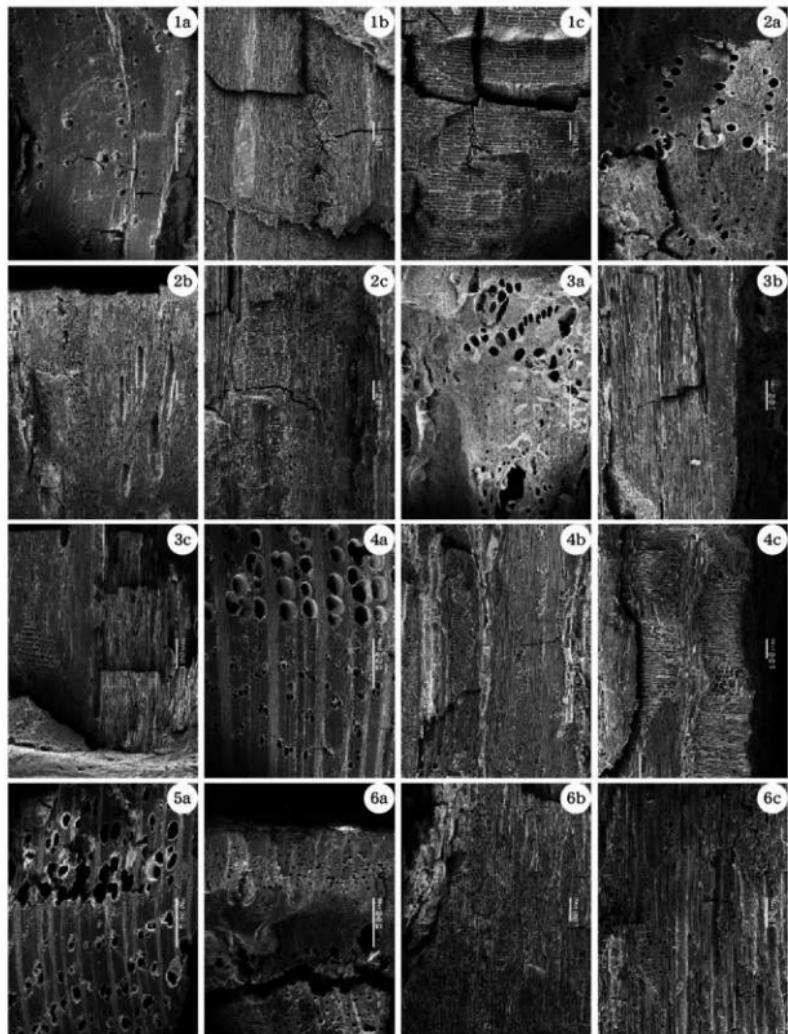
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p. 青海社。

植田弥生（2002）宝満山遺跡23次調査出土炭化材の樹種同定、福岡県教育委員会編「宝満山遺跡群田ノ浦遺跡III」：247-256、福岡県教育委員会。

文責：小林克也（パレオ・ラボ）

第5表 炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	出土遺構	区分	層位	樹種	直径(cm)	残存半径(cm)	残存年輪数	年代測定番号
1	SK002			エノキ属	-	1.3	4	
2	SK003	①		コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	
3		③		コナラ属クヌギ節	-	0.4	2	
4	SK004	①		エノキ属	-	1.3	2	
5		③		エノキ属	-	0.5	1	
6	SK006	①	最下層	クマノミズキ類	-	-	-	
7		③	最下層	コナラ属クヌギ節	2	0.9	3	PLD-23095
8	SK008	①	SK006 ①上層	コナラ属クヌギ節	2	0.3	2	
9		③	SK006 ③上層	コナラ属クヌギ節	-	-	-	
10				コナラ属アカガシ亜属	3	1.4	3	



第37図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c.コナラ属アカガシ亜属(No.2), 2a-2c.コナラ属クスギ節(No.3), 3a-3c.コナラ属クスギ節(No.7), 4a-4c.エノキ属(No.1), 5a.エノキ属(No.4), 6a-6c.クマノミズキ類(No.6)

a:横断面, b:接線断面, c:放射断面

4　まとめ

(1) 各遺構の所属時期と機能

元岡・桑原遺跡群第59次調査では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認された。ここでは、各遺構・遺物の所属時期やその意義について考えてみたい。

まず、最も古い遺物としては、1区谷SX01から出土した縄文土器片がある。外面に貝殻条痕を施す、晩期頃の深鉢と考えられる。今回の調査で縄文時代から弥生時代にかけての遺構は確認されていないが、近隣の第42次調査でもわずかながら晩期の土器片が確認されている(米倉編2012)。元岡・桑原遺跡群全体でみても、縄文時代晩期から弥生時代中期前半までの遺構・遺物は非常に少なく、この時期の様相については、まだ不明な点が多い。

続いて、古墳時代には、中期後半～末頃にSX24で祭祀行為が行われた。これについては、次項で検討する。

奈良時代以降になると、谷SX01の緩斜面を利用して、SX02・03・04・06・08・09の焼土坑で製炭活動が行われた。土器等の年代を示す遺物の出土はなかったが、最外皮の残る木炭を試料として、AMS年代測定を実施した結果、8世紀後半から9世紀後半、つまり奈良時代後半から平安時代前半にかけての時期に伐採されたものであることが分かった。

また、出土した木炭の樹種は、コナラ属アカガシ亜属とクヌギ節、ニレ科エノキ属であったことが分かった。いずれも炭化すると硬くなるため、炭としてよく利用される樹種だが、特にアカガシ亜属とクヌギ節は近世のたたら炭にも用いられていた。また、近隣の31次・41次・57次調査の成果から、当該時期にこの周辺で鉄・鉄器生産が盛んに行われていたことが分かっており、木炭生産はそれに伴って行われたものと推測される。古代における元岡・桑原遺跡群の歴史的意義を考える上で、鉄・鉄器生産は大きなキーワードとなるが、それを支える森林資源の維持・管理のあり方についても、今後検討していく必要があるだろう。

中世になると、大溝SD05が谷から丘陵斜面にかけて掘削される。溝は水の流れが激しく、出土遺物から溝の掘削時期を特定するのは難しいが、同安窯系青磁や、外面に鍋蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗などが主体となることから、12世紀後半から13世紀前半にその機能を果たしたものと考えられる。SD05は、北側丘陵斜面を流れてくるSD13・14と合流してSD20となり、まっすぐ東側へ流れる。その時期には、この元岡丘陵は古今津湾に面しており、SD20は海へと流れ込んでいた可能性が高い。

では、この溝が果たした機能とは何であろうか。調査当初は、山城の防御に関わる溝である可能性を想定し、溝が南側丘陵を切るように繋がっていくのではないかと考えていた。しかし、丘陵部のトレンチ調査で溝が丘陵を切断しないことが判明し、出土する遺物も中世前期のものであるため、山城に伴う溝ではないという結論に達した。

この一連の溝が、谷SX01を横断すること、水の流れが激しかったこと、海側へ流れていくことから総合的に判断し、谷内部へ流れ込む水を海へ排出するための溝だったと考えるのが妥当であろう。谷SX01内は今回調査対象外としたため様相は不明だが、31次調査の谷内では中世期の集落が確認されている。集落を守るために、大規模な排水装置を作ったのであろうか。課題は残る。

(2) 水辺のまつりについて

SX24は、31次調査区と繋がる谷路であり、古墳時代から古代にかけての遺物が多く出土する。なかでも、第4層の古墳時代中期の遺物には、多量の土師器や須恵器、ミニチュア土器、故意に穿孔

された壺、滑石製の白玉が含まれ、31次調査では滑石製子持勾玉や模造品が出土したことから、祭祀行為が行われたと判断される。土師器は重藤編年V期（重藤2009）、須恵器はTK47～MT15段階に相当し、5世紀後半から末頃の年代が与えられる。

遺物は大部分が4層中から出土したが、本来は5層上面で祭祀行為が行われ、遺物類が水の流れで動き、やや浮いた状態になって4層中に包含されたものと考えられる。SX24の土層断面をみると、断面V字形だった谷が5層上面ではかなり平坦化し、谷の中央部に細い流路SD33が形成される。おそらく、古墳時代以前は陥しい渓谷だったが、古墳時代中期後半段階では緩やかな谷川となり、中央に小川が流れる程度であったのだろう。当時の人々は、その小川のそばで「水辺のまつり」を行ったと考えられる。祭祀遺物は31次調査区から59次調査区までかなり広い範囲に分布しつつ、数か所の集中部が見られ、かつ遺物の時期に多少の幅があることから、まつりは数十年のなかで断続的に行われたと推測される。

市内での同時期の「水辺のまつり」の事例としては、博多区立花寺B遺跡第6次調査（田上編2002）や、早良区野芥遺跡第8次調査（米倉編1998）が知られる。

立花寺B遺跡6次では、御笠川北岸で営まれた古墳時代中期末から後期初頭にかけての集落と、御笠川から分岐した旧河道が検出され、その旧河道内から当該期の夥しい数の土師器・須恵器や、滑石製の子持勾玉・白玉・模造品などの祭祀遺物が多量に確認された。同じく、野芥遺跡8次でも、溝内から多量の土師器や須恵器、ミニチュア土器・土製鏡・土製紡錘車・滑石製有孔円盤などの模造品が溝内から確認された。溝の埋没過程から、短期間に何度もまつりが行われたと推測されている。

全国的にみると、古墳時代の「水辺のまつり」には、①河川、溝、沼のほとりなど、自然物を対象とする祭祀と、②人工的な導水施設や井泉施設を祭祀場とする祭祀の大きく2種類がある。②の場合には、奈良県南郷大東遺跡や南紀寺遺跡のように、大掛かりな治水施設を構築し、清浄な水を得るために、地域の王が祭祀を執り行つたと考えられている（今尾編2003）。

一方、今回の59次調査や立花寺6次、野芥8次などは、①の自然の河川を対象とした祭祀行為である。このまつりが、何のために、どのようにして行われたのかは、当時の人々の精神世界に関わる問題であり、憶測の域を出ないが、水のカミに対する信仰の結果であることは間違いない。また、子持勾玉の役割について、豊饒・増殖系の呪具ではなく、神靈を鎮める呪具であったとの見方もあり（桃崎2013）、河川を祭祀場としてまつりが執り行われた背景を推察するヒントとなるだろう。

5世紀後半といえば、元岡地域では経塚古墳や石ヶ原古墳といった首長墓が営まれた時期もあるが、同時期の集落については不明な点が多い。古墳時代の集落の様相と、葬送や祭祀との関連性の解明が待たれる。

＜参考文献＞

- 今尾文昭編 2003 『カミによる水のまつり』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第60冊
金子裕之編 1998 『日本の信仰遺跡』奈良文化財研究所学報第57冊
重藤輝行 2009 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集
田上勇一郎編 2002 『立花寺B遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第702集
桃崎祐輔 2013 「九州出土子持勾玉研究入門」『福岡大学考古学論集2』
米倉秀紀編 1998 『野芥遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集
米倉秀紀編 2012 『元岡・桑原遺跡群21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集

第6表 遺物観察表

番号	地区・層・遺構		種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		
								内	外	内
1	1区	SX01 1層	土師器	壺 脊部	—	—	(6.7)	—	外	暗5YR7/8
2	1区	SX01 1層	土師器	高环 腹部	—	—	(4.7)	内 明赤褐色 2.5YR5/8	外	暗5YR6/8
3	1区	SX01 10層	土師器	壺 口縁部	—	—	(3.2)	—	外	暗5YR6/8
4	1区	SX01 1層	土師器	壺 頭部片 (頭頂部) (26.2)	—	—	(7.5)	内 淡褐色 7.5YR5/2	外	暗5YR6/6
5	1区	SX01 1層	白磁	皿 口縁部	(13.8)	—	(2.0)	胎 白N8/0	釉	白色透明
6	1区	SX01 1層	陶器	碗 底部	—	4.7	(4.5)	胎 浅黃褐色 4.5YR8/4	釉	灰白5Y7/2
7	1区	SX01 6層	陶器	碗 口縁部	(29.0)	—	(4.2)	胎 赤灰10R5/1	外	に赤褐色2.5YR4/4
8	1区	SX01 1層	土師質土器	掛け鉢 片	—	—	(5.2)	—	外	暗5YR7/6
9	1区	SD05 1区	弥生土器	壺 脊部	—	—	(5.2)	内 に赤褐色10YR7/4	外	に赤褐色10YR7/4
10	1区	SD05 2区最下層	須恵器	壺 頭部	—	—	(11.7)	内 淡褐色~墨5YR3/3	外	暗褐色5YR4/1~5?2?
11	1区	SD05 3区	青磁	碗 底部	—	—	(2.1)	胎 灰白5Y7/1	釉	灰オリーブ7.5Y6/2
12	1区	SD05 4区	青磁	碗 底部	—	—	(7.6)	(3.4) 胎 浅黃褐色7.5YR8/4	釉	灰オリーブ5Y6/2
13	1区	SD05 4区	土師器	碗 底部	—	—	(8.1)	(1.5) 胎	外	暗5YR6/8
14	1区	SD05 4区最下層	青磁	碗 底部	—	—	5.8	(3.4) 胎 灰白5Y7/2	釉	灰オリーブ5Y6/2
15	1区	SD05 6区	白磁	皿 (10.0)	3.7	(2.3)	—	胎 灰白5Y7/1	釉	—
16	1区	SD05 6区	白磁	碗 底部	—	6.7	(2.6)	胎 灰白5Y8/1	釉	灰オリーブ5Y6/2
17	1区	SD05 6区下層	土師質土器	碗 底部	—	—	(5.6)	—	外	暗2.5YR6/8
18	1区	SD05 7区上層	須恵器	環身 (22.6)	—	—	(2.5)	内 褐褐色N3/0	外	灰N6/0~黒
19	1区	SD05 7区上層	須恵器	環身 (12.6) (21.5)	—	4.3	—	内	外	赤褐色N4/1
20	1区	SD05 7区上層	青磁	碗 (15.4)	—	—	(5.7)	胎 灰白7.5YR7/1	釉	オリーブ黄7.5YR6/3
21	1区	SD05 7区	青磁	碗 (12.0)	—	—	(4.2)	胎 灰白	外	オリーブ灰5GY6/1
22	1区	SD05 7区上層	青磁	碗	—	5.8	(3.4)	胎 灰白5Y7/1	釉	オリーブ黄10Y6/3
23	1区	SD05 7区上層	青磁	碗	—	4.8	(4.4)	胎 灰白5Y7/1	釉	オリーブ黄5Y6/3
24	1区	SD05 7区上層	白磁	碗 (17.8)	—	—	(4.0)	胎 灰白10Y8/1	外	—
25	1区	SD05 7区上層	白磁	碗 口縁部	—	—	(3.4)	胎 灰白7.5Y7/1	釉	灰白10Y8/1
26	1区	SD05 7区中層	青磁	碗 口縁部	—	—	(3.0)	胎 灰N6/0	釉	オリーブ灰10Y6/2
27	1区	SD05 7区	青磁	碗	—	6.2	(3.9)	胎 灰白	釉	オリーブ灰2.5GY6/1
28	1区	SD05 7区	青磁	碗	—	6.2	(1.7)	胎 灰白N8/1	内	灰オリーブ7.5Y6/2
29	1区	SD05 7区下層	陶器	壺	—	6.0	(9.8)	胎 灰白2.5Y7/1	釉	赤褐色~灰10Y5/1
30	1区	SD05 7区上層	陶器	壺 底部	—	(8.8)	(3.3)	胎 赤褐色5YR4/6	外	褐色7.5YR4/6
31	1区	SD05 7区中層	陶器	壺 口縁部	(8.0)	—	(5.3)	胎 灰白2.5Y7/1	釉	淡褐色2.5Y5/3
32	1区	SD05 3区	陶器	鉢	—	(18.2)	(10.2)	内 に赤褐色10YR5/3	外	淡褐色10YR5/3
33	1区	SD05 5区	瓦	丸瓦	—	11.6×7.9×2.2		灰褐色 N5/0		
34	1区	SD05 30層	瓦	丸瓦	—	7.3×5.6×2.3		—	外	暗7.5YR7/6
35	1区	SD05 7区上層	石製品	石鍋	—	—	(6.4)	—		
36	1区	SD05 7区中層	石製品	石鍋	—	—	(3.6)	—		
37	1区	SD12 1区	染付	碗 底部	—	—	(2.3)	胎 灰 N6/0	釉	オリーブ灰5GY6/1
38	1区	SD12 2区下層	青磁	碗 底部	—	5.7	(3.6)	胎 灰白7.5Y8/1	釉	オリーブ灰2.5GY7/1
39	1区	SD12 2区下層	青磁	碗 体部	—	—	(5.6)	胎 灰白7.5Y7/1	釉	オリーブ灰10Y5/2
40	2区	SD13 1区	青磁	碗 口縁部	(18.0)	—	(3.5)	—	外	オリーブ灰5Y6/3
41	2区	SD13 2区	青磁	碗 口縁部	(15.2)	—	(3.3)	胎 灰10Y5/1	釉	綠灰10Y5/1
42	2区	SD13 2区	青磁	碗 口縁部	(14.4)	—	(4.7)	胎 淡黄色	釉	オリーブ灰10Y6/2
43	2区	SD13 1・14	青磁	碗 底部	—	5.6	(2.0)	胎 灰白7.5Y7/1	釉	灰オリーブ7.5Y6/2
44	2区	SD13 1区	白磁	皿 口縁部	(10.0)	—	(2.6)	胎 淡い黄色と灰白	釉	灰 5Y6/1
45	2区	SD13 2区	青磁	碗 底部	—	(5.6)	(3.3)	内 灰黄5Y5/4	外	オリーブ2.5YR7/2
46	2区	SD13 1区	白磁	碗 口縁部	(17.0)	—	(4.8)	胎 青味灰	釉	乳白
47	2区	SD13 2区	白磁	碗 底部	—	6.8	(2.7)	胎 白色	釉	白色
48	2区	SD13 2区	白磁	碗 底部	—	6.2	(2.8)	胎 灰白	釉	灰白
49	2区	SD14	土師質土器	皿	(8.6)	(6.0)	(1.3)	—	内	に赤い黄褐色 10YR7/4
50	2区	SD13 2区	瓦	平瓦	—	8.5×8.1×2.2		—	外	に赤い黄褐色 10YR6/4

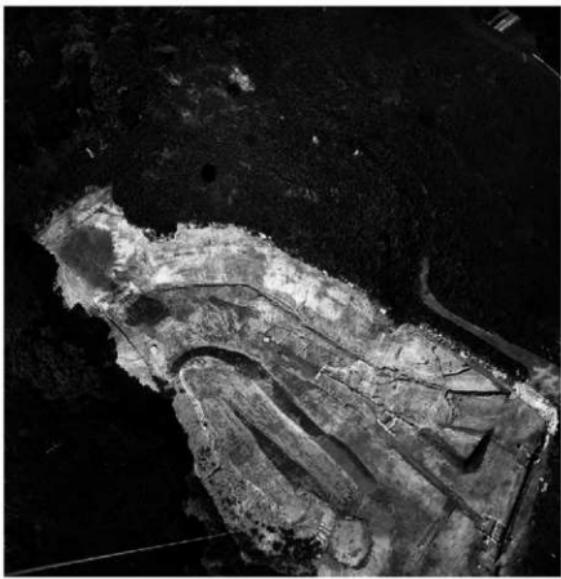
番号	地区・別・遺構		種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調			
51	2区	SD14	瓦	平瓦	15.9 × 8 × 1.2 ~ 2.2			にぶい橙~褐色 7.5 YR6/4 ~ 4/3			
52	2区	SD16 上層	白磁	碗 口縁部	17.0	—	(3.4)	オリーブ黄 5Y6/3			
53	2区	SD16 上層	青磁	碗 底部	—	4.8	(4.0)	オリーブ灰 10Y6/			
54	2区	SD16 上層	白磁	皿 底部	—	5.0	(1.3)	灰白			
55	2区	SD16 上層	土師器	甕 口縁部	—	—	(4.3)	橙 7.5 YR6/6			
56	2区	SD16 下層	青磁	碗	(17.6)	—	(5.6)	胎	灰色	胎	オリーブ灰 10Y5/2
57	2区	SD16 下層	青磁	碗	(16.4)	—	(4.9)	胎	灰黄 2.5 Y7/2	胎	オリーブ黄 5Y6/3
58	2区	SD16 下層	青磁	皿 底部	—	(5.0)	(1.3)	オリーブ黄 5Y6/3			
59	2区	SD16 下層	白磁	碗	(19.6)	—	(4.0)	胎	灰白 N-7/	胎	灰白 N-7/
60	2区	SD16 下層	白磁	碗 口縁部	(16.0)	—	(4.3)	胎	灰白 7.5 Y7/1	胎	乳白色
61	2区	SD16 下層	陶器	壺 底部	—	7.8	(7.0)	内	にぶい黄 2.5Y6/3	外	灰黄 2.5Y6/2
62	2区	SD16	陶器	壺 底部	—	(10.0)	(4.7)	胎	灰白 5Y7/3	胎	浅黄 5Y7/1
63	3区	SD20 ベルト	土師質土器	桷 底部	—	8.5	(2.9)	橙 7.5 YR6/8			
64	3区	SD20 2区 灰褐色土	須恵器	桷 底部	—	(9.0)	(1.3)	灰 N5/			
65	3区	SD20 4区 灰粘土	須恵器	桷 底部	—	(9.4)	(1.0)	明灰色			
66	3区	SD20 ベルト	須恵器	桷 底部	—	9.6	(1.6)	灰色 N6/ ~ 5/			
67	3区	SD20 3区 最下層	白磁	碗 口縁部	(16.8)	—	(4.1)	灰白 5Y7/1			
68	3区	SD20 4区 灰粘土	白磁	碗 口縁部	(15.2)	—	(4.6)	灰白 10Y7/1			
69	3区	SD20 4区 灰粘土	白磁	碗 口縁部	(16.0)	—	(2.2)	—			
70	3区	SD20 3区	青磁	碗 口縁部	(15.4)	—	(4.5)	胎	灰白 5Y7/2	胎	オリーブ黄 5Y6/4
71	3区	SD20 3区 離灰褐色シート層	青磁	碗 口縁部	(15.8)	—	(4.5)	オリーブ灰 5G6/1			
72	3区	SD20 1区	青磁	皿	(11.4)	—	(2.3)	胎	灰白	胎	灰オリーブ 7.5Y6/2
73	3区	SD20 2区 最下層	青磁	桷 底部	—	7.0	(2.7)	胎	明灰色	胎	灰オリーブ 7.5Y6/2
74	3区	SD20 2区 最下層	青磁	桷 底部	—	6.2	(3.2)	オリーブ黄 5YR6/3			
75	3区	SD20 2区 最下層	青磁	桷 底部	—	6.3	(3.8)	胎	灰色 2.5Y7/1	胎	オリーブ黄 5Y6/3
76	3区	SD20 2区 最下層	青磁	桷 底部	—	(6.0)	(3.1)	灰オリーブ 5Y6/2			
77	3区	SD20 4区 灰褐色土	青磁	桷 底部	—	(5.8)	(2.7)	オリーブ灰 10Y5/2			
78	3区	SD20 2区 最下層	白磁	桷 底部	—	7.0	(2.4)	胎	黄味を帯びた白色	胎	乳白色
79	3区	SD20 2区 最下層	白磁	桷 底部	—	(5.4)	(2.5)	胎	灰白 5Y8/2	胎	黄味を帯びた白色
80	3区	SD20 3区 最下層	白磁	桷 底部	—	6.8	(2.0)	内	—	外	乳白色
81	3区	SD20 2区 灰褐色土	青磁	皿 底部	—	(5.2)	(1.3)	胎	明灰色	胎	明緑灰 7.5G7/1
82	3区	SD20 3区 最下層	青磁	皿 底部	—	5.0	(1.0)	明緑灰 7.5G7/1			
83	3区	SD20 下層	土師質	甕 完形	(28.6)	最大径 (29.0)	11.7	内	赤い褐色 7.5YR6/2	外	赤い褐色 7.5YR6/2
84	3区	SD20 3区 離灰褐色シート層	瓦	平瓦	—	6.7 × 5.2 × 4.8 残存		表	灰黄 2.5Y5/2	裏	にぶい黄橙 10YR6/4
85	3区	SD20 3区	瓦	平瓦	—	9.6 × 6.8 × 1.6 残存		灰黄 2.5Y7/2 ~ 6/2			
86	3区	SD20 3区 離灰褐色シート層	土師器	甕 圓筒形	(17.4)	—	(5.8)	浅い黄橙 10YR8/4			
87	3区	SD20 4区 灰粘土	土師器	甕 圓筒形	(20.0)	—	(4.4)	明赤褐色 2.5YR5/8			
88	3区	SD20 4区 灰粘土	土師器	高环 扇部	(16.0)	—	(4.3)	橙 5YR6/8			
89	3区	SD20 4区 灰粘土	土師質土器	桷 底部	—	(8.4)	(3.4)	明赤褐色 5YR5/6			
90	3区	SD20 3区 離灰褐色シート層	須恵器	环身手直	(11.2)	盤部 (13.2)	(2.5)	内	黒赤灰 5R4/1	外	黒に近い灰オリーブ 5Y3/
91	3区	SD20 3区 離灰褐色シート層	須恵器	环盖	(15.2)	—	(1.5)	灰白 7.5Y7/1			
92	3区	SD20 4区 灰粘土	須恵器	环蓋	(18.4)	—	(3.0)	灰色 10Y6/1			
93	3区	SD20 2区 灰褐色土	土師器	甕 把手部	—	最大径 (4.4)	(9.4)	内	にぶい黄橙 10YR8/3	外	明赤褐色 5YR5/8
94	3区	SD20 4区 灰粘土	土師器	甕 把手部	—	—	(4.4)	内	にぶい黄橙 10YR7/4	外	明赤褐色 5YR5/8
95	3区	SD22	朝鮮白磁	碗 底部	—	(6.2)	(3.0)	灰白 2.5Y8/2			
96	3区	SD22	瓦質土器	推鉢 底部片	—	(17.6)	(6.0)	黒~灰黄褐 10YR6/2			
97	3区	SK28	土師質土器	皿	(9.8)	(7.8)	(1.5)	にぶい黄橙 10YR7/4			
98	3区	1面包含層	青磁	皿	(10.6)	(6.4)	(1.6)	灰オーブ 7.5Y6/2			
99	3区	Pit151	土師質土器	环	(17.6)	(8.2)	6.2	橙 7.5YR6/6			
100	3区	Pit151	弥生土器	甕 口縁~底部	(22.4)	—	(8.5)	内	にぶい黄橙 7.5YR7/3	外	にぶい赤褐色 5YR5/0

番号	地区・別・遺構		種類	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		
								内	—	外
101	3区	SX29	土師質	壺	(10.6)	8.4	(3.1)	—	—	—
102	3区	SX29	白磁	皿 口縁部	(9.6)	—	(1.3)	—	—	灰白 2.5YR8/1
103	3区	SX29	青磁	碗 底部	—	(6.0)	(2.5)	オーリーブ黄～灰オーリーブ	5Y6/3～5/3	
104	3区	SX29	朝鮮陶器	皿 底部	—	4.3	(1.8)	内	橙 5YR6/6	外 灰黄 2.5Y7/2
105	3区	SX29	土師質	足鍋の足	—	—	(8.9)	内	—	外 灰白 10YR8/1・8/2
106	3区	SX29	瓦質土器	火鉢	(40.0)	—	(5.8)	内	脚付盤13774-12761	外 浅黄+黑 2.5Y7/4
107	3区	SX29	瓦質土器	壺?口縁~底部	(28.6)	—	(8.8)	—	—	灰白 10YR8/2
108	3区	SX29	瓦質土器	壺?口縁~底部	(26.0)	—	(9.4)	—	—	黑色
109	3区	SX29	瓦質土器	羽釜 剥離	船大坪 (25.2)	—	(10.2)	内	浅黄 2.5Y7/3	外 ぶい黄瓶10TR7/3~5/1
110	3区	SX32	土師質土器	壺	(13.6)	8.4	3.6	内	灰白 10YR8/2	外 灰白 10YR8/2
111	3区	SX32	土師質土器	壺	(13.8)	8.1	3.7	—	—	灰白 10YR8/1
112	3区	SX32	土師質土器	壺	(14.8)	(7.8)	3.5	—	—	橙 5YR6/6
113	3区	SX32	土師質土器	壺	(15.6)	(9.6)	3.3	—	—	橙 5YR6/6
114	3区	SX32	土師質土器	壺	(16.6)	(9.0)	4.1	—	—	ぶい橙 7.5YR7/3
115	3区	SX32	土師質土器	壺	(18.0)	9.3	3.4	—	—	ぶい橙 7.5YR7/4
116	3区	SX32	土師質土器	壺	(16.8)	(10.0)	5.2	—	—	ぶい橙 7.5YR7/3
117	3区	SX32	土師質土器	壺	—	7.2	(2.0)	—	—	ぶい橙 7.5YR7/4
118	3区	SX32	土師質土器	皿	(18.0)	(13.0)	2.0	—	—	黄橙 10YR7/3
119	3区	SX32	土師質土器	皿	—	17.6	13.4	2.2	—	橙 5YR6/6
120	3区	SX32	土師質土器	大皿	(18.0)	(14.4)	1.6	内	ぶい橙+墨 7.5YR7/4	外 ぶい橙 7.5YR6/4
121	3区	SX32	土師質土器	皿 底部	(17.6)	12.2	1.7	—	—	橙 7.5YR6/6
122	3区	SX32	土師質土器	碗	—	(8.0)	(1.8)	—	—	ぶい橙 7.5YR7/4
123	3区	SX32	須恵器	高台付环 底部	—	(7.6)	(2.2)	—	—	灰色 10Y5/1
124	3区	SX32	土師質土器	甕 口縁部	—	—	(4.0)	—	—	—
125	3区	SX32	土師器	甕 口縁~近部	(17.0)	—	16.0	—	—	ぶい黄褐色 10YR5/3
126	3区	SX32	土師器	甕 口縁~颈部	(26.0)	—	(6.5)	—	—	ぶい黄褐色 10YR7/3
127	3区	SX24 1層	土師質土器	壺	9.9	5.2	3.5	—	—	浅黄橙 7.5YR8/6
128	3区	SX24 1層	土師質土器	壺	(13.2)	(7.6)	3.6	—	—	橙 5YR7/8
129	3区	SX24 1層	土師質土器	壺	(14.6)	8.5	4.4	—	—	ぶい橙 7.5YR7/4
130	3区	SX24 3層	土師質土器	皿	(15.4)	(11.8)	1.6	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4
131	3区	SX24 1層	土師質土器	高台付碗 底部	—	9.1	(5.0)	内	浅黄橙 7.5YR8/6	外 橙 5YR6/8
132	3区	SX24 1層	土師質土器	碗	(14.0)	7.8	6.6	内	—	外 橙 7.5YR7/6
133	3区	SX24 1層	黑色土器	高台付碗	—	9.4	(4.4)	内	黑色 5YR3/1	外 橙 5YR6/8
134	3区	SX24 1層	黑色土器	高台付碗 底部	—	(7.0)	(2.3)	内	黑色	外 ぶい須器10YR7/4+墨
135	3区	SX24	土師質土器	皿 口縁~底部	(13.6)	(10.6)	1.5	—	—	橙 5YR7/8
136	3区	SX24	土師質土器	皿 口縁~底部	9.3	6.6	2.2	—	—	橙 5YR6/8
137	3区	SX24	須恵器	蓋	(17.2)	—	2.1	—	—	灰白 2.5YR7/1
138	3区	SX24 1層	須恵器	高台付碗	(15.0)	(8.6)	5.5	内	灰色 10Y6/	外 灰色 N4/
139	3区	SX24 1層	須恵器	高台付碗	(13.0)	(8.0)	4.5	内	灰色 N6/	外 灰色 N5/
140	3区	SX24	土師質土器	高台付碗	(11.4)	8.0	3.9	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4
141	3区	SX24	土師質土器	高台付碗	(13.8)	(10.0)	3.7	—	—	黄橙 7.5YR7/8
142	3区	SX24 1層	土師器	小鉢皿 口縁部	船大坪 10.8	—	(7.7)	内	ぶい須器10YR6/4	外 ぶい須器10YR7/4+墨 10.8
143	3区	SX24 3層	須恵器	皿	(16.2)	(12.4)	2.1～2.4	—	—	灰色 N6/
144	3区	SX24 3層	土師器	甕 口縁部	(28.6)	—	(7.0)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4
145	3区	SX24 3層	土師器	甕	(22.0)	—	(10.8)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4
146	3区	SX24 3層	土師器	甕 口縁部	20.0	—	(3.1)	—	—	ぶい橙 5YR7/4
147	3区	SX24 3層	土師器	甕 口縁~底部	(16.2)	—	(10.8)	内	明赤褐色 2.5YR5/8	外 明赤褐色 2.5YR5/8-44
148	3区	SX24 3層	須恵器	壺 蓋	(14.0)	—	4.0	内	灰色 N4/	外 灰色 N4/灰かぶり
149	3区	SX24 3層	須恵器	壺 蓋	(13.8)	—	3.8	—	—	黒に近い灰色
150	3区	SX24 1区一括	須恵器	蓋	(13.6)	—	4.6	内	灰色 N6/	外 灰色 N5/

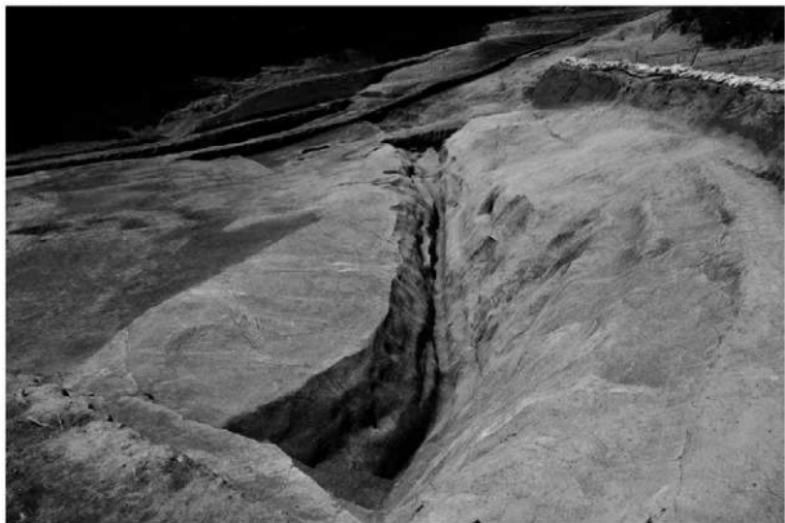
番号	地区・別・遺構		種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		
151	3区	SX24 3層	須恵器	环身	10.0	3.8	内 灰色 N5/ 外 灰色+暗灰色 N6+N3			
152	3区	SX24		土師器	鉢口縁部+脚部	(13.2)	—	(4.4)	橙 5YR 6/8	
153	3区	SX24 3層	ミニチュア土器	高环 脚部	—	明赤褐色 6.0	(4.8)	内 にぶい黄橙 10YR7/3 外 橙 7.5YR7/6		
154	3区	SX24		ミニチュア土器	鉢	4.7	(2.8)	4.6	にぶい黄橙 10YR6/4	
155	3区	SX24 3層	土製品	杓子	3.4×3.0×0.9			にぶい黄褐色～灰黄褐色 10YR5/4～4/2		
156	3区	SX24 4層	R 9	須恵器	环盖	(12.2)	—	(4.8)	灰色 N6/0	
157	3区	SX24 4層	R 25	須恵器	环身	10.8	雪瓣形 3.0	4.4	灰色 N6/0	
158	3区	SX24 4層	R 20	須恵器	环身	12.0	雪瓣形 3.0	5.6	内 にぶい橙 5YR7/4 外 淡赤褐色 10YR7/4	
159	3区	SX24 4層		須恵器	环身	(12.4)	雪瓣形 3.0	4.4	灰色 N6/	
160	3区	SX24 4層		土師器	鉢	9.6	—	6.4	にぶい黄橙～褐灰 10YR7/4～6/1	
161	3区	SX24 4層		土師器	鉢	11.1	6.5	5.5	橙 5YR 6/8	
162	3区	SX24 4層	R 10	土師器	鉢	(11.0)	—	7.3	橙 5YR7/8～2.5YR6/8	
163	3区	SX24 4層	R 8	土師器	椀	12.6	—	6.6	内 赤褐色 2.5YR4/5 外 明赤褐色 2.5YR5/8	
164	3区	SX24 4層		土師器	椀	13.2	—	6.2	明赤褐色 2.5YR5/8	
165	3区	SX24 4層	R 8	土師器	椀	13.4	—	5.3	内 浅黄橙 7.5YR8/4 外 色にぶい橙 5YR7/6～7/4	
166	3区	SX24 4層	R 8	土師器	椀	13.8	—	5.4	橙 5YR6/6	
167	3区	SX24 4層	R 37	土師器	椀	(13.6)	—	6.2	橙 5Y 6/6	
168	3区	SX24 4層	R 36	土師器	椀	(14.0)	—	6.8	橙～黑 2.5YR 6/8	
169	3区	SX24 4層	R 29	土師器	椀	(14.6)	—	(6.0)	橙 2.5YR 6/8	
170	3区	SX24 4層		土師器	椀	15.6	—	5.0	橙 5YR 6/8	
171	3区	SX24 4層		土師器	鉢	(12.0)	—	(8.0)	にぶい黄橙 10YR7/3	
172	3区	SX24 4層		土師器	小型丸底盃	10.2	—	9.4	橙 5YR 6/8～7.5YR 6/8	
173	3区	SX24 4層		土師器	小型丸底盃	(8.2)	—	(8.0)	内 圆褐色+淡青色 10YR4/2 外 橙 7.5YR6/6	
174	3区	SX24 4層		土師器	小型丸底盃	6.4	—	7.2	橙 2.5YR 6/8	
175	3区	SX24 4層		土製品	轟锤車	直徑 6.0	孔径 0.9	(3.0)	浅黄橙 7.5R 8/4	
176	3区	SX24 4層	R 26	土師器	高环 脚部	—	—	(2.0)	橙 5YR 7/8	
177	3区	SX24 4層		土師器	高环 脚部	—	—	(7.0)	橙 5YR 6/6	
178	3区	SX24 4層		土師器	高环	—	明赤褐色 12.6	(6.2)	明赤褐色 5YR 5/8	
179	3区	SX24 4層	R 19	土師器	高环 脚部	—	明赤褐色 11.6	(7.7)	明赤褐色 2.5YR5/8	
180	3区	SX24 4層		土師器	高环 脚部	—	明赤褐色 9.6	(6.3)	明赤褐色 2.5YR 5/8	
181	3区	SX24 4層		ミニチュア土器	椀	(4.2)	—	3.6	にぶい黄橙 7.5YR7/4	
182	3区	SX24 4層	R 33	土師器	小型丸底盃	10.8	—	13.9	浅黄橙 10YR 8/4	
183	3区	SX24 4層	R 32	土師器	小型丸底盃	(9.0+α)	—	(13.4)	内 赤褐色 2.5YR 4/8 外 明赤褐色 2.5YR5/8+黒度	
184	3区	SX24 4層	R 31	土師器	小型丸底盃	13.1	—	19.8	にぶい黄橙 10YR7/4	
185	3区	SX24 4層	R 18	土師器	小型甕	(11.6)	—	16.9	明赤褐色 2.5YR5/8	
186	3区	SX24 4層	R 11	土師器	小型甕	(12.8)	—	16.3	明赤褐色 2.5YR 5/8	
187	3区	SX24 4層	R 34	土師器	大型甕	(15.4)	—	(6.0)	橙 5YR 7/6	
188	3区	SX24 4層		土師器	大型甕	(16.3)	—	(9.9)	にぶい橙～褐灰色 7.5YR 6/4～4/1	
189	3区	SX24 4層		土師器	大型甕	17.8	—	(8.6)	内 橙 5YR 6/6+黒度 外 明赤褐色 5YR5/6+黒度	
190	3区	SX24 4層	R 5	土師器	大型甕	16.0	—	(18.4)	内 橙 7.5YR6/8 外 橙～C5+褐 7.5YR7/4～4/1	
191	3区	SX24 4層	R 3	土師器	大型甕	鉢大形 16.0	—	(25.4)	にぶい褐色～橙 7.5YR 6/3～6/6	
192	3区	SX24 4層	R 1	土師器	大型甕	鉢大形 26.1	—	(21.3)	にぶい橙～褐灰色 7.5YR 7/4～4/1	
193	3区	SX24 4層	R 17	土師器	大型甕	(17.4)	—	28.8	内 明赤褐色 5YR5/8 外 C5～C6+褐 7.5YR6/8～5/4	
194	3区	SX24 4層	R 15	土師器	大型甕	17.3	—	28.3	明赤褐色～暗赤褐色 5YR5/8～3/4	
195	3区	SX24 4層	R 16	土師器	大型甕	19.6	8.0	33.0	赤褐色～にぶい赤褐色 5YR 4/8～5/3	
196	3区	SX24 4層	R 2	土師器	大型甕	18.3	—	(28.5)	明赤褐色 5YR5/6	
197	3区	SX24 4層	R 6	土師器	甕	(27.0)	(9.4)	(25.7)	内 橙 5YR6/8 外 橙 7.5YR7/6	
198	3区	SX24 4層	R 38	土師器	甕	28.7～ 25.0	7.9	24.3	内 橙 5YR7/6～6/8 外 蜜褐色 2.5YR6/8～5/4	
199	3区	SX24 4層	R 7	土師器	甕	26.9	(8.2)	27.2	内 明赤褐色 2.5YR5/8 外 蜜褐色 2.5YR6/8～4/5	
200	3区	SX24 4層	R 22～ 24	須恵器	大型甕	38.4	—	(33.8)	内 灰色 N-5/1 外 灰色 N-4/	



(1) 1区全景（東から）



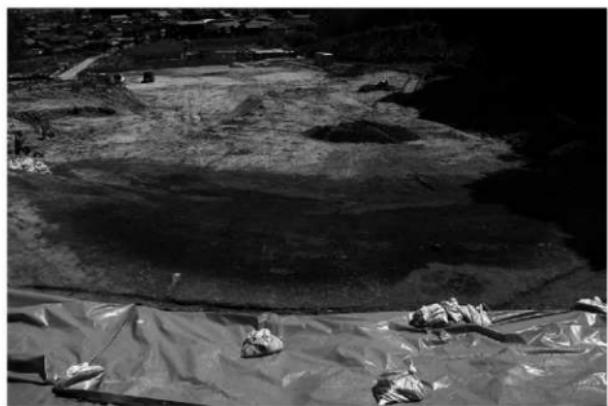
(2) 1区全景（南から）



(1) SD05 全景 (北東から)



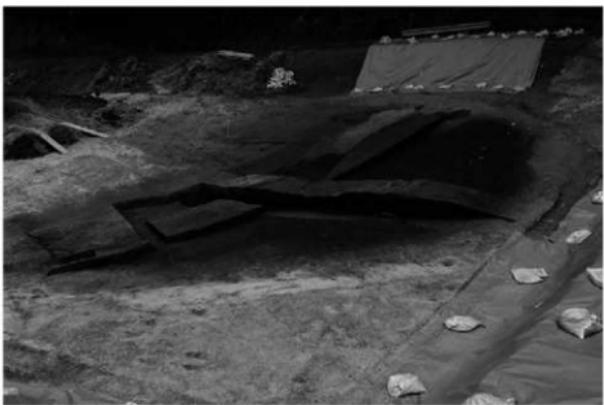
(2) SD05 近景 (東から)



(1) SX01 全景
(掘削前、西から)



(2) SX01 A-A' 土層掘削
状況 (北から)



(3) SX01 掘削状況
(北西から)





(1) SD05 A-A' 土層断面（北から）



(2) SD05 B-B' 土層断面（南西から）



(3) SD05 C-C' 土層断面（東から）



(1) SD05 D-D' 土層断面
(西から)



(2) SD05 E-E' 土層断面
(西から)



(3) SD05 F-F' 土層断面
(西から)





(1) SD10・SD12 全景
(西から)



(2) SD10 土層断面
(西から)



(3) SD12 土層断面
(南から)



(1) SK03・SK04 完掘
状況（南から）



(2) SK03・SK04 半掘
状況（南から）



(3) SK04 土層断面
(南西から)



(1) SK08 完掘状況
(南西から)



(2) SK06 完掘状況
(南西から)



(3) SK06・08 土層断面
(南西から)



(1) SD05・13・14・16
全景（東から）



(2) 1～3 区全景
(南東から)



(3) SD20・22 完掘状況
(南から)



(1) SD13・14 A-A' 土層
断面 (南東から)



(2) SD13・14 B-B' 土層
断面 (南東から)



(3) SD16 C-C' 土層断面
(北西から)



(1) SD20 全景（南から）



(2) SD20 E-E' 土層断面（西から）



(3) SD20 D-D' 土層断面（西から）



(1) SK25 土層断面
(東から)



(2) SK28 土層断面
(北から)



(3) SX29 検出状況
(西から)



(1) SX32 遺物出土状況
(西から)



(2) SX24 土層断面
(北西から)



(3) SX24 遺物出土状況 1
(北東から)



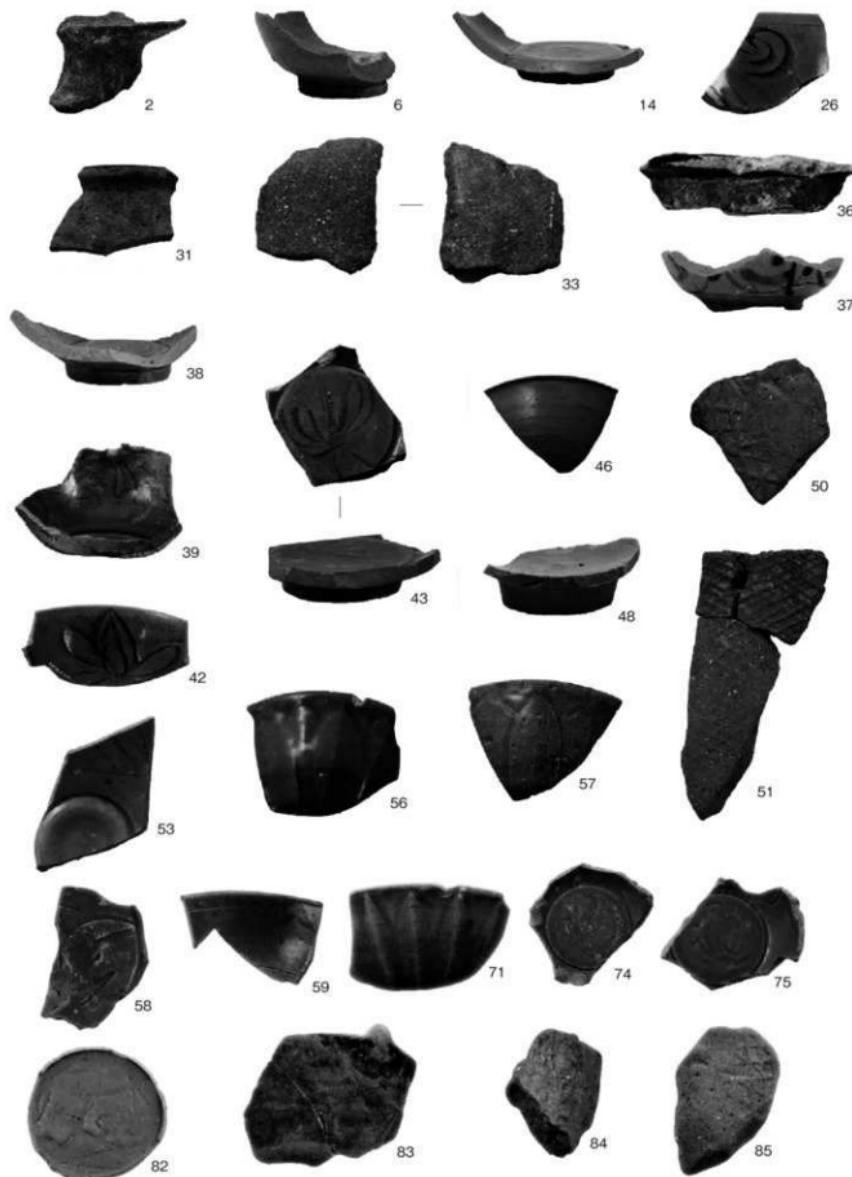
(1) SX24 遺物出土状況 2
(西から)



(2) SX24 遺物出土状況 3
(南西から)



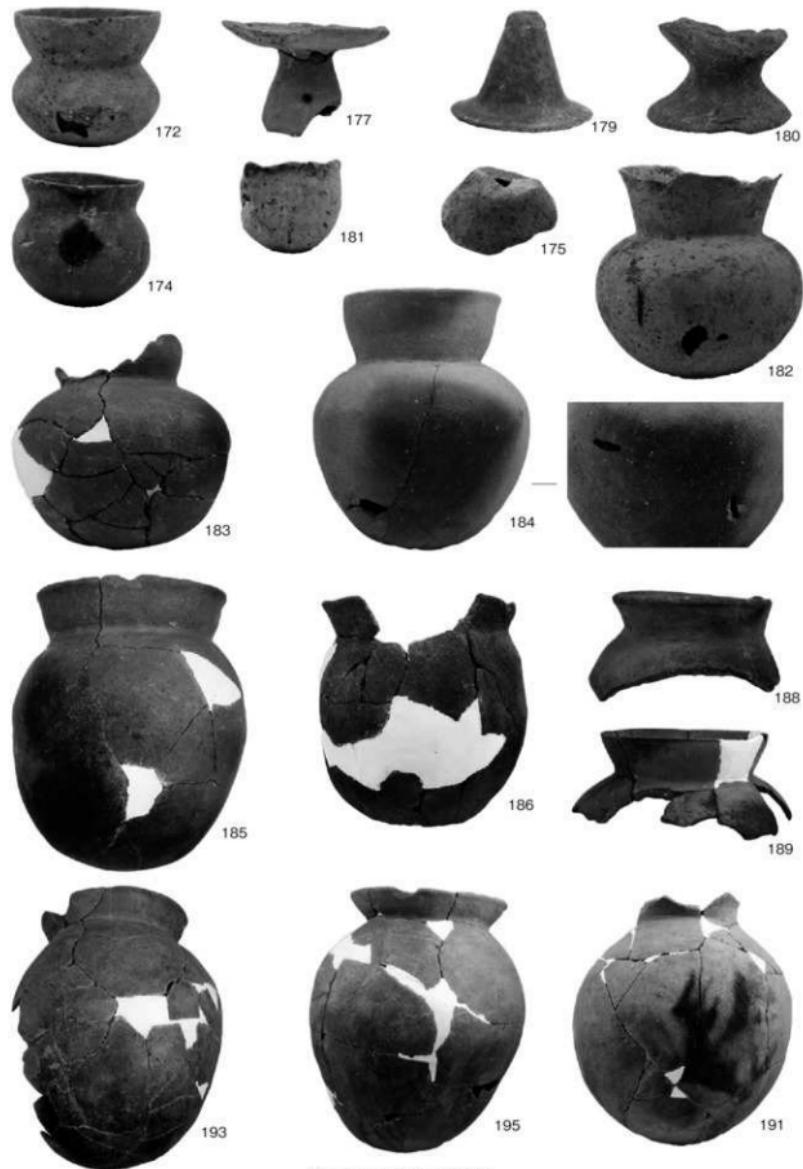
(3) SX24 遺物出土状況 4
(北西から)



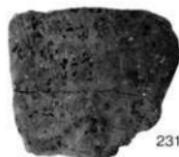
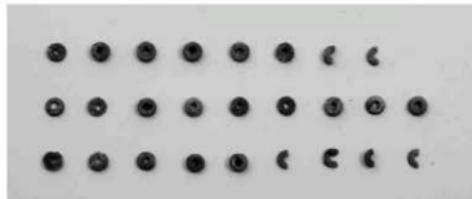
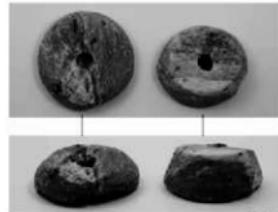
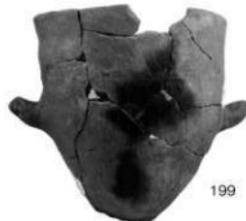
第 59 次調査出土遺物 1



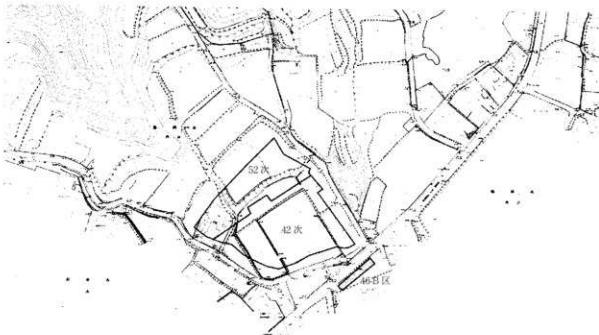
第 59 次調査出土遺物 2



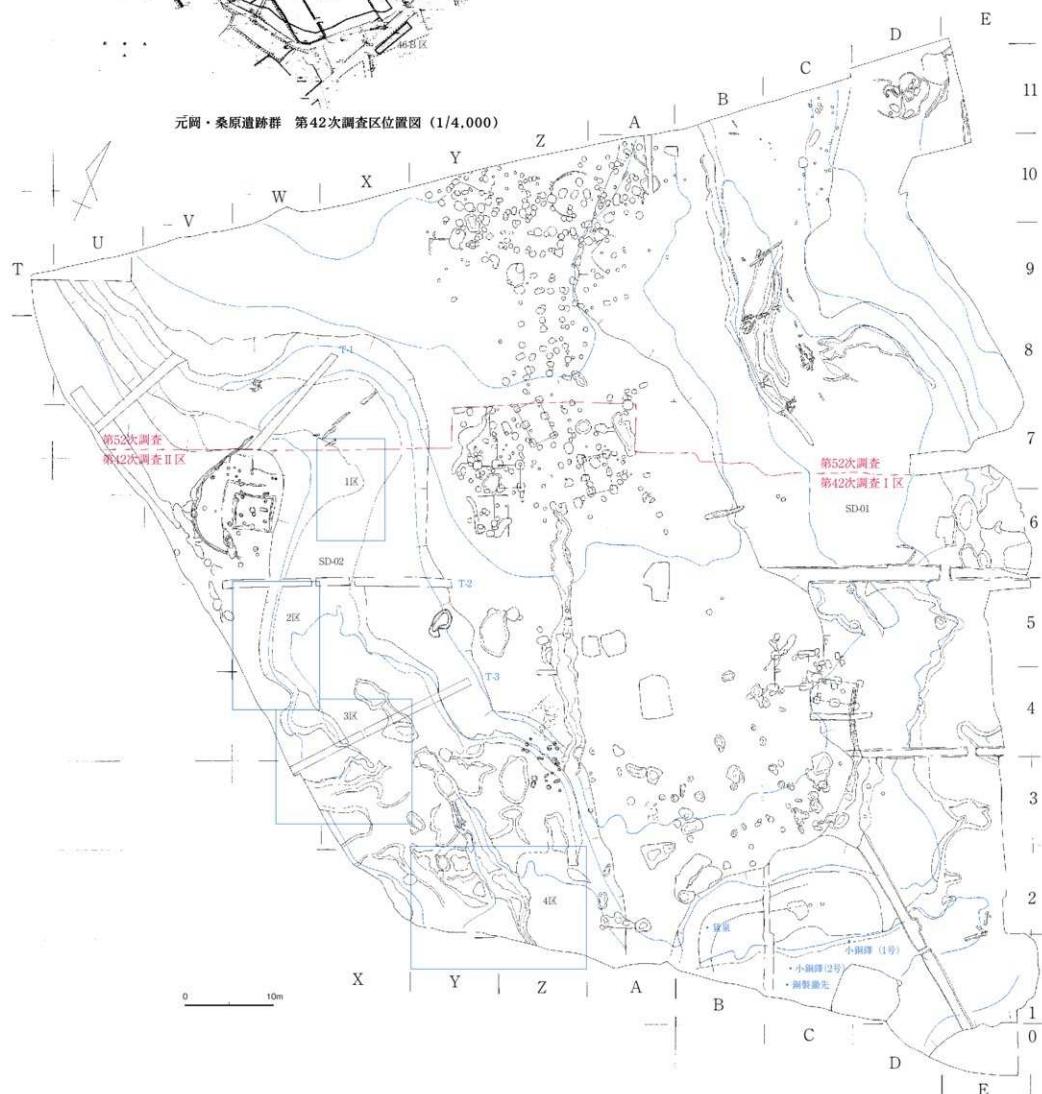
第 59 次調査出土遺物 3



第 59 次調査出土遺物 4



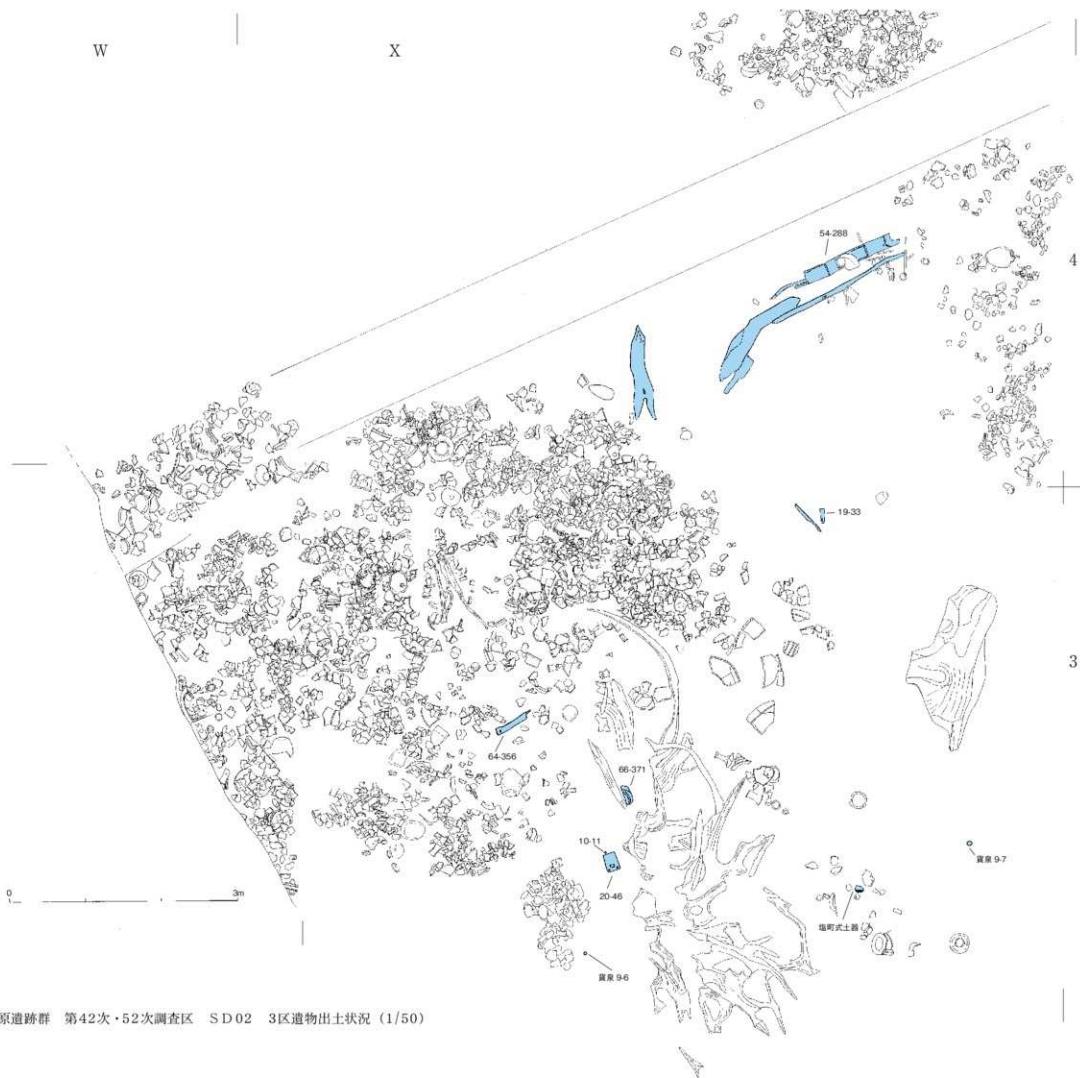
元岡・桑原遺跡群 第42次調査区位置図 (1/4,000)



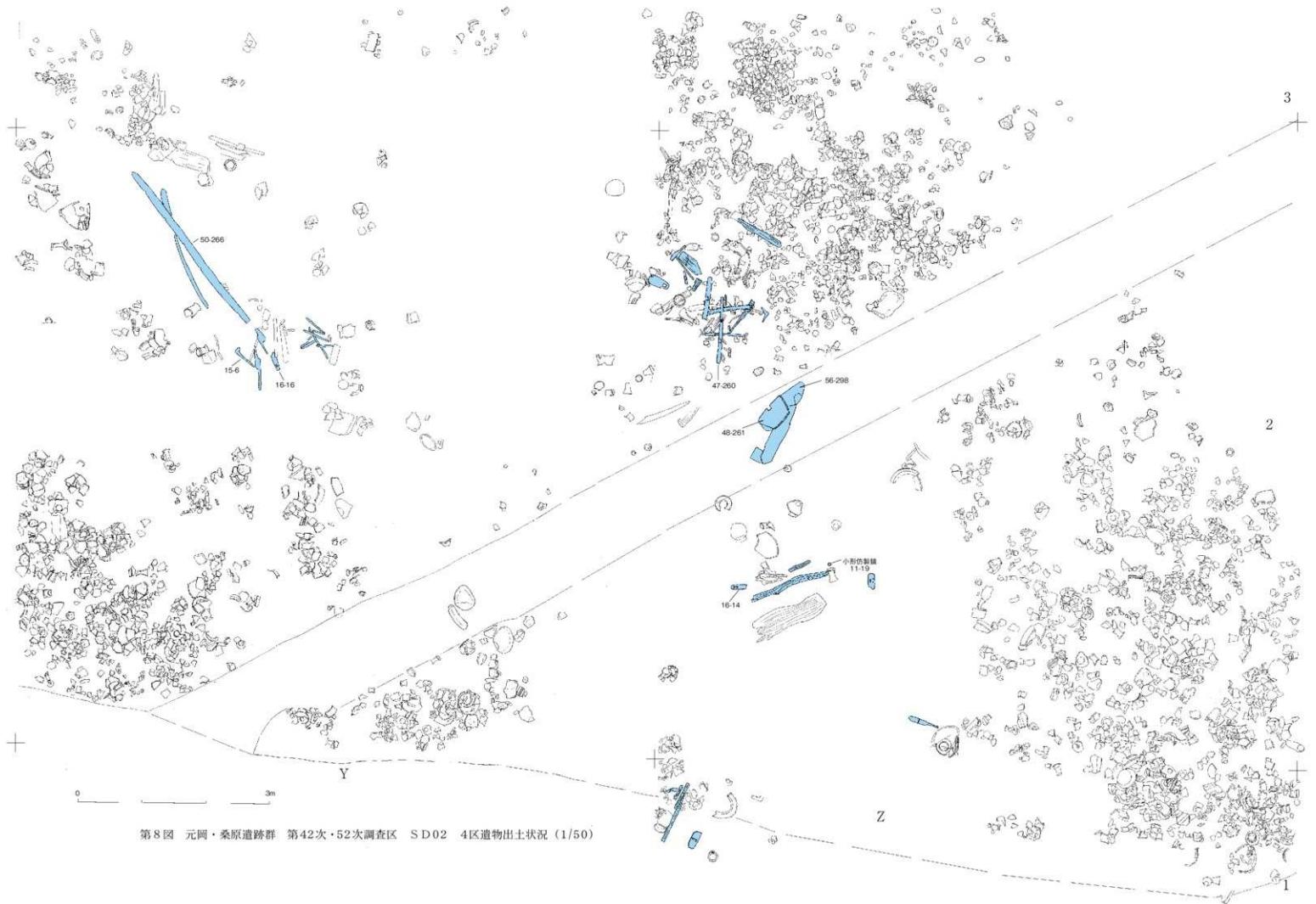
第3図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査遺構配置図 (1/400)

W

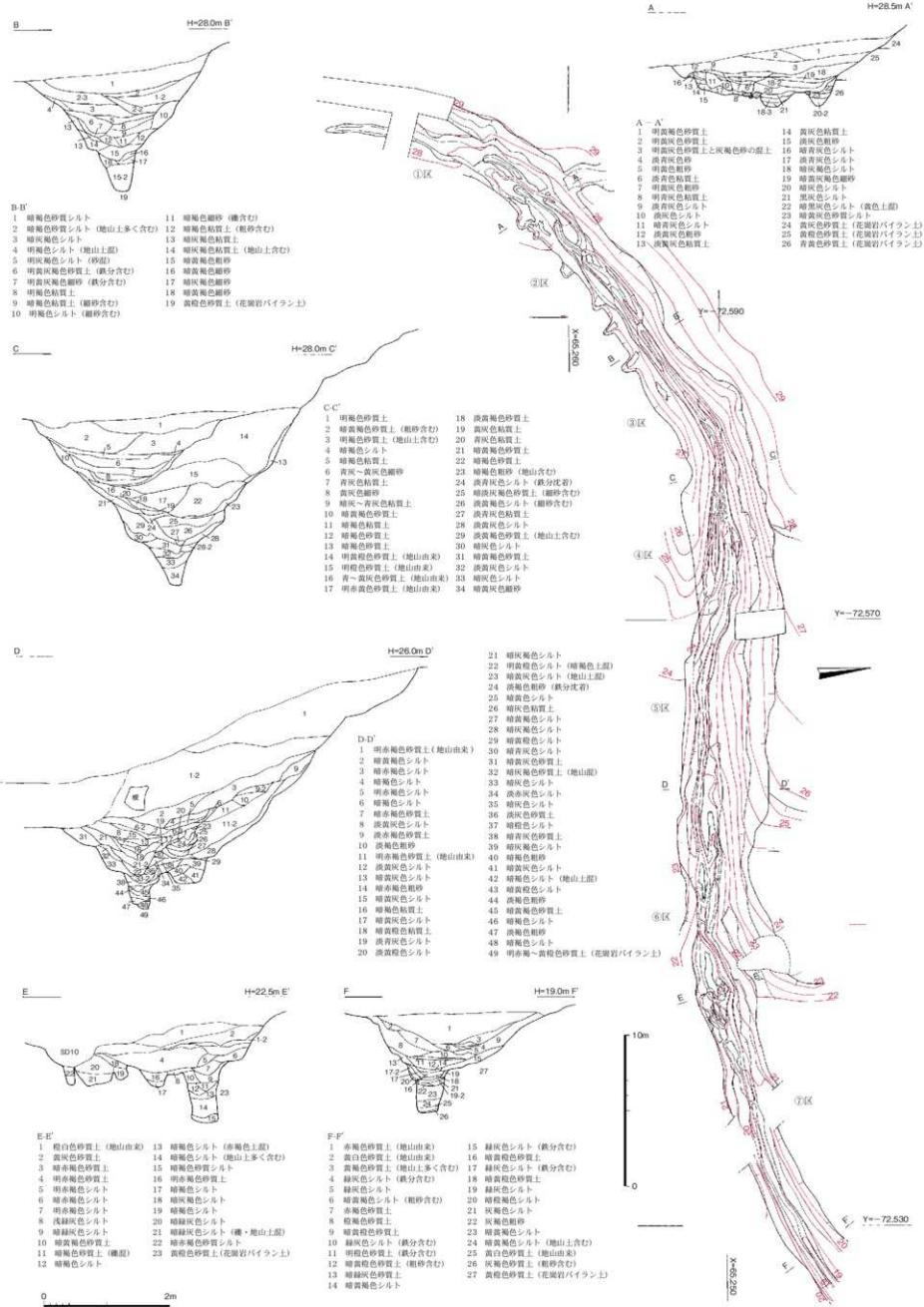
X



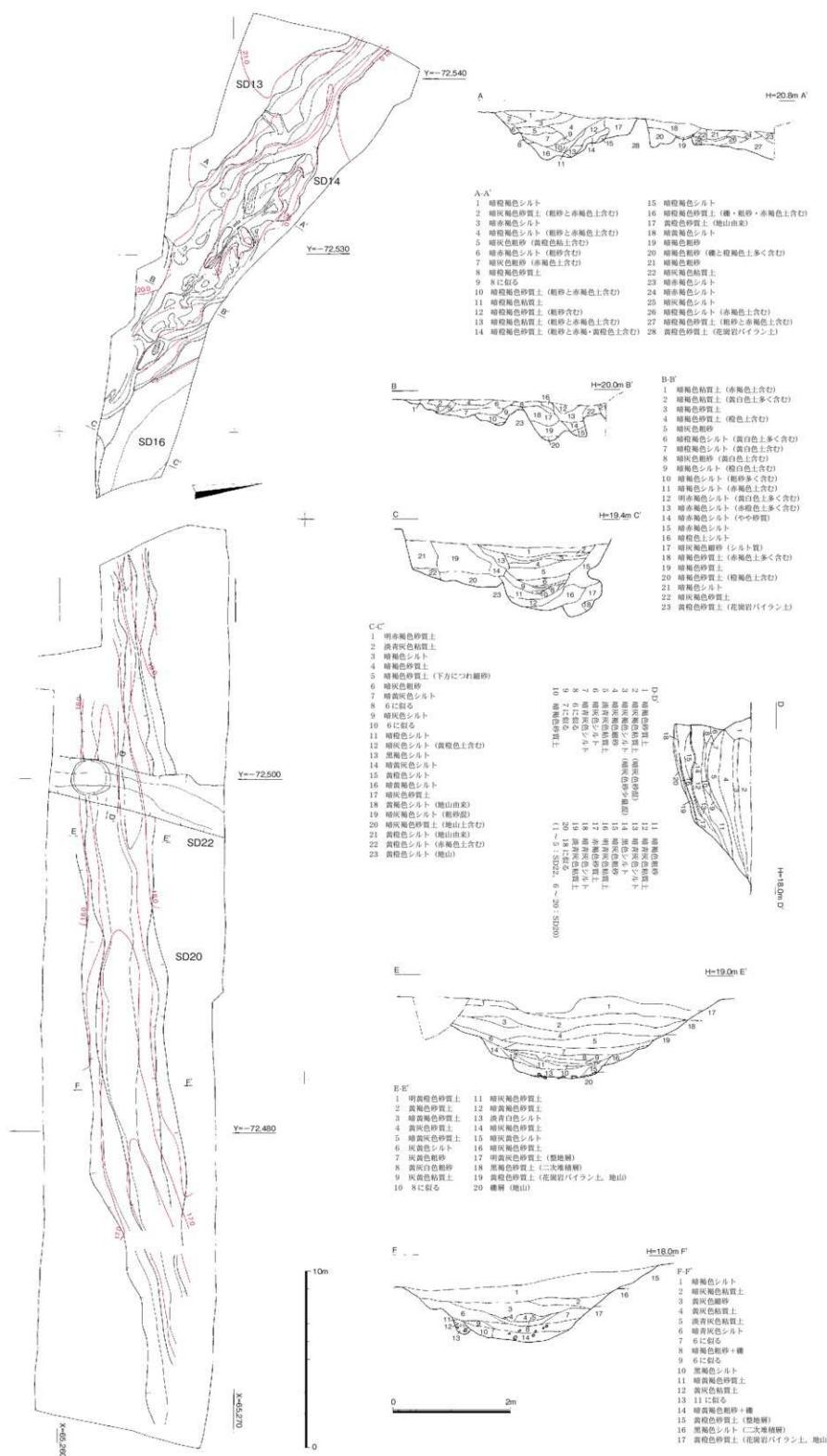
第7図 元岡・桑原遺跡群 第42次・52次調査区 SD 02 3区遺物出土状況 (1/50)



第8図 SD05 実測図(1/250) および土壌断面実測図(1/60)



第14図 SD13・14・16・20・22実測図(1/200)および土壌断面実測図(1/60)



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(m ²)	
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごじゅうくじ 第 59 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざとおか 西区大学元岡	40137	2782	33-35-21	130-12-58	2012.1.13 ～ 2013.3.15	2,298	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
桑原遺跡群 第 59 次	集落	縄文時代～ 中世 古墳時代 古代 中世	包含層 溝 祭祀遺構 焼土坑 溝	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 滑石製品 石鏡				
概要	縄文時代～中世期の遺物を含む谷の包含層、古墳時代の祭祀関連遺物、古代の焼土坑、中世期の大規模な溝などが確認された。谷 SX24 は、本来急峻な谷地形であったが、古墳時代後期には谷の底面は平坦になり、小規模な流路 (SD33) が流れる程度であったと考えられ、その流路のそばで土師器や須恵器、滑石製品などの祭祀遺物が確認された。この谷の上流域にあたり第 31 次調査区でも、滑石製品持ち勾玉を初めとする祭祀関連遺物が確認されており、「水辺のまつり」が行われたと推測される。1～3 区で確認された溝状遺構 (SD05・13・14・16・20) は、谷を横断して斜面沿いを下り、さらに下流へ続く。SD05 は最深部で検出面から約 5m を測り、溝の底面は激しい水流により著しく削られている。谷内への水の侵入を防ぐための排水機能があったと考えられる。							

元岡・桑原遺跡群 23

—第 18・42・59 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1246 集

平成 26 年 3 月 24 日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野 2-13-29